
俺はテストの召喚獣

琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺はテストの召喚獣

【Nコード】

N5500M

【作者名】

琥珀

【あらすじ】

主人公は女の子にモテて、頭が良くて、気配りができて、腕っ節も強い上に仲間想いの主人公。しかし、某所のメアリ・スー診断テストではまさかの13/100という低得点っぷり。「へー、一体なんでなんだろうね?」「その分苦労や苦悩を背負ってるからだよ」「・・・えっと、元気出してね?」「ほとんどはお前らのせいだよこのバカ野郎共ッ!」この物語は、そんな苦労系主人公が織り成す学園バカコメディである。

『バカとテストと召喚獣』の二次創作になります。オリ主やオリ展開が苦手な方は御注意を。

只今学園祭編 『外伝』を別枠にして上げなおすことにしました。そのため一旦こちらからは削除しています。

プロローグ

転生。

そう言われて貴方が思い浮かべるものは何だろうか？

「神に間違えて殺されてアニメや漫画の世界へ行くことになったやつたけど

神様からもらったチート能力で好き勝手にゼヒヤツホウ！」

俺の思い浮かべる転生はコレだ。いわゆるテンプレか。

まあこれは俺の考えであり他人と違うのは当たり前なのだが、そんなことはまあ大した問題ではない。

…問題は。

俺の『転生』がテンプレ通りではなかったということなんだよ。

「吉井イイイイ!!」

…俺の意識は、耳に入ってきた日曜洋画劇場で有名な声優さんに似

た声で叩き起こされた。

(…ダンボールが似合いそうな声だな…)

朦朧とした意識でそんなどうでもいいことを考えながら、自分がどんな状況におかれているのか確認する。

俺は確か、夜にコンビニで立ち読みを終えて、家に帰る途中だったんだっけ…？

なのに、今は明るい。恐らく昼過ぎくらいだろうか。周りは何やら白煙が満ちていて、自分は砂利のまじった地面、恐らく学校のグラウンドにうつぶせて倒れているようだ。

…時間も、場所もズレている。俺は、何をしていたんだ…？

「ぎゃあああ！？むさ苦しい筋肉ダルマが襲い掛かってくるぅー！？」

「貴様後で補習室送りに…いやその話は後だ！
今度は何をやらかしたんだこのバカ！！」

「なんで僕がやらかした事になってるんですか！？僕にこんな難しいシステムいじれるわけないじゃないですか！！」

「…すまなかった。冷静さを失っていた」

「やめて！そのリアクションは僕の心を遠慮なく叩きのめすから！

「！」

倒れている俺の耳に、先程の渋いボイスと共に、頼りなさげで、そしてどこまでも頭の悪そうな声が聞こえてきた。

なんで急にコントを始めてんだ？と普段の俺なら思うだろうが、今の俺にはそれよりも気になることがあったので残念ながらその考えには至らなかった。

…この声を、俺は聞いた事がある。

観察処分者。

吉井という名前。

ダンボールが似合う声。

想像を絶するバカ。

帰る途中、突然襲ってきた壮絶な衝撃と痛み。

パズルのピースが埋まっていく。

意識がはっきりするにつれて、俺は自分が今『どこ』にいるのか、おぼろげに理解していく。

「…嘘だろ…っ!？」

思わず呟いて、その声にハツとして自分の口を抑える。
いつも聞きなれている自分のソレよりも、やや声が高い。

「…まさか」

恐る恐る、口を抑えていた手を見る。

そこにあつた自分の手は、見知ったものよりもずいぶん小さい。

慌てて立ち上がり、見慣れない学ランを着た自分の体を見下ろすと
- - - - -

- - - - - 身体に、尻尾が生えてるんですが。

「というか僕の召喚獣はどうなったんですか！？なんか爆発しましたけど！！？」

「むう…『観察処分者』への設定変更は今までにない事例だからな…バカはトラブルを呼び込むのか…」

「最低だこの教師！生徒を自然にバカにしてる！！」

「吉井…お前は苦いものを甘いというのか？」

「？急に何を言ってるんですか。苦いものは苦いって言いますよ」

「つまりそういうことだ」

「????あ、煙が…！大丈夫なの僕の召喚獣！？」

煙が晴れていく。

呆然と立ち尽くす俺の前に、一人の少年が砂煙を払いながら走ってきた。

7

自分の数倍もある身長に、俺は彼を見上げる形になる。

少年が大きいのではなく、俺が小さいのだ。

そこの猫より少し大きい程度のサイズしかない俺は、つまり「人間ではない」のだ。

そして、その少年を、俺は知っていた。

「吉井：明久」

「.....君が、僕の召喚獣：？」

驚愕の表情で固まる俺と明久。

こうして。

俺の『召喚獣』としてのセカンドライフが幕を開けた。

プロローグ（後書き）

というわけで始まりました。

主人公の名前すら出てないですね！バカだな作者！！

時期としては明久が一年生、葉月ちゃんの件で観察処分者になった頃です。

しかし次回はいきなり一年飛んで最初の試召戦争のお話へ。

この作品が僕の処女作になります。よろしく願います。

第一話

あれから、一年が過ぎた。

「くそう…十問に一問は解けたのに、どうして僕がFクラスなの！？」

「100点のテストで10点なら間違はなくバカだろ」

「ひどいよユキト！君だけは僕の味方だと思っていたのに！！」

「一分も勉強せずゲームやってた奴に何を言えと？」

少し遅刻したからか、廊下には誰もいない。進級した新二年生は、もう新しいクラスでHRが始まっているのだろう。

どこまでもバカな明久と彼の肩の上で会話しつつ、俺は周囲を見渡す。

「…です。次に、支給品の確認を…」

「お？あれはAクラスか」

「ホントだ。ちょっと覗いてみようよ」

ふと聞こえてきた声を探してみると、そこには「2-A」と書かれ

たやけに豪華な表札が。

「システムデスクに巨大モニター…うわ！各個人に冷蔵庫があるよ…
カロリーの補充ができるなんて、流石Aクラスは人の命を大切にす
るんだなあ…」

「お前の着眼点は致命的におかしいな」

文月学園。

世界でも類を見ないこの試験校は、完全な実力主義による、成績順
のAからFクラスへのクラス分けを行っていることが特徴だ。

成績優秀者の頂点であるAクラスは、更に勉学に励めるように、充
実した設備を。

逆に劣等生の集まりであるFクラスは、向上心を持たせるために粗
雑な設備を。

そういう売り文句は聞いてはいたが、やはり実際にAクラスの設備
を見ると凄まじいものがある。学校というよりは貴族向けの英才教
育みたいになっていないか？

「…姫路さん、本当なら…」

「…」

明久の悔しそうな呟きに、クラス分け試験の時のことを思い出す。この学校は、完全な実力主義。病気などでテストを欠席してしまった場合は、自動的に0点となる。

そして、今回もその犠牲になってしまった少女がいたのだ。

「…向こうの言うことも間違っちゃいないさ。実力を発揮できなきや、力があっても意味ないからな」

「でも」

「だが、勉強が全てってわけじゃない。だろ？」

「…うん、そうだね。ありがとうユキト！」

そう。この学校が特別なにはもう一つの理由がある。

召喚獣。

テストの点によって力を得て、0点になると力を失う、科学とオカルトと偶然によって生まれた特殊な存在。

そして、俺はその中でも更に特殊な存在である。

「なにせ召喚フィールドがなくても存在してられるんだからな」
「本当に不思議だよね。死んだと思っただら召喚獣になつてたなんて」
「まあな」。しかもお前と感覚が微妙にリンクしてるし」
「僕の感覚はユキトにいかないけど、ユキトの感覚は僕にフィールド
バックが来るんだよね…ユキトが食事できたら僕は楽だったのに」
「できて味だけだろ。お前死ぬぞ」
「そんなあ…あ、ここだ」

と、話しているうちに目的地に着いたようだ。
中からはやけに穏やかな社長ボイスが聞こえてくる。おそらく担任
教師だろう。

「うわー…先生喋ってる途中だよ」
「どうすんだ明久。いきなりぼっち生活スタートか？」
「それは遠慮したいよ…よし、ここはなるべく明るく行こう」

ぱしぱし、と明久は頬を叩いている。
どうも気合を入れているみたいなので明久の肩から降りる。
どうする気だ？と思っていると

すーはー、と明久は深呼吸して、

ガラッ

「すいませえーん 女子高生と曲がり角でぶつかって遅れました」
「「「「 処刑の時間だ！！！！」」」」
「ぎゃああああつ！！？視界を埋め尽くす文房具の山があーっ！！」
「？」

なんだよこれ。

とりあえずもう片方の教室の入り口から教室の中へ。
教室のドアは今の俺にとっては巨大だが、召喚獣は見た目より遙かに力があるので楽々開けられた。

周りを見渡してみると、やはりFクラス、それはもう酷い有り様である。

窓は隙間空いてるし、床は畳、机はちゃぶ台。

椅子の代わりに座布団が置いてあり、その中身もほとんど入っていない。

これは教育の法律に引つかかるんじゃないか？と思っていると、

「ようユキト。明久もやっぱりFクラスか」

去年のうちに聞き慣れた声が出た。そこにいたのは、

「雄二か。お前の成績からするとクラス代表は…」

「もちろん俺だ。これでこのクラスは俺の軍隊ってわけだ」

「大丈夫なのか？Fクラスだぞ？勉強に期待はしてないだろうが、他のことが優秀な保障は…」

などと話していると、

カカカッ！

という鋭い音と共に、明久の悲鳴が聞こえてきた。
何があったのかとそちらの方を見ると、

明久が礫にされ壁を彩るオブジェになっていた。

…コンパスはまだしも、分度器や定規で制服と壁を貫通させるとは。

「…行動力はあるそうだな」

「まあ、そのくらい無きゃ困るがな」

なんだろうこの気持ちは。こんな時、どんな顔をすればいいのか俺はわからねえよ。

「ああ。おまけに、今年は強力な戦力も入った。だからな、ユキト」

そう言って、子供が悪戯を考えた時のように、雄二は笑う。
そして、本当なら明久が言うはずだった台詞を彼は言う。

「試召戦争を………始めるぞ」

「そんなこと言っていないで助けてよー人共ギヤアアアアアア！！？？？」

台無しだった。

第一話（後書き）

原作とは違う物語へとズレていきます。

主人公名前だけ出ました。ユキトくん。

まずは設定から書いていくので好き勝手できるのはDクラス戦が始まるくらいからですかねえ…

説明文ダルくてごめんなさい。

しかしメインキャラがまだ雄二しか増えていない！

こんなゴリラよりはやく美少女出したいです。秀吉ー！はやくきてくれー！！

明久は犠牲になったのだ…

第二話

「まさか召喚獣に人の意識が宿るなんてねえ」

「『ありえない』って否定しないのか？自分で言うのも何だがこんなメチャクチャが平然と起こってるのはどうかと思うが」

「試験召喚システムはまだ解明されきってないからね。個人的には研究材料が増えるのは大歓迎さ」

「この姿がどんなものかは俺も調べなきゃいけないから構わないが…人体実験みたいなものなんだ、タダではやらせないぞ」

「まあ、そうだろうね。そっちの欲しいものは揃えよう。幸いな事にいるんなとこから研究費は出てるしねえ」

「そいつは気前がいいことだ」

「ハッ、貴重な研究材料を逃すよりはよっぽどいいさ」

「…えーと、西村先生。なんの話をしてるんですたっけ？」

「バカには理解できん話だ」

「それも一生な」

「機密情報が漏れる心配はなさそうだねえ」

「アンタらは鬼だ！っていうか鉄人はまだしも、初対面の学園長とキミはなんで僕のこと知ってるんだ！！」

「え？いやそれは…アレだ、俺は一応お前の召喚獣っつー扱いだからな、なんとなくお前のことがわかるんだ」

「アンタの悪名は校長室にも届いてるよ」

「さすがだな、吉井」

「みんな嫌いだあーっ！！」

「やれやれ…すごいバカっぷりだな。そっちのガタイのいい人も大変だな…えーと、スネークさん？」

「何を言ってるんだお前は！？鉄人はまだしもその呼ばれ方は始め

「てだぞ!?!」

「いやー、その渋い声のイメージがそれしかなくて。というわけで、よろしくスネーク」

「やめろ!色々ギリギリになるだろうがッ!」

「…さらに騒がしくなるのかい、この学校は」

「ところで、なんで妖が学園長してるんだ?何かの呪いか」

「あ、それ僕も思った」

「アンタら老人どころか人外扱いかい!?!」

礫にされていた明久だったが、担任教師(社長ボイス)の手によりなんとか救出されたようだ。

雄二は「死ねばよかったのに」とか平然と呟いていた。なぜこいつらは友達をやれてるんだらうか?

「それでは、教室の説明を終えたので、次に自己紹介をお願いします」

その担任の台詞で、机の端の奴から自己紹介を始めようと

ガラッ

「お、遅れてすみません！」

したところ、クラスメイトの最後の一人が入ってきた。

本来Fクラスには一人（解釈を広げれば二人）しか女子がいないが、その声の主はまぎれもない少女である。

「姫路さん……」

「来たか、強力な人材が」

心配そうな明久と、ニヤリと不敵な笑みを浮かべている雄二。

俺は『前世』のことで、明久から聞いた話で知っていたが、雄二も彼女のことを知っていたようだ。

何を知っていたかというと、

「え？姫路さん？なんでここに……」

「えと、振り分け試験で高熱を出してしまって……」

彼女がFクラスであるということである。

ざわざわ……

それを聞いて、騒がしくなるクラス内。

「なん…だと…?」

「姫路さんがFクラス…」

「それより姫路さんまじ巨n…ぐきゃあああっ!!?!?」

「須川の霊圧が…消えた…?」

…このクラスで胸の話はやめたほうがよさそうだ。

「みなさん静かに。では全員揃ったので、自己紹介を」
担任（影が薄い）の声で、騒がしさを残しつつも自己紹介が始まった。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。ちなみにワシは男じゃー!」

最初の知り合いは秀吉か。本当にいつ見ても性別がわからん奴だな。しかし雄二のことといい俺が持つてる『原作知識』もズレててあまりアテにはできないな。
ここで男と強調することはなかったはずだが。

「…土屋康太」

「あとは俺と明久だけか」

ふと、雄二がそんなことを言う。

・・・いつのまにかそんなに進んでたのか。気づかなかった。

「んじゃ、紹介は俺からいくぞ。明久はともかくユキトはモチベーションの操作に使えるからな」

「？モチベーション？」

「雄二も試召戦争やりたらしいぞ、明久」

「え？そうなの？」

などと会話していると、担任（福原）がギシギシとドアを開け教室を出ていた。俺は話を聞いていなかったが、何かの用事でしばらく出てくるようだ。

おお、これは演説チャンスだな？雄二。

そのことはアイツも理解しているらしく、教卓のほうへ向かう雄二。

「皆、俺がクラス代表の坂本雄二だ」

「

どうやら二年はツイてる年になりそうだ。

今までなら学校の設備がどんだけだろうと気になんてならなかった。アイツから逃げられるしな。

しかし、振り分け試験の最中に姫路が倒れて、それに明久が猛抗議するのを見てから、考えが変わった。

「 Aクラスの設備に、不満はないか？」

「『『『大アリじゃあああっ！！』』』」

今年は姫路がFクラスになる。

そして明久のことだ、姫路のためにAクラスの設備を手に入れようとするだろう。

他にも勝つための戦力がある。

ムツツリーニ。

秀吉。

島田。

そして、ユキト。

…これは無謀な突撃なんかじゃねえ。俺達は、勝てる。間違いなく、勝つことのできる戦争だ。

「俺たちFクラスは、Aクラスに試召戦争を申し込む」

勝てるわけない、無理だ、という声が聞こえる。

そんなことはない。

「そんなことはない。今から、それを証明してやる」

成績が悪くたって、それが人間を決める全てじゃないってな！！

大体『原作』通りのやりとりのあと、雄二が勝てると言える根拠を示していく。

秀吉に島田、ムッツリーニ、姫路。雄二の話術も合わせてFクラスのもちべが上がっていく。そして、

「それに、吉井明久だっている」

「えっ？」

「えっ？」

「誰？」

「ふえええっ！？吉井君！？」

…うん、名前すら紹介されていない明久に対してのリアクションなんてこんなもんだよな。

流石雄二、明久をバカにすることにかけては他の追従を許さない。ていうか最後のは姫路か。気づいてなかったんだな…

「コラバカ雄二！この面子で僕を出す意味なんてないでしょ！？」

「ああ、ないな」

「いつぺん死ぬクソ野郎！！」

「お前はブサイクでクズでバカでゴミみたいな存在でおまけにバカだが」

「バカって二回言うんじゃない！！」

「だが お前は『観察処分者』だからな」

観察処分者。

その言葉にふたたびざわつく教室。

「それってバカの代名詞じゃなかったっけ？」

「ち、違うよ！心がきれいな少年を観察しようという」

「バカの代名詞だ」

「せめて最後まで言わせて！！」

「お主の言い訳はバカ丸出しじゃったぞ、明久…」

冷静な秀吉のツッコミ。

おい明久、血の涙を流すな。畳にシミがつくだろ。

「
だが、その『召喚獣』はバカじゃない」

そう言つと、雄二はこちらに歩いてきてひょいっと俺を持ち上げる。

「おいこら雄二。試召戦争のためとはいえあんまりいい気分じゃないんだぞコレ」

「そいつは悪かったな。今度漫画でも買ってやるよ」

そんな会話をしながら空中でまわりを見渡してみる。

…みんな目が点になってるな。前からの知り合いもいるはずなんだが。

ひょっとして、忘れてるのか？ありえるな、Fクラスだし。記憶力が絶望的じゃないのか。

やれやれ。まあ一応、自己紹介しておくか。

「柊雪人だ。ユキトでいいぞ」

召喚獣が喋るって、結構シユールなんだろうなあ。

こうして、ズレた物語は回り始める。

この先のことは、まだ誰も知らない。

第二話（後書き）

こんな駄文ですが感想を頂く事ができました。
本当にありがとうございます。

で、「主人公の得点が0になったらどうなるのか」という
ご質問を頂きましたが、それについては今後物語の中で説明します。
四話が五話ぐらいになるでしょうか。お楽しみに。

主人公のフルネームが出ました。柊^{ひいらぎ}雪人と言います。
まあ30cmのキャラに漢字使うのが嫌なので今後はユキトで統一
します。

オリキャラはこいつだけになるでしょう。
原作キャラとコントやらせたいですね。

第三話

シン、と教室が静まり返る。

まあそれはそうだろうな。彼らは一年の時に『召喚獣』を実際に目にして驚きはしただろうが、その時から今日までに『なるほど！召喚獣は実在するけど、喋らないしむしろラジコンに近いもんなんだな！』というような納得をしていたのだろう。

しかし、俺はその固定観念をも打ち破った。

『召喚獣は実在するけど喋れない』はずなのに『召喚獣が喋ってる！？』という驚きを与えたわけだ。

秀吉や島田のほうを見たら苦笑を返された。

『自分達も去年驚いたぞ』と言いたいのだろう。そのくせ去年から知ってる他の奴も驚いてるな。バカなのか空気を読んでるかの言及は避けよう。

「かつ……」

そういえばムツツリー二（先程雄二にアダ名をバラされた）はどこに……って、堂々と姫路のパンツを覗こうと……あ、鼻血吹いた。一体どこからあんな量が出てるんだらうか。本当にFクラスはわからないな。しかし、姫路はなんでムツツリー二に気づいてないん

「かわいいです　　っ!!!」
「むごほお!?!」

なんだ!?!何事だ!?!姫路の姿が一瞬ブレたかと思っただら目の前が真っ暗に!?!
ていうか息が苦しい!?!このマシユマロみたいなやわらかいものは一体「姫路さんのおっぱいが僕の顔にそして僕の四肢がありえない方向にいいいい!?!」明久からのフィードバックがなくて本当によかった!?!

「姫路さんの胸の中にINだと!?!許せん!?!」
「しかし何故吉井まであんな反応してるんだ」
「ああ、『観察処分者』は召喚獣の感覚のフィードバックを受けるんだ」

「「「吉井!死ね!?!!」」」」

なんだか周りが大変なことになってるけど俺の息も大変だ。この姿になってから呼吸を意識したことはなかったけど…どうやら俺には酸素が必要だった…らしい…な…

「姫路よ。そのくらいにしておいてやったらどうじゃ?ユキトが死にそうじゃぞ」

「え？…ああつ！？大丈夫ですかユキトくん！？」

ぷはー！！

顔の拘束が解かれ、新鮮な空気が入ってくる。

どうやら俺は生きていらしい。あぶねえ、川の向こうで昔死んだじいさんが「ホホ、どうやら行きつく先は同じじゃったようじゃの」とか言っていたぜ…

「あー、去年ウチもやったわそれ。…ウチのときは、死にかけたりしなかったけどね…！！」

「すーはー…落ち着け島田、明久はポニテが好みだ」

「えっ！？そ、そうなんだ…う、ウチはどうでもいいけど…」

隠してるつもりかよ。たとえ『原作』読んでなくてもお前を見てれば丸わかりだつっの。しかしこの分だと、『明久の好みはポニテ巨乳』ということは言わなくてよかったな。

「あ、よ、吉井君！大丈夫ですか！？」

思い出したように姫路が明久の元へ近づく（ちなみに俺は抱えられたままだ）。呼吸困難およびFFF団の制裁（処刑ともいう）を食らったんだ。生きているほうが不思議なのだが、

「だ…大丈夫…心配してくれてありがとう…」
「まったくだ。こんなブサイクをよくもまあ」
「入学するとき雄二が黒髪美人と話してた」
「…」坂本、覚悟はいいか「…」
「明久あっ！！後で覚えてやがれっ！！」

ダダダダダッ！

やかましい足音と共に、FFF団が次の生贄を求めて走り去る。
この分だと、俺は無事に過ごせそうだな。
まあ、自分の数倍もある相手に対してドキドキするかわわれると微妙なところなんだが。元々俺はこいつらほど性に貪欲じゃない。

「…！！（ブシヤアアアッ）」

あの惨状を一年見てきたんだ、反面教師にもするぞ。

「吉井、身体が大丈夫ならあと2、3000発はいけるわよね？」
「いけないよ！？単位が明らかにおかしいでしょ！？君はどれだけ僕と一緒に時間を過ごしたいのさ！！？」
「えっ！？そ、そんなの一生に決まってるじゃない！！」
「君は悪魔だ！！」
「流石明久じゃ、言い回しがわざとやっているとしたか思えんの…」

「あれはもう治らない病気なんだろうな。これから一生付き合っていくものだ」

繰り広げられる即席コント。明久、お前本当にバカだな。

まあ島田もバカだが。…む、姫路が俺を抱く力がちよつと強くなつたな。俺からは顔は見えないがちよつと不満気な顔になっているんだろう。

ともかくこのままだと何かしらのとばっちりを受けそうなので、腕の中から脱出するでしょう。

「姫路、とりあえず放してくれ。雄二が帰って来るまでに黒板に要点をまとめときたいから」

「え？あ、ごめんなさいユキトくん」

よし、ナイス言い訳だ俺。とりあえず教卓に乗るとしよう。

召喚獣の体は人間より遥かに強い。姫路の腕の中からも教卓までジャンプするなんて楽勝だ！

「はっ！」

「ひゃっ!?!」

掛け声と共に、姫路の腕からジャンプ！

タンツ！（俺が姫路の腕から跳んだ音）

ガタツ！（俺が教卓に着地した音）

ガシャアアアツ！（教卓がバラバラになった音）

ゴガンツ！（俺が床に頭をぶつけた音）

「「痛つたあああああああ！！？」」

転がり回る俺と明久。しまった！この教卓はボロいんだつたあ！！

「だ、大丈夫ですかユキトくん！？」

「や、やばい音がしたわよ吉井！？」

大丈夫じゃない！！壮絶な痛みが頭に襲い掛かってきてマジメに痛い！！

そして明久もフィードバックで大ダメージである。正直申し訳ないが今は痛みがああつ！！

「…明久も雄二もムッツリーニもユキトもその他も…ワシ以外の男子は全滅してしまったのか…」

「えっ？」

「男…子…？」

「待て姫路に島田よ！？なぜそこで疑問系なのじゃ！？」

「…とにかく、これでウチのクラスが十分勝てることは証明できた」

「うおおおっ！とFクラス内に興奮した雄叫びがあがる。

あれから十分して、ようやく俺と明久は復活し、雄二やその他も帰ってきた。雄二の制服がズタボロなのは全員スルーだ。

ちなみに、担任（本来教卓を粉砕！する人）は帰ってきてきて早々壊れた教卓を取り換えに出ていってしまった。影が薄いな…いやまあ、俺のせいなんだが。

「そこでだ！我々はまずDクラスに試召戦争を仕掛ける！！だが忘

れるな、最終目標はあくまでAクラスのシステムデスクだ！！それまでは通過点に過ぎない！！」

「「「「うおおおおっ！！！！」」」」

本来なら今の台詞には異義を唱えても不思議じゃない部分があったが、雄二の言葉を信用しているのかただ単に気づいていないのか、突っ込みはなかった。おそらく両方だろうな。

「そして明久。お前にはDクラスへの宣戦布告という大役を任命しよう」

来たか。

露骨に嫌そうな顔をする明久と、さわやかな笑顔の雄二が対象的だ。まあよく見ると雄二の口元は微妙に引きつっていて、笑いをこらえている顔である。

「…試召戦争の使者って、だいたい酷い目に合わされるんじゃないかな。つたっけ？」

基本的に上位クラスには下位クラスの挑戦を受けてもメリットは無い。そのため、明久の言うように下位クラスの使者はボコられる運命にある。

雄二は明久を騙してそれを楽しみたいんだろうが、今回それをさせるわけにはいかない。

「大丈夫だ明久、俺が」
「待て雄二、明久を使用者にするわけにはいかない」

何？という疑問顔の雄二に、俺は人情ではなく作戦的な意味でそれを却下する。

「俺と明久はあまり離れて活動できないんだよ。俺のことを知られたら困るだろう？」

それを聞いて雄二がむ、と唸る。

俺と明久はあまり離れられない。距離はよくわからない条件で左右されるので具体的にはわからないが、遠くなると俺が見えない糸に引つ張られるように明久に引き摺られてしまうのだ。何故なんだろうな？某ゲームのように考えるなら俺と明久には何らかの霊的なパスが繋がっているとでも解釈すればいいのか。でもサーヴァントに『距離制限』はないしなあ。

「そうなのか…しかし、そうなると困ったな。明久なら構わないが、他の奴らはボコられるのをわかってるから希望者がいねえ…」
「やっぱりボコられるんじゃないかこのバカ雄二！！」

お前は黙ってる明久、話が進まない。

「いや、大丈夫だそれについては考えてある。雄二、使者にはお前がなってくれ」

「おい、俺にボコられるってのか？」

「大丈夫だ、これを持ってけ…ムツツリー二」

「…用意してある」

そう言っつてムツツリー二が雄二に『あるもの』を渡す。

「ん？これで何を…ああ、なるほど。これなら大丈夫だな」

「だろ？まあ誰も酷い目に合わないしコレで行こう」

「お前も優しいな。んじゃ、行ってくるぜ」

そう言っつて雄二は教室を出ていった。

「ねえユキト、なんで雄二はあんなにあっさり承諾したの？」

「そうね。ウチも気になるわ」

「何か渡しておったのう…Dクラスへの脅迫か？」

「でも、ユキトくんは誰も傷つかないって…」

「…聞けばわかる」

そう言っつと、ムツツリー二がどこからかスピーカーを取り出した。雄二にいつの間にか盗聴器をつけていたらしい。いつの間にかやった

んだか。

「…違う。写真のほうにつけた」

悪用するつもりなら盗聴は大変危険な犯罪だ。しかし、この情報がDクラス戦に役立つかもしれない以上強く言えないのが困り物だ。

『…クラスの…ザザ…本だ…』

なんてやりとりをしていると、スピーカーから音が聞こえてきた。

『…Fクラスがなんの用だ？』

『ああ、ちよつと待て。その前に…清水って奴いるか？』

「げっ…何であの子を…？」

「島田さん、知ってるの？」

「えーと、まあ…」

「ああそうそう、島田。先に言っとく。しゅめん」

「え？何で？」

『…薄汚い男風情がなんの用ですか？』

『この写真と伝言を預かってきた。ほれ』
『こ、これはっ…!? 愛しの美波お姉さまの写真!?!』

「ちよつとおおお!!? 何でウチの写真があああ!!?」
「待つんだ島田さん! 今行ったら色々大変なことになる!!」

雄二を止めようと全力で駆け出す島田を、明久が羽交い絞めにして止める。

うーん、あの写真効果抜群だな。これは凄い。

「悪いな島田…これが一番皆が傷つかない方法だ」

「ウチの精神は傷つきまくりなんだけど!?!」

「お前が明久にやってることを考えたら軽いほうだろ」

「う…そ、それは…」

「まあ安心しろ。写真っていつでも水着とかじゃなくて普通の写真だし、将来盗撮される可能性を潰したとも言えるだろ?」

「…だからって…」

「まあ、今度明久絡みで御礼はするから勘弁してくれ」

「ありがとうユキト!!」

「ちよつと待って! 勝手に僕の命を引き合いに出さないで!!」

安心しろ明久。ただのデートの取り付けだ。まあ面白いから今は言わないでおくか。

『伝言の内容だ。これが欲しければFクラスの試召戦争を受ける』

『わかりましたっ!!』

『ちよつと清水さあんっ!!!?』

『言質は取った。んじゃ、俺はこれで』

『あ、ちよつと待つてください！伝言の主は！この素晴らしい写真を提供してくださったのはどなたですか!?!』

『あー、Fクラスのユキトって奴。んじゃ』

『ユキトさん…ひよつとして、あの…?』

よし、成功だな。

しかし雄二の奴、面倒なことが起こったら俺に押し付ける気満々だったな。まあ悪い感情は持たれてなかったみたいだし構わないか。

なんにせよ、これで準備は整った。
さあ、試験召喚戦争を始めよう！！

第三話（後書き）

あずにゃんにゃん！竹達さんは素晴らしいですよね！

なんとなく美春関連の伏線を張ってみました。回収しきれるように頑張ります。

4000字か…ギャグ詰め込みすぎですかねえ。ご意見ご質問お待ちしております。

第四話

キーンコーンカーンコーン…

「では、皆さん復習をきちんとしてくださいね」

そう言つて教師が教室を出た瞬間、空気が緩み溜息や話し声が教室に溢れ返る。

「全然わからなかつたな」

「バカめ。俺なんて全くわからなかつたぞ」

「フツ…お前らは甘いな」

「…なんだと？」

「俺なんて全く『聞いてなかつた』ぜ！！」

「…！？」

バカしかいねえなこのクラス。

今は4時間目が終わり昼休みだ。

Dクラスとの戦争は放課後すぐに開始となるので、きちんと休息を取れる時間はこれで最後である。

まあ、こいつらなら五時間目も六時間目も寝て過ごすだろうが。先生方も大変だ。

ちなみに、朝から今まで召喚獣の俺が何をしていたかというところ、意外にも一緒に授業を受けていたりした。明久から遠く離れられないのも理由のひとつだが、この学校の教師が教え方が上手いというのもある。まあこれだけ特殊な学校なんだ、教師陣についても力を入れるのは当然か。というか、スネークや社長が勉強教えてくれるんだぞ？そりゃ授業受けるわ。

ちなみに、筆記用具はiPhone。ちょうどタッチパネルのキーボードのサイズがこの体にとっては人間のソレと似たようなサイズになるのだ。技術の進歩は素晴らしい。

「ユキトはいいなー。授業中にゲームやっててもバレないんじゃない？」

お前らのようになりたくないからわざわざ勉強してるんだよ、言わせんな。

あと、『手先の微妙な感覚が明久へフィードバックしちゃうんじゃないか？』という疑問についてだが、どうやらフィードバックというものは一定のレベルを超えた場合にのみ発現するようで、なんでもかんでも明久が感じるわけじゃないようだ。そういえば視覚や聴覚も共有はしてないな。

話が逸れた。まあとにかく、昼休みである。

「みんな、お弁当食べようよ」

明久がその声をかけ、いつものメンバーがちゃぶ台に集まってくる。

「うむ。明久のおかずを今日も少し分けてもらおうかの」

「…パンを買ってくる」

「んじゃ俺も行くわ。早めに行かないと無くなるしな」

「相変わらずよく食うな。まあそのガタイなら納得だ」

雄二は弁当のほかにも更に購買で買ってくるようだ。胃袋すごいな。ちなみに俺はメシを食えない。こういうところは少し…いや、非常に残念だ。腹は減らないけど食事っていう行為は案外楽しかったんだなあと『前世』を思い出しまう。

「吉井、ウチらも一緒にいい？」

そう言いながら島田と姫路もやって来た。

いつの間にか二人は仲良くなってたみたいだな。あの二人は貴重な（二人だけは意見が分かれる）女子だからか、話が会うようだ。まあ、明久のこと以外ではあの二人の相性はいいんだろう。

「勿論構わないよ。ちゃぶ台もう一ついるかな？」

「ちよっと隣の借りるか、よっと」

「わあ…ユキトくん力持ちです」

ちやぶ台の足をひょいっと持ち上げた俺に、姫路が目を丸くしている。

この体の外見と性能が一致してないのはわかるが、さっきから姫路が俺を見る目が愛玩動物に対するソレになっている。おいおい、これでも精神年齢はお前らよりちょっと上なんだぞ？そこらへんをきつちり言っておかないといけな

「ユキトくんはここですね」

「何ッ！？何故俺は姫路の膝の上に!？」

あ…ありのまま 今起こったことを話すぜ！

『ちやぶ台を持ち上げたと思ったら膝の上にあった』

何を言ってるのかわからねーと思うが 俺も何をされたのかわからなかった

超スピードや催眠術じゃねえ…もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

「貴様っ！また姫路さんの体に密着して」

「えへへ…ユキトくん抱きやすいですっ」

「……がはあっ!!」「」「」

「須川の霊圧が…消えた…?」

Fクラス大量殺人事件発生。

姫路の笑顔に明久や他の男子が鼻血を吹いて倒れていく。ていうか須川、お前靈圧消えすぎだろ。虚とバトルでもするつもりか。あとムツツリーニ。お前はパン買いにいったんじゃなかったか？鼻血吹くために一瞬で戻るとは…大した奴だ…

そんな地獄絵図を生み出しておきながら嬉しそうな姫路。ひよっとして、ペットとか飼いたかったけど体が弱いから飼えなかったかなのか？アレルギー持ってそうだし。

「そつえば、吉井君のお弁当凄いですね…お母さんが作ってるんですか？」

俺を抱きしめて満足したのか、姫路が話を振ってくる（しかし俺はいまだに姫路の膝の上）。さすが姫路、空気を読めていないな。島田はなんだか複雑な顔をして拳を握り締めているし、秀吉は全てを諦めたように瞳のハイライトを消している。というかそもそも、周りの男子（かどうか微妙な奴を除いて）は鼻血を拭ってる途中なの

にな。

「はー死ぬかと思った…いや、僕の弁当は自分で作ったよ」

「え？ウチはユキトが作ってると思ってたんだけど」

「この身長で料理できるわけないだろ？それは明久の実力だ」

「うむ、ワシも保障するぞ。明久には料理を作ってもらったりもしているからの」

そう言いながら、明久の弁当箱からミニハンバーグをもらっている秀吉。美味しそうに食べているその姿はどう見ても美少女のそれである。

…なんか「まるでカップルみたいね…っ！」とか「羨ましいです…木下君」とか「ちょっと料理勉強してくる！」とか「お前に勉強ができるわけないだろ」とかの声が聞こえてくるけどスルーしておこう。

「うーん…でもちよつと意外ね。吉井が料理なんて」
などと島田が不思議がっている、

「おいムツツリーニ、ここにいたのか。いきなり居なくなっとうし…いや、大体わかったからやっぱいい」

「あ、雄二」

気付けば雄二が戻ってきていた。ムツツリーニについては鼻血の跡で察したらしい。うん、スルー安定だよな。

「何の話してたんだ？よつと」
「うわー、坂本の弁当も美味しそうね。家族の人料理うまいの？」
「いや、これは自分で作ったが」
「ええっ!？」

驚く島田に姫路。まあ外見からはこいつが料理できるなんて思わな
いか。

「まあ落ち着け二人とも、明久も雄二も嘘なんて言っていない。こいつらは料理が上手いんだ」
「い、イメージと違います…」
「吉井なら食費を遊びに使ってそんなものだけど…」

よくわかったな島田。俺がアイツの家で居候始めるまでは水と塩が主食だったよ。
生活を改善させるのには苦勞したぜ。クソゲーと神ゲーを選ぶセン
スや、中古を買うことを教えなけりゃどうしようもなかっただろう。

「なんで二人ともそんなに料理上手になったのよ？羨ましいわね」
「…家族が…」
「…触れないほうがいい」
「…え？な、なんかウチ、まずいこと言ったの？」

「島田：悪いのはお前じゃない。きつと、世界のほうなんだ…」

色々思うところがあるのか、高校生が背負うには大きすぎる哀愁を漂わせている二人。彼らはお互いの肩を叩き合い、励まし合っていた。友情が深まった場面に、流石の俺も彼らに対して涙を禁じ得ない。

「そ、そういえば坂本君！どうしてDクラスから攻めるんですか！？」

ナイスだ姫路！今度は空気読んだ！！
突然の話題転換だったが、わりかし重要なことでもある。雄二も自分を取り戻しつつその質問に答える。

「そのことか。まずEクラスを攻めない理由だが、これは必ず勝てるからだ」

「え？なんで？」

「姫路がいるだろ？明久。本来の実力ならEクラス全員でも姫路には勝てないさ」

「そ、そんな…」

照れる姫路。悶える明久。おいムツツリーニ、カメラをしまえ話が進まないっての。

「で、Dクラスを攻める理由としては、勝利することで自分たちはやれるという実感を持たせること、召喚獣の操作に慣れること、あとは下積みつてとこだな」

スラスラと喋る雄二。やっぱり頭がいいんだなこいつは。本当な、Aクラスなんて楽勝でなれるだろうに。まあ俺は『原作』でAクラスが嫌な理由を知ってはいるが、彼女だけが理由じゃないことも確かだろう。

「ふーん…まあ雄二に作戦は任せるよ」

「なんだかんだで、雄二はやる時はやる奴じゃからのう」

「…（コクリ）」

信頼を示す明久達。こいつらもいい奴らだよな。ただのバカっついてわけじゃなくて、何かしらの力を彼らは持っているんだろう。他人を信頼することとか、素直であることとか。そしてそれは、勉強ができるようになると大体なくしてしまうことが多いものだと思う。

「…やるなら勝てよ、雄二」

心からの言葉だ。やっぱり、世の中は勉強だけじゃないんだ。それを証明するためにも、彼らには是非勝利してほしい。

「安心しろユキト、俺たちは最強だ」

自信満々に、彼は言い切る。

それを見て、俺は薄く笑った。彼らならきつと、本当にやってくれるだろうという期待を持ちながら。

「だが雄二。油断はすんなよ？お前のことだ、小学生の問題とかだとナメてかかって返り討ちになりそつだ」

「……………」

「おい雄二」

「…善処する」

「それにしても、わざわざカレーを『つらく』したいなんて…どうしてですか？」

「文字でしか伝わらないネタやってんじゃねーよ!!」からく『だこのバカ!!』」

彼女の弁当を、しばらく見ることはなさそうだ。

第四話（後書き）

必殺料理人フラグを折りにいきました。

だが気をつけるユキト！彼女の腕を甘くみたら…ぐあああっ！！？

戦争始めるとか言いながらバトルはまだです。

今日は0時にかけて二話更新しますのでお許しください！

ああそうそう、ユキトはオタクです。まあ分別をわきまえてる奴なので大丈夫ですが。この作品だと鉄人と並んで一番大人なんじゃないかな？

第五話

ついに、放課後である。

正確にはあと五分。つまりまだHRなのだが、担任（大体のことは許してくれる人）の態度もあって、Fクラスは臨戦体制に入っている。

「いいか皆、それぞれの役割を果たせば絶対に勝てる」

「おうー！」「」

「が、頑張ってくださいみなさん！」

ちなみに、今回は姫路の出番はない予定だ。彼女はできるだけ温存してここぞという時に使う切り札だ。ムツツリーニの情報操作もあり、彼女の存在は秘匿されている。

本当なら姫路がいなきゃDクラスの代表は倒せないが、今の状況は『原作』とは違う。十分にいける！！

キーン…コーン…

「行くぞおっ！！」「」

チャイムが鳴った瞬間、実動部隊が一斉に外へ飛び出す。

「秀吉、島田さん、頼んだよ!!」

「アンタこそしつかりね!」

「任せるのじゃ! 皆の者、行くぞ!!」

ダダダダッ!

足音が遠ざかって、叫び声が聞こえ始める。始まったか…これは戦争、何が起るかはわからないものなんだ。

「姫路、雄二を守ってくれ。教室に入らせる気はないが、もし入ってきたらすまん」

「お願い、姫路さん」

「はい! お二人ともお気をつけて!」

そう言っただけ俺達も教室の外へ向かう。

それにしても、姫路は明久を本当に心配そうに見てたな。そういえば昼休みの後の十分休みに何か話していたようだが…明久が心配されるのってあんまり無いから意外だ。頭の心配はいつもされている

が。

「明久、さっき姫路と何を話してたんだ？」

「うん、『振り分け試験の時に怒ってくれてありがとうございました』って」

ああ、明久は確かテストの監督の教師に『途中退場が0点なのはおかしい』って抗議したんだっただな。それを姫路に御礼されたと。：
フラグ立てたな、明久。

「：でも結局、僕は何もできなかったからね。だからAクラスの設備を手に入れて、姫路さんみたいな頭のいい女の子にはふさわしい所で勉強してほしいんだ」

：本当に、大した奴だよこいつは。他人のために深く考えずそんなことができるなんて。

「まずはDクラスだ。勝つぞ、明久」

「うん！」

決意を胸に、俺たちは走っていく。

雄二の考えた作戦は『敵の戦力を固めた後、挟み撃ちにする』という基本的なものだ。

だが当然、学校というフィールドではそれを行うのは難しい。移動には廊下を使わざるを得ないため、相手の拠点の後ろへ移動するのが極めて難しいのである。

なら、どうするか。簡単だ。

廊下を使わなければいい。

「よっ…と。明久、んじゃ行くぞ」

「ここに怖いっ！もうちょっとバランスのいい持ち方ないの!？」

「仕方無いだろ、俺がこのサイズなんだから」

今俺達がいるのは、自分達のFクラスや敵であるDクラスがある階のひとつ下の階である。

より詳しく言えば、その階の教室の外にあるベランダ。

「ていうか、Fクラスのベランダから跳べばいいじゃないか！そうすればこんな怖いこと…」

「それは相手が予測できる範囲内だから駄目だ。相手もまさか『下の階のベランダから上の階に飛び移る』ことは想定してないだろ」

そう、俺達は…正確には明久を持ち上げている俺は、召喚獣ならではの常識外れな身体能力を活用することにしたのだ。

ただ、この体勢。俺が明久の腹を支点にして持ち上げている格好である。なので、俺の手が滑ったら明久は真つ逆さまに落ちるのだ。まあ召喚獣の握力なら滑らないし落ちてても明久なら平然と起き上がって文句を言うぐらいは楽勝だろう。

…こう考えると人間やめてないか明久。

「うっ…なんでユキトと離れられないんだ僕は…」

「んじゃ、いくぞー」

「え？ちよっ、ま…うわあああっ！？」

明久の返事を待たず、ダンッ！と手すりから跳躍する。

何やらベコオ！と手すりから変な音が聞こえた気がしたが、まあ気のせいだろう。

そのまま上の階まで到達し、着地。

うむ、問題なかったな。手すりなんて俺は知らん。

「こ、怖っ…!!ユキト!!せめて心の準備を」

「まあそう言うな、姫路のためだ。上手くやれば抱きつかれるかもしれないぞ」

「さあ、作戦続行だ!!」

扱いやすいなあ。絶対将来詐欺とかで酷い目に逢うなこいつ…いや、もう遅いか。雄二が存在している限り酷い目に逢うのは避けられない。

ともかく、俺達は相手の背後をつくことに成功した。後は当たって砕けるだ!

side 美波

「ぐわあっ!!」

「横田がやられたぞーっ!!」

「戦死者は補習うう!!!!」

「ぎゃああああっ！！」

くっ…マズイわね、数が減ってきてる。

挟み撃ちにすると言っても、一定の数がいなきゃ意味がないもんね…

ああもう！吉井とユキトはまだなの！？補習も嫌だし、それよりもDクラスには「お姉さまあーっ！！」「いやああああっ！！？もう来た！？

「見つけましたお姉さま！！麗しい写真も良いですが、やはり本物のお姉さまが一番ですっ！！」

「ちよつとやめなさい美春！！ウチは普通に男が好きなの！！」

「美春は普通にお姉さまが大好きです！！」

そんなこと言われてもホモサピエンスは異性を好きになるように出来ているのよ！！あーもう誰か助けてっ！吉井いつ！！

涙目になりながら、私はあのバカのことを想う。

助けて！早く来て！！

神様は、その願いを聞き届けてくれた。

「ああっ！霧島さんのスカートがめくれてる！！」
「「「「何いつ！！？」」「」「」」

今の私なら、アフリカゾウだって殺せるだろう。

「……………」

…何か気を引く台詞を叫べ、と明久に言ったら出て来た言葉はこれだった。

もう、さっきまで持ち上げてたのになんでコイツはこうなんだろうな？

69

「てやあっ！！」

「しまっ…きゃあああっ！」

唯一気を取られていなかった秀吉が、よそ見をしているDクラスの生徒を攻撃する。

Fクラス

木下秀吉

物理

82点

V S

Dクラス 鈴木純

物理 0点

秀吉の召喚獣が持っている薙刀で突きを放ち、Dクラスの生徒を撃破する。

「今じゃ！！Dクラスの間を突くのじゃ！！」

「『霧島さんのパンツを見た者に死を！！』」

なんか知らんがFFF団も殺気が溢れている。あれか、Dクラスの連中だけスカートの中を見て自分達は見れなかった、というような誤解をしているのか？実際にはそもそもそんな事実はないんだが。

「うん、効果あったみたいだね！よかったー」

「…確かに効果はあったな。…さよなら、明久」

「え？ユキト、一体ど」

ぐっせ

豊田のじよ、忘れるからじつじつじよになるんだよ。

小説で表現できない暴力が繰り広げられています。しばらくお待ちください。

「追いつきましたよ！おねえ…さ…ま？」
「やめとけ清水。巻き添えになりたいのか」

島田は今、一時的にニンゲンを超越している。この作品はR15ではないので肅正が終わったなら元に戻るだろう。ていうか戻ってくださいお願いします。

「…えーと…貴方が、ユキトさんですか？」

と、清水が俺に聞いてくる。

どうやらグロテスクな部分はスルーすることにしたらしい。賢明な判断だ。

「ああ、そうだ。久しぶりだな」

「…あの時はありがとうございました。それに、写真のことも」
「気にしなくていい。人間として…いや、今は召喚獣か。まあ、当たり前のことをしたただけだ」

「え？ユキト、美春に会ったことあるの？」

「ああ、ちよつと彼女のお父さ…変態を撃退したただけだ」

「あの時は本当にありがとうございました…ってお姉さま!？」

「うおお!？島田!？」

はえーなオイ！明久の処刑に手馴れすぎだろ！！ていつか返り血すらついてないんだが何が起こってたんだよ！？

「吉井のこと、いつも考えてるから……」
「おかしいな、乙女のような台詞のはずなのに」

俺は背筋に恐怖しか感じない。

「お姉さま、その男のことを……！？そんなの認められません！」
試
獣召喚サモン『……！』

特有の光と共に、清水の召喚獣が現れる。おお、俺と同じサイズで親近感が……じゃなくて。

「……から待ってって清水」
「ああっ！？ユキトさん、どうして邪魔するんですかっ！？」

とりあえず、清水の召喚獣を羽交い締めにして動きを封じる。精密

動作で俺に勝てる召喚獣はいないだろうな。

「駄目だろ？相手の嫌がってることを無理矢理やったら、お父さ…
あの変態と同じだろう？」

「うっ！」

「まあ性別とか色々言うべきことはあるんだが、それは置いておく
としてだ。お前は島田が好きなんだろ？」

「は…はい」

「なら、自分の好意を押し付けられるだけじゃなくて、相手に自分のこ
とを好きになってもらうように、努力しなきゃいけないはずだ。島
田に振り向いてもらいたいんだろ？」

「それはっ！勿論です！！」

「なら、やり方についてはちゃんと考えなきゃ駄目だ。俺の言うて
ること、わかるな？」

「…ユキトさん…」

「…やれやれ。わかってくれたようで何よ」

「『試^{サモン}獣召喚』っ！！」

「うにゃああああっ！！！？」

Dクラス 清水美春

世界史 96点 0点

…あれ？

羽交い締めにした清水の召喚獣が、島田の召喚獣のサーベルを受けて倒れたぞ？

…えええ…？

「ナイスよユキト！これでウチの貞操は守られたわ！！」

心底安心したように島田が俺に笑いかける。
やべえ。やつぱり島田もバカだ。
人が清水にしていた説教を何も聞かず不意打ち。正直これはないだろ。

「…つづ…ユキトさん…」

清水…哀れな…

「…清水。やっぱりお前は自分の思う通りにしていいよ」

「でも、ユキトさん…」

「ああ、大丈夫だ。そろそろだから」

「えっ？」

本来なら島田に教えてやるところだが、今回はあまりにも酷い。こは清水の気持ちを優先させてやるう。

「あれ？ユキトと美春って、なんの話だったのかしら？なんで二人で話し合って」

「Dクラス代表、平賀です！『試獣^{サモン}召喚』！！」

「え、なっ…きゃあああっ！！！？」

Fクラス 島田美波

世界史 57点 0点

ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト

「戦死者は補習うううう!!!」

平賀くんマジよくやった。

まあ、Dクラスの教室ごと挟み撃ちにしたんだ。
とにかく包囲を突破しないと非常に危険だからな。そうなるとう然、
相手は敵が少ないほうに来るに決まってる。

「じゃ清水。席は隣だ、頑張れよ」

「ゆ、ユキトさん…！ありがとうございます！これからは美春と呼んで下さい！！」

「ああ、それじゃあな美春」

「嫌あああああああっ!!!?」

引き摺られていく二人。

幸せそうに手を振る清水…じゃなくて美春と、絶望している島田の顔が対象的だった。

因果応報って奴だ。

第五話（後書き）

美波ファンの皆様ごめんなさい。

別に彼女のことは嫌いじゃないです。ただ、美春をもっと好きなか
けです。

純に関してはつい出来心で…アニメでのプッシュに僕は小躍りして
ます。さすが京アニや…！

第六話

さて。

尊い犠牲を見送ったところで、今の状況を確認しよう。

現在、FクラスとDクラスの闘いは拮抗している。本来ならFクラスが大幅に不利なのだが、FFF団の熱意（殺意とも言う）による結果だ。

ムツリーニが保険体育で勝負を挑んで少しずつ数を減らしているところを見ると、むしろFクラスが有利かもしれない。

「Fクラスの吉井か：どうやってここまで来たんだ？廊下はふさがれていたはずなんだが」

Dクラス代表の平賀が明久に語りかける。

：平賀君、明久はただ倒れてるように見えるけど、あいつの体内では今、人間として奇跡ともとれる再生が起こってるんだ。だから多分君の言葉は聞こえてない。

「だが、お前一人じゃどうしようもないな。

『観察処分者』ってのはバカの代名詞だろ？挟み撃ちってのはな、挟む戦力がそれぞれそれなりの戦力を持ってなきゃ成立しないんだ。お前の成績じゃ、Dクラスは――」

「安心しろ、それは計算済みだ」

「…ん？」

不思議そうにキヨロキヨロとあたりを見渡す平賀。
倒れている明久を見て、闘っているFクラスの奴らを見て、『？』
マークを浮かべ、

俺と目が合った。

「ええええええええっ！？召喚獣が喋ってるっつっ！！？」

…まあ、そんなリアクションだよな普通。
Fクラスの際は姫路があんなことしたからつやむやになっただけ。
しかし、なんか哀しくなってくる…俺だって好きでこんな姿になっ
てねえよ。

…まあ、それはこの際置いておこう。

「おい明久、起きろ。出番だぞ」

「うう…エイリアン…プレデター…はっ！」

…なんの夢見てたんだか。

さて、明久も復活したし準備も整ったな。ああそうだ、ついでだから彼に言いたいことも言っておこう。

「…平賀。確かに俺たちはFクラスだ。けどな、今もこうやってDクラスと張り合ってるんだ」

「…何？」

「『観察処分者』。それは事実だ。Fクラスがバカなこと否定しない。けどな」

俺が平賀に言うこと。それは雄二や明久、秀吉にムツツリーニ、それと島田や姫路…Fクラスの全員が抱えている気持ち。これを証明するために、俺たちは闘うんだ。

「…バカだと思って、嘗めるなよ」

「っ！『サモン試獣召喚』！！」

平賀が召喚獣を召喚する。なら、こっちも行くぞ！！

「明久！！」
「うん！！」

「『武装顕現』！！」

言霊を紡いだ刹那に、空間に光が満ちた。召喚獣を呼び出すときに
出る光に似たそれは、しかし密度と量が比べ物にならない。平賀は
たまらず、目を腕で覆った。

そしてその神秘的な光は、まるで誘われるように、俺の右手のあた
りに集まっていく。

光は次第に輝きを増して、やがて細長い何かを包むようなカタチを
創り出し――

バシユウツ！

「な…何だ！？普通の召喚じゃないっ…！？」

俺の手の中に、確かな重さを持つものが創り出されていく。

それはまるで、小さな小さなパズルを物凄い速さで組み上げていくように――

リアライズ
武装顕現。

俺の体は他の召喚獣とは明らかに違う理で活動している。

たとえば、普通の召喚獣は教師が張った専用のフィールドでしか活動できないが、俺はそんなものを必要とせずに活動している。

さらに、普通の召喚獣とは違い、五感があり、意思を持ち、まるでニンゲンのような特性……『魂』とでも呼ぶべきものが備わっている。

さて、ここで疑問が生まれる。

普通の召喚獣は、テストの点が0になると消滅する。そして、召喚者が点数を補充するまで召喚することができなくなる。

しかし、これは逆に言えば、点数がなくなっても補充さえすれば再召喚できるということだ。

では、俺は？

俺の点数が消滅してしまった場合、果たして俺はどうなってしまうのだろうか。

他の召喚獣と同じように、明久によって再召喚できるのか。それとも、人間における死と同じように二度と召喚できなくなるのか。

答えは、誰にもわからない。

実験して試すというわけにはいかない。俺は失敗すれば死ぬというリスクを背負うのはバカげているし、学園側としても貴重な存在である俺を失うわけにはいかない。

しかし、この学校には召喚獣である俺にとってはまさに命の危機に晒される場である『試験召喚戦争』システムがある。

学園側としては曲がりなりにもこの学園の生徒である明久から、その権利と義務を奪うわけにはいかない。

そこで考案されたのが、召喚獣の『武器』に点数をつけるというも

のだ。

『武器』を独立した召喚獣のように見立て、点数を付加させる。点数に比例して武器は強化され、そして武器が破損したら戦死扱いとなり、補修を受ける。

『武装顕現』は、明久にとっての『闘う存在』を呼ぶ言霊なのである。

…鋭い奴ならもう気づいただろう。

この武器は、明久の点数によって強さが変わる。なので、

…俺の手に握られているのは、ただの木刀だった。

Fクラス 吉井明久

現代国語 34点

「待て！？それはないだろう！？こんだけシリアスな空気を作った上に勿体ぶった描写をしておいて！！！」

平賀がキレた。まあ、そりゃそうだよな。あんなだけ長い描写の果てがコレとは。

だが、あえて言うなら…明久が格好つけられるわけないだろバカ！
！（ユキトも犠牲者です。怒らないであげてください by 作者）

「いやあ、現国は…その、ちょっと居眠りを」

「言い訳はいいぞ明久」

やれやれ、と溜息をつく。まったく、こんな武器とはな。相手はちやんとした鉄製の剣だぞ？

「…勝つのが大変になるだろうが」
「…っ！バカにしゃがって…！」

だっ！

平賀が召喚獣をこちらに突撃させてくる。
そして、そのまま俺に向かって剣を振り上げる。袈裟斬りか、だが…

「…動きが単調だ！」

召喚獣に足払いをかけ、体勢を崩したところに木刀で一撃。
たまらず転んだ相手に、

「はああっ!!」

力を込めて突きを相手の腹に打ち込む。

ガキン!という音がして、相手の鎧が弾け飛んだ。

…むう。今、木刀のほうも嫌な音がしたな。気をつけて使わないと
自爆しそうだ。

まったく、どんだけ弱いんだよ明久?

「くそ!? 点数では倍以上勝ってるのに!？」

平賀が叫ぶ。焦っているのか、苛立っているのか。なににせよ、さ
らに動きが単純になってるぞ…!

「操作性能が粗けりゃ宝の持ち腐れだ!!」

横に薙いできた剣をかがんで躲し、相手の腹に蹴りを入れる。

鎧は壊しているの、足には柔らかい感触。一瞬遅れて、平賀の召
喚獣が壁に叩きつけられる。

俺は『今の設定』では木刀以外の攻撃で相手の点数を減らすことが

できない。だが、隙を作れただけで十分！！

「ユキト！今だよ！！」

「言われなくてもっ！！」

全体重をかけて、右足を踏み込む。パン！と床を打つ音と同時に、

「でやああああっ！！！！」

バキイン！！

渾身の力を込めた振り下ろしに、木刀が耐えきれずに砕け散る。

だが、

「…そんな、バカな」

平賀の呆然とした眩きと共に、

ピューン！

試召喚戦争の終了を告げる笛が鳴る。

そう。木刀は碎けはしたが、それと同時に平賀の点数は0となった。

つまり。

「そこまで！Dクラス代表は戦死した！」

よって、勝者は

Fクラス!!!!」

「…え？」

「…マジで？」

そんな声がFクラスの面々から漏れる。

明久のほうを向くと、ニヤリとした笑みを返された。
俺の口元もついつい緩んでしまう。

「何してんだお前ら？ポカーンとバカ面見せやがって」

そんなことを言いながら、雄二がFクラスの教室から出てきて、

「俺たちの勝利だ!!!」

大声で叫ぶ。

「…勝ったのか」

「俺たちFクラスなのに」

「マジかよ…」

「「「いよっしゃあああああ……！」」」

Fクラスの歓声が響く。

「まあ、まだ通過点なんだけどな」

「それでも凄いよ、本当に勝ったんだから」

「ああ。…今は、素直に喜ぶか」

そう言って、俺は明久と拳を突き合わせ、

「「楽勝……！」」

勝利の喜びを噛み締めるのであった。

こうして、新学期最初の試験召喚戦争は、Fクラスの勝利で幕を下ろしたのである。

「と言いたいところだが。吉井、これを見る」
「え？なんですか西村せん…」

Fクラス ？ 吉井明久
現代国語 ？ 0点

「…は？」

「あー…悪い…明久」

さて。俺たちのみの特殊ルールにより、明久は武装が壊れたら戦死となる。

で、そこに転がっている破片は壊れた木刀のものである。ということとは、

「戦死者は補習だ、吉井」

なんということでしょう。そこには、不敵な笑みを浮かべるスネークの姿が…！

「なんで僕だけこんなオチ！？地獄の補習は嫌だあああああああ
っ！…！！」

明久の絶叫は、余すことなく廊下に響いたのであった。

…ごめんな明久。せめて俺は、島田のお前に対しての八つ当たりを
なんとかするよ。

第六話（後書き）

初バトル。前回入りきらなかった『主人公の点数がなくなるとどうなるか』を解説してみました。まあ、実質的には『わからない』っていう回答と同じなんです。バカだな作者！！

そうそう、このサイトってアクセス数を調べられる機能がついてるんですよ。折角なので僕も調べてみました。

一日目 約800

二日目 約1200

三日目 約3000

！？

なんだこの変化は！？というか予想外に多くの方に見ていただいているようで、感謝の気持ちを得ると同時にバカテスという作品のネームバリューを感じました。

お気に入り登録や、評価を下さった方もいらっしやっただようで、本当にありがとうございます。

…というわけで徹夜で更新してみました。眠れなかった結果がこれだよ！

皆様のご意見・ご感想などお待ちしております。

次回はユキトの設定とかの解説になります。

この作品の設定など（前書き）

今回は本編ではなく、設定集をお送りします。

本編で出したことのまとめだけなのは嫌だったのでどうでもいい伏線とかネタを用意してみました。

まあ大したものではないんですが。

この作品の設定など

作中設定

・キャラクター

ユキト（柊 雪人）

『生前』のデータ

身長：173cm

体重：60kg

年齢：17歳（高校二年）

容姿：黒目黒髪、髪はやや長め。

顔は普通だがきちんと磨けばイケメン。

身体能力は並。100人参加のマラソン大会で57位。

現在（召喚獣の姿）のデータ

身長：ぎゅっとすると丁度いいサイズ（瑞希談）

体重：猫ぐらいかな（明久談）

容姿：元の顔をデフォルメしたような感じ。声はやや高くなっている。

この姿で話したりてくてく歩いたりすると可愛くて生きているのが辛い（瑞希談）。

能力：召喚獣のため超絶的な身体能力を誇る。

明久を抱えて上の階へ楽々ジャンプできたりするレベル。

じゃあなんで瑞希の抱擁から逃げられないかって？あのマシユマロに手をつまめるほど恥知らずじゃないですよ彼は。

共通項

性格：平等。

誰に対しても公平に接する。

女子勢からの暴力フラグをさりげなくへし折ったり、瑞希の料理フラグをへし折ったり、雄二や明久が真実を知れば涙を流して感謝するようなことをさりげなく行っている。

つまり、超いい奴。この作品の中では鉄人と並んで常識人。

趣味：ゲームやアニメ、パソコンいじり

つまりはオタク。ただ普通にいい奴なのでそれが問題になることなど無い。会話のそこらにネタを突っ込んだりする。

好みはバトルもの。まさかこの世界に富樫がいて、しかも似たような休載しているとは思ってなかったので、心底驚愕したという。

好きなもの：風呂、他人の召喚獣、音楽

飯が食えないので風呂好きに拍車がかかった。別に汗をかく体ではないがやはり好きなものは好きらしい。

風呂には服を着たまま入る。服は体の一部のようなもので、特に不快感はないらしい。

召喚獣が好きなのは、自分と同じサイズで安心するから。

音楽は初音ミクやアニソンが多い。ちなみにiPhoneやパソコンは学園長と交渉して手に入れました。

嫌いなもの：格ゲーにおける厨キャラなど、理不尽なもの。超展開。人の話を聞かない奴。

Dクラス戦のときの美波は彼にとって色々アウトだったのであいうことに。それでも美春の手助けをしてあげるのが彼らしい。それと、普通の人が生理的に嫌うものも普通に嫌い。グロ画像に耐性はあるが。

備考：他人の心の機微に敏感。まあバカテスに登場するキャラは大体分かりやすいが。

異性から自分への好意もちゃんと理解するが、『前世』では縁がなかったうえ、召喚獣である自分にそんなものが向けられることも無いだろうと思っている。

でも美春とフラグが立ちつつあるよね？

評価：

彼の周りの人から話を聞いてみました。

明久「ユキトがいなかったら死んでたよ」

食費管理などしてもらって、感謝している様子。

雄「ユキトがいなきゃ死んでたな」

彼も何かしら世話になっているようです。家族関連とか。

秀吉「ユキトがいなければ死ぬところじゃった」

優子さんから助けられていたのです。

ムツツリー「ユキトのせいで死んだ」

鼻血は自爆です。

瑞希「ユキトくんのせいで死んじゃいますっ」

可愛いすぎて生きているのが辛いようです。彼女の中の可愛いメン

キングではアキちゃんとユキトが同列一位。

美波「ユキトのせいで死んだわ…女として」

因果応報という奴ですね。

美春「ユキトさんのおかげで昇天できました…はふう」

おい馬鹿やめろこの作品は全年齢向けだ！

というか命に関連する事柄以外ないのか！なんだこのヤクザの組員
同士の仲間意識みたいな関係は！

翔子「ユキトの」

なんで居るんですか！？ネタバレはやめてください！！

・設定

『武装顕現』

リアライズ、と読む。漢字はどう見ても作者の厨二病のせい。

武装そのものに点数を用意して、ユキトが命を賭けずに試召戦争を行えるようにするためのシステム、または発動時の言霊。

なお、ユキトに暴れられるとシャレにならないので明久とユキトが同時に言霊を唱えないと武器は出てこない。

また、この武器は普通の召喚獣と同じ扱いなので召喚フィールドがなければ展開できない。

最低ランクの武器は木刀だが、点数が上がると…？

どんな武器持たせようか作者の妄想が止まらない。

『ユキトの体について』

- ・ 召喚者から一定距離以上離れることができない。『距離制限』。
- ・ 『観察処分者』の召喚獣なことには間違いないので、召喚者へのフィードバックが存在する。
- ・ 召喚フィールドの外でも活動できる。ただし武器は出せない。
- ・ 自分で考え、動ける。五感もある。食欲・性欲は『この姿ではない（というか出来ない）』。睡眠欲はある。
- ・ 一年のころから存在しているが、他のクラスの人は存在を知らない。人形だと思ってたらしい。ご都合主義すぎる。
- ・ 濡れても大丈夫だが温度の変化の限界は人間と同じ。しかしやや鈍い。
- ・ 服は脱げない。体の一部のようなもの。学園側のシステムで変更はできる。ちなみにすぐ乾く。
- ・ いくら特殊とはいえ、文月学園の召喚獣はテストの点数がなければ存在できないはずだが…？

以下、追加の設定があれば区切りのいいところで新しい設定を投稿
します。

この作品の設定など（後書き）

というわけで設定集でした。

なんだかユキトが聖人みたいな書き方ですが、彼は明久をからかったりも普通にしますよ？

バカテスの世界観から見ると『臨死体験させないなんてこのキャラまともだな！』という前提がありますが、冷静に考えてください。このりくつはおかしい。

設定のどこかに穴があったらごめんなさい。ギャグ作品だから許して：許されませんよねやっぱり。井上先生、お許しください！

今回はDクラスの処遇と、Bクラスへの話です。お楽しみに。

第六・五話（前書き）

一万PV記念、本来なら書く予定のなかった補修室でのお話です。

美波ファンの皆様はマジでごめんなさい。

第六・五話

補修室。

鉄人こと西村先生により、『勉強大好き！尊敬する人は二宮金次郎です！』という人格になるまで勉強させられるという、地獄とも呼ばれる場所。

そのわりには『原作』で明久たちが勉強大好きになっただけという描写はなかった。

意外と地獄ではないのか、それとも彼らがバカ過ぎるだけなのか。いや、考えるまでもなくバカなだけなんだろうなあ…

さて、そんな地獄の補修室に今俺たちは来ている。

明久が来るハメになったのは俺のせいだし、多少の勉強は見てやろうかなーなんて思っていたのだが。

なんで皆廊下で補修してるんだろうか。

「…スネーク、なにやらせてんだ」

「…いや、俺も知らんが…というかその呼び方はやめると言つのに」

どうやらこの奇妙な状況はス…鉄人「それも違つだろ」がやらせたわけではないようだ。

だとすると何故こんなことをしているのだろうか。逃げるつもりか？それにしてはやけに教室のほうを見ているような

『さあさあお姉さま！この漢字はなんと読むのですかっ！？間違つたら脱衣ですよ！！』

『うっうっ！！か、漢字じゃなくてせめて数学に…』

『駄目です！苦手科目を改善するために補修というものはあるんです！！』

『脱衣うんぬん言ってるのになんで言ってることはまともなのよ！』？

ああ、大体わかった。

「ちくしょおっ！！なんで俺たちが廊下に出なきゃいけないんだ！
」！

「このドアの向こうに桃源郷があるってのに…！」

「相手が勝手に脱いでるんだから俺たちが目に焼き付けても問題ないだろ！？」

FクラスどころかDクラスの男子まで血の涙を流している。駄目だこの学校はやくなんとかしないと。

「させないわよ！同じ女子として柔肌は絶対に見させない！」

「清水さんは女子に対しては案外いい子なんだからっ…！」

「ここで見させたらムツツリ商会に写真が出回るに決まってるわ！
」！

力強く叫ぶ女子一同。

結構好かれてるんだな、美春。しかしムツツリ商会に関しては警戒しすぎじゃないか？別にムツツリーニは補修室送りにはされてないんだからなあ。

「…無念っ…！」

訂正。警戒つてのは、しすぎて困ることはない。

「つ、つまり…今、教室の中には全裸の島田さんが!？」

「島田が漢字を一切読めないって断定はやめてやれよ明久」

ともかく、そんなわけで女子勢が男子を外に出したわけか。

うーむ、美春の行動にはやりすぎの点があるのは間違いないだろう。自分に正直になってもいいとは言ったが周りに人がいる中で脱がすとは。明らかにこれはやりすぎだ。

…ん？おかしいな。美春なら『お姉さまの素肌は美春だけのものです!』とか言いそうなんだが。

とにかく、盛大に溜息をついている鉄人と、ムツツリー二と天井から盗撮できないかという可能性を模索している明久を放置して、教室の扉をノックする。

ちなみにDクラスの連中は俺を見て目を丸くしていた。その反応飽きたよ。

「おい、聞こえるか美春」

『え？その声はユキトさんですか？』

よかった。まだ話を通じるくらいには理性が残ってた。

『ユキト！？ユキトなの！？助けて、ウチに漢字という名前の悪魔と美春という名前の変態が襲いかかってくるの！！』

『うふふ…お姉さま、靴下はつけたままのほうがいいですか？それとも…』

『いやあああつ！？変態があつ！？』

なんだか割とマジで泣きそうな島田の絶叫が聞こえる。うーむ、かなり危険な状態みたいだな…果たして俺はこれを止められるのだろうか…

「ちよつと待つんだ、清水さん！！」

『吉井！？』

俺がどんな言葉をかけようか悩んでいると、明久が教室に声をかけた。
おお、やる時はやるじゃないか明久！その調子で、なんとか島田を救出してくれ！！

「靴下を脱がすのには断固反対だ！そんなことしちゃいけない！！」
…（コクコク！）」

さっき少しでも期待していた自分を殺してやりたい。

『えっ…！？そ、そう。吉井はそういうのが好みなんだ』
『バカな豚野郎にしてはわかってる事を言いますね』
「」「」「そうだ！よく言ったぞ吉井！！」「」
「」「」「悔しいけど、女子からみてもそれは正しいわ」「」

なんでお前ら普通に返すの!?

ひょっとして俺がおかしいのか?ここではそういうルールがあるのか?それとも全員全力でバカなだけか?

ポン、と鉄人が俺の肩を叩く。

「学校は変わった」

「…スネーク…」

「だから違うというのに」

いや、その台詞はもはや確信犯じゃないのか。

って、こいつらのペースに乗せられてどうする！話しがズレすぎてるんだよ！いい加減本題に入らないと！！

「おい待て美春！流石に島田の服を脱がすのはマズイだろう！！考え直せ！！」

「え？ユキトさん、何を言ってるんですか」

「何？」

なぜか、美春はそんな返答をしてきた。どういう事だ？俺たちは、何か思い違いをしてるっていうのか？

「脱ぐのは美春ですよ？」

その発想はなかった。

『うふふ…衣服は理性を維持するための鎖…それを外していけば』
『何かよくわからないけど、ウチも結局は脱がされそうな気がする』
！？』

わー、教室の中からピンク色の何かがもれてるよー。

…つまりこういうことが。

島田、お前が頑張って漢字を覚えれば全て丸く収まる!! (迫真)

というか、俺が問題にしていたのは『他人の服を大勢の前で脱がす』ことなので、『自分の服を脱ぐだけ』なら別に問題にはならない。自己責任という奴だ。

女の子がそういうことするのはどうかと思うが、『好きにやれ』って一応言っちゃったからな、俺。

ふむ、つまり俺が今するべきことは、

「美春。女の子が大勢に肌を晒すのはよくないし、そこに居られると補修ができないだろ？場所を変えなさい」

『わかりましたユキトさん!』

『ちよっとお!?!ユキト、ウチを見捨てるの!?!』

ふう、これが一番被害が少ない方法だな。今頃Dクラスの代表と雄二が今回の戦闘の結果について話し合ってるし、早く戻らないといけないんだよ俺は。

「つまり、補修が終わった奴からあいつらを探してのぞく権利を得るわけだな！」

「…俺は補修する必要はない」

「ムツツリーニ！録画はできるか!？」

「…任せろ」

うおおお！と湧き上がる歓声。今この瞬間、戦争していた彼らDクラスとFクラスの気持ちは一つになった（ただし男子限定）。
どうしようもないな、本当に。

「おお、そういえば脱ぐのは清水だったな。胸がゼロじゃなくなっただぞ」

ぼそり、と誰かが呟いた。

女子勢が顔を真っ青にして呻いていた。

そのくらいの反応でよかった。この状況なら、精神的にショック死してもおかしくないし、心に甚大なトラウマを残す可能性もある。

「（…ユキト、どうしよう）」

明久が俺に小声で言う。

その顔にはびっしりと冷や汗が浮かんでいる。かくいう俺も、恐らく汗はかかないが同じような顔をしているだろう。

視線を前に向けると、そこには島田…『だった』殺戮の主が立っている。

たった五分。

たったの五分で、俺と明久を除く補修を受けていた男子全員が肉片に変えられていた（あと美春も）。

この作品は全年齢向けだというのに…！

こんな展開の引き金を引く文月学園の生徒達を、俺は憎む。これだけ苦勞を背負わされていれば、奴ら憎んだところで誰にも文句は言われないはずだ。

「…みんな、オナジコト…イウノネ…」

ぞくうつ…！

「（…くっ…！？）」

島田に見えるナニカが、そんな言葉を零す。それだけで、言い表せないほどの殺気が撒き散らされている…！

あまりの圧力に、膝が震える。

召喚獣として強大な力を持っている俺だが、…いや、持っているからこそ判る。アレには勝てない。アレは次元が違う。闘えといわれて実行に移せるのは、異世界の白い冥王様（19）ぐらいだろう。正直に言っただけ逃げ出したいところだが、被害拡大を防ぐために既に鉄人が召喚フィールドを張っているのも無理だ。

だが、まあ…今の島田なら男子だけでなく、胸の大きい女性さえもその手にかかる可能性があるため、その判断は正しい。

…腹、括らないとな。

「（…策なら、ある）」

「（…！本当、ユキト！？）」

「（…成功するかどうかの保障はない。しかもこの策には、明久。お前の協力が必要だ）」

「（…大丈夫、信じてるよユキト。君はいつだって、僕を助けてくれた。だから、今回だって大丈夫だよ）」

「（…ああ、そうだな）」

絶望的な状況だが、俺と明久には今までよりも更に硬い友情が結ばれた。これで、あつちに逝っても俺は元気にやれるだろう。

…いや、弱気になってはいけけないな。俺たちは帰るんだ！あの、バカばかりだけど楽しいFクラスへ！！

「…アンタモ…ウチノコト…」
『 ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?
ッテ…イウノ…?』

ギギギ、と首を動かしてこちらを向く島田。

…迷っているヒマはない…!

「（明久、いいか、こう言っただ!）」
「（わかった!）」

「あー、そういえば！今度のデート、『美波』はどんな服着てくるんだろっ！！」

「…エ？デート、…？…ああっ！？そういえばユキトが吉井とのデート約束してくれたんだっ！？どどどどうしよう！？可愛い服？それとも、大人っぽいほうが吉井は…っというか今『美波』って…！あうっ…！？こ、こんな場合じゃないわ！可愛い服とか見てこないと…！！」

死神の顔から、急にいつもの顔に戻り、真っ赤になりながら百面相する島田。

そして早口で何か言いながら自己完結したかと思うと、急に駆け出して行ってしまった。

「っつて、あれ？なんで召喚フィールドがあるのよ！？ウチは急いで

帰って服とかの準備しなきゃいけないのに……あ、消えた！」

よし！スネーク空気読んだ！！

緊張したまま島田の足音が遠ざかるまで待ち、遠ざかってから一分ほどして、ようやく危険が去ったことを確認した俺たちは廊下に入り込んだ。

「助かったんだ、僕たち」

「……ああ」

「大丈夫か、お前達！？」

スネークが走って駆け寄ってくる。

手ぶらだったはずの手には、多種多様な救命道具があった。

……ああ、アンタは教師の鑑だよ。今を見てしまったら、逃げても誰も責めたりしない。なのに、アンタは周りへの被害を防いで、なおかつ犠牲者への配慮も欠かさないんだ。

「…先生…ムツツリーニたちや、みんな…助かりますよね…？」
「ああ。必ず助ける。だから、安心しろ」

力強い言葉に、明久は弱々しく、だが嬉しそうに笑った。
俺も肩の力を抜き、廊下に寝転がる。

「ああ…生きてるって素晴らしい」

この事件で、俺は忘れていた大事な…とても大事なことを、思い出した。
車に轢かれて、この世界に来た。死んでいないってというのはとても幸運なこと、生きることができるっていうのは幸せなことなんだ。それを俺はいつのまにか忘れていた。

だから、もう決して忘れない。この幸福を、大切さを。俺は深く心

に刻んだのであった。

「明久、今度から島田のことは『美波』って呼ぶようにしろよ」「
うん。理由はわからないけど、それで助かったみたいだからね」

∴ 本当なら、理由もわかってほしいんだがなあ。

ちなみに、この事件により島田の『彼女にしたいくないランキング』が上がったが、それを俺たちが知るのはしばらく後の話である。

第六・五話（後書き）

PVが急激に多くなって驚いた、という話をあとがきでしました。

一昨日 PV約3000

昨日 PV6194

（ ^ q ^ ）

（ ^ q ^ ）

飲んでたコーラ吹き出したわ。

というわけで、一万PVを達成しました。皆様、本当にありがとうございます。ございます。

何か記念に書こう、と思って妄想を始めたらまた美波いじめが出来上がりました。

これはファンの方にマジギレされる内容なんじゃないか？と心配でなりません。

さて、さらにこの作品に二通目の感想をいただきました。ありがとうございます。

その中に、『ユキトに食欲はないが他の欲はどうか』というご質問がありましたのでこの場を借りてお答えします。

睡眠欲：あります。精神を休める意味もあるようです。

性欲：『この姿では』ないです。伏線。ヒントはお化け屋敷。

食事をしないのでトイレには行きませんし、汗もかきません。涙に関しては微妙なところですが、『システムの表現能力』が表現したものであるという設定でいきます。

というか、原作でも微妙なんですよこらへん。ムツツリーニが工藤さんの召喚獣を倒した時、葉賀さんのイラストでは血が出たりしていますし。

まあいざとなったら必殺ギャグ小説クオリティで乗り切ろうと思います。

ダメ作者でごめんなさい…

このへんは設定集にも後で追加しておきますね。説明不足申し訳ありませんでした。

次回、平賀君が出るかは微妙ですがBクラス戦へ突入！突入できないきや二話連続投稿になります。次回をお楽しみに。

第七話

いきなり極限状態に放り込まれて、なんとか生き残った俺たち。

必死な救命活動により、男子たちの命も救われた。それを見た明久は涙を流していて喜んだ。

やっぱり、Fクラスには固い友情が結ばれてるんだな。バカはバカでも、こういう良いところがあるのがFクラスだ。

「ムツツリ商会がなかったら生きていけなくなるところだったよ…
！！」

照れ隠しだと信じたい。

「へへ…生きてなきゃ、ムツツリ商会が使えないからな…地獄から帰って来たぜ」

「サンキュームツツリーニ。お前のおかげで、俺たちは助かったんだ」

「…俺も、まだまだ死ねない」

このバカ共が。

しかし、命が助かった場面で色々言うのもアレなので、ここは突っ込みを控えておこう。

そういうわけで、俺たちはなんとか、Fクラスに帰ってきたのであった。まだ新学期初日なのに、えらく懐かしく感じる。帰る場所があるって、それだけで幸せだな。

「ん？明久、早かったな。鉄人の補修室送りにされたんだ、今日は帰ってこないと思ってたぞ」

「姫路はたった今帰ってしまったしの。それにしてもどうしたのじや？明久」

「ああ、疲れただろうから今日は帰っていいって」

「異常事態だ！！」

驚愕に目を見開く雄二と秀吉。まあ、そりゃそうだろうな。俺だって何も知らなきゃ同じ反応だろう。

「あのゴリラがそんなこと言ったのか？ありえねえ、明日は槍どころか隕石が大量に振ってくるんじゃないか」

「コラ雄二！あんな人格者のことをゴリラなんて言っちゃだめだよ！！」

「…奴は教師の鑑」

「もうダメだ！明日は世界の終末だ！！」

いやいや、スネークは本当に人格者だから。

まあこの場合は明久とムッツリー二がそんな事を言ったからこんな

俺と明久以外の『アレ』を体験した奴らが漏れなくトラウマを呼び起こしている様に驚く秀吉。

そういえばDクラスの女子たちはあの惨状を見て大丈夫だったのだろうか？肉体的なダメージはなかったとはいえあの場面は女子には厳しいものがあっただろう。

「まあそれは明日確認するか。じゃ、帰るか明久」

「そうだねユキト」

「いや待てお前ら！何があつたのかぐらい教えろ！！」

「そうじゃ！拷問には普段から慣れているFクラスの連中がなぜこんなことに…！？」

「…秀吉。僕たちは少なくとも今、生きている。だからそれでいいじゃないか」

「明久！？目が虚ろになっておるぞ、しっかりするのじゃー！？」

もう面倒だ、全部スルー。

帰って風呂入って寝よう。肉体も精神も疲れきっているし、今日はよく眠れそうだ。

ちなみに、俺はこの姿、要するに服を着たまま風呂に入る。どうやら服も体の一部みたいな扱いで、着衣水泳みたいな不快感はない。体は元々汚れないし、湯船につかるのが心地良いのである。すぐ乾くしな。

「「そんなじゃ、さよならー」」

「「待て!!!この空間に置いて行くな!!!」」

大丈夫だって、死んでないなら。

で、翌日。

教室のドアを開けた朝の始まりは、

「お、おはよう…あ、アキ…」

「！！ お、おはようしま…美波」

「（…！？）」

照れながら明久のことを呼ぶ島田と、顔をいつも通りにしながらも足をガクガク震えさせている明久の挨拶から始まった。

昨日言ったように、明久はすっかり島田のことを名前で呼んでいる。よかった、忘れるかもと少し不安になってたんだよ。まあ、あいつは自分の命とかの大事なことが絡むと案外悪知恵が働くんだけどな。

「…ど、どうして吉井君は…というか、クラスの皆も何も言いませんし…まさか、公認カップル…！？」

…やりとりを見て姫路が教室の隅で盛大な勘違いをしている。実際にはみんな余計なことに首を突っ込んで死にたくないだけなんだが、まあ明久に島田を名前で呼ぶように言ったのは俺だし、今度何か埋め合せをしたほうがいいかもしれん。

「おう、来たか島田にユキト。作戦の説明をお前たちにはしてなかったからな、今しておくぞ」

「え、僕も聞いてないよ雄二」

「お前はバカだから説明しても無駄だ」

「なんだとこのバカ！」

「明久、お前が言うその言葉はとても重いんだ。軽々しく使うべきじゃない」

「ちよつと待つて！それは僕のことを最低クラスのバカだと扱ってすることに…真顔にならないでよ！！そつちのほうに傷つくからね！？」

大丈夫大丈夫、お前はバ…強いからすぐ立ち直れるさ。

「次はBクラスとの戦争になる」

雄二がそう切り出して説明を始める。

「昨日俺たちはDクラスに事実上勝利はしたが、名目上は話し合いによる終結になっている」

「雄二、なんでDクラスの教室をもらわないのさ？保険になっていないじゃないか」

「やれやれ…お前、試召戦争つてのには勝っても負けてもひとつの『制約』があるんだぞ？知らないのか」

「も、もちろん知ってるよ！」

「ほう、じゃあ答えろ。あ、ムツツリーニ。ちょっとペンチ貸してくれ」

「えーと、疲れ…ってちょっと待った！！なんでペンチが必要なのだ、そしてなんでムツツリーニはペンチ持ってるのさ！？」

流石FFF団の一員だけある、凶器はいつでも隠し持っているようだな。

しかし荷物検査をしているのにも関わらず見つからないとは何故なんだろう。お前らエロ本とかその技術で隠せばいいんじゃないのか？

「あの、吉井君。試召戦争をした後は、『三ヶ月間次の戦争ができなくなる』っていうルールがあるんですよ」

見かねた姫路が助け舟を出す。

雄二は盛大な舌打ち。本当に明久を不幸にするのが好きだな。

「まあ、そういうことだ。保険を取れるならとっておきたかったが、ルール上仕方ない。それに、Dクラスで設備に満足しちまう奴も出るかもしれないしな」

「へー、なるほど」

明久もDクラスに関しては納得したようだ。

「で、次にBクラスになるわけか」

「ふむ。Aクラスにすぐ仕掛けるわけにはいかんのかの？」

「正直に言って、Fクラスじゃどう頑張ってもAクラスには太刀打ちできない」

『原作』どおりだな。だから、Bクラスに勝って、設備を交換するかわりにBクラスにAクラスへ試召戦争を挑むように交渉するわけだ。

そのあたりの説明は原作と同じだったので、割愛する。

「それで、具体的なプランはあんのか？」

「ああ、DクラスにはBクラスのエアコンの室外機を壊すように言
つておいた」

「ふむ…窓を開けさせて、ムツツリー二の保険の点数を使うのか」
「察しがいいな。そう、ここまで伏せておいた姫路を使えば、ムツ
ツリー二を使える状況まで追い込めるだろう」

「…けど、Bクラスの代表は『あの』根本らしいぞ？」

「げ、マジかよ」

その名前を聞いて嫌そうな顔をする雄二。

『原作』の知識を使わずとも、根本の悪評は俺の耳に届いている。
カンニングやら嫌がらせやらで、かなりの嫌われ者として有名だ。
成績がよくてもどうしようもない奴はいる、という典型だ。

「そうになると、何かしらの対策が必要になるな」

「ねえ土屋、何か知ってることはないの？」

「…男に興味はない」

清々しい奴だな。俺は思うんだが、お前はオープンなスケベになっ
てないか？Wikipediaにも書かれてたぞ。

「あー…確か、Cクラス代表がアイツの彼女らしいぞ？ムツツリー
二、そのネタでなんとかならないのか」

ちよっとした『原作』の情報を使ってみる俺。なあに、相手は根本
だ。多少卑怯なことをしたって、何も問題ない。

「…調査しておく」

「頼むぜ。情報が多いに越したことはない」

雄二も念押しする。戦争は情報が命だからな。

よし、作戦の基本方針はだいたい決まった。あとは、

「今回の使者に誰がなるかだよな…」

そう、それが問題である。今回は美春みたいな人物がいなし、使者がボコられるのは回避できそうにない。

「やっぱ明久を…ん？」

雄二がそう呟いていたところ、彼の肩に手が置かれる。雄二が後ろを振り向くとそこには、

「「「「「我ら異端審問会。その役目、引き受けよう」「」「」

フードを纏った、クラスメイト達の姿が。

「準備はいいか？ムッツリーニ」
『…できている』

今俺たちは、ちゃぶ台の上に置かれたモニター越しに、使者として向かった異端審問会の様子を見ている。

これは根本が『試召戦争を受ける』という発言を記録して、言い逃れできないようにするためだ。本来は音だけでよかったのだが、都合により映像として記録することに。

盗聴だけでなく、映像をライブ配信できる機材があるとは。ムッツリー商会は一体どれほどの規模を誇っているのだろう。

と、考えている間に異端審問会がBクラスの前に到着したようだ。フードをかぶった連中が殺気を撒き散らしながら廊下を歩いている様子は、何も知らない生徒が見たら一目散に逃走するレベルだろう。

バキバキ！ドガッシャア！！

あえてドアを開けずに、多人数で蹴りをぶちこむことで破壊する異端審問会。どうやらマジギレのようだな…これがただのモテたい連中の集まりだと言っても誰も信じないだろう。

『うわ！？何だ、急にドアが！？』

『『『『代表の根本を出せ』』』』

『ひいつ！？お、おい根本！お前の客だぞさっさと行け！！』

『ちよつと待て！？あんな知り合いは…ぐがあ！？』

クラスメイトに蹴り出される根本。あいつマジで嫌われてんな。

『ひ、ひいつ！？な、なんだお前等！？』

『我らは、異端審問会』

『我らは、清らかで穢れなき乙女を守る者達』

『我らは、その禁を破るものにふさわしき鉄槌を下すもの』

血のついたペンチやら鎌やらコンパスやら鞭は、鉄槌とは呼ばないと思う。

『貴様がCクラス代表の小山氏と付き合っているという情報が入っ

た
』

『な！？い、いや違うぞ！？あ、あいつとはただの友達で』

『録音は？』

『既にやっている』

『彼女への連絡先はどうする』

『奴の携帯から引きずり出せばいい。無論、消去も忘れるな』

『ああ間違いなく彼女だよ畜生！！』

半泣きで叫ぶ根本。

「あはは、バカだなあ。目をつけられた時点で終わってるのに。あ
あいつのら最初から諦めておくのが正解だよ」

「全くだ。俺たちがあの場にいなのが残念だな。もっと心を念入
りに砕くやり方があるのに」

明久に雄二が朗らかな笑顔でそんな事を言っつて、女子勢（ワシを含
めるでない！）をドン引きさせている。まあ、明久が異端審問され
る時は大体女子勢のせいなんだが。

『何？根本の奴、彼女いたのか』

『まじかよ糞箱売ってくる』

『俺だつてできてないっつーのに…！』

『そんな事より私女だけど根本って普通に死んで欲しい』

Bクラスからも殺意を抱かれる根本。嫌われようが筋金入りだな。つーか二番目の奴と四番目の奴には色々問題がある。マイクロソフトは関係ないだろ！いい加減にしろ！！

『そうか、認めたか。では諸君、手はずどおりに』

『了解。…おい根本』

『なっ…なんだ!?!』

『本来ならお前には八つ裂きにした後に彼女との縁を切らせ、さらには女装趣味がある変態野郎として写真集を用意するという極刑がとられるが』

『俺に死ねと言うのか!?!』

『…Fクラスとの試召戦争を受けるならば、温情をかけてやらんこともない』

『する！するから、それは勘弁してくれ!?!』

『よし、今の発言はちゃんと録画できてるな？ムツツリーニ』
『…問題ない』

これで使者としての役割は成功したな。いやあ、皆に平等なことを心掛けている俺だが、根本に対してはまったく庇う気が起きない。まあ仕方ないな、本当にクズだし。島田と違って読者さんに文句を言われることもないだろう。

「というわけで、後は異端審問会の好きにしていざ」
『…今伝えた』

『ふむ、では温情だ。貴様が代表をやっている、このクラスの皆に
問うことにしよう』

『なっ!?!おま、それは!?!』

『訊こう、Bクラスの諸君!?!今自分の保身のために君たちを売っ
たこの男に、どのような判決を望む!?!』

いや、元はと言えばお前等が嫉妬して襲い掛かったせいなんだけ
どな。

『根本勝手なことしてんじやねえぞコラ!?!』

『前から気にいらなかったんだよこの野郎!?!』

『釘ならあるよ?いるかい?』

『クラスの仲間はそんな雑に扱うものではないし、むやみやたらに
売ることは許されないんDA!』

さりげなく責任を押し付けているにも関わらず、Bクラスの連中はそれをスルーして根本にブーイングの嵐。

というか、Bクラスにはチャージマンがいるのか。

『では、判決。極刑』

『『『異義なし』』』』

『ぎゃあああああつ!!?!?』

根本の叫び声が聞こえたかと思つたら、異端審問会の連中のフードで画面が見えなくなつてしまった。

女装映像は大丈夫なのか？まあムツリーニのことだ、情報の入手には手を抜かないだろうから大丈夫か。

「ラッキーだな雄二。Bクラスで一番成績がいい奴が参加しそうにないぞ」

「点数よくてもどうせカンニングだろ。クズらしいやり口だ」

「まあまあ二人とも、どうせ彼は（たくさんの意味で）終わっちゃつたんだから別にいいでしょ」

「…うむ、まあ…勝てそうだからよかつたのう」

「…悪い人だつたんですね。なら、うん、よかつたですね!」

「まあ本当にクズだつたみたいだし、別にいつか」

というわけで、根本は一ヶ月入院することになり、その間に女装映像と写真によって弱みを握られ、Cクラスの小山とは別れることになるのであった。

まあ、因果応報の一言で済むが。

第七話（後書き）

根本くんフルボッコ回。

Bクラス戦もきちんと書くころかと思っただけですが筆を進めているうちに中ボスである根本くんが爆死してしまったのでさっさとAクラス戦に行こうと思います。

しかし、誰かが酷い目に逢う話はとても書きやすいですね！
どうやら僕はDSと呼ばれる性癖のようです。まあいいか。

一万PVで外伝みたいな話を書きましたので、次回は五万PVを超えたら外伝を書くころと思います。誰の話にしましょうかねえ…今のところは美春かな。

とにかく、早く翔子を書きたいです。黒髪クールでやや天然、しかも巨乳とか…雄二マジ異端審問される。

僕はiPhoneでこの小説を書いています。で、誤字の訂正とかをする時には一回投稿してから別窓で開いて確認しながら修正しています。

なので、過去の微妙に言い回しが変化していることがあります。御了承ください。

第八話

結論から言うと、俺たちはあっさりBクラスに勝利した。

『原作』では姫路がラブレター関連で脅されたから苦戦したのであって、姫路が万全（しかも存在を知られていなかったという不意打ち）なら、Bクラスを相手にするのは十分勝負になるレベルの戦いなのである。

それに、根本は病院送りにされてたのでBクラス次席の奴が臨時の代表をやっていたんだが、ムッツリーニが『Fクラスの最終目標はAクラスの設備でありBクラスの設備を取る気はない』という情報を流したところ

「ゴミ掃除してくれたFクラスには恩があるし」

と言ってあっさり負けてくれたというのもある。
流石根本、クラスメイトからゴミ扱いされている。明久への扱いはまるっきり蔑み方のベクトルが逆である。これが根本クオリティ。

そういうわけで、俺たちは最後にして最大の関門、Aクラス戦に臨むことになったのだった。

「Fクラス代表の坂本だ。俺たちはAクラスに試召戦争を申し込む」

そう、雄二が言い放つ。今回はみんなで宣戦布告に来ている。

ここはAクラス教室。時はBクラスに勝った翌日である。

既に雄二のプランである『一騎討ちに持ち込んで大化の改心が出れば勝ち』作戦は皆に説明済みだ。

まあ雄二が霧島翔子の幼馴染だと知られて一悶着あったが、それも『原作』通りなのでここでは割愛しておく。

で、Aクラスの反応。

「あら、FクラスがまさかAクラスに勝てるっても…って、ユキト！？」

雄二に対応していた彼女は、秀吉の姉の木下優子。成績優秀で弟（戸籍登録を間違えたという噂）に似て美少女と、一見非の打ち所のないように見える少女である。

が、

「ちょ、ちよつとこつち来なさい！」

「うお！？おい優子、頭を掴むな…それはアイアンクローと呼ばれる技術だ…俺だから平気なだけで普通は絶叫してるぞ」

俺にアイアンクローをかけながら物陰に引つ張るなど実は割と暴力的で、

「あ、あんた私のことバラしてないでしょうね！？あれは本当にたまたまなんだからね！？」

「たまたま通販じゃなかったんだろこの腐女子」

Bレマニアの腐女子だったりするのである。

ちなみに俺が優子と会ったのはア　メイトに明久と漫画を買いに来ていた時、本当に珍しく優子がBL本を買いに来ていた時のことである。

「あ、あの時は仕方なかったのよ！！『王子×王子』のアニメ限定特典が欲しかったの！！」

「やれやれ…あの時俺が明久を誤魔化しておかなきゃ今頃学校中に知れ渡ってたぞ」

「うっ…か、感謝はしてるわよ」

「つつか知られても別にいいだろ？この学校はイロモノばっかなんだし、お前は割りとマシな方だって」

「そ、そういうわけにはいかないのよ…これは木下の血みたいなものなんだから」

そんなに風評を気にするの、疲れないのかねえ。しかし『木下の血』か…演じるのにこだわるところとか、容姿だけじゃなく案外似通ったところがあるんだよねー、この姉妹(?)。

「まあ、俺が言いふらしたりはしないから安心しろ。バレるとしたら俺以外の誰かからだな」

「…そうね。ちゃんと秀吉とOHANASIIしておこうかしら」

「…家でもマトモにしてりゃいいだろ…」

とつかこの流れは間違いなく秀吉の死亡フラグだ。

…そんなこんなで、口止めをされて戻ってきた俺と優子。

「あれ、帰ってきた。お帰りユキト」

「どうしたのじゃ姉上？というか、ユキトとは知り合いだったのかの？」

「あー、まあそんなとこだ」

「秀吉、ちよつと来なさい」

何やら優子が秀吉の腕に抱きつきながら耳打ちしている。秀吉が冷や汗を垂らしながらプルプルしているのは恐らく気のせいだ。

しかしどんな顔でも美少女に見えるとは、あいつ何故男に生まれたんだらうな？

「…そういうわけで、五人での勝負ならいい」
「ああ、それで構わない」

「おや、俺が優子と話してる間にAクラスとの交渉はもう終わったらしいな。」

「…霧島が直接話してたのか。本来は優子がいなければ5対5の構図にはならないはずなんだが、なんだかんだ言っても多少は『原作』に引き摺られるのかねえ。」

「ちょっと待ってよ雄二！そんな勝手に決めちゃダメだ、本人の許可も取らずに！」

「…（ボタボタ）」

「おいどうした明久。ムツツリー二も、カメラに鼻血はこの局面で出す意味ないぞ」

「だって、雄二が勝手に姫路さんを！」

「え？わ、私ですか？」

「あー、アレか。霧島は同性愛者で姫路を狙ってるっていう誤解の話か。実際にはズーッと雄二に惚れてるといっただけの話なんだが、ここでネタバレするのは変に思われるしやめとくか。」

「まあ落ち着け明久。雄二はなんだかんだで他人には迷惑をかけな

いようにする奴だぞ、お前以外には」

「ユキトの言う通りだ。姫路には絶対に迷惑はかけないから安心しろ。明久はむしろ不幸になって死ぬ」

「雄二…後でちょっと屋上に来いや」

こんな彼等は親友同士、一回世の中の『親友』の皆さんに土下座するべきなのは間違いない。

まあ、そんなこんなでAクラスへの宣戦布告は終了したのだった。死闘フラグが明久と雄二に立っている？そんなものは何時ものことだろ。どうでもいい内容だし割愛！

時間の流れは早いもので、今は放課後。

Aクラスの中に2クラス分の人数が入っているのに、スペースが余裕で余っていることに關心しながら、俺たちFクラスは整列していた。

「先生、Aクラスはこの五人です」

「Fクラスはこのメンバーだ」

各クラスそれぞれの代表者達が向かい合って立つ。緊張や敵意などが漏れている様は、激戦の予感を醸し出している。

ちなみにFクラスメンバーは雄二に姫路、ムッツリーニ、秀吉、明久（と俺）。

Aクラスは霧島、美春の同類久保利光、『原作』でおなじみ工藤愛子、それと優子、最後に『原作』で明久を瞬殺した佐藤美穂さん（メガネっ子）の五人である。

「では、まずはAクラス側に教科選択権を与えます」

秀才と名高いAクラス担任の高橋女史がそう言い放つ。今回は特殊な戦争なので彼女がジャッジを勤める。

俺も学園長と色々実験したりした時に知り合いになったが、彼女も姫路と同じで微妙にズレてるんだよなあ…

例えば、野球の『スクイズ』をスクール水着の略だと勘違いしたりとか。この学校にはまともな奴がないのか？かくいう俺も見た目がおかしい奴なので他人をどうこうは言えない立場だけだな。

「じゃあ、私が出るわ」

「姉上か。ではワシがゆこうかの」

優子が出ると聞いて、秀吉が名乗りを上げる。うーむ、点数としては勝負にならないレベルだぞ？大丈夫なのか、秀吉？

「うむ、ワシなりに作戦を考えてみたのじゃ」

「ほう。ちなみにどんな作戦なんだ」

「うむ、姉上の日常生活を…」

「危ねえ秀吉っ！！」

ドンツ（俺が秀吉を突き飛ばした音）

パンン！！（優子が空気を握りつぶした音）

俺が秀吉を突き飛ばした瞬間、秀吉の頭があつた場所を優子の手が握りつぶしていた。：距離は5メートル以上離れてたんだぞ！？瞬歩！？瞬動！？おまけに何なんだ今の音は！？

「ひでよし、ころすわ」

「待て優子！！まだ未遂だしバレたらお前も困るだろうっ！？」

とっさに俺がしたフオローに『ちっ!』と盛大な舌打ちをする優子。そんなに殺したかったのか、会話文平仮名だけとかマジ怖い。…ていうか、Aクラスの連中にひそひそ話されてるぞ。大丈夫なのか優子?元も子もないとはこのことか。

「秀吉: お前もお前だ。死にたいのかよ」

「う、うむ…ワシもまさか姉上が瞬歩を習得していたとは思わなかったのじゃ…」

生まれる時代や場所が違ったら王様にも死神にもなれたんじゃないか、優子。

「つーかお前が脅しをかけるなんて珍しいな。そもそも優子にバラさないように口止めされてたんじゃないのか」

「…口止めするなら、普通は弱みだと思っじゃろっ…?」

普通か。この学校では、その言葉はまず捨てるべきもの一つだ、間違いなく。

「…卑怯なことも、リスクが高いこともわかっておった…じゃが…ワシも、足手纏いではなく皆の役に立ちたかったのじゃ…」

「ぐはあっ！！（ブシヤアッ）」

秀吉の涙目に明久とムツツリー二が鼻血を吹いて崩れ落ちていった。そしてそれにゆらりと近づく姫路と島田。いつも思っているが、本当に彼女達は明久に惚れているんだろうか。お仕置きより先にやることは沢山あると思う。

「俺は何も見ていないからな」
「……………」

雄二のほうを見ると、なぜかすっかりと目を閉じながらあさつての方向を向いていた。俺からは表情は見えないが、頬には凄まじい冷や汗が。向かい側にいる霧島が手を握ったり開いたりする姿が恐ろしい。

「…えーと、勝敗はどうなるのでしょうか？」
「Fクラスの不戦敗でいい!!」

尋ねる高橋女史に俺が返答した。そんなことより、秀吉の可愛さに嫉妬して黒いオーラを出している優子をなんとかする方が先だ！

Aクラス ?
Fクラス ?
x

なんとか優子を宥めて、気を取り直して2戦目へ挑む俺達。

「幸先いいね。じゃあ、次はボクが行こうかな？」

そう言つて、Aクラス次峰には工藤が出てきた。

保体勝負か。まあ、この勝負はムツツリー二に分があるだろう。なにせ保健体育では異常なスキルを持つてるからな、アイツは。

「…」

無言で前に出るムツツリー二。今回はこちらに科目選択権があるし、安心して見ていられるだろう。

「ふふ。ムツツリー二君でしょ？君のことはよく知ってるよ」

「…ボタリ」

鼻血はえーよ、ムツツリーニ。あの言葉のどこにそんなもの出す要素があった。…しかし土屋康太という名前のほうは完全に忘れ去られているな。アイツの将来もやや心配だ。

「キミは保健体育で有名だけど…ボクも得意なんだよ？保体。それも、実技でね」

「…貴様の体に興味などない（ポタポタ）」

工藤の台詞に鼻血が止まってないのによくそんな事を言えたものだ。ちなみに明久はまだ復活していなかったので今の台詞を聞いておらず、命の危機は免れていた。まあ、現在進行系で三途の川を渡っているが。後で姫路と島田にはちゃんと言っとかないとな…

「じゃあ、始めよっか」

そう言って工藤は不適な笑みを浮かべながら、ムツツリーニは無言で前が出る。

「『試獣召喚』！』」

「…『サモン試獣召喚』」

Aクラス ? 工藤愛子
保健体育 ? 427点

V S

Fクラス ? 土屋康太
保健体育 ? 563点

「…「なっ!?!」」

驚愕するAクラスの面々。確かに、あんな点数は普通目を疑うだろう。

でもまあムツツリーニだしな、仕方ない。この一言で済ませられる彼は本当に大した奴だと思う。

「こ、こんなことって…!?!」

「…工藤愛子。お前では、俺には勝てない」

「くっ…!ボ、ボクにだってプライドがあるんだよ!負けられないんだから!」

肩を震わせる工藤と、勝利宣言をするムッツリーニ。

まあ、工藤は可哀想だがこれは勝ちが決まったようなものだろう。ムッツリーニから保健体育取ったら何も残らないしな。

「…ムッツリーニ君」

工藤がムッツリーニに語りかける。む、あの眼は何かを企んでいる眼だな…。

気をつけるよムッツリーニ、油断しているとやられかねんぞ!

「…貴様の言う言葉など、聞く気は」

「ボク、今ノーブラだよ」

ぶぱっ！

「「し、しまった！」」

鼻血を出したムツツリーニを見て、驚愕に俺と雄二の声が八毛る。
まずい！ムツツリーニの弱点をこんなに早く理解するとは…！工藤
の洞察力を甘く見ていた…！

「あ、あはは！やっぱりムツツリーニ君つては案外ウブなんだね！
！悪いけど、この勝負勝たせてもらうよ…！」
「…貴様の、胸など…！！」（ブシャアアアッ）
「高橋女史！工藤を止めろ、あれは精神的な攻撃だ！ルール違反だ
ろっ！？」
「え！？えーとその…どうするべきなんでしょう？」

くそっ！高橋女史は困惑していてストップにはなれそうもない…！

「しっかりするのじゃムツツリーニ！！早く召喚獣に攻撃を！！」

「ボタン開けちゃったりして。あ、もう一つ開けてみようかな」

「…っ！！（ドバシヤアアアッ）」

「…ムツツリーニイイ！！！！」

やばい、鼻血の擬音が人間から出る音じゃなくなってきたぞ！？勝敗どころじゃない、このままだとムツツリーニの命が！！

「ふふふ…！勝てば官軍って奴だから、恨まないでねムツツリーニ君！…あ」

変なテンションから、急に工藤の声が素に戻る。なんだ？何かあったのか？

ムツツリーニから工藤のほうへ目を向けると、工藤が胸ポケットから落ちたハンカチを拾おうとしていたところだった。

…待てよ？この状況、やばくないか？

今の工藤の状態を思い出してみよう。

彼女は今ノーブラで、ブラウスボタンを二つ外している状態だ。
元々上着の前は開いており、首元が見えていることからシャツも着
ていない。

そんな彼女が、前かがみになったらどうなる？

「っ！！ムツツリーニ、見るなあああああー！」
「へっ？」

気づいた俺が絶叫したが、もう遅い。

前かがみになりながらこちらを向いて『?』という顔をしている工藤。

そしてその胸元から僅かにのぞいた隙間から、

生のおっぱ

A	クラス
?	?
F	クラス
?	?
x	x
x	x

やばい、もう後がない。
?

第八話（後書き）

ムツツリーニフルボッコ。でも彼なら幸せそうな顔で死んでいるに
違いありません。

奴が笑って逝ったのなら、我々が泣くわけにはいかんな…

次回、vs Aクラス戦その2。ムツツリーニも負けちゃって、もう
後がない状況の中、ついにユキトが奥の手を使う…！？

その前にAクラスの掃除しないといけませんけどね。

第九話

ピーポーピーポー…

輸血をされながら救急車で運ばれて行くムツツリーニ。

俺達の手でも応急処置は施したとはいえ、彼の出血量は尋常ではなかった。果たして大丈夫なのだろうか？

しかし、今は彼にしてやれることが何も無い。せいぜい、病院側に輸血パックが大量にあることを祈るぐらいしかないのだ。

「ムツツリーニ…」

「あれだけ血が出たつてのに、目の前にいた工藤には返り血が付いてないんだぜ…？」

「ああ、奴は男の中の男だ…！」

「何があっても女子は汚さないその覚悟…尊敬に値する」

後ろにいるFクラスの皆も、彼の無事を祈っている。このクラスはやっぱり団結力は一番だな。

「吉井！坂本！頼む、奴の敵を討ってくれ！」

「俺の購入予定の写真の敵も！」

「俺なんて抱き枕買ってたんだぞ！？それをAクラスの連中…許せねえ！！」

「……俺達が消えちまった奴等にできるのは、Aクラスの設備を手に入れることだけだ！！」「……」

褒めるとすぐこれだよ。

うん、間違いなくムツツリーニは生き残るな。フラグ的に。なんかFクラスの中では死んだ扱いだけど、『死んだと思ってた奴がひよっこり現れる』ってのは物語の王道だ。

ていうか、Aクラスの設備手に入れて何する気だよお前ら？。どうせ巨大モニターでムツツリ商会の秘蔵写真見たいとかそんなんだろ？その設備は勉強用にあるんだよバカ共。

「…な、なんかボクが悪いみたいになってるけど…ボクだって、その…見られたんだから（ボソツ）」

そして工藤がうつむいて顔を赤らめながらそんなことを呟っていた。

やべえ、可愛い。

さっきのナマチチも凄かったがこれもかなりの破壊力である。

普段えつちな事言ってる子が恥ずかしがってる姿っていいよね！これがギャップ萌えてやつか！！

ムツツリーニを手早く病院送りにしておいてよかった。あいつがここに残ってあれを見ていたら、間違いなくそのまま昇天して帰ってこなかっただろう。

とりあえず、あの表情 i P h o n e で写真撮つとくか。ムツツリーニと工藤に頼み事ができたらこれを使おう。

まあ、そこまで酷いことを頼む気もないしこのぐらいは許されるはず。

「…ていうか、アタシたちが勝ったらこんな血の匂いのする設備で授業続けるの？…なんか負けたくなくなった」

優子、Fクラスの血の匂いはこんなもんじゃないぞ。

というわけで、試合再開。

ちなみに、ムツツリーニが出した鼻血は俺達が救命活動を行っている間に高橋女史が業者を呼んで片付けさせていた。

：本来は死体を処理したりする業者を呼んでいたみたいだが。いや、この場合は適任なんだろうけど…高橋女史が天然なのか、それとも状況判断が上手いのかは判断に苦しむところだ。

「マズイな…もう後がないとは。明久を嫌がらせのために代表にしたのは間違いだったか…」

現在、もう後がないということ、残ったFクラス代表四人（+俺）で緊急会議をしている。まあ約一名は最初から戦力外なのだが。で、その途中にさらっと雄二が問題発言をした。

「ねえ雄二。ちよつと窓の外見てよ」

「ちよつとアキ！？カッターなんて何で持つてるの！？そしてなんでそれを坂本に向けるの！？」

「抑えてください吉井君！！」

「離して二人共！！あいつを殺さないと僕の人生は駄目になっていくんだ！！」

残念だがそれはもう遅いと言わざるを得ない。雄二によりお前の幸福はかなり消滅した。

だが、今はそれよりも問題にすべきことがある。

「やれやれ、明久がまたはしゃいでいるな」

「おい待て雄二。明久を生贄にするってことは、俺がああメガネっ子にボコられるということと同義だと思っただが」

「……おお、本当だ」

雄二。明久を不幸にするならまだしも、俺のことまで犠牲にするとはどういうことだ。

「しまった、明久を不幸にすることしか考えてなかったな…。まあ一応、お前の体へのダメージは『武器』が肩代わりしてくれるんだろ？命に別状がないなら別にいいだろ」

肩代わり。その言葉の意味を説明するのはちょっと長くなる。面倒な人は下に結論だけ書くからスルーしていいぞ。

『武装顕現』を行っている時の俺の体は、『点数の影響を受けなくなる』。

防御面で言うと、俺が体に受けたダメージを『武器』が肩代わりして、武器の点数がダメージの分減少する。

この仕様にしたからこそ、俺は試召戦争を安心して行っている。だってそうだろう？武器が壊されれば失格とはいえ、相手が武器だけを狙ってくるはずがない。

とりあえず足止め目的で蹴り飛ばしたり、武器を落とした時に素手で応戦したり、そもそもこれは戦争なんだから、俺が集団で攻撃されることだってあるんだ。

それが下位クラスの攻撃ならまだしも、Aクラスの点数を持つ召喚獣になると、洒落にならないレベルで『俺の身体が本来持っている点数』が削られてしまう。

そういうわけで、俺の身体には特別な設定がされているわけだ。ちなみに、この設定は命の心配をなくした代わりに多少のハンデを俺に背負わせた。

それは、攻撃する時『武器で攻撃しないと点数を削れない』ということだ。

例えば、俺はDクラス戦で平賀の召喚獣を蹴り飛ばした。しかし、点数を削ることはできなかった。こういうことである。

つまり、俺が蹴りを入れても殴り飛ばしても、あくまで『体勢を崩せるだけ』なのだ。

俺は精密動作がウリだっていうのにその精密動作が活かしきれないんだ。立派なハンデだろ？まあ、命には替えられないんだがな…

話が逸れた。こんな説明をして何が言いたいかと言うと、

『点数が減らなくても痛みは消えない』

ってことだ。

つまり、一撃の威力がダンプカーに轢かれるぐらい痛いAクラスの召喚獣にボコられるのは、拷問よりキツイことなんだよ！

で、雄二。お前にはそのことをちゃんと話したよな？それでもなお、明久にフィードバックを受けさせるために俺を犠牲にしようとした、と。

「まあ、悪かったな。未遂だし許せ、ユキト」

安心しろ、絶対に許さない、絶対にだ。

未遂って罪に問えるんだぜ、知ってたか？

お前には後で地獄を見せてやるよ、雄二……！！

まあ、今はそれよりも目の前の問題をなんとかしよう。

姫路が久保に勝てるとしても、Fクラスの勝利のためには、明久、
というか俺がああメガネっ子に勝利しなければならない。

…うーむ…知り合いが相手ならまだ交渉できたかもしれないが、今
回の相手は好みも弱みも全く知らない女子だ。
どうする…どうすればいい…!?

「…ひょっとして、ユキト。僕の出番なの？僕にも一応、とってお
きがあるんだけど」

「実は左利きのバカは黙っててくれ」

「せめて聞いてよ!?!?ていうか、なんで僕の言おうとしたことわか
ったの!?!?」

「明久…それを伝えてどうする気じゃったのじゃ…」

今は明久に付き合ってられない状況なんだよ。

脅し…Aクラス全員が見ている前でそんなことは無理だ。

交渉…知らない奴相手にそれはできない。

不正…相手は高橋女史だ、通用するとは思えない。

駄目だ、奇策の類は通用しない…！何か、何かないのか…！？明久の点数でも勝てるようにする魔法は…

…点数？

「あ
」

「どうした、ユキト？」

…うわぁ…勝てる方法、見つけちゃったよ。

しかも、俺が一番やりたくなかったことをやらなきゃ、勝てないとかどっいっことだよ…

っていうか、あくまでこれはただの設備入れ替え戦だろ？俺がそこまで頑張る必要なんて…

『姫路さんには、ふさわしい場所で勉強してもらいたいんだ』

『成績が悪くたって、それが人間を決める全てじゃない!!』

『ワシなりに、皆の役に立ちたかったんじゃ…』

『『『『ムツツリーニイイ!!』』』』

…彼等の言葉を思い出す。

『姫路も島田も大変だな…男ばっかだし、バカばっかだし。ひよつとしてFクラスの生活なんて、耐えられないんじゃないか?』

『そんなことないですつ。皆まっすぐに楽しいクラスですつ』

『うーん、バカには慣れてるわよ?ウチも。なんだかんだで嫌いじゃないのよ、このクラスが』

『はい!私、このFクラスが大好きです!!』

…彼女達の言葉を思い出す。

…やれやれ、どうすんだこれ。こんな言葉思い出しちゃったら、

やるしかないじゃねえか。

「…はあ。なんだかんだ、俺もこのクラス大好きだよ、姫路」

「…え？ユキトくん!？」

「お前ら全員バカだけど。バカって面白いから、嫌いになれないんだよ」

姫路がきよとんとしている。まあ、いきなり意味わかんないこと言

われたんだ、そりゃそうだよな。

「ユキト、まさか何か思いついたのか!？」
「え、本当に?ウチら、まだ勝てるの!？」

その問いには答えず、俺はゆっくり目を閉じる。

…さあ俺。今からやることはマジで命がけだ。

本当に俺は、やれるのか?怖くなって途中で逃げたりしないか?

…なーに、問題ない。

臨死体験なら、新学期初日にやったからな！

覚悟は決まった。

「高橋女史、待たせたな。始めてくれ」

「ユキト君ですか。つまり、Fクラスからは吉井君が代表者として出るのですね」

そう、高橋女史が確認してくる。

だが、

「違う」

「「「「え？」「」「」

明久の点数でAクラスに勝つことはできない。

なら、どうすればいい？

明久の点数がダメなら…明久の点数でなければいい。

「代表者はこの俺、柊雪人だ」

ブウン、と。

代表者の得点が表示される。

召喚獣 ? 柊雪人

世界史 ? 460点

VS

Aクラス ? 佐藤美穂

世界史 ? 342点

「 「 「 「 「 ええっ! ? 「 「 「 「 「

げ、明久の奴気づきやがった。いらんところで頭がまわる奴だな。

「…召喚獣は、例外なく点数を持っていて、点数によって動いている」

「翔子…？」

「代表…？」

ぼつり、と霧島が意見を述べる。

「…自分の意思があつて、死にたくないと考える召喚獣が存在しているなら、設定をいじって身を守るのは当然だし、事故を恐れて自分の点数を上げるためテストを受けてもおかしくない」

「さすが学年一位、これだけのヒントでよくもまあそんな推理ができるもんだ」

霧島、満点だな。

いやあ、転生した時はマジで怖かったぞ。なにせ最初は明久の二桁代の点数だったからな？

足ぶついたりとかの衝撃でも点数が減って行って、こんなんで死に

かけるとかふざげんな！ってキレたりした。

そんなわけで、転生して一番最初にやったのは状況確認とか自己紹介じゃなくて、全科目のテストだった。

こんな風に転生とか憑依している奴は俺以外にいないだろう。…なんか他にやる事なかったのかよ、と自分で虚しくなってくる。

「…ちょっと待て。じゃあ今、ユキトの点数が出てるってことは…設定で保護されていない。つまり、自分の命を賭けて勝負しているのと同じ状況」

そうなんだよ。点数勝つてるとはいえ、だからやりたくなかったんだよなあ。

「おいバカ、何やってやがる！？お前はなんだかんだ被害を受けない場所にてツツコミ入れるのが役割だろうが！？」

雄二が珍しく焦ったように叫ぶ。

召喚フィールドが展開された今、外部からは干渉することはできない。つまり、声を出すしか外の連中はできないのである。

「仕方ないだろ。こうしないと負けちゃうし」

「設備なんかどうでもいいよ！ユキトの方が大事に決まってる！！」

有難いセリフだ。だがまあ、

「設備だけなら、俺もこんなことしないんだけどな」

右手を上に掲げる。

「お前等、ここまで随分頑張ったろ？Dクラスに勝って、Bクラスにも勝った。そして今、無理だと言われていたAクラスに挑んでい

る。

そうして頑張った結果を、俺のせいで無駄にするわけにはいかない。
…俺がいたから、ムッツリーニが負けたようなもんだしな」

「何を言っておるのじゃ！？ムッツリーニのことに、ユキトは関係ないであろう！？」

「あるさ。お前等にはわからないことだけど、俺がいたから物語がズレてしまった。それは確かなことだ」

掲げた手が、ぼんやりと光る。

「俺には、変えてしまった責任がある」

命のやりとりなんて断固お断りだ。だから、俺がするべきなのは最強の道具を用意すること。

「お前等といると、楽しい。だからって、俺が幸せになったからお前等がバカを見るのは間違ってるだろ？」

… 光は強く。俺が抱く最強のイメージを具現化していく。

「俺はお前等にずいぶん助けられたからな。妖精みたいな存在は恩返しするのが付き物だろ？」

「だからってユキトが危ない目に逢うのは間違ってるよ!!」

星が鍛えた最強の剣。ファンタジーの世界にしか存在しないはずのそれは、しかし同じファンタジーである俺なら創り出せる。

205

「勝てるからな」

「…ユキト？」

「今、こんなバカみたいで中二病くさいこと考えてんだ、大丈夫さ」

そう、負けたりしない。ここで負けて俺の人生ジエンドなんて、物語として盛り上がらないだろ？

「そのメガネっ子。構えろ」
「っ！…！さ、『試獣^{サモウ}召喚』…！」

…出したな？なら、俺も『顕現』させるとしよつ。

「…『^{リアライズ}武装顕現』」

唱えた瞬間、

ゴオオオオオオオオ！！

俺の腕の周り…正確には、手に握った黄金の剣に暴風が吹き付け始める。

先ほどの控えめな光とは比べ物にならない現象に、全員が目を見開く。

…ふむ。この風はフィールドの外には出てないみたいだな。つまり、この武器は『観察処分者』としての物質干渉能力はないようだ。

よかったー、『これ』が物を壊せたら教室の半分吹っ飛ぶからな。

「ちよっ…!?これ、アニメの世界の武器でしょ!?なんで召喚獣の武器として出てくるのよーっ!?!」

優子が全力でツッコミを入れている。

違うな!正確にはエロゲだ!!アニメなんてなかった!まさに黒歴史だ。

ていうか、周りの人が『木下さんなんでそんなこと知ってるの?』みたいな顔で見てるな。大丈夫か優子。

と、伝えてやりたいところだが、正直、そんな余裕はない。

今、俺は猛烈に後悔している。命が惜しかったとはいえ、400点なんて超えるんじゃないかな。

特殊能力がつく『腕輪』は確かに強力だが、点数の消費が激しくなるのは『原作』でも説明済みだと思う。

しかし、俺にとって点数は生命力と同じなのである。それを吸われるせいか、身体中からどんどん力が抜けていく…苦しいんですけど…これ…

アーサー王、君はこんな感覚を我慢してぶっぱなしていたのか。心から同情するぞ。

使ってみてわかるこの辛さ。二度とやんねーよこんなこと。

「な、な、なあっ…!?!?」

あー、目が霞んできた。なんだこれ、バトル漫画みたいな展開だな。

どうしてこうなった？作者と俺も驚愕だ。

…まあいいや。とりあえず、相手は動かないみたいだし、さっさと終わらせてしまおう。

振り下ろせ。

その名を呼べ。

それこそが、この力の証明なのだから。

「
・
・
・
」
『
エクスカリバー
約束された勝利の剣
』

光が、
全てを吹き飛ばした。

side 明久

「…うわぁ…」

思わずそんな声が出てしまった。

ユキトが世界一有名な聖剣で、佐藤さんの召喚獣を攻撃した結果。

「…きゅっ」

あとには、灰さえ残らなかった。
というか、佐藤さん本人まで気絶してるんだけど。まあ確かに、あんな光に身体を包まれたら僕だって気絶する自信がある。

召喚獣 ? 柊雪人

世界史 ? 209点

VS

Aクラス ? 佐藤美穂
世界史 ? - 106点

マイナスって・・・

ユキトのほうも一撃で200点以上消費する攻撃を放って、かなりフラフラだ。そして僕もフィードバックでフラフラだ。

意識が薄れていく。ぼんやりとした思考の中で、僕は思った。

ユキトに対する感謝や謝罪より先に、

ユキト。君が敵じゃなくてよかった。

第九話（後書き）

あらゆる二次創作のバトルもので出てくるアレを出してみました。

どうも、作者です。まさかの朝四時の更新です。ラストランカーや
つてたらこれ書くのすっかり忘れてて大惨事です。

しかしさすが第まるきゅー話ですな、意味がわからないシリアスと
かを詰め込みまくってしまいました。ごめんなさい、眠くてイミフ
な内容です。

「ユキトは明久達が大事」ということを書きたかったんです。

で、なんでエクスカリバーが出てくんねん。

まあ個人的にはアロنداイトのほうが好きです。もう本当に何を言
ってるんでしょう僕は。眠気がハンパなくて頭がぐるぐるしてます
…あ、鳥の鳴き声が聞こえる…

最後にちよつとした募集を。この作品「俺はテストの召喚獣」って
いう名前なんですけど、長くて困ってます。

しかし、「オレテス」って略するのはなんか嫌なので皆さんから略称
を募集したいと思います。

別になくてもいいんですが、何かうまいのを考え付いた方は感想欄

からお送りください。僕がそれを見て決定したいと思います。

しかし、毎日更新だとあとがきに書いても目立たない気がしますね。
タグにでもつけておこうかな？

まあ、それはまた明日（もう朝だけど）の話ですね。

ああ、もう限界です…皆さん、おやすみなさい…

第十話

もにゅん。

この身体になってからえらく身近になってしまったものを後頭部に感じて、俺は目を覚ました。

「…むじ…?」

頭を軽く振って、意識を覚醒させようとしたところ、その度にむにゅんと後頭部の感触が形を変えてきた。

なんだろうこの柔らかい物体は…なんか、俺コレにより何か恐ろしいことになった気がする。

なんだっけ、確か友人が血まみれになったり窒息死しかけたり…

「…って胸じゃねーか!？」

「…あ、起きた」

聞こえてきた声に顔を上に向けると、霧島が俺を覗き込んでいた。どうやら、気を失っていた俺を抱きかかえて介抱してくれていたようだ。

…やっぱり、俺は愛玩動物扱いにされてるんだなあ…いや、別にいいんだけどさ？なんか男としては複雑な気分だ。

「あー、悪かったな霧島。地面に寝かしてくれてもよかったのに」

「…別にいい。頑張ってる人は好き」

う。柄にもないことして恥ずかしいのにそんなストレートに言わないでくれ。

というか言い方も気をつけてほしい。男女問わず凄まじい視線が俺に集中してるんだが。殺意じゃないのは、やっぱり俺がこのサイズだからだろう。

まあ俺自身も性欲みたいなものはないし、八つ当たりされなくてよかった。

しかし、敵である俺のことを介抱してくれるなんて、本当にいい娘だな霧島。そりゃモテるはずだわ…まあ、本人は雄二一筋で他人に興味はないんだろうけど。

「ところで、俺はどんぐらい寝てた？」

そう霧島に尋ねる。自分で覚えてるのは相手の召喚獣が灰も残さず消えた瞬間までなんだよな。

…佐藤さん、ほんとごめんね。

「…十分くらい。次の試合はもう始まっている」

ああ、だから霧島が介抱してくれてたのか。なんで姫路じゃないのかと思つてたけど、久保と副将戦やんなきゃいけなかつたんだな。

そういえば、介抱と言えば明久もひよつとしてフィードバックで気絶してたのか？ちよつと申し訳ないな。

そう思つて明久を探すと、

「…えへへ」

島田が微笑みながら膝枕をしていた。

「…吉井…！すまん、俺は止められなかった…！！！」

「クラスの仲間を一日で二人も亡くすなんて…ッ！！！」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「おい、しっかりしろ！誰か、気絶させるの手伝ってくれ！！！」

そして周りの皆は壮大な勘違い中。いやお前ら、本当に島田のこと女子だと思ってないな。

いやまあ…気持ちには確かにわかるよ、あんな島田（殺戮鬼）を見たならそんな反応だよな。

でも、あの顔は流石に恋する乙女の顔だろうよ。普通に美少女なのに、あいつも損してるよなあ。

「…吉井…起きた時の態度、ウチは信じてるからね…?」

だめだこの島田、恋愛が下手という次元じゃない。

あいかわらず明久には死亡フラグしかないのであった。雄二がほっこりしている。うん、その顔むかつくからやめろ。

『…好きなんです、このクラスが！だから私は、絶対に負けられません…!』

『くっ、この力…!しかし、僕はまだ…』

ハッ、吉井君!?君はいつの間になんか体勢に』

『はああああっ…!』

『…!しまっ…!』

キュボツ!!

爆音と共に、姫路の召喚獣から出た炎が久保の召喚獣を焼き尽くした。

おお、俺が見ていなかった間に姫路と久保の決着がついていたようだ。
きっと原作どおりだったんだろう、よかったームツツリーニみたいにならなくて。

…原作どおりだったろ？な？俺は明久につられて隙を見せた久保のことなんて知らん。断じて知らん!!

Aクラス ?
 ? × ×
Fクラス ? × ×

「正直に言つて、予想外でしたね」

そう高橋女史が呟く。

そりゃそうだよな、いくら決闘形式にしたとはいえ学年最低のFクラスが学年最高であるAクラスと拮抗してるんだから。

「雄二、あとはお前次第だ」

「雄二、ユキトがあそこまでしたんだから、負けないですよ?」

「何もできなくてすまぬ……」

「坂本、頼んだわよ」

「坂本君、頑張ってくださいっ」

皆で雄二を激励する。やれることは全てやった、後は雄二を信じるのみだ。

「ああ、任せろ。(…正直、ユキトに言われて復習しなけりゃ、ヤバかったな…)」

聞こえてんぞ雄二。というかよかった、言っておいて。

「…まあとにかく、後は全力を出すだけだ！いってこい雄二ー！」
「おう、任せろ」

そう言っつて、しっかりした足取りで前へ出て、雄二が科目と対戦方法を伝える。

…正直、結末は俺にも全くわからない。『原作』とはもう全く違う物語だからな。

だけど。

どうせやるなら、負けんじゃねーぞ、雄二ー!!

Fクラス ? 坂本雄二
小学生用日本史 ? 100点

V
S

Aクラス ? 霧島翔子
小学生用日本史 ? 100点

「は？」

お互い緊張に包まれながら、モニターでの結果発表を待っていた俺達は、表示された結果の意外っぷりに目を開きながら固まっていた。いや、雄二。確かに『負けるな』とは言ったよ。

だけども。

るかボケ!!」

「土屋死んでないでしょ!?!なんで勝手に殺してるの!?!」

ギャーギャー!と騒ぎ出す一同。

「…どっしり」

霧島も困り顔である。そうだよな、元々『お互いの言うことを何でもひとつ聞く』という条件こそが彼女の目的だったんだから。

…待てよ?

「高橋女史、あんたAクラスの担任だったよな」

「?え、ええ。そうですか…どうしました?」

「じゃあさ、ひとつ聞きたいことがあるんだが」

そう言って、女史に『とあること』を聞いてみる。

「…ええ、ありますが…しかし、それでどう收拾をつけるのですか？」

…いや、『それ』さえあればいいんだよ。

やべえな、今日の俺は冴えてるぞ？

なにせ『誰もが悲しまないハッピーエンド』を考えついちゃったからな…!!」

「おい、みんな聞いてくれ！」

少し声を張り上げて注目させる。こんな姿の俺だ、声を張り上げれば注目は集めやすい。

ちなみに、まだ俺は霧島の腕に抱えられている状況である。かなり恥ずかしいがこの際だ、この格好も利用させてもらおうとしよう。

「霧島、ここは妥協してくれないか？」

「…妥協？」

「え、どうしたのユキト」

「妥協と言っても、施設を半分こというわけにはいかぬぞ…？」

霧島に交渉を持ちかける。すると、明久と秀吉が口を挟んできた。

「いや、大丈夫だ秀吉。俺が欲しいのは、Aクラスの施設じゃない。

「欲しいのは、『Aクラスの非常用設備』だ」

試験召喚戦争に負けたクラスは、設備をひとつ落とされるといふ決まりがある。Aクラスならば、Bクラスの設備になるのだ。そしてそのために、学校側は全てのクラスに対して、特別予算でひとつ下の設備を用意してあるのだ。

それが、非常用設備である。

「確かに、それを使えばムツツリーも浮かばれるよな……」

「そうになると、Bクラスと同じ設備になるのか……?」

「引き分けでそれなら、随分お得だが……」

ざわざわと波紋が広がる。どうやらFクラスとしては肯定的な意見が多いようだ。

「…そっちが有利すぎる条件じゃない」

と、優子が当然の疑問を言う。まあそれはそうだが、Aクラス側は『まだ』平等な取引とは判断できないだろうからな。

だが問題はない。何故ならこちらは、

「代わりに、こちらは霧島の恋をFクラス全員で支援してやる」

「」「」「」「は？」」「」「」

あ、皆目が点になっている。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！？なんなのその条件は！？」

「え？設備の対価としては妥当だろ」

「何言ってるのさユキト！？そもそも、霧島さんの恋は性別的に決して実らないもので」

「お前が何考えてるか知らんけど、それは確実に間違っているぞ」

明久、霧島同性愛者説のことまだ信じてたのか。

「そうじゃなくて！妥当なんて言ってるけど、完全にこっちが割に合わないじゃ…」

「…そんなことない」

「代表…？」

霧島の言葉に、優子が驚いて抗議を止める。

「…ずっと、ずっと…小学生の頃から好きって言ってるのに、断り続けられて…避けられてる」

珍しくいつもの凜とした姿ではなく、ちょっと悲しそうな顔で言う霧島。

まあ、アイツも頑固だからな。こんな美少女に言い寄られながら拒否し続けているんだなら。そして、俺が出した条件はその鉄壁を壊

す手伝いをする事。これがどんなに大変なことか…『原作』を読ませてみたいくらいだ。

「ていうか代表が好きって言って断る男子がいるの!？」

「霧島さんって…好きな人いたのかよ!!」

「なんてこった…神は死んだ」

「オーケー、死ぬわ」

「付き合っぜ、仲間よ」

「な、な、な…!?!? 誰だそんな羨ましい奴は!?!」

「それでも霧島がかわいい」

彼女の言葉に、Aクラスの皆さんも、驚いたり怒ったり天を仰いだりしている。

霧島のカリスマ性の一端が伺える様子だなあ。

「ところで坂本雄二くん? 教室から出て何をするつもりかなー?」

「「「えっ?」「「「

びくうっ!!

全員が教室のとびらに視線を向ける。

するとそこには、扉に手をかけて硬直している雄二が。

「…ユキト…てめえ…!!」

あはははは、言っただろう?地獄を見せてやるって。

グッパイ雄二、物理的にも精神的にも君とはサヨナラだ。親指を下向きにして見送ってやるう。

「あ、ところで霧島。お前の好きな人って誰？」

最後の仕上げに、地獄への片道切符を切る準備をする俺。

「ユキトは知ってると思ってた」

俺に対して不思議そうな顔をする霧島。ははは、知ってるぞ。でもな、

「お前の口から聞きたいんだよ。気持ちを込めて、な」

そうしないと切符が切れないからさ

雄二が口パクで『ギブ、ギブ』みたいな動きをしているが、拷問未遂その他の罪があるんだ、罪状は充分だろう？

そう、と霧島は納得したように言って、その名前を口にした。

「…私は、雄二のことが、ずっと好き」

「……坂本、死ねえ!!」「……」
「ちくしょおおおおおおおおおおおおおーっ……」

まあ、死んでも生き返るだろ、多分。

こうして、Fクラスの設備はBクラス相当になり、晴れて霧島と雄二は公然のカップルになったのでした。

「あ、ユキト。そういえば今日は生ゴミの日だよ、ゴミをちゃんと捨てに行こう」

「それ多分霧島に高く売れるぞ？ゲームでも買おうぜ」

雄二は犠牲になったのだ。

おまけ

・没ネタ

…意識が、はつきりしてくる。

ここはどこだ？ 確か俺は点数の半分使ってエクスカリバーぶっばし
たんだっけか…

ゆっくり、目を開ける。そこには、

なんだか赤黒いシミがついた天井が。

「…見知らぬ天井とは、口が裂けても言えねえなあ…」

た。どの見ても△シンリーニのせいで、本業にあらがよんじれごまご

第十話（後書き）

というわけで、引き分けになりました。

今回の話はやや説明不足で強引にやっつけてしまいました。申し訳ありません。あまりにも酷かったので加筆しましたー
「大化の改新が出なくて引き分け」っていうことまでは考えていたんですが。

次の話でエピソードにあたる話を書いて、勉強合宿へ行きたいと思
います。

オリ展開がさらに増えるでしょうね。美春を更正させたので覗き事
件は起こらないのです。

さて、ここからは裏話。

五万PVを達成したら外伝を書く、という話しをしました。
ところが、僕は毎日この話を投稿している身。忙しくて外伝を書く
暇があまり無いのです。

まあ一日のPVは4000〜6000なので、一週間以上は余裕が
あるし、ちよつとずつ書けばいいかな、と思ってたんですよ。

昨日のアクセス数：8963

五日しか猶予がないんですけど。

なんでこんなに伸びた！？エクスカリバーか、エクスカリバーが悪いのか！！

セイバーさんまじばねえっす！！なんで俺がユキトと同じように意識を失うよう仕向けるんですか！？勘弁してください！！

…まあそれは別として、たくさんのアクセスありがとうございます。感想もちよつとずつ増えてきました…！実質一人だと…？

ま、まあとにかく感想には化ならずお返事をしていますので、ぜひお送りください。作者の励みになります。

それと、お気に入り登録も伸びているようで。感謝感激です。

これからも努力していきますので、拙作「俺はテストの召喚獣」をよろしく願います。

ラストランカーに時間が取られる…！

第十一話

一週間後。

だいぶ落ち着いてきたので、それぞれ皆がどう変わったかを語っておこうと思う。

「…雄二、いる？」

「こんにちは霧島さん！今すぐ連れてきますのでしばらくお待ちをッ！！」

「冷たい水でもどうぞ！！」

「…助かる」

まず、雄二と霧島。二人は晴れて公認カップルとなり、Fクラスの全面的な支援の下で過ごしている。

「いたぞ、坂本だ！」

「気は進まねえが捕まえるぞ！！」

「なら見逃せお前ら！…このままだとマジで翔子と付き合うハメに

なるじゃねーか!！」

「『『『美少女の頼みは断れない!』』』」

「死ねこのバカ共!！」

どうやら、先日生ゴミになった雄二は自力で蘇生し、今日も自由を得ようと逃亡を続けているようである。

本気で嫌なら翔子に嫌われるようなやり方がいくらでもあるだろうに、霧島がからむと不器用になるなあ雄二は。

「…ユキト、吉井。今日もありがとう」

「おう霧島、多分もう少して捕まるぞ」

「こんには、霧島さん。気にしなくていいよ、設備の対価だしね」

俺たちに気づいた霧島がこっちに来たので、備え付きの氷水（これがAクラスだとジュースになっている）をコップに注いで渡してやる。

「しまった!? またユキトがさりげなくポイント稼ぎを!？」

「まさか、奴は霧島のことか… 抜け駆けか!？」

「そんな馬鹿な、奴はあのサイズで、しかも性欲もないんじゃない

のか!？」

「しかし毎回おっぱいに後頭部を埋めさせているぞ……」

「俺たちの劣情をもてあそぶだと……許せる!?!」

「許すのかよ!?!」

東映板は削除要因になるからやめろ。

そんな風に騒ぎまくっているFクラスの面々だが、本気で俺を処刑する気は無いようだ。

どうも、エクスカリバーの一件で俺の株が上がったようで、妙な親近感が生まれた。身体を張った甲斐があったな。

そして代わりに雄二は最優先処刑対象となっていた。しかも全校で霧島のファンだった奴らが少しずつFFF団に増えてるようだし、この学校から『普通』という文字が物凄い勢いで消えている。まあ、もう諦めてるがな。

ちなみに、異端審問会いわく俺は『女をはべらせているように見えるのに全くやましく見えない』らしい。

やっぱりこのサイズが一番の要因だろうな…男子からも姫路や霧島のペット扱いに見られてるってどうなんだ…。

「おっと、椅子が足りないな」

「それじゃ美波の椅子を借りところか」
「そうするか」

ガタガタ。

そうそう、設備もBクラス相当になったので、ちゃぶ台が机と椅子（腰とかに優しいらしい特別なやつ）に変わった。

やっぱり綺麗な教室のほうが気分がいいな。冷暖房もついてて夏場も安心だ。

「でも、モニターが没収されるなんて…！」

「…鬼畜の所業…！」
「いや、あれはお前らが悪いから」

ムツツリー二と明久が涙を流して慟哭している。馬鹿ばっか。

ああそれと、ムッツリーニの話もしておこう。彼が生き残った理由についてだが、

「…あらかじめ輸血しておけば大量に出ても問題ない」

とのことである。

…人間の身体って、血液が多すぎると体調が悪くなったりするんだけど、何があいつをそこまで駆り立てるんだらうな？
あいつとは麻雀やったら恐ろしいことになりそうだ。

さて、設備の話の続きだが。

なぜ明久達が血の涙を流しているかと言うと、本来ついている標準性能のモニター（黒板ぐらい大きい）が没収されてしまったからである。

まあ、コレに関しては生還してきたムッツリーニが開いた

『ムッツリ商会特別オークション〜現世よ、私は帰ってきた〜』

でこのモニターを使ったのが鉄人にバレたためだ。ガトーのネタを使ったらスネークに見つかるとか数奇な運命だな。

ちなみにこの騒ぎのせいで .

「おい、吉井に柊。学園長が呼んで…またいたのか、霧島」

クラス担任がスネークになりました。

どうでもいいが彼はこの作品で貴重な俺の苗字を呼ぶ人間である。
ユキトで別にいいんだけどなー。

担任変更についてだが、俺としてはこの声聞いているだけで満足なんだけどクラスの連中にとっては違うみたいだ。
そりゃそうか、教室にクーラーあっても補修室送りにされたら関係ないし。あいつら間違いない送られるし。

と、そういえば学園長に呼ばれていたな。

「悪い霧島、呼ばれたから行ってくる」

「雄二とお幸せにね」

「…ありがとう。二人共いい人」
「てめえら覚えとけよコラ!!」

む、雄二が来た瞬間に行かなきゃならないなんて間が悪いなあ…

ああそうそう、姫路と島田については、番外編で話すことになったので後のお楽しみだ。

さて、目的地に着いた俺は、文月学園グロ注意シリーズのひとつである妖怪と対面していた。ツッコミが疲れるので明久は外で待機している。あいつ難しい話全くわからないからな。

「アンタとは一度じっくり話し合う必要がありそうだね…」

なーんて言ってるがスルースルー！。

「まあいい。今日アンタを読んだのはね、もうすぐ行く『勉強合宿』のためさ」

「おや？本当なら学園祭が先のはずじゃなかったか？」

不思議に思っただけ聞いてみる。おかしいな、勉強合宿はまだやらないはずなんだが…。

「ああ、去年まではそうだったんだけどね。今回は学園祭で色々やる予定だし、そのための準備や調整を向こうでやるのさ」

そういえば、合宿する場所は文月学園が土地を丸ごと買って召喚獣が出せるように丸ごと改造したんだっただけな。

ひょっとしたら学園にはない研究施設とかがあるのかも。何やらマツドな感じだ。

しかし、『原作』とのズレがここにも現れているようだ。合宿所で何の調整をする気なんだ？

「学園祭中は、常に召喚獣が出てるように設定を変更しようと思っ
てね。どつちやらこの辺りはアンタのおかげで召喚獣の知名度が高い
し、いい宣伝になるだろうよ」

日程変更俺のせいだったのかよ。

またもや微妙に原作ブレイク。なんだか色々申し訳なくなるな…

まあ確かに、スーパーやアニメイトの店員や近所の皆さんは既に俺
のことを知ってるけど。

最初は驚かれたけど、この一年
で随分皆慣れてきたみたいだな。

「なるほど、つまり合宿中俺は多少時間取られると」

「そういうことさね。今回はその通達と、あとは釘を刺しておこう

「？何をだ」
「？何をだ」

学園長がため息をつきながらそう言ってくる。釘を刺すって、俺な
んかしたか？

「アンタ本人ではないけどね、Fクラスの木下がいるだろう？」

「秀吉がどうかしたか」

「ああ。女みたいない外見だけど、あいつは戸籍は男みたいだし……」

え？なんな嫌な予感。

「木下には他の連中と一緒に風呂に入ってもらおうよ」

やべえ。そういえばプール掃除の話でフラグ立ってなかった。

「…マジで？」

突然訪れた惨劇の予感に、声が震える俺。

「…その反応だとやっぱりマズイのかい、木下と風呂っていうのは」「当たり前だろ！あんなな、せっかく皆で頑張ったのにFクラス全員が死ぬかもしれないんだぞ！？」
「ちよつと待ちな！？何故そんな深刻な問題になるのさ！？」

くっ…この妖怪は何もわかってねえ…！
ムツツリーニは出血多量で即死するし、明久や雄ニは女子勢の〇

S I O K Iを受けて生き延びることはとてもできまい…!!
そして恐らく、秀吉自身も優子によって抹消されてしまうだろう。

『アンタのせいでアタシが全裸で男子と風呂に入ったと誤解された
じゃない!』

みたいな感じで。

まずいぞ!このままでは誰一人として生き残れない。
え?前回と雄二の扱いが違う?

いやいや、俺が雄二をああいっことにしたのはあくまで霧島のため
であって、雄二を殺したいわけじゃないんだぞ!?

254

「というか、そこまで女扱いなのかい木下は」

「いや、あいつは『第三の性別、秀吉』っていうレベルなんだ…」

「あんたらの頭はどうなってんだい!？」

うるせえババア!

「というか、まさかこの始末を俺につけさせる気かよ!？」
「まさかそこまで危険だとは普通思わなかったのさ!！」
「アホか!！秀吉と他の男子が風呂に入るのを阻止しろなんて、そんなこと...」

がちゅっ

と、俺の後ろでドアが開く音がした。

え？

なんでドアが開いたんだ？ドアの前には明久がいたし、ここは学園長の部屋なんだからノックぐらいされるはず…

…明久？

ぎぎぎ、と首を後ろに動かすと、

そこには、目を見開いている明久が。

「…明久、まさか…聞いたか？」

「…秀吉が、僕らとお風呂？」

「……………」

「……………」

「皆っ！！僕たちは合宿所で天国を見るぞおおおおおっ！！」
「やめろオ明久ア！！頼むから命を大事にしろオオオオ！！」

こうして、死亡フラグ満載な勉強合宿が始まる。

第十一話（後書き）

昨日のアクセス：9415

5日もなかった。

というわけで、Aクラス編エピローグと次回予告みたいなお話でした。
前回書き忘れたんですが『今は学園祭を本気でやる理由がない』ので、
原作の順番を多少入れ替えております。

決して彼等を殺したいわけじゃありません。

感想が急にどばっと増えました。ありがとうございます。
質問の返答を感想欄のコメントで返したりしていますが、これら裏設定などは後でまとめて設定集その2として投稿する予定。

さて、今回は5万ヒット記念、瑞希と美波のデート回の番外編です。
ひよっとすると二話連続。ですが期待はなさらないでください。三
徹とか、僕が死にます。

番外編（前書き）

五万PV記念のお話です。

正直、本編でやれと言わざるを得ない。

番外編

「アキ、そういえば…デ、デートにはいつ行くのよ？」

「……………ユキト、今まで楽しかったよ」

「落ち着け明久。今のは別に処刑の比喻表現じゃないぞ」

「え？じゃあ僕拷問で済むの？」

「なんだか涙が出そうな台詞だな、死ぬか拷問かって」

「ちよつとユキト！？アキにはこの話してたんじゃなかったの？こ、この前服の話とかもしてたはずなのに…」

「明久だからな、忘れたんだろ」

「やめてよユキト！君の言葉は僕の心にさりげなく一番キツイんだよ！？」

「なんだ、それなら仕方無いわね」

「美波は肉体だけじゃなくて精神にまで攻撃するのか！！どれだけ僕のことを殺したいんだ！！」

「…あれ、吉井君に美波ちゃん、どうかしたんですか？」

「このバカの記憶力がどうしようもないって話よ、瑞希」

「もう、美波ちゃん！もうちよつと言い方に気をつけないと吉井君が傷ついちゃいますよ？」

「今のお前の言葉が一番のダメージだな」

「…今日は雨が激しい日だね…」

「泣くな明久」

「…というかここ屋内よ？」

「…え、えーとそれで、吉井君は何を忘れてたんですか？」

「！？そそそそれはその…しゅ、週末にウチとデートすることを…」

「ええっ！？ずるいです美波ちゃん！吉井君はその日私と映画を見る約束なのに！！」

「いやそんな事実はない。フラグの立て方がなってないぞ姫路」

「瑞希が相手でもこれは譲れないわよ!？」
「私だつて吉井君とデートしたいんですっ!」
「…ねえユキト、ひよっとして姫路さんも僕を」
「だから拷問じゃないっつうの」
「うーん、じゃあ何で…あ、ひよっとしてユキトと一緒にいたい、
姫路さん?」
「…は?」
「いやだつて、ユキトは僕から離れられないから必ず三人で過ごす
ことになるよね?」
「……………」
「……………」
「…すまん二人共。そのことをすっかり忘れていた」
「あーもう!なら、瑞希も連れて四人で遊びに行くわよ!」
「そうですっ!まずは好感度を上げて勘違いを無くすところからで
すっ!」
「…あれ?ねえ二人共、ひよっとしてその費用は」
「…女の子に払わせるの?」
「…今月、久し振りに水道水かな」
「…俺が奢ってやるから泣くなつて」

そういうわけで、終末…じゃない、週末である。

「それにしても・・・生まれて初めて女子と遊びに行くことになつてどんな気持ちだ？明久」

「え？秀吉とはよく遊んでるよ？」

「あいつは例外だろ」

「そうでなくても、僕ネネさんとよく遊んでるし」

「ラブ ラスも例外だから」

そんな話をしながら、待ち合わせ場所へ向かう俺たち。

ちなみに島田に服装の話をしておいて申し訳ないが、明久はいつも着ている普段着である。ここらへんは予算の都合と言わざるを得ないな。

蛇足だが、俺の服は学ランだ。この服着替えられないんだよな、まあ俺は服とかファッションとかよくわからんから別にいいけど。

「しかし、女の子ってどこで遊ぶのかな？」

「さてな、俺も女子と遊んだことなんて全くないぞ」

「え、そうなの？ユキトって『前世』ではモテてたかと思ってたよ」

「カップル成立の手助けはしてたが自分で遊んだりはしてなかったな」

俺の昔のポジションは『クラスに必須の頼れるやつ』みたいな感じで、恋愛がらみの話はあんまり無かったな。後輩から尊敬はされてたみたいだが。

「と、もうすぐ着くか」

「美波は新しい服って言ってたけどどんなのなんだろうね？」

なんだかんだで明久も楽しみにしているようだ。うん、やっぱり緊張するなら女の子のことを考えるほうがいいよな？

自分の命がどうなるかを常日頃から考えているのはおかしなことだよ、本当に。

「さて、時間は五分前だけど…あ」

「もう待ってたみたいだな。おーい、島田、姫路…」

『お姉さま、そんな綺麗な格好をされて…！美春はもう我慢できません！』

『ちよ、何でここにいるのよ！？ていうか、その台詞だとある科学の何たらみたいだからやめなさい…！』

『し、清水さん…あの、頑張ってください!!』

『ちよつと瑞希!?!』

『恋は戦争なんです、美波ちゃん!!』

うわ。

「…ユキト、帰りたい」

「…俺もそう思ったが、まあ何とか説得してくるから待ってる」

美春…なぜここに。さてはムツツリーニから情報を買ったな？ムツツリ商会は案外女性利用客も多いからな。もうムツツコミ所しかないよなああの商会。

そして、最近お互いを名前で呼び始めた二人の友情が早くも壊れ始めている。

どうしてこうなった。何度も言うけど、本当に好きなら抱きつくなりキスするなりの好意のアピールをしろよ、拷問してる場合じゃないだろ。

ちなみにこの後、こいつらの説得に、三十分かかりました。

S i d e 美波

「…そしてなんとか美春達を宥めた俺は現在、他の三人と映画館に
来ているのだった」

「誰に説明してるの？」

『いわゆるメタ発言だ、気にするな』とユキトがよく分からないことを口にしていた。たまに変なこと言うのよね、ユキトって。

まあ、そんなこんなで来た映画館だけど、『何を観るか』が問題よね。

デートなら恋愛ものとかを観るのが普通なんだろうけど、アキだと途中で寝ちゃいそうだし、瑞希もいる状況でその選択は危険だわ。うーん、でも今の時期はアクションものはやってないみたいだし、ホラーは…わ、私にはちょっと…！し、仕方ないでしょ！？怖いものは怖いの…！

「…どれにしましょうか、美波ちゃん？」
「そうね、いっそのことアキ達に選んで…あれ？どうしたのよ二人共」

なんだか、二人（片方は召喚獣だけど）がある一点から視線を外さないわね。

えーと、何々？EVANGELION・新・・・？うっ、漢字が読めないわ。

でも、どこかで見たことがあるわね。ああ、これ確かドイツにいたころの日本アニメ特集で出てたんだっけ。たしか登場人物にドイツ人がいるのよねー。

あの二人もこういうアニメが好きっていうところは、やっぱり男子ゆえなのかしら。

えーと、確かこのアニメのあらすじは、

「エバっていうロボットが怪獣と戦う話だっけ？」

「「違うわボケえー!!」」

「きゃああっ!?!」

な、何!?!急に二人が激怒してるんだけど!?!

「島田…貴様は今全てのエヴァファンを敵に廻した」

「全くだよ…『エバ』なんて間違いをするなんて…美波がそんな人だなんて思わなかったよ、このクズ!!!」

「ええっ!?!?そんな文字でしか伝わらないところに怒るの!?!?」

おかしい。なんだか二人のテンションがとてもおかしい…!私は一体どこでどんな地雷を踏んだの!?!?

「美波ちゃん…!」

「み、瑞希!助けて、二人が変になって…!」

「流石にそれは許せません!?!」

瑞希までおかしくなってる!?!?

「しかも、エヴァをロボット扱いしたり使徒を怪獣扱いするとはな…!」

「『エヴァファンがキレルランキング』1〜3位を制覇してるなんて…信じられないよ」
「ひどいです、美波ちゃん！」

ええっ！？何この状況！？知らなかっただけでなんでこんな扱いになるの！？

「おいおい、あれは酷いな」

「絶対に許されない」

「ああいう奴はモテないな」

「もー！なんであんな事言えるのあの人は！」

「おいおい、落ち着けてイリヤ」

「お兄ちゃんはあれを許せるの！？」

「まあ、知らないなら今から知ればいいだろ、な？」

そして何故かまわりの通行人にまで散々に言われている私。

というか、モテないのは関係ないでしょ！あとその銀髪と赤髪の兄妹！！一番傷つくから少し黙ってなさい！！

「ふむ、エミ……じゃなかった、通行人の兄ちゃんが良い事言ったな」
「うん、観る映画は決まったね」
「すみません、高校生三枚と召喚獣一枚をお願いします」

なんかいつのまにか視聴が決まった私。
ていうか、召喚獣一枚って何だろう。どうしよう、今回は私、三人
についていけないことが多い気がする。

もう、こんな風に言われたらどんな映画でも楽しく見られないわよ
！こうなったら、終わった後に『つまらなかった』って言ってやる
んだからね！！

「ウチが悪かったわ」

「わかってもらえて何よりだ」

みなみ　？は　？めいさくと　？であった！

うむ、洗脳完了。俺と明久は二回目だったが、やはり破は素晴らしい出来だった。シンジ君が成長フラグ折られなかったらあんなに強くなるんだな。

「なんかもう、全てが面白かったわ」

「そうですねっ！レイちゃんが食べられちゃった時はどうしようかと思いました！」

「僕も』ほかほかする』って言う言葉にはいろいろ感動したよ」

「旧作からは綾波も変わったからなあ」

興奮冷めやらぬ中、映画の感想で話題は持ちきりである。
やはり映画はいいね。リリンが生み出した至高の文化だよ。

「あーでも、黒いエヴァが倒されるところはちょっと」

「怖かったです…」

「えっ」「」

・・・お前ら、あんなもんは慣れっこじゃないのか？普段は自分達
で同レベルの残骸を生み出しているじゃないか・・・

273

でもこの質問は怖くて聞けなかった。仕方ないね。

で、その後は映画館のそばのゲーセンとかで普通に皆で遊んでいた。

俺と明久が

『ヒヤッハア！バカがア！！』

『てめえは…吹き飛ばえッ！！』

格ゲーで対戦したり、

「あ、これ可愛い」

「クマさんです」

「やめとけ。クレインゲームなんて金を落とすだけだ」

「本当にユキトはこつこつこの苦手だよね」

明久が二人にぬいぐるみを取ってあげたり、

『 お願い、気がつかないで 』

「よし！パーフェクトよ！」

「凄いです美波ちゃん！」

「ククク…EASYをクリアしたか…だが奴は我ら四天王のなかでも最弱よ…」

「EXTREMEなんて手が痛くなりそうだもんね」

音ゲーをやる島田を応援したりしたのだった。

そして一日が終わり、帰る時間になった。

「あー、すっごい楽しかったー！」

「今日はありがとうございました、ユキトくん、吉井君」

「楽しんでもらえて何よりだ」

「命の危険がなかったなんて幸せだね！」

明久…。

「でも悪かったわね、思ったよりお金使っちゃったし」
「気にすんな、学園長から金はもらってるんだ」
「バイトみたいなものだよね」
「人体実験のな」

そんな冗談を言いながら、帰り道を歩いていく。

「それじゃ、ウチはこっちだから。また月曜ね」
「うん、それじゃ」

やがて、島田が先に別れ、姫路と三人になった。

「（…はあ…）」

こっそりと溜息をつく姫路。あー、なんだかんだで今日は島田のほうか明久と話してたし、ちよつと不完全燃焼なのかもな。

…仕方ない。

「（姫路）」

「（ひゃわっ！？な、何ですかユキトくん！？）」

「（俺は本当はお前らの恋に手を出すつもりはなかったんだが、なんだかんだ島田に手助けしちまったからな）」

「（え？な、何を…）」

「なあ明久、島田は今日は一回も暴力なかったよな」

「？うん、そうだね。凄い幸運だったよ」

「その理由は実は、お前が島田を名前で呼ぶようになったからだ」

「え？そうなの？」

「おう。相手の名前を呼ぶという行為は、無意識に相手を自分の存在に近づけるという儀式的な行為なんだ。だから肉体的精神的に島田とお前が接近することによりなんだかんだで暴力が減ったわけだ」

「な、なるほど！」

277

さすが明久、こんなに適当な説明でも納得したぞ。こういう時は扱
いやすく助かる。

「つまりだ。明久、姫路のことを名前で呼べば暴力が減るぞ」

「ええっ！？」

「ひゃわっ！？」

おお、面白い反応。姫路もけっこうバカだから（染まったとも言っ
ていると面白いな）

「い、いやその今現在は命の危険はないし姫路さんにも迷惑だろうし恥ずかしいし僕は」

「おーおー、テンパってんな明久。」

「さあ姫路、後はお前の勇気次第だぞ？本当に好きなら、一步を踏み出してみる。」

名前を呼べば、それでいいんだよ。

「あ、あ…」

「ひ、姫路さんごめんね？ユキトがこんな迷惑なことを言うなんて珍しいんだけど…」

「明久君っ！ふつつかものですがよろしくお願いしましゅっ！！」

「「「「吉井を殺せえっ！」「」「」
「おらばだっ！！」

ダッ！！

…うん、やっぱり一日一回は生命の危機に合うのが明久だよな。

見えない糸で（物理的に）明久に引っ張られながら、俺は思った。

「やっぱりお前らバカだろおおおおお!」

残念ながら、その叫びには誰も答えてくれなかった。

番外編（後書き）

僕は旧作の使徒を第十七使徒まで全部暗記してます（キリッ

そんなわけでデート回でした。美波の出番が多かったので最後に瑞希の出番を入れてみました。バランスが難しい。

さて、今回は番外編ということで相当はっちゃけました。エヴァンゲリオンとかブレイブルーとかプリズマイリヤとか。

エヴァを僕に語らせたらうるさいですよ？破は名作なので何も言わずに一回見てみてください。ヤバいですから。

次回の番外編はどうしましょうかね？やっぱり、妥当なところで10万PVで…

本日のPV：10247

二十万PVにしたいと思います。

なんだか凄いな伸びが…早朝に投稿すると通学通勤中に見てくださいるんでしょうかね？

皆様ありがとうございます。これからも、拙作をよろしく願います。

『略称ですが、おれはてすとのしょうかんじゅう、なのでおしょうゆでございしょうか』

天才現る。

第十二話

時間というものはいつも俺の希望を無視して動いている。『時間よ長くなれ』と祈ると短く、『短くなれ』と思うと長くなる。

そういうわけで、勉強合宿当日なのである。

まあ、来る前に明久が例の話を言いふらしたせいで、またもやF A T A L K・O・になってしまったのは言うまでもないだろう。

その光景については皆さん想像できただろうから、俺の口からは言わないことにする。誰だって処刑の様の説明はしたくない。

しかし、あえて一言言つなら、そんな目に遭つても明久は裸を見る気満々である。

「それにしても、現地集合なんて流石にやってられないな…」

そう、電車の中で俺は呟いた。

「ここらへんは『原作』と同じだな。最近変わりまくっててアテに出
来ないと思ってたが、変わって欲しいところが変わらないとは…」

「いくら設備レベルが上がったとはいえ、FクラスはFクラスとい
うことで、学校規模の扱いは変わらない」とはスネークの台詞。

284

まあ、他のクラスとFクラスが、一緒に来るとほぼ間違いなくトラ
ブルを起こすと思われるんだろっけどな。
そしてそれは正しい判断だ。いつものメンバーだけでも大変なのに
Fクラス全員なんて制御できるかっつうの。

「それに、霧島は雄二と一緒に来ると思ってたが…来てないな」

流石の彼女も先生の言うことには従ったらしい。しかし、霧島なら

雄二を鞆につめてAクラスの送迎バスにぶち込むくらいはやりそうだが。この勉強合宿で何かやる予定なのかもな。

「…で、お前らはいつまで作戦会議してるんだ？」

…現実逃避のために色々独り言を言っていたが、ネタがなくなっただけで仕方なく車内へ意識を戻す。

「…何とかしてユキトを拘束する…」

「ムツツリーニ、駄目だったら最悪僕が移動してユキトを防衛範囲外へ移動させるから、その時は…」

「…映像は死んでも撮り続ける…！」

「ありがとう、ムツツリーニ。仏壇には僕の持つてる最高の一品を備えるよ」

「お主ら…まあよい、裸を見ればワシが男であると納得するじゃろ

「うからな！」

話し合っているのは、ムツツリーニ、明久、秀吉の三人。話の内容から察するに『入浴時にどうやって俺を物理的に足止めするか』を考えているらしい。

…うわー面倒な話。

明久が『秀吉は男子とお風呂』について学校規模で噂にしなければもう少し楽だったものを。

さて、今回の俺のミッションは『秀吉を男子と一緒に風呂に入れない、最悪女子風呂にぶち込む』というものである。

なぜこんなことをわざわざやるかと言うと、『人死にを出したくないから』の一言に尽きる。

あと、明久が死んだら俺にもなんだかんだで影響がありそうだしな…
サーヴァントはマスターが死んだら消えちゃうだろ？あんな感じで。

今回ののは日頃の臨死体験とはレベルが違う。

そういうわけで、俺は秀吉を男子風呂に入れちゃいけないことになったのだが、なんと秀吉本人は明久達の味方をするという。

秀吉は自分の裸にそんな価値は無いと思っているらしいが、『原作』でムツツリーニがあんな目になっていたことを考えると、楽観視はまったく出来ない。

ぶつちやけ秀吉の裸は大量殺人兵器にカテゴライズされるかもしれない。姫路の料理と同じランクとは、恐ろしい奴だ。

287

「ゆ、ユキト！なんとかしないと駄目よね！！」

「明久君とお風呂…だ、駄目ですっ！！木下君だけずるいですっ！！」

そして、女性陣は今回俺の味方である。まあ、こいつらの中では秀吉は恋敵扱いみたいだからな。一緒に入浴させるわけにはいかんだろつ。

…実際のところはどんなのやら。秀吉、たまに明久に頭撫でられて顔が赤い時あるしな。

で、雄二は我関せず、と言った顔でぐーすか爆睡中だ。まあ、こいつは秀吉と風呂に入ることにはまず無いだろう。秀吉への興味より命のほうが大事だからな。

つまり、完全に中立。いざとなったら、『霧島との強制恋人関係をなんとかしてやる』というネタで力を借りなければならぬかもしれない。

だが、これはあまりやりたくない。交渉の手札が減るというのもあるし、何よりこいつらのギャグ補正を甘く見てはいけない。なんだかねで雄二も秀吉の裸を事故で見てしまい、霧島に八つ裂きにされることも十分考えられる。

「…精神的にめっちゃ疲れそうだなあ…」

とはいえ、妥協はできない。何とかして阻止しなければ。この任務、失敗すれば生命が失われるのだから。

え？どうせ明久達はギャグ補正で死なないだろうって？

そんなこと言つてマジで死んだらどうすんだよ！死んじやつたら生き返らないんだぞ！？そんな危ない橋を渡れるほど冷血な人間にはなれねえよ！！

プシュー…

いろんな思惑を乗せた電車が、現地へ到着した音がする。
お願い時間よ止まれ、泣きそうなの。だが無常にも時は流れを止め

ることはなかった。ちくしょうめ、神よ死ね。

「ふわああ…お、着いたか」

大あくびをしている雄二。

「…よくそんな平然としてられるな、雄二」

「何言ってるんだ、覗きうんぬんは俺には関係ないだろ。時間をずらして最後のほうに入ればいいだけだ」

「いや、そっちじゃなくて」

周りの緊張感を完璧に無視できるのも凄いやえば凄いが、

「霧島と四泊五日だろ？」

「家に忘れ物をしてきた。悪い、取りに帰る」

「…大丈夫、私が貸してあげるから」

こんにちは霧島。バスで現地に着いただろくに、駅で雄二をわざわざ待ってるなんて、本当にいい奥さんになりそうだ。

「いやいや翔子、歯ブラシとかそんなんじゃないで、下着を丸ごと忘れてきたからな、家に戻らないと」

「…雄二のパンツなら持ち歩いてるから大丈夫」

「待て翔子！？その発言は見過ごせるものじゃねえぞ！？」

さすが霧島。そのパンツで何をやっているのかは言うなよ、この作品がノクターンノベルズ送りになるからな。

「Fクラスの皆さん、到着しましたか。では私が引率しますので…霧島さん、何故坂本君を簞巻きに？」

「社長、スルー安定です」

「いえ、私は社長では…まあいいでしょう、全速前進しますよ」

さすがに駅からは引率が来たか、まあ迷子になっても困るしな。しかし福原教諭（嫁が最近Sinになりました）、あんたもワザとやってるだろ。

「あはは、じゃあ行こうかユキト（死んでも僕は拜んでみせるよ…！）」

「ははは、そうだな明久（何故そんな事を平然とできる！命は、なにだつて一つだ！！）」

「…（知れば誰もが望むだろう。女子の裸を拝みたいと、むしろ触りにいきたいと！）」

「（流石にその改変はクルーゼに謝れバカ！！）」

こうして、欲望にまみれた四泊五日が幕を開けた。

第十二話（後書き）

まだ施設内に入ってすらいません。

大丈夫か、このペースで。さっさと学園祭やってお化け屋敷編で書きたいものがあるんですが。

そついうわけで、四泊五日、風呂に入る機会は四回あるわけですね。防衛戦を四回やるかどうかは分かりませんが。うーむ、このままだとけっこう長くなりそうです。

今回はガンダムSeedファンに土下座しなければいけませんね。ムツリーニが改変した結果がこれだよ！

そろそろ設定集2も用意しないと……ユキトの成績などについて記載する予定です、お楽しみに。

第十三話

とはいえ、いきなり全力の防衛戦が始まるわけではない。

あくまで、この勉強合宿は勉強のための行事である。俺たちは昼頃に到着してすぐに、部屋へ荷物を置いてから各自で勉強をすることになった。

まずはD・E・Fクラスの合同自習である。

原作ではAクラスとFクラスを組ませてお互いのモチベーションを上げようとしていたようだが、どうやらFクラスが試召競争に勝ったためにこの編成になったようだ。

まあ、DEクラスの奴等も姫路の前で全力でふざけて邪魔しようとは思わないだろうし、

「…わからないところは教える」

霧島も来たから雑談をすることはまず無いだろう。

「いや翔子、俺は理解できないわけじゃなくしていなかったただけだからな」

「…やっぱり雄二は凄い」

「サボってただけだ…それより、何故お前は俺の膝の上にいるんだ…妻だから」

「そんな事実は無いから降りろ」

「…」（坂本！！ブチ殺す！！）「…」

彼等に雑談などしている暇はない。いかにして迅速に雄二を殺すか、それ以外を考える余裕はないだろう。やはり下位クラスか。

「霧島さん、大胆です…私にはまだあんなことはできないです」
「待て姫路。だからといってナチュラルに俺を膝の上に乗せるな」

俺はペットじゃないって言ってるだろ。

そんなある意味いつも通りの（命も含めた）やり取りをしていると、

「あ、こいつが噂のFクラスの召喚獣なの？」

「おー、あれが？」

「姫路さんのぬいぐるみみたいだねー」

「その節は美春ちゃんがお世話になりました…」

DクラスとEクラスの女子達が俺の存在に気づいたようだ。

何故だろう、その中の一人とゆっくり酒を飲みたい気分になった。
お互い苦労してるね。

296

「へえ…本当に自分で動くんだけ」

女子の一人がひょいと俺を持ち上げる。この子は確か、Eクラス
代表の中林か。

ところで、俺…ついにぬいぐるみ扱いかよ。クマさんとかと同列は流石に御免だ、きつちりこの場で言うておこらう。

「おい、お前ら…俺は一応精神年齢は18で」
「わあ…本当にしゃべった！かわいいっ！！」
「むぎゅ」

中林に抱きつかれる俺。人の話は最後まで聞いて欲しい。

「あ、ヒロミズるい！あたしもあたしも！！」
「わ、私も一回…」
「ちよつと、終わったんなら貸しなさいよ！」
「怒らない怒らない、一緒に抱きついてみよー」
「ぎゅむむむ…」

それが引き金になったのか、いろんな女子達に抱きしめられていく俺。

と、とつかえひつかえ柔らかい感触が顔に…流石にドキドキするな。

性への執着って感じではないみたいだが。

しかしまあ、あの時みたいに呼吸困難になることはないようだ。そりゃそうだよな。あれは姫路の胸が規格外だから起こる珍事であつて、そう簡単に起きることでは「次は私もですっ!」「んぶう!？」

なんだ、急に息が…!こ、この圧迫感、まさかまた姫路に抱きしめられてるのかよ!?!命に関わるから勘弁してくれってあれほと言つたのに!!

「はふう…幸せですう…」

「くくくくあああつ!」「くくく」

またもや姫路の脱力しきつた顔に男子大ダメージ。一部の女子まで鼻血を出して顔を背けるとは、どんな威力やねん。

「…まだまだ…写真を、せめて…」

「ああ…いつもとは違う場所だあ…花畑は地獄じゃないし、もう僕
ゴールしても…いいよね？」

鼻血とフィードバック（と姫路の無差別攻撃）にそろそろ倒れるバ
カ二人。

執念でカメラのシャッターを切ろうとするムッツリーニ（しかし鼻
血まみれで映らないと思う）と、ついに三途の川・地獄・天国の三
種目を制覇した明久がとても印象的だ。

彼等は死というものに慣れすぎてはいやしないだろうか。そのうち
直死の魔眼とか手に入れてもおかしくない。

…おや？おかしいな、明久が拷問されてないぞ。男子は全員倒れて
いて、雄二は

「…私もあんな表情してみたい」

「ぐああああっ！？目にチヨキをぶち込むな翔子おっ！！」

霧島が邪魔で動けないとして、

まず真つ先に明久のもとへ向かうはずの島田は一体何を…

「さあお姉さま、いつかの続きです！間違えたら美春、一気に二枚脱ぎますよー!!」

「いやあああー!!ちょっと、ウチは男が好きって言うてるでしょー!!」

こういう理由でした。

なんていうか、美春も変わらないな。いつもとやってることが同じだ。勉強合宿に来たんだから勉強をやれと言わざるを得ない。まあ

全員に言えるけど。

ああ、だんだん意識が薄くなってきた…あれれー、明久は俺の横で倒れているはずなのに、なぜか目の前で花畑の中に寝転んでいるぞー？

なんだかいつのまにか上には柔らかな日差しが差しているし、そもそも俺は今姫路の胸の中で前が見えないはずなんだが…まあ、いいか。

なんだか穏やかでいい気分だし、空は蒼くて、今日もいい…天気…だ…な…

「ただいま戻ったぞい…って何じゃ！？この惨状は何が起こったのじゃああああー！…」

この後、なんとか秀吉が蘇生してくれました。

「あー…ひどい目に遭った」

「…あんな羨ましい真似をしておいてその言い方はおかしい」

「いや、お前等よりも俺は鼻と口が小さいんだぞ？あの中になるとな、ちよつど気道が塞がれて視界が黒から白へゆっくりと…」

蘇生後。時刻は既に夜になっており、俺たちは先程の修羅場ことを自室で駄弁っていた。

やれやれ、散々な目に遭ったな…が、一ついいこともあった。

なんと、風呂の時間にFクラスの面々は復活が間に合わず、結局その時間は秀吉が一人で入ったのだ。雄二？知らん。

これで、四回ある防衛戦を一回はクリアしたことになる。その為に臨死体験をしたことを考えると、色々複雑な気持ちになるが。

「…まあよい、あと三回はあるからの」

頼むから不吉なことを言わないでくれ。

「おいお前達、他のクラスの入浴が終わった。あとはお前達だけだ、さっさと入ってこい」
「……はい」「」

そんなわけで、本来の時間より遅く風呂へ向かう俺達。

「いやー、広い風呂は久しぶりだなー」
「ユキトはお風呂好きだもんね」
「…疲れを取りたい」

ムツツリーニ。お前は体を洗ってから入れよ？鼻血を風呂に入れたくはないからな。

ガララッ

「おおお…すっげー広いな！」
「普通の大浴場って感じだけど…」
「…ユキトは体のサイズが小さい」

服を脱いで（俺は脱げないが）中に入ると、俺の目の前にはすさまじく大きい風呂が広がっていた。体が小さいと他のものが大きく見えるぜ。

「この体はこういうところがいいんだよね…プールみたいにデカイ風呂とか、一回入ってみたくならないか？」

「あはは、そうだよな。お湯を湯水のように使ってさ」

「いや、間違いなく湯水だが」

「うるさいよう」

ま、無駄話はそこそこにして、さっさと入るか。

かぼーん。

「あー…生き返るよー」

「文字どおりの意味でなー…」

お湯で体を流して、早速入浴する俺と明久（ムツツリーニは体を先に洗っている）。

しかし、『かぽーん』って擬音は桶を置いた時に出る音で、今聞こえるはずはないんだが…まあいいか。

「やべ、一番風呂は先を越されたか」

「おいおい、飛び込むなよ？その汚い体で」

「バカ言つな、吉井でさえ掛け湯をしたんだぞ？流石にそれを忘れるバカはいない」

「まあ確かに、そこまでのバカはいないか」

「吉井ですらやったからな」

「うるさいよそのバカ共！！」

他のFクラスメンバーも集まってきたようだ。ジャバジャバと明久と水をかけ合い始めた。あー、やるやる。修学旅行とかには鉄板のネタだよなー。

とりあえず巻き込まれたくはなかったのでプカプカと浮きながらバタ足で移動する。

お、あそこの水が出るところの影、どうやら死角になってるみたいだな。あそこに避難するか。

「ながれてくーときのーなーかでもー」

のんびり歌いながらその死角に移動すると、

「けだるさがー…ん？」

「え？」

「へっ？」

「…あ」

「（…ムガガガ！！）」

何故か、そこには全裸の姫路、島田、霧島…

と、簀巻きにされ目隠しをされた上に猿ぐつわを噛まされて水面に浮く雄二の姿が。

「ちよ、雄二！？そのままだと溺れ」

「（大きな声を出しちゃダメですーっ！！）」

「てあぶなにもゆうつー！！？」

姫路が慌てて俺を押さえつける。胸に。

ちよ、ナマチチは流石にまずいって!!いくら俺がこのサイズでも
異端審問されるから!!つつか俺の呼吸器が水中にごぼお!!

「(ユ、ユキトお願い!!アキ達に見つかっちゃうから声抑えて!
!)」

「(ごぼがぼがぼ)」

「(…瑞希、ユキトが溺れちゃう)」

「(ああっ!?!ご、ごめんなさいユキトくん!!)」

ぶはあああっ!!なんだ、俺は酸素に嫌われてるのか!?!息ができ
なくて死に掛ける展開多すぎるだろ!!

「(…し、死ぬかと思った!?!ていうか、ここ男湯だろ!?!なんでお
前等ここにいるんだよ!?!)」

「(そ、それが…)」

「(お、男湯に通じてるなんて思わなかったのよ!?!)」

「(…何?詳しく説明してくれ)」

「(…えっと、その…)」

彼女達の話をもとめるところだ。

まず、俺達があのをさまよっている間に、霧島が『…雄二とお風呂に入る』と雄二と追いかけてこを開始したらしい。

それを見た姫路が、思わず霧島に『どうやったらそんなに積極的になれるんですか!?!』と尋ねた。

そうして話をしてみたところ、二人は意気投合（元々相性は悪くないしな）。

島田も誘って『一緒にお風呂で愚痴やこれからの作戦、抱負について語り合おう』、ということ、本来指定されている風呂の時間には入浴せずに『皆が風呂を済ませて誰もいなくなった時間に入ろう』という待ち合わせをしたらしい。

しかしいざ姫路と島田が女子風呂に向かったところ、霧島がいなかった。不思議に思って二人が女子風呂にも同じように存在した『死角』のほうを探してみると、

全裸の霧島と簀巻きにされ猿ぐつわを噛まされた雄二を発見したら
しい。

「（ちよつと待て！？それじゃあ、最初からここの風呂は男湯と女
湯が繋がってたのかよ!?）」

「（…元々はひとつの風呂だったのかもしれない。仕切りがしてあ
った）」

「（は？その仕切りはどうしたんだよ）」

「（…男湯に雄二の気配がしたから壊して突入した）」

「（お前何やってんだこのバカ!!)」

霧島もなんだかんだでバカである。いや、天然ボケというべきか。

しかし、雄二が『他の男子が全員入り終わった後に入浴する』と完
壁に読んでいるあたり、流石幼馴染と言わざるを得ない。

てつきり既に手遅れかと思ってたわ。雄二、惜しかったな。

「（で、その後姫路と島田の裸を見た雄二に目隠しを追加したと）
「（…そう）」

俺に返答しながら自然な動作で雄二を仰向けからうつ伏せの体勢にひっくり返す霧島。当然、反対側は水面である。

ゴボゴボと漏れる気泡。…ごめん雄二、助けてあげられそうにない。だって、霧島が暗く微笑んでいてマジ怖いから。

今度何かお詫びをしてやろうと俺は心に誓った。そのためにも生き延びてくれ、雄二。

「（しかしマズイな…まさか、秀吉の危機が去ったと思っただら今度はお前等とは）」

「（あうう…スミマセン…）」

奴らの性への執着は今更語るまでもないだろう。写真一枚に金を出すほど飢えてるんだ、女湯と繋がっているという事実が気がつくの

は時間の問題だ。

「(じゃ、じゃあウチらは急いで女湯に戻ってお風呂から出たほうが)」

「あ。ユキト、ここにいたんだ。大きいお風呂はどう？」

なんてこった。このタイミングでこれかよ。
明久…！本当に空気読めない奴だなお前はア！！

「(あ、明久君があわわわわわわ)」

姫路も涙目になりながら混乱している。頼むからのぼせるなよ姫路…！この状況では水音を立てたらアウトだ！！

ちっ…！三人が女湯に戻るには、明久をここから離すしかない！！幸

い明久はバカだ、誘導は簡単になはず！！

「おう明久、こっち来ちゃったのか？俺も今、そっちに行こうと思
ってたのに」

「え？いやいや、やめたほうがいいよ？だって、アレ」

「…インパクトに向けて鋭く加速、素早くパワーを入れて…これを
行っ！！」

「なあっ！？『水切り』だと！？」

「馬鹿な！あれは漫画のネタのはずだろう！！」

「ふははは！！アインハルトさんの真似をして完成させたんだよ！
！！」

「ふざけんなコラ！中学生とか許される年齢じゃねーんだよ！！ヴ
イヴィオ以外認めねえ！！」

「てめえらなのはさんデイスってんのか！？ああ！？」

「なら俺は『悪魔の右腕』を！！」

「やめろ須川！！それは霊圧が消えるフラグだ！！」

ばっしゃーん。

なんだか、無駄に高度な技術を使って水のかけ合いをしているFクラスの面々。

「こいつらバカだ！！もうやだ全部投げ出して帰りたい！！」

俺の心の叫びである。いいだろ？叫んだって。俺にだって、やりきれないときだってあるんだ。

…でも最近、こつこつ展開がとても多い気がする。神を殺しに行きたい。

「…ユキト、その…正直ゴメン…」

そして叫んだ結果、明久にマジで謝られていた。

なんだろう、傷ついた心に沁みる一言だ。でもな明久、多分お前以外の奴もまたバカやると思う。

「うーん、ユキトをそんなに追い詰めてるなんて思わなかったなあ…ねえユキト、僕は姫路さんの可愛い顔見れたし、いっそのこと秀吉の裸は我慢しても…」

ばしゃあっ!!

し、しまった!! 明久の何気無い言葉に姫路がのぼせて倒れたっばい!!?

「あれ、何今の音? ひよつとして、雄二も入ってたのかな」
「ま、待て明久!!」

やばい。このまま明久に『死角』を見せたら色んな命が犠牲になる!! どうする、何とかして明久を遠ざけるんだ!!

「そ、そつちはダメだ明久!!」
「え? なんでさユキト。ひよつとしたら雄二かもしれないじゃないか」

考えろ... 考えろ! 明久を遠ざけて、なおかつ他の連中もあそこに近づかないような言い訳はなんだ!?

ええい、『原作』では風呂の描写はなかったし…肝心な時に『原作知識』は役に立たな…

…！これだ…！

「明久、よく聞け！！実はあの『死角』は女湯と通じている！」
「えええ！？そ、それは本当なの！？なら、みんなも呼んで…！」

「そして、今あそこには学園長がいるんだ…！」

「総員、退避！いいいいいいいい！」
「「「「「うぎゃああああああ！……！」「」「」

俺の言葉を聞いた途端、即座に風呂から逃走していくFクラスの面々。

…ふう、どうやら女子達も無事戻っていったらしい…

「って霧島！！雄二をお持ち帰りするな、今雄二息してないからっ
！！」

…こうして、一部の人間の風評と引き換えに、生命や羞恥心など、
様々なものが守られた。

ありがとう学園長！あなたの犠牲、俺は忘れはしないで！！

…そういえば、俺あいつらの裸見たのに全員ノーリアクションだっ

たな。

このサイズだとはいえ、俺も秀吉とは別の意味で『男』ってこと忘れられてるんじゃないか？

第十三話（後書き）

一日目終了。秀吉のターンはまだです。あと三日あるのでそちらにご期待ください。

ババア便利すぎる。

今回は瑞希寄りの描写が多かったですね。まあ美波のことばかり書いてましたし少しぐらいは…え？イジメしかしてなかった？それは否定できません。

誰かを酷い目に合わせないと僕は話が書けないみたいなんですよねー（外道）。
最近雄二が酷い目に遭っています。精神的にはユキト。
神様死ねとか言われてますが、僕は自作自演とはいえこう思うのです。

ざまあ^^

あ、これ死亡フラグだ。やばい。

そういうわけで、次は二日目。ひょっとしたら設定集になるかもしれません。

いいかげんヒロイン予定の美春と甘い話を書きたいです。頑張ります。

設定集その2(前書き)

短いですね…

質問などが増えたら、また追記していききたいと思います。

設定集その2

設定集2

キャラクター解説・追記

「…み、みなさんこんにちは…佐藤美穂です…」

「あ、やっぱりわからないですか…ユキトくんのエクスカリバーの犠牲になったAクラスの一人です…」

「め、眼鏡っ娘って言わないでください！普通の特徴すぎるじゃないですか…」

「…くすん。ユキトくんが『お詫びに出番くれる』って言ったから来たのに…」

「…え？終わったら一回だけぬいぐるみ扱いにしてもいい？ほ、本当ですか！？な、なら頑張ります…！」

「えっと、今回は設定集その2をお送りします」

「本当は『作者と登場人物のどつき合い』みたいなコミックス巻末のお約束をやるつもりでしたが」

「『せっかくだから佐藤さんに出番をあげよう』ということでごこんな形になりました」

「私としては複雑な気分です…」

「では、まずユキトさんの学力についての設定をどうぞ」

・ 柊雪人の学力について

『生前』

Bクラス上位程度。理系。

勉強はそこまで好きではないが漫画の雑学などを学ぶのは好き。

『現在』

Aクラス上位。

リアルに命の危険があるために勉強して、この点数となった。

得意科目は世界史、日本史、現代国語。ゲームで覚えたり読書で覚えたりできるため。理系のくせに文系科目ばかりである。

これらの点数は400点を超えている。これ以外の教科も調子がいと超える。

苦手科目は古文漢文。『こんなの何の役に立つんだよ!』という苦手意識があるため。(一応勉強はしている)。点数は250点程度。

「人から頼られる人間だったので、勉強を教えているうちに自分も勉強するようになったとか」

「ふふ…なんだか、世話焼きの幼馴染みたいな人ですね、ユキトくん」

「え？今は人じゃない？言葉のアヤですよっ」

「では、次に点数関連のややこしい説明です」

・『武装顕現』の設定について

ユキトは『自分の体を維持するための点数（彼自身のテストの点数）』と、『戦闘時の安全のために用意した点数（明久の点数）』の二つの点数を持っている。

明久の点数は彼に対するプロテクトのようなもので、この点数がある限り『本体』がダメージを受けても『武装』がその分の点数を肩代わりしてくれる。

ただし、痛みはある。また、このプロテクトをかけていると相手の召喚獣の点数を『本体』の攻撃で減らすことはできない。

「作中で上手く伝え切れなかった自信がない、って作者さんが言っていました」

「人に説明するのって難しいです…」

「さて、次は一番無理矢理感が否めなかった腕輪についてですね」

・腕輪能力

テストの点数が400点を越えた場合、『現創』という腕輪能力を使用できるようになる。作者の中二病っぷりの権化。ちなみに明久が400点を越えた場合でも使える。

この能力を使用すると、術者がイメージした武器を今現在所持している武器に『降霊』させ、その能力を限定的にコピーすることができる。

具体的には、『木刀』を『エクスカリバー約束された勝利の剣』と同じ性能に変更、
など。

しかしこの能力は『イメージした武器』の能力を『完璧に』再現して使用できるようにしてしまうので、同時に『弱点』も再現してしまう（エクスカリバーの場合『膨大な魔力消費』）。

チートに聞こえるかもしれませんが、文字通り命を削る能力なので、この強力な効果になりました。

なお、あくまで武器を『変身させる』のではなく『降霊させる』ので、木刀の形から外れすぎているものは再現できない。また、『人格がある武器』を完全に再現はできない。

F a t e の 宝 具 で 言 っ と

・ 大丈夫なもの…エクスカリバー、アロンドイト、カリバーン

・ 無理なもの…ゲイボルグ（剣ではないから）、バーサーカーの斧
剣（大きすぎる）、ルールブレイカー（小さすぎる）など。

「果たしてこの設定はうまく使えるのでしょうか…」

「そもそもバトル描写をあんまりしない物語なのに…」

「剣しかコピーできませんし。作者さんは『凶剣』とか『デルフリ
ンガー』とか好きですけど、後者はともかく前者を知ってる人はい
らっしゃるのでしょうか？」

「ひょっとすると皆さんに『使ってほしい剣募集！』なんてことを
お願いするかもしれません」

「そんなバトル展開になるかどうかは微妙なんですけど…」

「さて、最後に感想欄に来た質問をFAQで答えたいと思います」

「これは作者さんが直接答えます」

・感想欄のFAQ（多少口調などをいじっています）

Q1 .

『雄二は原作ではサドンデスを挑んでなかった？引き分けしても大丈夫なように』

A1 .

全力でこちらのミスです。本当にすみませんでした。原作の雄二はうちのと違って抜け目ないな！

なので、裏設定として『ユキトに言われたから小学校の頃の復習をしっかりして、自信をつけた雄二はサドンデス設定にするのをすっかり忘れた』というものを作りました。

なんというこじつけ。しかしウチの作品の雄二は（作者と同じで）バカなのです。お許し下さい。

Q2 .

『ヒロインは誰？』

A2 .

清水美春さんです。彼女を助けたりしてフラグは既に立てています。現状は仲が良いだけですが。体のサイズをなんとかすればオトせる状況なんですよね…

つまりユキトの体はこれから…（禁則事項）

Q3 .

『お化け屋敷編はユキトの姿どうなるの?』

A3 .

ネタバレになるので書けません。ですが、僕はその話が書きたくてこの小説を毎日更新しています。

「さて、今書ける設定はここままでしょうか」

「色々まだ考えてはいるんですが、それは本編で出てからの楽しみというところで」

「それではみなさん、また本編でお会いしましょう」

「えへへ…ユキトさんのサイズって猫や犬みたいな安心感があるん

「ですよね…」

「え？その笑顔も大量殺人できる？…なんの話ですか？」

設定集その2（後書き）

佐藤さんに出番をあげました。

けいおんに言えば立花^{モブ}姫子ぐらいの立ち位置の彼女。
ひよっとすると今後もこういう立ち位置になるかもしれないね。

・近況

評価ポイントが300を超えました。皆さんありがとうございます。
お気に入り登録も200を超えたようで、感謝の気持ちで一杯です。

ここまで来ると設定にボロが出た時が心配になってきますね。
疑問や矛盾がありましたら感想欄から「このバカが！」と送ってくださると助かります。作者も大喜び…するか！俺はSなんだよ！（威張ることではない）

それ以外の感想もお待ちしております。小学生の女の子から感想が来た時は鼻水が出ました。色々大丈夫でしょうか、今やってるのは男同士の醜い争いです。

前回書き忘れていましたが、『水切り』の元ネタは『魔法少女リリカルなのはVivid』から来ています。
スポーツ格闘魔法少女漫画、しかも乳首解禁をしている色々前衛的な漫画ですので、是非一度読んでみてください。リリカルなのはシリーズにのめり込みます。

ちなみに僕が好きなのはアインハルトさんです。

まじめキャラは素晴らしいですね。ポーターブレイクもまじめア
バターな琥珀に隙はなかった。

第十四話

一部の人間が、地獄を見た妖怪風呂事件の翌日。

「…ふわあ…朝か…」

Good morning 俺。できればこのまま何もかも捨てて一日中寝ていたい。が、残念ながらそうもいかないのが現実だ。

「二日目でこの疲労感が…体が保つのか果たして」

独り言を呟きながら、体を起こして伸びをする。

昨日の夜の時点では、アイツらが騒いで夜眠れなくなるんじゃないかと思っていたくらいだが、あいつらには珍しいことに何も騒ぎが起きなかった。

どうやら、学園長のこと相当尾を引いていたようで、全員今にも吐きそうな顔。…見てもいないのにこの威力、まるで呪いである。

さて、目が覚めたところで明久達を起こすか。明久が動かないと俺も動けないし。

ちなみに、明久が離れると俺は見えない糸に引っ張られるという話はしたと思うが、俺が離れても明久が引っ張られることはない。

これもちよっとした謎だな。どういう原理で俺と明久はリンクしているんだろうか。謎である。

「おーい、全員、起き…る？」

ふすまを開けて（ちなみに俺はふすまの中の押し入れで寝た。ドラえもん状態である）声をかけようとした俺の目に入ってきたのは、

「「「ZZZ」」」

なぜか秀吉を真ん中にして、抱き合っ
て寝ている明久と雄二が。

「……………」

やばい。どうしようコレ。

葛藤する俺。今、目の前に死亡フラグが視覚化されて展開されてい
る…！ん、待てよ？いつもの展開だと、これは…

ガチャッ

「雄二。お目覚めのキス」

「おはよーアキ。起こしに来てあげたわよー」

「みなさん、おはようござい…ま……」

部屋に入ってきて、そして固まる姫路達。

うん、正直この流れは読めた。

パタン…

ふすまを閉めて、俺は布団をかぶり二度寝と洒落込むことにした。

ギヤアアアア…

布団をかぶっていたので、断末魔なんて俺には聞こえてません。絶
対に。

キング・クリムゾンッ！

「…えーと、代表たちは何があったの？」

「スルースキルを磨く練習ということにしてくれ…」

時刻は昼。向かい側に座っていた工藤が若干引きながら俺に尋ねるが、それに答えるとさらに疲れそうだったので言葉を濁すことにした。

え？工藤が何に引いてるか？言わなくてもわかるだろ、拷問後の明久達だよ！言わせんな恥ずかしい。

工藤がいることでお判りいただけたと思うが、今日はAクラスとの
合同授業。

原作通りの組み合わせになったな。まあ、

「…今日は添い寝する(ぎゅむ)」

「おい霧島、俺を膝に乗せるな。あと雄二の死体と腕を組むのもや
めろ」

「おー 代表、大胆だね」

霧島は何があっても雄二と一緒になんだろうがな。

とつか、ストレスが溜まってるからって俺をペット扱いにして癒
しを得るのはやめてほしい。

「ねね、代表」

お、工藤。この面子の中ではぶっちぎりの常識人だけあって、もしかして霧島を止めて…

「次、ボクにも貸してね」

「…雄二は駄目」

「大丈夫、ユキトさんのほうだよ」

「…わかった。それならいい」

「ですよー」。

「というか、俺はモノ扱いか」

「ふふ、女の子に抱きしめられるんだからいいでしょ？」

そう言つて悪戯つぽく微笑む工藤。

『女の子』ねえ…お前ら、完全に俺を『男』として見てないからなあ…あんまり嬉しくないぞ。

「…まさかあんなことになっているなんてね…」

「やっぱり木下君は強敵ですっ」

「まさか『事後』じゃないでしょうね…」

「おいコラ島田。この作品は全年齢指定だって言ってるだろ」

一方、姫路と島田は暴走していた。

危ない台詞をさらりと言うな。最悪の場合、世界の抑止力とかが働
くぞ。

その場合、お前は美春に連れ去られて二度と作品に出演できなくな
る。発言には注意してくれ頼むから。

「ふう…このぐらいでいいかしら。秀吉、くれぐれも行動には気を
つけなさい」

「お前も気をつけるよ！！明らかに警察沙汰になる位のダメージを
秀吉に与えてるじゃねーか！！」

そして優子も返り血を拭うレベルのスプラッタなことを弟（…なの
か？）にしていた。名前と違って全然優しくない。

『病院沙汰』ではなく『警察沙汰』なのがポイントだ。なにせ、今
俺の目の前にはモザイクがかかった秀吉が倒れているからな。

これが世界の抑止力か。グロ規制するよりもっと先にやることがあるだろ神様!!

「…うーん…あれ？おはようユキト…ってあれ？おかしいな、もう昼だ」

「ん？急に昼になっておかしいと思ってたら…お前もか明久」

ん、明久と雄二が意識を取り戻したか。秀吉は…もうしばらくかかりそうだ。

うん、君たちはおかしくない。おかしいのは照れ隠しに拷問したりおしおきで拷問したり誤解から拷問したりするほうだと思う。

まあ、それは後で女子勢に言っておくとして。

今は、今夜の風呂をどう乗り切るか考えなくちゃいけないな。

「明久、秀吉の風呂は諦めてくれるって昨日言ってたよな」

「ああ、その話？うん、まあ…ユキトがそんなに疲れてるのを見るとね…」

バツが悪そうにそう言う明久。いやいや、反省してくるだけまだお前はマシだよ。人の話を全く聞かない奴もいるくらいだし。

じろり

「「「「」」」」

自覚はあるようだな、姫路、島田。

「わ…悪かったわよ…」

「つい我慢できなくて…」

「拷問や処刑は我慢以前に実行することがおかしいと気づいてくれ」

拷問は日本の法律で禁止されています。

「まあとにかく、明久と雄二はこれで秀吉と入浴することはなくなつたわけだ」

「…とてもいいこと」

「霧島。お前も男湯には入らないようにしろ」

「…残念」

一応あの後スネークに仕切りを直してもらつよう言っておいたが…霧島ならまた突破しかねん。

「で、だ。この勉強合宿でこの先死人が出ないようにするには、あとはムツツリー二と残りの男子をなんとかすればよくなったわけだ」

「お前もお人好しだな。死人が出るなんていつものことだろうに」

「まあまあ雄二、それがユキトの優しさなんだよ」

「え！？待って吉井君、坂本君！！死人がいつも出てるのはおかしいと思うよ！？」

なんとなく話を聞いていた工藤が俺のかわりにツツコミを入れてくれた。…なんでだろう、超嬉しい。

「…そのままのお前でいてくれ、工藤」

「…えーと、ユキトくん…？辛くなったら、いつでも相談に乗るから…」

そう言っ
て抱き上げられてナデナデされる俺。なんでだろう、目から汗が。

疲れているときの優しさって、本当に優しいものなんだな…とても暖かいよ…

「…姫路、島田。ちょっと耳貸せ。ユキトがあまりにも不憫だ、協力しよう」

「…なんでだろう、僕も涙が止まらないや…フィードバックかな、あはは…」

「…アキ、違う。違うのよ。だって…ウチも申し訳なさすぎて…」「ふえ…ひつく…涙が…」

そんな会話があったことには全く気づかないまま、俺は工藤に癒されてきたのだった。

一方、ムツツリーニはどうしていたかと言いつと、

「純白しかねえだろ……」

「しましまだ！」

「ブルマーという選択肢を！」

「……それはない……」

「……時間はたっぷりある。納得するまで続行する」

いつも通りバカなことを熱く語り合っていた。

その後スネークに全員連れていかれたのは、まあ当然だろう。

で、夜。

「おい聞いたか明久ー！翔子が下着を落としたらしいぞー！！」

「こつちも大変だよー！美波に姫路さんも、着替えを落としたらしいよー！？」

「なに、それは本当かー！？なら、今あいつらは困っているだろうなー！見つけた奴に御礼をしてくれるに違いないなー！！」

そこには、わざとらしく叫んでいる明久と雄二がいた。

俺が癒され終わった後、雄二が提案してくれたのがこれ、『入浴時間』を偽情報で潰せ作戦』である。

普通ならこんなわざとらしい棒読みの会話に引っかかるバカはいないが、

「「「絶対に見つけるぞお!!」「」」」

Fクラスは普通じゃないバカでいっぱいなんです。

「うわー、バカがいっぱいだね」

「お前も言われたら引っかかってただろ」

「うるさい!雄二だって霧島さんの下着なら血眼で探すだろ!!」

「あー、それありそうだな。で、『ちっ』とか舌打ちしながらこつそり霧島の荷物に戻すんだよ」

「その後霧島さんにバシッて抱きつかれたりしてね」

「やめろっ！何故か完璧に想像できちまうんだよ！？」

ぐあー！と叫ぶ雄二に、生暖かい視線を送る俺と明久。

現在、俺たちは大浴場へとつながる廊下で雑談をしながら『奴』を待っている。

そう、『奴』だ。下着情報でFクラスの連中を誘導する作戦は、俺だって思いついていた。

だが、俺一人では実行できなかったんだよ。

それは何故か。本気で『奴』にステルス勝負を挑まれたら、明久に妨害されながらの俺に勝機は全く無いからだ。

しかし、明久は味方になり、雄二という心強い援軍も現れた。

「…だから、お前に勝ち目はないんだよ、ムツツリー」

俺の言葉に、二人もそちらの方へと向き直る。

「…情報戦で、俺に勝てると思うな」

味方にすれば心強い、敵にすれば最悪。

『寡黙なる性識者』が、そこに立っていた。

「いや、どうせお前のことだから嘘だとわかってても一応あらゆるところを探したんだろ？」

「そうじゃなきゃこんな無駄話する余裕もないさ」

「思ったより早かったね、ムツツリーニ」

「…！（ブンブン）」

あらゆることを台無しにする。それが、Fクラスクオリティ。

第十四話（後書き）

次回、バトル展開へ。

賭けているのは、命か誇りか。

こう書くとかつこいいですが、こいつらは秀吉と一緒に風呂に入りただけです。ユキトじゃなくてもバカさ加減に呆れるわ。

あと、ユキトが下着作戦（ひどい名前だな）を実行しなかったもう一つの理由に、

『女子に失礼だから』というものがあります。雄二が瑞希や美波に耳を貸せと言ったのは、これが理由だったり。

次回、VSムツツリーニ。果たしてバトルはあるのか？

『というか、この作戦を使えばもう全部解決じゃねーか』と思うユキト。

いえいえ、そんな簡単にいくわけじゃないじゃないですか。物語は思わぬ方向へ…？

第十五話（前書き）

これ書いてる途中に一回メモ帳がフリーズしました。ないわー…

第十五話

『見つかったか!?』

『いや、まだまだ!探し出せ!』

『了解だHQ!』

ドタドタという音をBGMに、俺達とムツッリーニは無言で対峙していた。

「…なぜ邪魔をする」

静かに、ムツッリーニが問いかけてくる。まるで怒っているような、悲しんでいるような…そんな声。

「…悪いけど、ユキトには沢山助けられてもらってるからね。これ以上、追い詰めたくはないんだ」

「あまりにも苦勞を背負っているようだしな」

そう、ムツッリーニに告げる明久達。自分のために何かをしてくれ

る友人が、これほど心強いものだとは知らなかった。

…知らなかったけど、さ…

俺は『ムツツリー二を死なせたくないから』やってるんだけど。

お前ら俺より先にあいつの生命の心配をしたほうがいいと思うんだが。

命は掛け替えのないものなんだぞ？お前ら、いつもレイズしてるからって感覚麻痺してないか？

そんな複雑な感想を抱きながらも、俺は思考を切り替えてムツツリー二をどう止めるか考え始める。

いくら奴でも、生身で俺達三人を突破できるとは思っていないだろう。つまり、何らかの策を持っているはずだ。

「…はあ。やっぱりロクなことじゃなかったか。すまん、お前ら」

「！…大島先生…」

…やはりそう来たか。ムッツリーニの背後から出て来たのは、保健
体育担当の大島教諭だ。

つまり、奴は保体においては学年一の実力を持つ自分の召喚獣の力
でここを突破するつもりらしい。

「『保健体育のテスト結果を模擬戦で確認する』と言うから来たん
だが…なんというか、残念すぎる理由だったようだな」

…どうやら彼も被害者側っぽいな。

まあ、仕方がない。教師からすると、『勉強の成果を試したい』と
言われたら拒否することはできないだろう。

それに、ムッツリーニに『風呂に入るな』なんて言うわけにもい
かない。なにせ、今は本当にFクラスの入浴時間だしな。本来なら妨
害する俺たちのほうがおかしいんだ。

秀吉は一応戸籍上男性なので、一緒に風呂に入るのを咎めることはできないというのもある。

…今更だけど、俺こんな面倒な条件つきで防衛しなきゃならんのか？

『…というが、ワシは男じゃと言いつてるのに…！』

何か電波が聞こえた気がしたが、多分気のせいだろう。

「やれやれ。それでは、フィールドを展開する。吉井達はがんばって止めてくれ…西村先生なら事情を話せば風呂には後で入れてくれるだろう」

スネーク。あんたマジで人格者だ。

などと考えているうちに、フィールドの展開が完了したようで、気を取り直して身構える。

「明久！俺と雄二は召喚獣をなんとかする！お前は本人を頼む！！」
「わかった！！」
「例の作戦通りにやれ、明久！！」

お互いの役割分担を伝えて、それぞれの持ち場につく。今回は命のやりとりではないので、俺自身の点数で勝負だ！！

「『『^{サモン}試獣召喚』！！』」

雄二とムッツリー二の声が重なる。俺もいくぞ！

「『リアライズ武装顕現』……！」

言霊を叫んだ瞬間、ムツツリー二に向かって走り出す。

パアッ！と召喚時のエフェクトが晴れた瞬間、

ギイイーン！！

相手のクナイと、俺の持っている漆黒の日本刀が火花を散らした。

今回俺が『現創』したのは、最近インフレが激しくなってきたあのオサレ漫画の武器、『天鎖斬月』である。

この刀は、『膨大なエネルギーを小さい形に圧縮してスピードに特化した』という設定を持つ武器だ。

…最近はその設定に意味がなくなってる気もするけど、まあとにかく。

「スピード勝負なら互角だ、ムツツリーニ！」

「…通らせてもらっ…」

既に腕輪の能力である『加速』を使っているムツツリーニの召喚獣の動きも、俺と同じく未知の領域。

人間の目には見切れないほどの戦いの火蓋が今、切って落とされた。

s i d e
雄二

あの二人の姿がまるで分身しているように見える。これじゃ、とてもあの中に割って入るのは無理だな。

とはいえ、これは既に予想済みだったことだ。そもそも、俺とあいつらの戦力差は、

Fクラス 土屋康太

保険体育 ? 576点

V S

召喚獣 ？ 柊雪人&Fクラス ？ 坂本雄二

保険体育 ？ 418点 / 256点

これだけ離れているんだ。

総得点では勝ってはいるものの、奴の召喚獣はスピードに特化しているタイプ。一対二の戦いにはさせてもらえないだろう。

俺とあいつらのスピードが自転車とヘリ並に離れている以上、ムツツリーニが動きを止めない限り俺は戦闘に参加することはできない。

しかしそれは逆を言えば、動きを止めることができれば、総得点が上回っている俺たちに勝機があるということだ。

そして、その作戦も既に仕込んである。

「ムッツリーニー!!」

明久が召喚獣ではない本体のほうのムッツリーニに語りかける。

「…今更、話すことなどない」

「ムッツリーニ…お願いだよ、僕に『コレ』を使わせないで。ムッツリーニが死ぬところなんて、僕は見たくないんだ」

「…脅しなど聞かない」

にべもなく明久を拒否するムッツリーニ。

交渉決裂か。分かってはいたものの、自分の表情が苦々しいものになるのを自覚した。

「…明久、やるんだ。ユキトは今も闘っているんだぞ」

「…ムッツリーニ、…ごめん」

そう謝りながら…明久は『アレ』を取り出した。

「…！それは…！？」

そう、これこそがムツツリーニ対策に用意しておいた『必殺兵器』だ。明久の言葉は脅しなどではなかった。何故ならアレには、

『いえーいムツツリーニ君聞いてるー？ボク、実は今ぱんつ履いてないんだ！！』

女子達のエロ会話が入っているのだから。

「…しまった…っ！（ブシャアアアッ）」

鼻血の海に沈んでいくムツツリーニ。

そう、明久が使ったのは工藤から借りてきたボイスレコーダーである。

…悪いなムツツリーニ。俺とユキトはお前の弱点なんてお見通しなんだ。

今回ばかりは自分の作戦の残酷さに自己嫌悪を感じるが…ユキトのあの哀れな顔には勝てなかったんだ。

どちらかが犠牲になり、どちらかが生きる…人の世は、それを永遠に繰り返していくものなんだよ。

「…こんなのって…こんなのって、ないよ…！」

涙を零しながら、明久が苦しそうに呟いた。

俺はそれをフォローしようとして…意外な声に、それを止めた。

「…明久…敵であるお前が…俺を憐れむな…」
「ムツツリーニ…」

そう、明久に言葉をかけたのは…敵であるはずの、ムツツリーニだった。

「…俺もお前も…自分で考えて自分で決めた行動…だからこそ、その信念を…裏切るわけにはいかない!!」

そう、力強く宣言する…『敵』。

もう、お互い引き返すことはできなくなった…そういつことなのか…。

…すまない、ムツツリーニ。生きてまた会えたら、また一緒にバカをやるっ…

「シリアスすぎてツッコみづれーじゃねーか！！っーかコレ以上聞かせるとムツツリーニ死ぬぞ！！雄ニ、手伝え！！」

ユキトの叫び声に、我に帰る。

…そうだな…ムツツリーニは、まだ死んじゃいねえ！！なら、ハッピ―エンドを目指すのが、せめてもの償いだ！！

「なんかまだアレな空気だが…まあ、やることは変わらないか…それから、『月牙天衝』ッ！！」

そう叫んだユキトが日本刀を横一文字に振り切ると、

ブオンッ！！

刀から、廊下を覆い尽くすような黒い衝撃波が放たれる！

「…この…程度っ！！」

フラフラになりつつも、衝撃波の微妙な隙間へと跳んで回避するムツリーニ。

…かかったな。

「空中では動きを止めざるを得ないよな、ムツリーニ！！」
「…っ！しまっ…！！」

Fクラス？ 土屋康太

保健体育？ 0点

「…見事」

バタリ。

そう言って、ムッツリーニと召喚獣は同時に倒れ。

二日目の闘いは、幕を下ろしたのであった。

「…ツッコミがないんだよ…工藤…」

「うん、まあ…Aクラスもたまにおかしくなるんだよね…」

さて、雄二視点でツッコミ不在だった二日目も終了し、現在は三日目である。

ちなみに、またAクラスと合同自習だ。二日連続で同じクラス？と疑問に思いはしたが、恐らく霧島が雄二の所へ行ってしまうくらいなら、ずっと同じ場所にいさせろ、みたいな理由だと思う。

昨日の夜は何があったかって？雄二は朝帰りだったぞ。後は察してくれ。

ちなみに、ムツツリー二は現在部屋で点滴と輸血をしつつ休んでいる。医者の話では三日間は安静にしているという話だったので、風呂問題はもう解決したと言っていいだろう。

そんなわけで、俺は現在工藤に癒されているわけなのである。

「ユキトくんも大変だね…」

「あー…お人好しな性格を直すべきかもな…」

「あはは、でもそこがユキトくんのいいところだと思っつよ？」

なんだか恋人みたいな会話だが、俺と工藤はフラグ的にそういう関係になることはない（ネタバレ）。

むしろ、カウンセラーとその患者みたいな関係になりつつあるな。周りの連中もそれがわかっていいるのか、異端審問する気配もない。まあサイズの問題もあるんだろうがな。

ああ・・・平和ってすばらしい。

「…と、そろそろ行かないとな。明久、悪いが一緒に来てくれ」

「ん？ユキト、どっか行く用事あるの？」

「学園長に呼ばれててな、データ取りの協力だ」

皆さんこの伏線を覚えていらっしやるだろうか？

元はと言えば、学園祭前にこの勉強合宿に来たのは、このシステム調整のためである。

風呂騒動ですっかり忘れていたが。なんつーか、一日が濃すぎるんだよな…

「ということだから、行ってくる」

「ババアに会いにいくなんて残念な趣味だな、ユキト」

「…そんな言い方はひどい」

「明久君も行くんですね…ちよつと残念です」

「ま、そんなことわざわざするんだから、学園祭には期待してるわよ」

「行ってくるがよいぞー」

各人からの言葉を頂戴しながら、部屋を出ていく俺と明久。

鉄人には理由を通してあるから大丈夫だろうが…明久の学力は大丈夫か？今度勉強を見てやらないとマズイかもな。

なんてことを考えながら廊下に出ると、

「あぁっ！居たわね諸悪の根源！！」

「Fクラスの『観察処分者』！！」

「その召喚獣はこっちに来なさい！というか、抱きしめさせて！

「抱きしめたいな、召喚獣!!」

なんだなんだ。急に十数人の女子達が集まってきたぞ？

というか、一人BUSHIDOみてえな奴がいたぞ。女子なのにそのネタはどうかと思う。

「おいちょっと待て、急にどうしたんだ」

「?ねえユキト、僕何かしたかな？」

「しらばっくれてるんじゃないわよ!!」

そう叫びながら、彼女はさりげなく俺を抱き上げ、頬擦りし、列を作っていた後ろの奴に名残惜しそうに俺を手渡しし、最後にひと撫でてから明久をビシィ!と指差し、

「女湯に監視カメラを用意するなんて、アンタ達しか考えられないのよ!!」

そう、宣言した。

…なんですか？

第十五話（後書き）

まさかの原作ルート。

まあ、結末は全く違うものになりますが。

というか、学園祭にマジメに臨む理由がないからこの展開にして理由を説明するつもりだったのに、まだ理由用意できてないとかどうということなの…

秀吉の出番は最終日かもなあ…秀吉ファンの皆様、お許し下さい。

それにしても今回はツッコミいなくて疲れました。マジメにバトルしてるけど風呂のためだろこのバカ！と自己ツッコミしてました。疲れた。

そうそう、十万PV達成しました！皆様ありがとうございました。

これからも「俺はテストの召喚獣」をよろしく願います。

…略称どうしよう？「俺召」は多作品とカブるから無理として…「オレハテ」とか？「サイハテ」みたいなノリで。

第十六話

え？何コレ？まだ続くのかこの騒ぎ。正直勘弁してほしいんですが。

…よし、落ち着け俺。とりあえず、冷静に今の状況を確認してみよう。

・まず、二人で学園長のところへ向かっていた。

すると、女子達にいきなり囲まれた。

『観察処分者』め、よくも監視カメラなんて設置しやがったわね！？と相手激怒。

困惑する明久。

一方、俺はいつものようにぬいぐるみ扱いされていた。

なるほど、まったくわからん。

「さあ、観念しなさい！今なら『お風呂の中で三十分土下座』くらいで許してあげるわ！！」

「いや、明久死ぬから」

そう、リーダー格の少女が明久を指差して叫んでいた。えーと、彼女はCクラス代表の小山か？根元とはスッパリ別れたあの女。

そもそも何故あんな奴と付き合っていたんだろう。弱み握られたりしてたんじゃないだろうな？まあ、今となっては終わったことだが。

「…えーと…ユキト、お願い！」

あ、明久が自分の理解力を越えた展開に思考を放棄した。

まあ、俺でもいきなりだったしな。とりあえず、今は情報が足りない。詳しい話を彼女達から聞かなきゃいけないところだろう。

「…そういうわけだから、そろそろ下ろしてほしいんだが…」
「も、もうちょっとだけ…」
「次、次は私だよ!」
「ちよっと、割り込まないでよ!」

俺、今後もこんな立ち位置なの？

三十分後、場所は変わってここは学園長用のシステム管理室。

文月学園のメイン召喚システムでは対応できない特別な（試験的な）設定変更をしたり、データ収集を目的とした設備がある部屋である。

「ふむ…女湯にカメラが仕掛けられたとはねえ…」
「言っておくが、犯人はFクラスにはいないぞ」

そこで、俺と学園長は今回の事件についての話し合いを行っていた。

会話についていけない明久はやっぱり外で待機。だが、あいつも携帯で雄二たちと事件の話をしているようである。

ちなみに、現在俺の体にはデータ収集用のヘルメットやら、コードがいつぱい繋がっている上着やらが装備されている。なんだか、新型ロボの開発風景みたいでメカメカしい。

さて、現在俺は明久を処刑しようとする女子勢を説得して話を聞かせてもらった後、学園長のところにやって来た。

呼ばれていたついでに、この件について話し合ったためである。

ちなみに、どうやって明久を殺そうとしていた女子勢を説得したか
という点、

「秀吉と一緒にのお風呂に、女湯盗撮の二つを同時にやれるような頭
のいい奴はFクラスにいない」

と言ったら渋々納得してくれた。

秀吉が完全に女扱いだったり、俺に関してそもそも疑っていなかったりしたのが気にはなったが、とりあえずスルーしておくことにする。

「ユキトの言葉が痛いっ!!」

なんて明久が悶絶していたのもスルー。

「ふむ。そういえば、アンタには木下と一緒に風呂云々の処理を頼んでいたんだっけね。なら、Fクラスの連中にはアリバイがある、と」

…この妖怪ババア、あんなこと押し付けておいて自分では忘れてやがった…！

まあ、俺は大人だから怒らないが。決してババアが既に『歩く超級グロ画像』として学校中に噂をされているからではない。

『これからも便利なFクラス鎮圧手段として使ってやるよ！ざまあ！！』などは決して思っていないのである。大人だから。

「…そういうことだ。つまり、Fクラス以外の誰かが犯人になるが…学校側はどんな対応を？」

「生徒には部屋に備え付けの浴槽を使ってもらうことになるね。夕飯の時にでも通達するよ」

「何っ!？」

聞き捨てならない発言に、俺の顔が驚愕に染まる。

つまり、俺はあの大浴場にもう入れないということか!？そんなバカなことが…!風呂好きには死活問題じゃねえか!!

せつかく色々問題も片付いて風呂にゆつくり入れると思っていたのに…!おのれ世界よ!どこまで俺の邪魔をする!!

「…いや、待て学園長。それ、犯人が見つければ大浴場は使用可能になるってことだよな」

「それは…そうなるかもしれんさね。だが、犯人のアテでもあるのかい？」

「風呂のためなら俺はなんでもしてやる…!!」

「アンタもたまに変になるねえ…!」

やかましい！外見が一番イカしてる妖怪には言われたくねえよ！！

静かな決意を固め、俺はなんとしてもゆっくり風呂に入ることを決めたのであった。

「というわけで、犯人探しに来た」

「…まあ、こちらとしては止める理由もないんだが…」

夕飯後。

本来なら入浴するための時間に、俺（と明久）はスネークのもとへ来ていた。

捜査の基本は情報収集。どんな状況でも逆転できる弁護士も、証拠や情報がなければどうにもならない。それだけに、どんな情報もあらかじめ集めておく必要がある。

「というわけで、スネーク。カメラは誰に、いつ発見されたのか教えてくれ」

「…もう俺へのその名前は定着したのか？」

ぶつくさ言いながらも、その時の話を教えてくれるいい人スネーク。いやー、まさに教師の鑑である。

さて、彼から聞いた話で状況を再現してみよう。

カメラが見つかったのは、今日の朝。第一発見者は、Cクラスの女子達だ。

朝、彼女達が起きて身支度を整えていると、一人の女子が靴下の片方がなくなっていることに気づいた。

どうやら、脱衣所に置いてきてしまったらしい、と思った彼女は、朝食に遅れないように急いで靴下を取りに向かった。

そして、脱衣所の扉を開けて靴下を探しているうちに、キラリと何か光るものを天井に見つけたという。

目を凝らしてそれを見ると、

「カメラが設置されていた、と」
「くっ…なんてうらやましいことをしてる奴なんだ!」
「お前少し黙ってる」

明久がバカ言っているのはいつも通りなので置いておこう。続きだ
続き。

さて、カメラを発見した女子は慌てて先生を呼んできた。

先生達が集まり、この問題をどうするか話し合っているうちに、あ
っという間に噂はCクラス中に広がってしまった。

そして、その卑劣な行為に激怒したCクラスの女子達は、正義感の
強い小山を中心にして、

「一番怪しいFクラスに文句を言おうとしたら、廊下で俺たちに出
会ったのか」

…ふむ。なるほど。

「俺から言えるのはこれくらいだな。他には何かあるか？」

「いや、とりあえずは充分だ。ありがとう」

スネークに礼を告げて、とりあえずその場を離れる。

「…うん。ねえユキト、これだけじゃ何もわからないんじゃない？ 犯人の可能性がある人が多すぎるよ」

「いや…実は、それには一応心当たりがある」

「え？」

明久の問いに、そう返す俺。

ババアにはアテは無いと言ったが、実は俺には犯人がほぼわかっている。

だが、今の話の中には、それだけでは説明がつかない部分が出てきた。どういふことなのか、しっかり知る必要があるそうだ。

「…だから、ちょっと話を聞かないといけないな」

呟いて、iphoneを取り出し、ある人物に電話をかける。

さて、こんだけズレてしまった世界だけれど…たまには、『原作』の知識に頼るとしよう。

「…美春か？覗きの件で話がある、今すぐ来てくれ。というか犯人お前だろ」

だが、こんな簡単に騒ぎが解決するとは思えない。

さらなる暗雲が、合宿所に立ち込めていたのだった…。

…なんだろう、俺またバカなことには首を突っ込んでいる気がする。

ちくしょう!!それでも俺は負けないぞ、大浴場に入るまで!!

第十六話（後書き）

ユキト苦勞フラグ。

でもまあ、感想で「苦勞してないユキトなんてユキトじゃないですよね！」みたいなご意見を頂いたので、僕はためらいなくドSっぷりを発揮することにします。

次回、ようやく美春とフラグを立てにいきます。

メインヒロインがんばれ！このままだと愛子に取って代わられるぞ！！

第十七話（前書き）

長くなったので二分割しました。
それでも4000字あるなあ…

第十七話

Q・お前、監視カメラ仕掛けたる？

「ええっ！？な、なんのことですか？ぜ、全然女湯のことなんて知りませんよ！？とミハルはミハルはシラを切ります！！」

Q・覗きのこと知らないのに女湯だってなんでわかったの？秀吉狙いの可能性もあるのに。

「は、はうっ！？そそそれはその」

Q・おかしいな…どうしちゃったのかな？島田の恋に頑張ってるのはわかるけど、盗撮は犯罪なんだよ…？

Q・話をした時だけ言うこと聞いたふりで、その後こんなことするなら…あの言葉の意味、ないじゃない、ねえ、約束は守ろうよ…？

Q・ちゃんと写真渡したのに…こんなんじゃない、全然意味ないじゃない…？

Q・ねえ、私の言葉、私の行動…そんなに、間違ってる…？

「少し、頭冷やそうか…」
「うにゃあああああっ！…！？」

…おっと、クールダウンクールダウン。「冗談はこれくらいにしておいて、と…」

つい風呂に入れない八つ当たりで美春にOHANASHIをしてしまったが、今は情報を手に入れることを忘れちゃいけないな。

さて現在、俺は明久を廊下の陰に隠して美春と一対一で対面している状態である。

こう言う時、明久との距離制限は厄介だな…どうしても『完全に一人つきり』にはなれない。

まあ…明久が臨死体験している時の俺はどこまでも孤独だが、アレに関しては例外としておこう。

で、俺の対面にいる美春は今、

ガクガクガクガク（正座）

完全に先程の俺が放っていた殺気に呑まれていた。

…うん、ちょっとやりすぎたな。美春がめっさ怯えている。女の子にこんなことしちゃダメだよな…

「あー…すまん、やりすぎた。大丈夫か美春」
「いえっ！むしろ今のは私が全面的にわるかったでしゅいたひっ！？」

あ、舌嚙んだ。

涙目で口を抑えている様は、元凶の俺が言うのもアレだが結構可愛らしい。その姿に、やや場の空気が和む。

そっと美春に近づいて頭をナデナデしてやると、ちょっと安心したのか気持ちよさそうに目を閉じた。

なんか猫みたいだな。実際の様子はぬいぐるみサイズの俺が自分より数倍大きい相手の頭を撫でているシュールな図だと思うが。

「（ゆ、ユキト…！その姿じゃなきゃ、清水さんは間違いなく墮ちてたよ…！？な、なんて特技なんだい…！？）」

物陰から一部始終を見ていた明久がそんなことを思っていたのは、また別の話である。

で、お互い落ち着いて。

「美春。お前がカメラを仕掛けたんだな」

「うっ…はい…そうです…」

俺は美春に質問を始めた。

ふむ、どうやら『原作』通り、カメラそのものは美春が用意したもののらしいな。これを用意した奴が別人だったら本格的に打つ手なしだったから有難い話だ。

だが、スネークに聞いた犯行状況…美春が犯人とするなら、明らかにおかしい部分がある。

「…なあ美春、どうして『脱衣所』にカメラを仕掛けたんだ？」
「え？」

美春が似非ムツツリ商會をこの『原作』とズレた世界でもやっつてるかどうかは分からないが、とりあえず言えるのは『美春の第一目標は島田である』ということだ。

しかし、それだと『脱衣所』に仕掛けるのはおかしい。

何故なら、島田は『女』で、美春も『女』。島田の着替えを覗きたいなら、Fクラスの入浴時間に『忘れ物をした』とでも先生に言い訳して自分で突入すればいいんだ。

事実として、島田達が風呂に入ったのは他のクラスが入浴し終えた後だしな。

それをせずにわざわざコストの高い『カメラ』を使った理由。それは何故なのかを聞かなければならない。

「ちょ、ちょっと待ってください！美春がカメラを仕掛けたのは『浴室』です！！」

「…！なるほど…詳しく聞かせてくれ」

美春と共に、俺は犯行現場である女湯に向かった。明久との距離制限が心配だが、これくらいの距離なら大丈夫だろう。

スネークに頼んで、中に入れてもらう。あっさり入れてもらったのは日頃の行いがいいからかね。

「さて、美春。確認するぞ…聞いた話では、カメラはここ『脱衣所』に仕掛けてあつたらしい」

「…でも、美春が仕掛けたのは『浴室』です」

「その確認は『浴室』で行うとして…カメラがセットされてたのはこの場所だな。美春、お前から見てこの場所はどつだ？」

「…そんなところにあつたんですか？そこだと、顔を上げたらすぐに見つかってしまいますし…というか、カゴや棚が邪魔で美波お姉さまの素肌が見えないじゃないですか！！」

…島田限定なのはこの際目を瞑っておこう。

「つまり『脱衣所のカメラ』は全く効果がないってことだな？」

「はい。…というか、ここにセットされていたカメラは美春が用意したものと同じタイプですね…という事は」

「『浴室』に行つて確認してみるか」

調べ終わったので、『脱衣所』から『浴室』へ二人で移動する。

ふむ、女湯の作りは男湯と左右対象になっているみたいだな。男湯にあった『死角』もきちんと存在する。

ここまで似ているということは、元々ひとつだった風呂に仕切りをつけてふたつの風呂に分けた、と考えてよさそうだ。

左右対象に作るなら女湯と男湯が『死角』のところで繋がっている必要はないしな。たぶん、文月学園に買い取られてから改築されたんだろう。

「ああっ！？み、美春がセットしたカメラがないです！？と、ということは…誰かが美春のカメラを動かしたんですか！？」

考え事にふけっていた頭を、美春の叫び声が呼び覚ました。

ほう、今のはなかなか重要な情報だったな・・・

ふむ、少しややこしい話になってきたのでここいらで整理しておくか。

以下、箇条書き。

- ・カメラを仕掛けた犯人は美春である。

- ・しかし、美春が仕掛けたのは『浴室』。

- ・だが、カメラは『脱衣所』にセットされていた。

- ・つまり、誰かが美春のカメラを動かしたことになる。

- ・『脱衣所』にセットされていたカメラは、『すぐに発見されてしまっ、覗きをする者にとっては意味のない場所』に配置されていた。

なんだかよくわからないことが起きているな。

この情報からわかるのは、誰かが『浴室』で美春のカメラを見つけ、それを『脱衣所』の『カメラを配置しても意味のない、そして見つかりやすい場所』に移動させた、ということだ。

だが、一体何のために？

覗きを止めたいならカメラを回収すればそれで済む話だろう。

犯人（美春）を捕まえるつもりだったのか？いや、それにしたってわざわざ『脱衣所』のほうに移すのは意味がわからない。

美春を逃がしたい理由があった？いや、『脱衣所』のバレやすい場所にカメラをセットしたんだから違うな。

自分も盗撮映像が欲しくて美春が回収できない『脱衣所』に配置し直したのか？…いくら素人でも、棚とカゴの配置くらい確認するはずだ。

「…うーむ、どうなってるんだ？」

謎の人物が何をしたのかわかった。が、その理由がわからない。
なぜカメラを移動させたのだろう？…ん？待てよ。

「なあ美春、お前はカメラをどこにセットしたんだ？」

「おのれっ！よくも麗しのお姉さまの…へ？カメラですか？あそこ
ですけど」

そう言つて美春が指差したのは、『浴室』の天井のスミ。なるほど、
あそこなら目立たないし全体を見通せる。

カメラは電池式で、煙も透かして見える高性能機だったみたいだし
な。だが…

「けっこう高い場所だな。どうやってあんなところにカメラをセッ
トしたんだ？」

「ああ、それは…その岩、露天風呂に似せて作ってありますよね

「？」

確かにここは天井がある風呂だが、岩などが配置されて露天風呂っぽくなってるな。なかなか凝ったデザインだ。

「それで、その岩をちよつとした階段にするんです。そこを登って、岩の上に風呂桶を重ねたりしたら天井に届きました」

「…滑って危ないだろ？女の子なんだから気をつけないとダメだぞ、美春」

「えっ…？は、はい…ごめんなさい…」

まったく、案外危ないことをしてたな、美春のやつ…

『ゆ、ユキト！その話術を僕にも教えてほしいよ！！』

『あいつらの邪魔をするなバカ』

『ああっ！離せえー！！あの話術さえ手にいれれば僕の人生がバラ色にいつー！！』

そんな会話がどこかで繰り返り広げられていたが、まあ、そんな空耳は放っておくとして。

また新しい疑問が生まれたな…

それは、『何故犯人はカメラの存在に気付けたか』ということだ。

俺は今美春に言われたから気付けたが、この場所をノーヒントで発見することは極めて難しいだろう。

もし美春の思惑通りに話が進んだら誰も気がつかないくらい上手い隠し場所だと思う。…そういう意味では、見つかってよかったな。

「ひょっとして、高い視線から見るとバレやすいとか…?」

確認のため、トン、と岩場に登ってあたりを確認してみる。

ふーむ…ダメか。遊びでここに登ったとしても気づかないレベルだなこれは。

そうすると、更に謎が深まるな… 『誰かが覗きをする確信を持っていた』とでも言うのか？

秀吉の件があったからムツツリー二達はそっちを優先する、と学校中で暗黙の了解ができていたはずなんだが…

考えながら、何かヒントはないかと高い所からあたりを見渡してみ
る。

おや、ここからは男湯の天井が見えるな。どうやら仕切りの一番上に隙間があるらしい。詳しいことはわからないが、換気とかの関係があるのか…

「！！」

そうか、わかったぞ！何故美春が仕掛けたカメラの場所がわかったのか！！

「スネークっ！！今すぐ男湯に入れてくれ！！」

『あれ、ユキト？どうしたのさそんな大声出して』

「なあっ！？この声は、吉井明久！！」

『し、しまったあー！？清水さんに僕の存在がバレた！！』

『なんとというか、バカだな責様は』

「コントやってる場合じゃねえぞ！いいから開ける！！」

男湯にもカメラが仕掛けられている可能性がある！！」

「「「何っ！？」「」

やれやれ、面倒事を増やしやがって…

見えたぞ、犯人の姿が！！

第十七話（後書き）

犯人がわかったユキト。

はたして、覗きをしたのは誰なのか！？

消去法でいけるだろこれ…

まるで推理ものみたいな文章でしたね、疲れました。

まあ僕の脳内理論なので穴があってもスルーでお願いします。

風呂場の説明がダルい上にわかりにくくなってしまい申し訳ありません。なんか僕の脳内で既にヘンテコ風呂になりつつあります。これを他人に伝えるとか無理だろ…

次回は半分ぐらい出来上がっているので、ひよっとしたら明日は早めにお届けできるかもしれません。

二話投稿はないと思います。書き溜めにまわさないと睡眠が…

なんだかんだ美春をドキドキさせてるユキト。

ひよっとしてこいつ生前もギャルゲ野郎じゃね？みたいに思われる方がいらっしやるかもしれませんが、この能力は美春にしか使えません。理由？作者パワーです。

明久「えっ！？つまり、僕にはあれを真似できないの！？」

やかましい、黙ってるこのフラグ野郎。

それが世界の選択だ、ラ・ヨダソウ・ステイアーナ。

第十八話（前書き）

話が進んでません。

いいかげん犯人だしてーよ！！

第十八話

side 明久

ユキトに言われるまま、急遽四人で男湯に移動する僕達。

男湯側の『浴室』に入ると、ユキトは女湯で清水さんが仕掛けた場所の『反対側』にあたる岩場へ登っていく。

「ユキト、そこにカメラがあるの？パツと見じゃ何も見えないんだけど…」

「そりゃそうだな。なにせ、こっちのカメラは『隠されて』いなきやおかしいんだ」

そう言いながら、ユキトが上へ登って手を上に突き出して引っ張る。すると…

あっ！湯けむりでよく見えてなかったけど、天井に布がひっかけて何かを隠してたみたいだ！

それをユキトが引き剥がすと、本当にカメラが出てきた。どういうことだろう…男湯にもカメラがあった上に、それがこんなに巧妙に隠されてたなんて。

「…カメラは電池式か。危なかったな」

「それはどういう意味だ、柊」

「こつちにカメラを仕掛けた奴…『犯人B』とでも呼ぶか。そいつがリアルタイムの映像を撮れるカメラを使っていた場合を考えてみる」

「…なるほど！私達が犯人を探しているのに気づいて、証拠隠滅をしようとする可能性があったんですね！！」

「そついうことだ」

え、どういふことなの？

まずい、皆が何を話してるか全然わからない。

はっ！このままだと、また僕が理不尽にバカ扱いされてしまうかも
しれない…！それは避けないと！！

よし、ここは会話がわかっているようなことを言っ
て誤魔化すことにしよう。

「つまり、カメラは二つあったんだね、ユキト！」

「バカかお前は」

「ぐわあーっ！？バカな、僕の完璧な計画がなぜ失敗したんだ！？」

「よくここまで頭が悪くなれましたね・・・」

「慌てるな、今から説明してやる」

「お願いユキト！せめてツツコんで欲しい、スルーされたほうがキ
ツイよこれ！！」

明久がまたバカをやって悶えている。こいつは本当に…いや、言及は避けよう。追いつちは気の毒だ。

まあとりあえず証拠のカメラは抑えたので、幾分かは俺にも余裕が出てきたな。

閃きの推理だったし、間違ってる可能性もあったが…どうやら正解だったらしい。

さて、この場にいる俺以外の三人には説明をしておくべきだろう。

…まあ、説明しても理解しないのが明久なんだが。頑張つて、わかりやすく説明するとうとうかね。

「結論から言うぞ。何故、『犯人B』が普通は発見できない美春のカメラを見つけられたのか。…それはな、『ちょうど真逆の場所に自分もカメラを設置したから』だ」

「ええっ!?!」

「み、美春と同じ!?!」

「ふむ…詳しく聞かせてもらおうか」

さて、俺の推理に基づく『犯人B』の行動を再現してみよう。

美春がカメラを設置した、その後のことだ。

美春が設置したのは一日目の昼間らしいが、その一分後か、はたまたずつと後かはわからないが、とにかく美春より『後』に『犯人B』は男湯にやってきた。

「『後』…どうしてそうわかるんですか？」
「それを今から説明する」

用意してきたカメラを持ちながら、『犯人B』は考える。

『カメラをセットするなら、慎重に、かつしっかりと撮影できる場所を選ばなければならない』

彼がしばらく探していると、幸運にもそれにふさわしい場所を発見した。

岩場の上から設置できる、天井のスミである。

「…美春の考えと同じですね」

「つまり、盗撮をしようとした人は二人いたってことなの？」

「…ウチの学校に二人もそんな奴がいるのか…」

ちよつと 不機嫌な美春、驚く明久、頭を抱えるスネーク。聞き手の三人は三者三様の反応を見せていた。

…残念だけどスネーク、明らかに一人だけじゃすまないんだぜ？

秀吉のことがなかったら男子全員が覗きをやったからな。ソースは『原作』。

「まあとにかく、続きを話すぞ」

『犯人B』はカメラを設置し終えて、ほっと一息をついた。

これで目的は果たした。それでは、戻るとしよう。

そうして彼が岩場に乗ったまま後ろを振り向くと、女湯の天井が目に映る。

ここからだ toward が見えるのか、などと思っていた彼は、ふと『あるもの』を見て仰天する。

なんと、自分がカメラを設置した反対側にも、カメラがひっそりと置いてあるではないか。

「それが清水のカメラか……」

「だから清水さんの『後』って言ってたんだね」

「そういうことだ」

納得した明久とスネーク、それに教師にバレて複雑な顔をしている美春の反応を確認しながら、俺は説明を続ける。

さて、女湯側のカメラの存在に気づいた『犯人B』は考えた。

『女湯にカメラを仕掛けた人間は自分と同じことを考えた』

『つまり、自分と同じようにして反対側のカメラを発見する可能性がある』

『ならば、そのための対策をとらなくてはならない』

そこで『犯人B』はまず布で自分のカメラを隠し、次に女湯のカメラを『脱衣所』の見つかりやすい場所に移動した。

「え？どうしてわざわざそんなことをしたのさ。布はわかるけど、場所を移動するとどうして自分のカメラを隠したことになるの？」

明久が不思議そうに聞いてくる。

「それはな、学校側としては盗撮騒ぎなんてあったら間違いなく風呂を閉鎖するだろ？」

「うん」

「つまり、閉鎖さえされれば『美春はカメラを回収できなくなる』から、岩場に登られて自分のカメラを発見されることはなくなるんだ」

あんな場所、岩場に登って注意深くしないと見えないしな。

「でも、男湯も閉鎖されちゃうよ？『犯人B』もカメラを回収できなくなるじゃないか」

「…そうだな…だから俺もてつきりリアルタイムで映像をパソコンとかで録画しながら観てると思ってたんだが…」

確かに、明久の言う通りこの部分は俺もひっかかっていたところなのだ。

いくらカメラをわかりにくい場所に設置して布で隠したとはいえ、なぜ『犯人B』は『風呂を搜索されて発見されるかもしれない』リスクを犯したのだろうか。

彼は何か男湯を搜索させない手段でも持っていたのか？

…ムツツリー二ならともかく『アイツ』にそんなコネはないはずなんだが…

「何を言ってるんだお前達は？」

そもそも、男湯が搜索されるわけないだろうに」

「「え？」」

その疑問の答えは、意外にもスネークが口にした。

「女湯は確かに絶対立ち入り禁止になるだろうが…あくまで男湯が閉鎖されるのは『とぼっちり』でしかないんだ。わざわざ無関係の場所を警戒するわけないだろう」

「で、でも…男湯にも監視カメラを仕掛ける人がいるかもしれないじゃないですか!!」

「何を言ってるんだ？男が男の裸を見てどうする」

…あ、そうか。

訝しげにそう言ったスネークの言葉で、ようやく俺はその発言の違和感に気づいた。

「なるほどな…明久、お前が不思議に思うのはおかしくないぞ。スネークと俺たちじゃ、男湯に関する考えに根本的な『違い』があるんだ」

「え？どういうこと？」

「つまりな、明久と俺はまず『秀吉のこと』を考えるけど、スネークはそうじゃないってことだ」

そう、この違和感は『秀吉をどう見ているか』によって発生した『対応の違い』によるものだったのだ。

つまり、俺と明久は『秀吉がいるから男湯も覗かれる可能性がある』
と
思っていた。

しかし、『犯人B』とスネーク達教員一同は『秀吉を女扱いして
いなかった』から、男湯は搜索されないものと考えたんだな。

ああ、なるほどなあ…確かに『アイツ』が犯人なら秀吉を男扱いす
るのも頷ける。そういう人間だからな、『アイツ』。

いやー、すっきりした。ひっかかってたものが取れた気分だよ。

「…なんとなくか、お前らは木下の性別をどう見ているんだ？」
「性別：秀吉」

俺と明久、迷わず即答。

秀吉はいつだって性別の境界を飛び越えている、女や男という次元の話ではないんだよ！

「…男性にもいろいろありますね」

感心したように、美春が呟いていたとかいなかったとか。

そんなわけで、説明終了。

「なるほどな…これで、不可解だった疑問のほとんどは解決したわけか」

スネークがそう呟く。

「でも、肝心の『犯人』がわかってないよ？男湯を覗く人間なんて心当たりがありすぎるし…」

「サラリと大変なこと言ったよな」

「…この学校は…」

スネークがこめかみを抑えながら呻いていた。なんだろうこの気持ち。今、猛烈に彼と酒が飲みたくなった。二重の意味で飲めないけ

ど。

しかし、犯人か…。

「…なあ、スネーク」

「?どうした柎、真面目な顔をして」

「この件の処分…俺に任せてくれないか？」

「「「え?」「」」

俺以外の三人の声が八モる。

「何を言うんだ?この問題は学校側にも影響が出ている。お前個人の問題じゃないんだぞ?」

「…それはわかってる。けど…そうするとさ、美春も何らかの処分を受けるだろ?」

「…」

バツの悪そうな顔をする美春。

いくら撮影に失敗したとはいえ、未遂も立派な犯罪だ。このままだと、学校側も何らかの処分をせざるを得ないだろう。

…けれど。

「実はさ、既に美春にキツイお仕置きしちゃったんだよ。美春には色々手伝ってもらったし、この上処分っていうのは申し訳ないんだ」

随分怯えさせてしまったんだ、これくらいはしてやらないとな。

「…ユキトさん」

驚いたような顔で、俺を見ている美春。

…そんな顔をされても困るな。あくまで俺は、やりすぎた自分に反

省して勝手にやっているだけなんだから。

感謝されるいわれなんて、ないんだぞ。

「お、お仕置き!？」

空気読めこの大バカ野郎が。

「むう…しかしだな…」

「それにさ、『女子が女湯覗いた』とか『男子が男湯覗いた』から
処罰した、なんて事実を学校としても公表したくないだろ？」

「…『男子』か。お前には、既に犯人がわかってるらしいな」
「ああ」

そう、俺は既に犯人がわかっている。

そいつのことを知っているから『処罰は俺に任せる』なんて言い出したんだよ。もちろん美春のこともあるけどな。

「…学校側としては、こんな騒ぎを二度と起こしたくないからな。清水、お前が二度とやらないと誓えるなら、それを認めてやってもいい」

流石スネーク、話がわかる。

「ねえ、大丈夫なのユキト？こう言うのもなんだけど、清水さんがそんな条件忘れちゃいそうだけど」
「あー、それは大丈夫だ」

明久がもつともな疑問をぶつけてきたが、まあ問題はないだろう。

何故なら、

「はははははいつー！あああ頭は冷やしましたのでお許しください
いっつー！ー！」

I。 …どうも、トラウマになっちゃったっぽいんだよね、OHANSH

第十八話（後書き）

劣化コピーでこれか…OHANASHIはトラウマを量産する力があるようですな。

さすが白い悪魔さんやで！！！！！！

話が進みません。予定では犯人とケリつけてるはずだったのに…

説明って難しいですな。理論に穴があっても（ry

次回、ついにこの騒動にケリがつかます。

さっぱり出番がなかった秀吉も、明久となんと…！？

となる予定ですが、20万PV記念では秀吉を暴走させる予定なので出番が逆に少なめになる可能性があります。今16万PV…学園祭には間にあわせないと！

第十九話

結局、美春の様子を見て渋々スネークは俺に処分を任せてくれた。

今回、けっこう彼には迷惑をかけてたな…今度、カロリーメイトでも持っていくとしよう。

スネーク的に考えて、あの名言は聞けるのだろうか？少し楽しみだ。

で、俺と明久は美春と別れて雄二達が待つ自室へと戻ってきていた。

ちなみに美春は去り際に、

「ユユキトさんああありがとととごさましたたたたああっ！！」

とガクガク震えながら俺にお礼（…だよな？）を言って去っていった。

O H A N A S H I I の悪影響が出たのか、なんだか顔を赤くしたり青くしたりと表情の変化が凄まじかったぞ…

人間はあんな信号機みたいに顔の色を変更できるものなのか？ちょっと美春が大丈夫か心配になる。

話を戻そう。

部屋に戻った俺は、部屋にいた雄二と秀吉に今回の事件の概要と自分の推理を聞かせた。

なぜかというと、『アイツ』…つまり、『犯人B』をおびき出すには、この二人の協力が必要になってくるからだ。

ちなみにムツツリー二は別室で治療を受けているのでここにはいない。まあ、彼の所には既にここにくる前に寄っておいたので問題はないけど。

「なるほど、話はわかった。個室風呂だと翔子が乱入してきたとき致命的だしな…手伝ってもいいぞ」

「…ワシも明久と風呂に入りたいしの、協力はするが…しかしユキト、結局犯人は誰なのじゃ？」

と、疑問符を浮かべている秀吉。

まあ、そりゃそうだな。俺だって『原作』を知らなきゃこんなカンまかせの推理できなかつたし。

「そうだな、説明するか…と言いたいが、明久。お前は耳をふさいでろ」

「え！？なんでさユキト！！僕だけ仲間外れなんてそりゃないよ！！」

反発する明久。まあ、当たり前だ。

…だが、この話をお前に聞かせるわけにはいかないんだ、わかってくれ明久…！

「いや待て明久。ユキトはお前のためを思ってるんだ」
「え？…本当なの、ユキト？」

どう取り繕うか考えてた俺のフォローをしたのは、なんと雄二だった。

珍しいな…雄二が明久をかばう手伝いをしてくれるとは。一体どう
いう風の吹き回しだ？

「この話をするためにはな、ババアの裸の説明から始めなきゃならないんだ」

「わかった。耳をふさいで目を閉じておくよ」

あ、精神への攻撃に切り替えてただけだった。

「…なぜこんな嘘に引つかかるのじゃ…?」

「バカだからだろ。で、ユキト。犯人は誰なんだ?」

自分の発言に悪びれもしない雄二。なんというか、因果応報という言葉をこいつは知らないに違いない。

世間一般では、これを死亡フラグと呼ぶ。

しかしまあ、明久が耳をふさいでくれたのは事実だ。あいつの気が
変わらないうちに話しておくとしようかね。

「…雄二、秀吉。今回の犯人は…」

「…Aクラスの、久保利光だ」

翌日。勉強合宿も四日目だ。

五日目である明日は、昼前にここを出発して帰るので、今日は実質的な最終日になる。

そんな四日目だが、今日は合同自習はなく、各クラスで課題を解くことになった。

スネークの話だと予定通りという話だったが、恐らく覗き騒動が多少は影響しているだろう。

…そんな中、俺はFクラスが集まっている部屋の外の休憩室に一人で立っていた。

今回の犯人である、久保と話をするために。

「…ねえ秀吉、さっき僕の声真似してたよね？つまり、犯人は僕の知ってる人なの？」

「（な、何のことじゃ？ワシはただ、急にお主の声真似がしたくなっただけじゃ）」

「（えっ！？ひ、秀吉…それって、僕のことを考えたってこと…？）」

「（待つんじゃ明久！な、なぜそんな嬉しそうな反応をするのじゃ！？た、確かにワシはお主のことを考えておったが…）」

「（ひ、秀吉…）」

「（はっ！？ちょ、ちょっと待つんじゃ！！今のは違うのじゃー！！）」

「（…お前ら、犯人が来たら大声は出すなよ）」

休憩室の自販機の影から、そんな声が聞こえてくる。まあ、言わなくてもわかるだろうが、明久、秀吉、雄二の三人である。

なぜ彼等がここにいるかというのと、俺が秀吉に、

『あ、久保君？ちょっと勉強でわからないところがあるんだけど、できれば教えてくれない？二人つきりで』

と、久保を呼び出すため明久の声真似を頼んだからである。大した接点がない俺の呼び出しに久保が応じるとは思えないからな。

しかし、『二人つきりで』なんて台本には書いてなかったんだが。また明久に変な噂が立ちそうだ。秀吉もやっぱりバカだ。演劇の。

ちなみに、雄二には『距離制限』により俺から離れられない明久に
『今回の犯人が久保だと知られないように』するように頼んでいる。

え？なんでそんなことをするかって？

言わなくてもわかるだろ？

…わかるよな？

わかなくても絶対に説明しねえからな！！

さて、待ち時間の間は暇なので、ここらで何故俺が『犯人は久保』
だと推理したのか、その種明かしをしておく。

推理モノの物語の場合、『普通』ならアリバイなどを真つ先に考えるものだが、俺個人に生徒全員のアリバイなどわからないし、

なにより文月学園の生徒に『普通』な奴などいない。

そついうわけで、ここは別の切り口…『誰が犯人の候補に成り得るか』について考えてみよう。

さて、そう考えるとまず真つ先に除外されるのが、Fクラスの男子全員である。

前にも言った通り彼らは秀吉と『風呂に入ること』に全力だった。カメラを設置することなど考える余裕もないだろう。

次に、霧島と姫路、島田も除外。カメラを仕掛けたなら、男湯に間違えて入るわけがないからな。

さらに、今回使用されたカメラのことについて考えてみよう。

今回使用されたものは、湯けむりも透過し、防水加工されている高級品だ。

こんな犯罪臭がするものを調達できる奴など、当然ムツツリーニしかない。

しかし、先程言ったように、秀吉のことに命を賭けていた彼には犯行は不可能だ。

つまり、犯人はムツツリーニ本人ではなく、彼が経営するムツツリ商会を利用している人間。

それに、こんな高価なものを購入できるということは、かなりのヘビーユーザーであると言えよう。

ここで、工藤や優子など、ムツツリ商会とは縁がない人間も容疑者から外れる。

…まあ、貴重なツッコミであるあの二人がこんなことするわけないんだけどな。

さて、この時点で『犯人は男子』ということが断言できる。
女性でムツツリ商会のヘビーユーザーなのは、霧島に姫路、島田と美春だけだからな。

ここまでが、状況から得られる情報を使って特定できる限界だ。

たとえ神童と呼ばれていた雄二でも、これ以上のことを特定することはできないだろう。情報が足りないために。

しかし、俺には『原作知識』がある。

それを使ってようやく、この推理を行うにあたり必ず抱いてしまう『先入観』に気づけるのだ。

…スネークの言葉を思い出してほしい。

『何を言ってるんだ？男が男の裸を見てどうする』

スネークは『男が男湯を覗くことは有り得ない』と考えた。

この言葉に対して、雄二なら『秀吉がいるんだから覗くメリットはある』と考えてしまうだろう。

だが、待ってほしい。

この学校で、男が男湯を覗くのは本当に有り得ないことか？

そう、いるのだ。秀吉以外を目的にして、男湯を盗撮するような同性愛者が。

それが、久保。

実際、残されたカメラをムツツリー二に確認してもらうと、録画のタイマーは秀吉の入る時間ではなく、『俺たちが入っていた時間』…

…つまり、本来はすべてのクラスの入浴が終わっているはずの時間にセツトされていたのだ。

恐ろしいことに、久保利光は

『俺がFクラス全員を止めて、明久と一緒に全員の入浴が終わってから入る』

という流れを完全に読んでいたのだ。

大した奴だ、久保…学年三位の知能は伊達じゃない。

…だが、お前の策は失敗に終わった！

残念だったな、久保！風呂が懸かった俺の執念を、読み切れなかったのがお前の敗因だっ！！

…と、ここまでが俺の『後付け』の推理である。

いや、実際はこんな難しいこと考えてなかったんだよね…だってさ、

冷静に考えてみるよ。

『原作』で名前が表示されていないモブキャラが、こんな大それたことできるわけじゃないか。

俺が実際に考えたことはこんな感じだ。

・まず、『原作』の重要キャラを並べてみる。

吉井明久・坂本雄二・木下秀吉・ムッツリーニ・姫路瑞希・島田美波・清水美春・小山裕香・根本ゴミクス・霧島翔子・工藤愛子・木下優子・久保利光

・ここからFクラスと当事者を除外する。残ったのは以下の六人。

小山・根本・霧島・工藤・優子・久保

・先程言った理由で霧島・工藤・優子は除外

小山・根本・久保

・怒鳴りに来た小山と、入院してる根本は除外

久保

というわけで、残った久保を軸に考えたら辻褄が合っちゃったので

ある。

俺の心からの本音を言おう。

こ
？
？
れ
？
？
は
？
？
ひ
？
？
ど
？
？
い

神様…あんに推理モノの才能は無い。だって消去法で答えわかつ

ちゃったじゃん…

コツ、コツ、コツ…

と、やって来た足音に、俺の意識が引き戻される。

…どうやら、久保がやって来たようだな。

「（あつ！来たみたいだね…結局みんな教えてくれなかったし、せめて顔を一目見ないと）」

「（姫路、島田。明久が秀吉とイチャついてたぞ）」

「（へえ、そうなんですか？詳しく聞かせてください、明久君）」

「（木下も、抜け駆けについてウチらとOHANASHIしないからね）」

「（なああつ！？ひ、姫路さん、いつの間に！？美波も、そ、それは誤解…あぎゃああああつ！！？）」

「（や、やめるのじゃ島田に姫路よ！？その関節はそっちには曲がらな…っ！…！）」

…雄二、明久を止めるとは言ったけど、息の根を止めるとまでは俺は言っていない。

「…む？君は吉井君の召喚獣の…吉井君はどこだい？」

なんてこった。止め（トドメじゃないぞ！）にいこうとしたら、先に久保に話しかけられてしまった。

もうこうなったら、明久達には終わるまで耐えてもらうしかない…！

だが大丈夫だ二人共！雄二も死亡フラグがブンブンしてるから！多分後でなんかして霧島に殺される。

というわけで、気持ちを切り替えて久保のほうに振り向く。

「…悪いが、久保。お前を呼んだのは俺だ」

「…！…おや、何故だい？僕と君に接点などないはずだけど…」

「とぼけるな。男湯にカメラを仕込んだのはお前だろ？」

「…ふう。どうやら、言い逃れはできそうにないね」

誤魔化そうとした久保に核心を告げると、諦めたのか久保は言い訳を諦めて溜息をついた。

「…えらくあっさり認めたな」

「君はバカではないようだからね。僕を言い負かす証拠や理論を用意してきたのだろうか？なら、論争するのは時間の無駄だよ」

そう言つて、自嘲するように笑う久保。

「…カメラは、ムッツリーニから仕入れたのか？本人は覚えてなかったと言つてたぞ」

「買った後にコンビニで買ったグラビア本を渡したからね。鼻血の海に沈む場面なんて初めて見たよ。少し申し訳なかったが…まあ、それも無駄になったようだね」

本当に色々手を回していたようだな。俺じゃなければ、この犯罪は確かに完全犯罪が成立したかもしれない。

しかし…会話をしているだけで、わかることがある。

それは、こいつが『頭がいいこと』だ。

言葉ひとつひとつに知性を感じる…とでも言えばいいのか？用意した策は万全で、たとえ不測の事態が起きても完璧に対応する。

認めよう。こいつは、頭がいい。

だが。

だからこそ、俺はこいつに聞きたいことがあったのだ。

「…なぜこんなことをしたんだ、久保」

そう。そもそも久保は『原作』ではこんなことしていなかったの
ある。

自分の欲望のために、犯罪をする。久保利光は、そんな人間ではな
いはずなのだ。

…もしも、それを歪めてしまう存在がいるとすれば、

「なぜ、か。…多分、焦ったのさ」

それは、

「君のような好青年に、吉井君が取られてしまうのは…悔しかったからね」

俺だ。

… Aクラス戦の時と同じだな。

俺がいたせいで、本来勝つはずの闘いに敗北してしまったように。

久保もまた、本来はこんなことを起こすはずではないのに、俺のせいで歪んだ。

だから、俺はスネークに『責任を取る』ことを言い出したのだ。

…自分の身勝手さに呆れるな。

これだけ楽しい日常を送っていたら、嫌なこととも起きるのが当たり前のはずなのに、そんなのはイヤだと否定する。

そうさ、認めよう。俺は、本当は責任うんぬんなんてすっかり考え
ちやいない。

ただ、自分に都合のいいようにしたいだけなんだ。

…後悔はしない。だから、その歪みを正すため…この言葉は、しっ
かり言わないと。

「…おい久保。一応言っておくが、俺と明久は恋人とかそんなんじゃないぞ」

「…え？な、何だっつてえっ!?!」

「うわあああああ!?!やっぱり勘違いしてたよこいつ!?!」

「バカ言っつてんじゃないやねえよ!?!俺も明久も同性愛者でもなんでもね

「から!!」

「し、しかし! 君たちはあんなに仲良くしているじゃないか!!」

「だあああッ!! おかしい! 仲が良いことと恋人をイコールで結びつけるお前はおかしいッ!!」

「学校の影で囁かれていることだぞ!？」

「訂正!! この学校すべてがおかしいぞッ!!」

だああああああ!! なんなんだこの学校はアアアアア!？

積みりに積もったストレスについにブチ切れ、先程のシリアスな空気を全て吹っ飛ばして叫ぶ俺。

「俺はお前みたいなバカのせいで風呂に入れなかったのか!! くらばれ!! このガチホモ野郎がッ!!」

「な、何だかわからないがすまない! ハッ!？ 待てよ、まだ僕にもチャンスはあるということなのか!？」

「貴様全く反省してないな!？ オーケイわかった、そこに正座しやがれ!! 貴様に風呂というものがどれほど偉大かを説教してやるよオオオオオオ!!」

怒りの臨界点を200kmぐらいオーバーした俺はその後4時間に
渡る説教を久保に行い、

この日を境に、『Aクラスの久保は同性愛者』という噂と、『吉井
明久の召喚獣から風呂を奪うな』という暗黙のルールができたとい
うが…

それはまた、別の話である。

…え？シリアスシーンで言った言葉と直後の暴言が矛盾してる？

知るか！！

第十九話（後書き）

久保君ファンの皆様ごめんなさい。

つーわけで、いいかげんキレたユキト暴走回でした。
なんだか投げやりなオチになってしまいました。冷静に考えてみてください。

- ・初日、窒息死しかける
- ・二日目、脱力モノのバトルを繰り広げた後、男湯に女子三人突入
- ・三日目、大浴場に結局入れなかった
- ・四日目、同性愛者扱いされ、しかもこの事件は誤解から始まったと判明

キレていいんじゃない？（まあこんな風にしたの僕ですけど）

なんだかんだで微妙に尺が足りなかったので十九・五話を連続投稿します。

たぶん4時ぐらいになるかなあ…皆さんは寝てください。

第十九・五話（前書き）

四時じゃなくて今は五時やないか！

第十九・五話

「…というのが、今回の話のオチだ」

「そ、そうかい…じゃあそいつの名前は公表せずにこの件は片付けるが…」

「…ああ、そうだな。久保の名前をバラすと美春まで公表しなきゃいけないし…チツ」

「…不機嫌だねえ…」

「あア？」

「な、何でもないさね！！そ、そうだ、アンタは今回の功労者だし…大浴場に入ってきたらどうだい！？」

「…フロ？」

「あ、ああそうともさ！一応、一回閉鎖した風呂を生徒に解放するのは面倒だし、貸し切りにしてやろう！ああ、それがいい！！」

「…貸し切りか…そうだな…そうするか。もう風呂入って寝たいし」

「…ほっ」

「…いつそ風呂の中で寝るか…」

「…ただ好きなんだいアンタは」

side ? 明久

そういうわけで、今回この事件の解決に協力した皆でお風呂を貸し

切りにしてもらったんだけど、

「…世界滅ばねえかな…」

さっきからユキトからドス黒いオーラが出てて怖い。

「…雄二、僕が三途の川を見てる間に何があったのさ」

「悪いが、それをお前に伝えたらユキトがさらに悪化するから言えないな」

「うむ…ワシらにできるのはそっとしておくことだけじゃ」

どうやら二人は理由を知ってるみたいだけど…うーん、ユキトはそれのせいで疲れきってるみたいだし、ここは聞かないほうがよさそうだ。

「孫子危うきに近寄らずって言っしね」

「…『君子』だぞ…」

ユキトのツツコミにも覇気がない。

うーん、これは重傷だなあ…僕がわざと間違えていつものテンションに戻そうとしたのに。

…やめてよ秀吉！そんな憐れむような目で僕を見ないで！！

わ、わざとなんだからね！？べ、別にユキトのために間違えたんじゃないからねっ！？

そうそう、なぜ男湯に秀吉がいるのかと言つと、

『これが最後のチャンスなのじゃ！ワシも今回こそは明久達と一緒に風呂に入るのじゃ！！』

と、涙目上目遣いという反則技を使われたためだ。

もちろん、妥協案として水着は着てるけどね。全裸だとユキトが頑張った意味がないじゃないか。

「…これはこれでいい」

先程部屋を抜け出してきたムツツリーニが幸せそうに呟く。

病み上がりなのに秀吉の水着を一瞬で布切れから作り出したり、さらに貧血なのに風呂に入るとは…彼の執念もハンパではない。

「…なぜ水着なのに上を着る必要があるのじゃ…？」

何を言ってるんだろう秀吉は。女物ならそれが普通だ。

「それにしても、五人だけで大浴場っていうのも贅沢だよね」

そう、正直な感想を口に出してみる。

ユキトも疲弊しきってはいるけど、この風呂に入ってから少しずつよくなってる…気がするしね。

Fクラスの男子と入った時は水切りとかで騒がしかったから、ゆっくり風呂に浸かるのは新鮮な気分だ。

「ああ。全くだな…なにより、翔子がないというのが素晴らしい」

コイツめ、あんな完璧美人に好かれながらこんな反応をするなんて。

「やれやれ…雄二、そんなこと言ってるといつか酷い目に逢うよ？」

「…よくわかったな、明久」

「んぬ？ユキト、急にどうしたのじゃ」

背泳ぎの姿勢でプカプカ浮いていたユキトが、唐突に僕たちの会話に口を挟んできた。

そっとしておいたほうがいいと思ってたけど、結構回復したのかな？

というか、『よくわかったな』ってどっこういう意味なんだろう。

「ねえ、ユキ…」

僕がその意味を尋ねようと顔の向きを変えると、

ブクブクブク

さっきまで雄二がいた場所に、静かに気泡が浮いていた。

「…フラグ回収だ」

ああ、なるほど。僕は気づかなかったけど、どうやらユキトの目には雄二が冥界送りになる予兆のようなものが見えていたらしい。

さよなら雄二、君のことは忘れないよ。まあ霧島さんは人口呼吸が目的だから、ひよっとすると生き延び…

「って、霧島さん！？何でここにいるのさ!？」

「ここは男湯じゃぞ!？」

秀吉！キミは他人のことを言えないよ!!

僕が心の中でそうツッコミを入れていたら（僕は一緒にいたいから口には出さない）、霧島さんが左手で雄二の頭を押さえつけながら水面から顔を出した。

「…大丈夫、水着を着てるから」

「一体どこから調達してきたのじゃ…」

それはほら、言うまでもないだろう。

静かに洗い場のほうへ視線を向けると、ムッツリーニが鼻血の海に倒れながらこちらのほうへ親指を立てていた。

グツジョブ、ムッツリーニ。見えるかどうかわからないけど、僕も親指を立て返す。君は今、最高に輝いているよ…

こんな短時間に二人も友人を失ってしまったことに心の中で黙禱を捧げながら、僕は霧島さんのほうに向き直った。

「そっついえば、霧島さんもお風呂に入れてもらえたんだね」

「…久保がこっそり教室を出るのを手伝ったから、ユキトがいいって」

「え？なんで久保君が出てくるの？」

「…なんでもない。忘れて」

そう言い残して、再び水面に潜りどこかへ消えて行く霧島さん。

雄二も一緒に連れていったみただけど、もう水面に気泡すらなかったなあ。五分脳に酸素がいかないと死ぬって漫画で呼んだけど、間に合うかな雄二。

まあ、可能性は五分五分かな。霧島さんのことだから目的は人工呼吸だろうけど、今回は秀吉とお風呂に入ったお仕置きも兼ねているだろうし。

ひよっとしたら、僕と雄二の腐れ縁もこれで終わってしまうかも…

「こらー！待ちなさい、木下！」

「明久君！どうして木下君とお風呂に入ってるんですか！！」

OK、どうやら僕と雄二の腐れ縁はまだまだ続きそうだ。あの世で。

「ユキト、悪いけど僕の頭を木刀で殴ってくれない？溺死のほうが楽に逝けると思うんだ」

「…お前はなんつーか、俺なんか比じゃないくらい哀れだな」

ハア、とユキトが溜息をつく。

うん、ユキト。疲れるところに申し訳ないけど、これが僕の人生で最後のお願いなんだ。

できれば迅速に叶えてほしい。さもないと、死神が二人すぐ来ちゃうから。

…やれやれ。明久を見ると自分の不幸っぷりが可愛く見えてくる

から不思議だな。

「アキ！観念しなさい！！」

「明久君っ！木下君のほうがいいんですか！？」

だから他にやることあるだろうに。アイツらも成長しないな。いい加減見ててイライラしてくるし、少しだけ手助けしてやるか。

「おいお前ら、神聖なる風呂場で血を流したら…俺は今後全力で秀吉の味方をするから」

「ええっ！？」

おー、流石にここまで言えば効果はあるみたいだな。

「な、何言ってるのさユキト！そんなことで二人が止まるわけない

よ！僕を殺すのが趣味なんだから！！」

「…お前ら、あんな風に思われてるみたいだが…いいのか？」

「…うっ…」

「なんだ、何もしないのか？なら、明久は秀吉と洗いっこするだけだな」

「アキ！背中流してあげるわ！！」

「明久君！私は湯船でマツサージしてあげますっ！！」

「ま、待つのじゃお主ら！明久はワシと洗いっこするのじゃー！！」

「な、何なのこの突然の幸運は！？…ああなんだ、つまり紙やすりか」

その発想は心が傷つきすぎていると思う。

しかし、久し振りにマトモなラブコメ展開になっているようだな。

あんだけ言っどけば流血沙汰にもならないだろうし、あとはあいつ等次第だろう。

ギヤーギヤー騒ぎはじめた四人を横目に、俺はこっそり『死角』のほうへ移動することにした。

そんなわけでプカプカ移動していくと、

「ゆ、ユキトさん!」

と、唐突に誰かが声をかけてきた。

背泳ぎの体勢から体の向きを元に戻すと、

「…美春？」

猫耳が似合いそうな少女が、やっぱり水着姿でそこにいた。

「なんでここに…ていうか、どうやって男湯に来たんだ」

「えーと…Aクラスの代表さんがそこにあつた仕切りを壊してたので…」

486

…霧島…

後でスネークに謝りにいかせようと俺は心に誓った。渡すカロリーメイトの量は20個に増やして。

「姫路達も女湯からこっちに来たのか…それで、どうしたんだ？美春」

「あの、その…ごめんなさいっ！！」

気まずそうにしていたかと思ったら、彼女は急に俺に謝ってきた。

「…私のせいでお風呂にも入れなかったみたいですし…さっきはすごい疲れ切ってたから、あの…」

「…それは美春のせいじゃないよ。俺が勝手にやったただけだ」

ああ、まだその事気にしてたのか。美春って、なかなか反省しないけど一度反省したらどこまでも自己嫌悪に陥っちゃうタイプなのかな？

「でも、美春は…」

「だからいって。それよりほら、島田のどこ行かなくていいのか

？なんだかフラグ立てかけてるけど」

「…ユキトさんが言ったんじゃないですか。相手の気持ちを考えずに自分の気持ちを押し付けちゃいけないって」

「…おお。ちゃんと覚えてたのか」

Dクラス戦の時、美春に言った言葉だったな。

あの後島田が空気読まなかったから有耶無耶になったと思ってたよ。成長してるなあ、美春…

…うん、そうだな。こういう自分を貶めちゃうタイプには、こういう対処が一番いいだろう。

「これで貸し二つだな、美春」

「…え？」

「試召戦争の時と、今回。利子は勘弁してやるから、ちゃんと返しなさい」

「トキトね…」

貸し借りのように具体的なカタチにして、それを『目標』にする。
そうすれば、自分をバカにするんじゃないかって、高めようと頑張れる
はずだからな。

「…ありがとうございます」

そう言って。

嬉しそうに、美春は笑った。

「…そういう顔をしてれば、普通にモテるんじゃないか？美春」
「何を言っんですかっ。薄汚い豚なんぞに言い寄られたくありません
ん！」

「男は豚かよ…俺も男だぞ」

「えへへ…ユキトさんは特別ですから」

などと言いながら、浮かんでいる俺を抱き寄せてくる美春。

…どう考えても哀願動物扱いだよなこれ。まったく、本気で俺が男
だって皆忘れてるよな…

ぷちっ

「あれ？」

なんだこの音は。

もしや誰かがキレたか？と思いつながら明久達の様子を見てみるが、特に変わった様子はないな。

じゃあ何が…と思って美春のほうへ向き直ると、

ハラリ

美春の水着が、水面に浮かんでいるんですけど？

…あー、そうかー。いくらムツツリーニのお手製とはいえ、即席で作られた水着の耐久力なんだ…

つまり、俺の目の前には今、

ぼーい

じゃぼーん!!

全力でブン投げられた俺は、当然重力に従い、

湯船の底に沈んでいったのだった。

薄れゆく視界の中で思った事は、

とりあえず、貸しはあと一つだろうなあ、なんて現実逃避だった。

第十九・五話（後書き）

ムツツリー二のことだからわざと脆く作ったかもしれないね。

というわけで、美春が露骨な作者のプッシュを受けた回でした。

あれ、こいつオリキャラじゃね？みたいな感想ですね、僕としては。

しかし、へたくそな推理に比べて筆が進むこと進むこと。

明久の拷問シーン、書くの超楽ですな！！さて、この調子でイチヤイチヤを

メモ帳強制終了

…四分の一消えました。いい加減にしろ！！

・近況

評価500ポイント達成！

20万PV間近！

お気に入り登録200間近！

え、番外編三本書くの？

という僕の絶望はさておき、皆さん本当にありがとうございます。これからも頑張りますので応援よろしくお願いします…！

さて、次回から学園祭編です。あれ？学園祭がんばる理由提示できてなくね？

というわけで、次回の冒頭でその理由を説明したいと思います。

やる気を出す方法のヒント…風田

もはや答えに近いですね。

それでは、マジ眠いので寝ます。おやすみなさい！

あ、セミの鳴き声が…

第二十話（前書き）

改行しすぎて携帯で見づらい、という意見を頂きましたので、この先の改行についてアンケートを取ることにしました。

- 1．このまま
- 2．改行は1～2行に留める（いつもは2～4行です）
- 3．むしろ増やせ

このうちどれが良いかの御意見を募集したいと思います。
何もしアクションがなければ1で行きますので、御了承下さい。

一応携帯用のPCサイト閲覧プロキシ集のURLを貼っておきます
ね。

すぐに使えるPCサイト閲覧ブラウザ（PCサイトビューア集）

<http://kt.tool-1.net/15/>

第二十話

「…やれやれ、とんでもない合宿になったさね」

「まあ勉強はしていたようですが…一部を除いて」

「それはまあ、ユキトがなんとかしてくれてるはずさ。全く、頼りっぱなしで少し情けないね」

「そうですね。腕輪の調整もしてくれたと伺いましたが？」

「ああ、アレは危ないところだったよ。点数が低くないと使えないなんてね…」

「彼はいつもタイミングよくフォローを入れてくれますね…」

「そうさね。ひよっとしてアイツは未来が見えるんじゃないかい？」

「…それならば、あんな苦勞は背負わないでしょう」

「ハハ、違くないね…まあ、こんだけ苦勞をかけたことだし、コレ位は当然ださね。」

Fクラスの奴らも、コレでやる気を出すといいねえ」

さて、色々あった勉強合宿も終わり。

気付けば今日は、学園祭当日である。

本当なら準備段階の説明とかをするべきなんだろうが：Fクラスの描写は『原作』とあんまり変わらなかったたので割愛。

とはいえ変わらなかったのは俺達だけのようで、学校規模で見ると

・召喚大会の商品である腕輪の不具合がなくなった

・教頭が俺の召喚の理屈を解き明かそうと必死で忙しいので、妨害はなさそう

なんて感じに結構変わっていた。

だが、まあ…一番の変更点と言えばここだろう。

・1〜3学年の中で一番売り上げが多かったクラスには、『温泉旅行二泊三日』と『高級牛肉一クラス分』を進呈する。

「気合入れるテメエらあっ!!」

「「「「「うおおおおっ!!」「「「「

学園長、Good job .

そんなわけで、Bクラスの設備を手に入れてやる気が全くなかったはずの俺達は、見違えたように張り切っていた。

「凄い張り切ってるわね…やっぱり男子は肉が好きなの？」
「ふふ、そうみたいですな」

女子二人は肉にそこまで執着はないようで、島田は呆れたように、
姫路は微笑ましく男子の様子を見ている。

まあでも、

「…今日は頑張らないといけないわね…！」
「…明久君と温泉旅行です…！！」

一位を獲得する気は充分あるようだ。安心した。

ちなみに、俺が風呂場で脅しをかけたあの一件で、彼女達はどうか
ら色仕掛けの有用性に気づいたらしい。

今までのあまりの拷問っぷりは多少息を潜め、明久に対してちょこ
っと積極的にアプローチをかけるようになったのだ。

まあ、実は合宿後の数日は恥ずかしくて明久と目も合わせられなかった、というのは秘密だ。

さて、現在の時刻は九時半。

そして学園祭が始まるのは十時からなので、俺達はFクラスの出し物『中華喫茶・ヨーロピアン』の最終打ち合わせを行っていた。

「そういうわけで、最初の宣伝に行ってくるから、女子二人はホールで接客。料理ができるって奴は足りてるみたいだから、臨機応変にホールも担当してくれ」

テキパキと指示を出していく俺。このクラスの行動力は凄まじいものがあるからな、頑張れば売り上げでトップになることは十分可能だ。

「あと姫路、お前は厨房には絶対に入るな。入ったらお前がムツツリ商会で買ったものを明久にバラすからよろしく。んじゃ、お前ら配置につけ!!」

「了解!!」「」「」

「ユキトくん!? 私はどういう扱いをされてるんですか!?!」

各自に伝達も終わり、全員が移動を始めている中、なんだか姫路が叫んでいた。

うーん…どんな扱いをしているか、ね。

「姫路、戦争で最も多く人を殺したものはなんだと思う？…『毒』だよ」

「化学兵器扱いですかっ!？」

「ちよつとユキト、瑞希に失礼じゃない？料理がダメでも、今から教えてあげれば多少は頑張れるでしょ」

「こいつはブイヤーベースを作ろうとして鍋を溶かす奴だぞ」

「さ、瑞希！ホールと一緒に頑張るわよ!！」

「ななな、なんでユキトくんがそのことを知ってるんですかっ!？」

「秘密だ。さ、配置につけ」

「行くわよ瑞希」

「あつう」

そんなこんなで、島田が姫路を連れ去っていく。

それを見ていた男子は、

「姫路さんはやはり天使だな」

「ああ、しかも巨乳だ」

「…純白なのも評価が高い（ポタポタ）」

「…おい、その写真1ダースよこせ」「」

やっぱりバカをやっていた。流石である。

しかし、即席漫才をやった姫路を見て、場の空気はずいぶん和やかなもの変わったようだ。

これなら仕事もはかどりそうだな。『実はお前達はさっきまで不発弾より危険なものの隣にいた』という事実は黙っておくことにしよう。

「うーむ…しかし、雄二がおらぬと知った時はどうなるかと思ったが…なんとかなるものじゃのう」

「そうだね。ユキトがいなかったら無理矢理にでも雄二を脅さなきゃいけなかったよ」

「俺もこういう仕切り屋になるのは始めてだが…まあ、大丈夫そうだな」

俺と一緒に、明久と秀吉は最初の宣伝に行くことになっている。

十時に備えてチラシを持ちながら教室を出て校門前に向かっていて、二人がふと思い出したように言ってきた。

そう、この場には今、雄二がいない。

なぜかというと、それは出し物を決めていた日に、

『焼肉か…よし、お前ら頑張れよ。俺は肉を焼く係になるからな』

『うわーやる気なくせに肉は欲しがるなんて最低だね雄二』

『…働かざるもの食うべからず』

『まあまあ、仕方ないだろ。雄二の境遇を考えれば』

『ぬ？つまり雄二は、また何か霧島からみでやらかしてしまったのかの？』

『な、何の話だ？また翔子が何か言ってたか！？』

『…お主の怯えようは心当たりがありすぎるといふことなのかの？』

『あれ？ねえユキト、雄二の反応からすると何も知らないみたいだ』

ね

『おや、何も知らずに言つてたのか…それは問題があるぞ、雄二』
『ちよつと待て。お前ら二人、何を知ってる』

『うーん、こんな凶々しい奴に教えるのは面倒だなあ』

『そうか…なら、話すか視力かどちらかを選べ』

『何をする気！？僕の目に何をする気なんだ雄二！！』

『まあ落ち着け雄二。…『召喚大会』の景品を知ってるか？』

『いや、知らないが…』

『ああ、それすら知らないのか。こりゃ霧島が手を回してるのかな？』

『…優勝商品は特殊能力つきの『腕輪』と『如月グランドパーク』のプレミアムチケット』

『な、何だと！？それは本当か、ムツツリー二！？』

『うん、そうだよ。あはは、霧島さんには僕がもう伝えてあるから安心…ぐあああつ！？目が、目があああつ！！』

『はいはいバルスバルス。んでな、雄二。そのチケットを持ってカップルで行くと、向こうの企業の都合で…結婚させられるしい』

『…は？』

『ジnkusを作りたいんだとよ。ここに来たカップルが本当に結婚した、っていうな。そうすればいい宣伝の売り文句になるからな』

『…のう、ユキト。霧島はこの話をどこまで』

『あ、僕が全部伝えておいたからぎゃあああああつ！？』

『…哀れ』

『こ、こうしちゃいられねえ！！おいユキト、俺と召喚大会に』

『あ、俺は喫茶にかかりつきりになるから無理だ。ちなみに姫路と島田も客引きで忙しいから出れないぞ』

『パートナー探してくる！！』

こんなやりとりがあったのだ。

というわけで、その後雄二は行方不明。パートナーは見つかったのか？…まあ、大会が始まればわかるか。

「ん？おいこらお前達、まだ校門には誰も来ていないぞ」

「あ、鉄人」

「よう、スネーク」

「…いい加減本名を言え」

そんな話をしながら校門に到着すると、そこにはスネークが立っていた。

何故いるのかと聞いてみると、生徒の宣伝のフライングとか変な客引きを防止するためだとか。

「そういつわけだ、まだ宣伝には早いぞ」
「ああ、そこらへんは大丈夫だ、俺は…」

俺がそう返した瞬間、

キンコーンカーンコーン…

と、学園祭の始まりを告げるチャイムが鳴り響いた。

508

わーっ！という歓声が校舎から聞こえてきて、一気に空気がお祭り
のときのソレへと変わっていく。

「…ちゃんと、時間は計算してきたからな」
「やれやれ。つくづく頭が回るな」
「そんな呆れた顔すんなよ。ほら、チラシだ。あんたにはカロリー
メイトをサービスするように言っているから、是非来てくれ」

ついでだ、スネークにも飲み物代を落としていってもらおう。

あ、でもこのままだと例の名台詞が聞けなくなるな。ムッツリーニ
に後で撮影を頼んでおくか。

そうして俺が割とくだらないことを考えていると、

「おお、お客様第一号が来たようじゃな。どれ、チラシを渡してく
るぞい」

と、秀吉が自然な動作でお客様のほうへ歩いていった。

おお、開始ジャストに来る外部者が来る人がいるなんて、流石に文
月学園は有名みたいだな。

どれ、どんな人が来たのか確認してみるか。

えーと、若い女の人だな。黒髪を短めに切った美人さんで、姫路の

それよりは小さいが巨乳で随分とスタイルがいいな。

…ん？

「二年Fクラスの中華喫茶です、美味しい点心を用意しておりますので是非お越し下さいね」

「Fクラス…あら？」

演劇モードに入った秀吉に、何かに気づいたように呟く美人さん。

え、ちょっと待て。この声聞いたことあるぞ。主に17歳の的な何かを感じる。

「あの、つかぬことをお伺いしますが」
「はい？」

「そのFクラスで一番バカな男の子はどちらにいますか？」

「…明久ですか？貴方は、一体どういう関係で…」

「私ですか？私は…」

「…なん…でさ…？」

隣で明久が呆然と呟く。かくいう俺も、思考が停止するほど驚いている。

何故なら、

「…吉井玲と申します。アキ君の、姉です」

いるはずのない人が、そこにいたんだから。

第二十話（後書き）

玲さん登場。

声優ネタがわからない人は置いていかれる予感…！

わからない人は『文月学園放送部』の井上喜久子さんの回を見ましよう。大体わかります。

番外編を三つ書かなきゃいカんの？という前回のあとがきでの件についてですが、

十九・五話も番外編ということにすればあと二つですな！

そして500Pt記念と20万PV記念を一緒に祝えば…ひとつ書くだけで済む…！

…すみません、徹夜で死にかけてるので三つも書けないのでこれで勘弁してください。

さて、次回は来襲した姉さんと、召喚大会の観戦。

その次は、全力でハツちゃけた番外編でお送りいたします。

え、どんだけ酷いかって？そうですね…琥珀とロリブルマが出ます。

没ネタ集（前書き）

今回の話には『バカとテストと召喚獣』以外の作品が出てきます。そういうものが苦手な方はご注意を。

没ネタ集

「みなさん再びこんにちは、佐藤美穂です」

「今回、作者さんが早起しなきゃならなかったため、更新が間に合いそうにありません！」

「しかし、毎日更新と銘打ったこの作品なので、急遽作者さんが前に書いていた没ネタを載せることになりました!!」

「この作者さん最悪ですね!!」

「玲さんの出番を待っていた方は本当に申し訳ありません…」

「そういうわけで、まずは作者さんが唐突に思いついた駄文をどうぞ！」

「…あれ!?これ、本編どころかバカテスにすら関係ない内容なんですかっ!?!」

何処かの研究所。

その中の一つの部屋に、ケーブルや人間が入りそうなサイズの水槽、それに大量のコンピュータが置かれている場所があった。

薄暗く…奇妙な薬品の匂いや、ところどころぼんやりと光る水槽を見れば、そこが普通の研究所ではないことは明白だろう。

と、

「…お母ちゃん」

ぼつり、と。この場に相応しくない幼い声がした。

紫色の髪をした、10歳くらいの年頃の少女が、円柱の形をした水

槽：正確には、その中に入っている『人間』を見上げている。

異様な研究所にさらに似つかない幼い少女の姿。

そこに、深い深い闇の片鱗が見えているのは…決して、気のせいではないだろう。

「ルー…大丈夫か？」

「……………」

ふと、少女…ルーテシアの肩のあたりから、心配そうな声が聞こえてきた。

ここには彼女以外には誰もいないはずなのに、一体どこから…

否、彼女は一人ではなかった。

ルーテシアの肩に、まるで人形のような少女が座っているのだ。

世の魔道師たちから『ユニゾンデバイス』と呼ばれている少女…アギトは、何も答えないルーテシアになおも心配そうに言い続ける。

「大丈夫だつて。レリックさえ手に入れば、きっとお母さんも目が覚めるから」

「…うん」

その言葉に、ルーテシアは強く頷き返す。不安を押さえ込むように、彼女は大丈夫だと自分に言い聞かせる。

その目には、強い決意が宿っていた。

「…そのためなら、どんなことだってしてみせる」

「ハツハツハツ。でもまあ、実はレリックなしでも目を覚ますんだけどね！」

「まあその場合二年ぐらいリハビリが必要で危なかったから言わなかったらしいけど、俺の協力でリハビリいらなくなったら嬉しいぞ」

だから、ドクター…ジエイル・スカリエツィがそんな事を言った時、ルーテシアは小さい口をあんぐりと開けてしまったのであった。

「…なんでこうなったの」

「…それは俺の台詞なんだが」

少女は彼を召喚し、

「ちょっと、悪魔ってなんなの！？そのお話詳しく聞かせて！！」
「うるせえ！武器を構えながら言うな！…ってガリユーが言った」

「…！？（ブンブン）」

魔導士たちは振り回され、

「お前にも研究以外にやる事が見つかるだろ」

「…そうなのかね？」

「お前天才だけどバカだな」

無限の欲望は世界を知り、

「戦闘機人か。確かにお前等人間じゃないんだな。でも、そんなだけだ」

「…え」

「首輪つければいい話だろ？」

「ペット扱いですか!？」

「うるさい!数字が名前なんだから似たようなもんだ!！」

「全然違いますからね!？」

機械の少女達は手を引かれていく。

「脳ミソが黒幕とかくったらねえなあ」

『なんだ…貴様は、一体なんなのだ!？』

「俺?大したものじゃないよ、俺は…」

「彼女の、召喚獣だ」

『俺は彼女の召喚獣』

「…探そうぜ。」

役割なんて、自分で選ぶことなんだから

c o m m i n g s o o n .

「なんですかこれ」

「…一応説明いたしますと、これは『魔法少女リリカルなのはSt rikers』とのクロスオーバーですね」

「作者さんが『もしコレの続編やるならこいつのどうよ!?!』とふざけて友人と作ったそうです」

「でも、ユキトさんのキャラが全然違いますね」

「首輪趣味なんてないし、全力でボケています」

「そついう意味で没ネタなんですねこれ…」

「さて、まだ作者さんには没ネタのストックがあるみたいですよ」

「今回は本編で使えなかったネタだそうです。それではどうぞ」

「いつまでそこに突っ立ってる気だ！手伸ばせば届くんだけ、いい加減に始めようぜ、同性愛者！！」

「一発ネタ！？」

「：このネタは久保利光君との説教に使う予定でしたが、方向性を変更したために没になりました」

「元ネタは『とある魔術の禁書目録』一巻ですね」

「八月に新刊が出てるんですが、もうその次の話が出来上がっているらしいです…。」

「絵師さんが死んでしまうのではないのでしょうか…。」

「では、没ネタ集最後のひとつです。どうぞ。」

美波「…？なに、もうヘッドホン取っていいの？」

瑞希「なにがなんだかわかりません…。」

ユキト「後で教えてやる。で、今から適当な話をするから、おまえ達はその間『拷問禁止』だから。」

美波「？いつたい何をする気なのよ。」

明久「大事なことだよ。」

瑞希「…？？」

ユキト「ま、それじゃスタートな。」

瑞希「あ、行っちゃいました…明久君、坂本君。何をすればいいん

ですか？」

美波「適当な雑談すればいいの？」

雄二「翔子は除外しよう」

瑞希「もう、坂本君！ダメですよ？ちゃんと翔子ちゃんの気持ちも考えないと」

明久「大事なことだよ」

美波「アキのいう通りよ？それとも、坂本は他に好きな人でもいるの？」

雄二「翔子は除外しよう」

瑞希「むゝ…何としても認めないつもりですねっ」

美波「あんな完璧超人なのに何が嫌なのかしらね？スタイルだっていいし」

明久「大事なことだよ」

美波「こらアキ！変なところに食らいつかないの！！」

明久「大事なことだよ」

瑞希「二度言わないでくださいっ！…それにしても、翔子ちゃんは羨ましいです」

美波「ホント、出るとこ出て引っ込むところが引っ込んでるわよね」

瑞希「翔子ちゃんに『胸は瑞希が勝ってるって言われましたけど…他の部分が…』」

明久「大事なことだよ」

美波「（ビキッ）」

ユキト「はいストップ。怒るなよー」

美波「ぐっ…！わ、わかってるわよ…」

瑞希「…そ、そういえば…明久君はどんなタイプが好みなんですか？」

明久「！？」

美波「むっ…！瑞希、それはこの場で決着をつけるってこと！？」
瑞希「そうです！さあ明久君！！一体どんな女の子が好みなんですか！？」

雄二「翔子は除外しよう」

美波「霧島さんは関係ないでしょ！！」

明久「だ、大事なことだよ」

瑞希「ちよつと待つてくたさい！？それって、明久君は翔子ちゃんが好きってことですか！？」

美波「な、なんですって！？」

瑞希「くっ…！坂本君！？いいんですか今の言葉を聞き流して！？」

美波「そうよ！ひよつとしたらアキは霧島さんのこと好きなのかもしれないのよ！？」

瑞希「というか、坂本君！明久君といつも一緒にいるなら教えてください！明久君の好きな人は誰なんですか！？」

美波「そうよ！！ヒントだけでもよこしなさいっ！！」

雄二「翔子は除外しよう」

瑞希・美波「「じゃあ誰なのよ（なんですか）！！！！」」

ユキト「…うーむ…二人の忍耐力を鍛えようとしてたんだが…」

ユキト「余計な誤解を生んだだけだったか」

ユキト「ま、面白かったからいいか」

「黒いですっ！ユキトさんが黒い！！」

「元ネタは『桜野くりむのオールナイト全時空』というラジオの『定められた一言』でした」

「話を組むのが難しく中途半端な出来になってしまったので没ネタになったそうです」

「…え！？没の理由はユキトさんのキャラが違っからじゃないんですか！？」

「い、一体ユキトさんに何が…！？」

「え、ユキトさ…！？ちがっ！私は何も見てませ…きゃああああああっ！？」

司会の佐藤さんがいなくなってしまったので、今回はここまでになります。

明日はきちんと本編を更新します…申し訳ありませんでした。

没ネタ集（後書き）

没ネタ集をお送りしました。

いや、本当なら本編を更新する予定だったんですが、その…間に合いませんでした。

しかし毎日更新が途切れるのもムカついたのでこういう形に。

つままないから没ネタにしたのにつままないもので話を作るとかどういうことやねん！！

本当にごめんなさい。明日は…明日こそは本編を…！

・近況

感想が50件を超えました。ありがとうございます！

で、僕は基本的にPVとかの記念に番外編を書くわけなんですけど、

一週間に11回も更新できねーよ！！

そついうわけで、申し訳ありませんがこの件に関して番外編はナシで。

秀吉が輝く番外編を書くから許してください…もうマジ眠いんです…

第二十一話（前書き）

今回は番外編の宣伝が多いです。なんでこんな書いたんだろう…
不愉快になってしまったらごめんなさい。

第二十一話

「な、な、な…なんで姉さんがこんなところにいるのさっ!？」

と、校門に明久の叫び声が響く。

人がいたら誰もが振り向いたであろうほどの叫びだ。

こら明久、今は居ないからいいが、客がいたら間違いなく逃げちゃうだろ。まあ、俺も同じ気持ちだから何も言わないけど。

「ああ、そこに居ましたか…久し振りですね、アキくん。では再会のチュウをしてあげましょう」

「あ、明久!? 姉弟プレイなどするレベルの彼女がおったのか?!? ワシに言っていた言葉は遊びじゃったのか!?!」

「待つんだ秀吉!! その人は血の繋がった僕の姉だし君の言葉にはツッコミ所がありすぎる!!」

明久の顔を確認した瞬間、にこやかに唇を奪おうとする美人さん…
改め、玲さん。

その発言に秀吉が反応して、一気に空気が昼ドラ的なドロドロした
ものに変わっていく。

しかし、秀吉：そのセリフは『自分をからかうな』とも取れるし、
『期待させていたくせに裏切ったな!!』とも解釈できるんだが…
どっちの意味で言ったんだ？

まあ、怖いから追及はやめておこくが…

「ちょっと、何を言い出すんだよ姉さん！どこの世界に再会したら
キスを迫る姉がいるのさ!!」

「おや、大学では再会の折にキスをしていた家族もいましたよ？」

「ほ、本当に…？また僕をバカにしてからかかってるんじゃないだろ
うね!？」

「嘘ではないですよ？『兄弟』でしていました」

「きつと『兄妹』の間違いだね!!会話じゃ文字なんて伝わらな
いから僕は姉さんの言葉になんか反応しないよ!!」

サラッと明かされる玲さんの衝撃的大学生活。というか文字ネタかよ。

ハーバード大学をバカにするのもいい加減にしるポケー！と俺もツッコミを入れたかったが今は秀吉を押さえつけるので忙しい。

ええい、暴れるな秀吉！あ、ホラ二人目のお客さんが来たからピラ配ってこい！うるせえいいから黙って行け！！

ふう、なんとか秀吉をこの場から離れさせることには成功したか。

「ところでアキくん、それが召喚獣というものですか？…喋るなんて聞いていませんでしたか…」

と、玲さんが俺に気づいてそう言ってきた。

「ああ、普通は喋らないけど…ユキトは色々特別だから」

「あー、はじめまして、色々あって明久の召喚獣やってる柊雪人だ」

とりあえず返事を返す。年上だけど敬語はあまり使いたくないからいつもの口調で話すことにしよう。

ん、なんで使いたくないかって？
ただでさえこんな小さい体なんだ、大きな態度をしないとマジでペ
ット扱いされるんだよ。

え？姫路とかにはどっちみちペット扱いされてるって？…確かに。
何か対策を考えなければならぬかもしれないかもしれん…

「…驚きですね。まさかこんなUMAのようなものを現実に目の当
たりにするとは…」

「俺も玲さんみたいな女性は始めて見ますけどね…」

ブラコン的な意味で。

「もう、何言ってるのさ姉さん…ユキトが馬なわけないじゃないか」
「お互いこのバカに苦労してますよね」
「待って！何故二人はいきなり握手を始めてるのさ！！」

うるさい、黙ってるバカ。馬とUMA（ユーマ、未確認生物）の分
類もできないなら口を出してくるな。

というか文字でしか伝わらないネタはやめろっつーに！

まあそんな話とはもなく、何故玲さんがここに来たのかを聞く必要があるみたいだな…

今はピラ配り中だし、後で喫茶店に来てもらってその時にゆっくり話をすることにしよう。

…おっと、その前に一つ、スネークがいる間にやっておくべきことがあったな。

「玲さん。ひとつ質問があるんですが」

「はい？何ですか？」

不思議そうな顔をしている玲さんに質問してみた。

「円周率はいくつですか？」

「…およそ3」

「「「ピ」ウォーカー!?」「」「」

さすがボス！そう答えてくれると信じてました！！

「やめる柀！そのネタはマニアック過ぎる！！」

「うるさい！俺（作者）はこの世界に来た瞬間からこのネタをやる
と決めてたんだよ！！」

「…蛇は二人もいらぬ…」

「うわ！？姉さんの顔がいきなり劇画タッチになった！？それにな
んで急に声を低くしたのさ！！」

「…な、なんとという演技力じゃ…！！」

「この演劇バカ！今問題にしてるのはそこじゃないよ秀吉！！」

ギャーギャー騒ぐ二人と、いつの間にか全力で逃走を始めたスネー
クとそれを追いかけるボス…もとい玲さん。

うん、なんていうか…二次創作のお約束みたいなもんだよね！

アニメ版は段ボールネタとかやったくせに何故このネタを使わなかったんだろっ…

で、そんな寸劇を終えてから二時間が経過した。

「姉さん…！一体なんで突然やってきたんだ…！！このままじゃ僕の大事なものが色々失われるよ…！」
「…おぬしも大変じゃな」

わりと評判になりながら（俺の姿と秀吉の客引きの成果のようだ）

ピラを配り終えた俺たち。

まあ、実はこんな一言では済ませられない事件が展開されていたのだが、それについては番外編で語ろう。

それはともかく、今俺たちが何をしているかと言つと、とりあえず『中華喫茶がどうなっているのか』の確認。

それと、『玲さんがどうして突然来たのか』を聞くために一度教室に戻るところである。

「なんとというか…個性的な姉君じゃったのう」

しみじみと呟く秀吉。いやいや、この世界に個性的じゃないヤツは存在しない。

言葉を変えて『なんてインパクトが強い姉君なのじゃ』と言つべきだな。

いやはや、何人もバカと変人を見てきたがアレは相当すごかったな。あそこまでブラコンなお姉さんだとは。

『原作』を見ていて理解したつもりだったが… 事實は小説よりも奇なり、というのは本当のことだったんだと実感させられた。

「明久、玲さんに連絡は入れたか？」

「うん、もうすぐFクラスに着くつて。まあ…でも正直、あんまり皆に会わせたくはないんだよね…」

「…強く生きる、明久」

そんな風に理不尽な世界を生きている明久に同情しながら歩いていると、

「む！なんと、行列ができておるではないか！！」

秀吉が嬉しそうに言うのを見てそちらの方を向くと、確かにFクラス『中華喫茶ヨーロッパピアン』の看板の前には15人くらいの長蛇の行列が出来ていた。

「…客を待たせるのはよくないんだが、まあ回転率はよさそうだし問題なさそうだな」

自分でも驚く程冷静に客足を観察する俺。

十五人という数字は多く見えるかもしれないが、実際には客が並ぶと同時に、すぐに中から客が出てきている。

つまり、この喫茶店は恐ろしく回転率がいいのだ。

「やっぱり多人数を処理する訓練を行っておいてよかったな…あまり行列が多すぎると並ぶ気がなくなるし」

「ユキトの言った通りになったのう…」

『売上を伸ばすなら、宣伝は一定レベルまでで良い。それより必要

なのは食材と客を効率よく処理していくことだ』

「じゃったか」

「うわー、秀吉今のユキトにそっくりだったよ」

「凄いな…声帯模写もここまで来ると超能力でいいんじゃないか？」
ボイスインプッター
「声帯模写』みたいに。きつとレベルは2ぐらいだ。」

「まあ、本当は行列を作らせない立ち回りをしたかったんだが…」
「アレ』が予想外の宣伝になったな」

「ああ…僕も『アレ』を見たら迷わず行くよ」

「？お主ら、何を言っておるのじゃ」

お前にだけは教えられないな、トラウマになるから。詳しくは次回
の番外編で！（宣伝二回目）

ともかく、中に入るとしよう。

「通してほしいのじゃー、店員なのじゃー」

よく声の通る秀吉が行列に呼びかけると、中にはすぐに入れた。

こういう時小さい体は便利だな、人ごみに揉まれなくて済むし。明久の頭の上はラクチンだ。

で、中に入ると。

「一番テーブル、食器を回収して二名様御案内だ！」

「…ドリンクと肉まん、完成」

「おい、三番テーブルへのスタミナ中華そばはまだか！」

「あつ、厨房が人手が足りないみたいですね！なら…」

「須川ア！全力で阻止しなさい！！」

「了解だ島田！俺たちはここで死ぬわけにはいかない！！焼肉を食い尽くすその日まで！！」

「ひ、ひどい扱いです…」

「ひゃー…なんだか凄いな…あ、ルビ…じゃなくて、そのチャイナメイドさん、ドリンクおかわりー」

『姉さん、キリキリ働いてください』

「ひーん！まさかステッキまで馬車馬のように働かせるなんて…秋葉さますら超越した御主人様っぷりですよ！？」

「…自業自得だと思う」

中は大変忙しそうである。

「あ、アキ！悪いけど厨房入って、須川と土屋を手伝ってきて！」
「わ、わかったよ！すごい人だね…交代まではあと二十分だよね？」
「うん、その時間まででいいから！」

うーむ、明久は厨房へ行ってしまったか。

俺は料理や配膳関連で手伝えることはないし、やはり廊下で客引きが妥当なところか。

そうと決めれば、色々やれることをやっておかないとな。

「よし、秀吉。お前は着替えてホールに出てくれ。ムッツリーニ、
衣装を」

「…ムッツリーニ」

「おお、完璧だな。あのバカステッキもたまには仕事をするのか」
「ちよつと待つんじゃない!? なんじゃこのフリルのついた和服は!?!」

秀吉…思い出すな、忘れておけ。詳しくは以下略。

さて、俺も今が頑張り時だな。『マジカルステッキ謹製の自信作ですよー!』などという空耳は適当に聞き流して、とりあえず俺は廊下に出るとするか。

ガラッ

「ん?」

「おや?」

と、出たところで丁度玲さんと出くわしてしまった。

あちゃー、これは少しタイミングが悪いな。

「ユキトくん、お仕事ですか？」

「まあな。悪いけど明久は仕事があるんであと20分ほど待つことになるんだけど…」

「いえいえ、構いませんよ。アキくんには珍しくサボっていないですよですし」

まあ、本人は怒りそうだが、その通りだ。普段なら明久はサボっているに違いない。

さすが肉パワー、健康な男子にはたまらないぜ。俺も食えないのが非常に残念である。

「ふふふ、アキくんも少しは真面目になったようですね。ユキトくん、アキくんと一緒に住んでいるんでしょう？」

「?なんでそれを」

「二ヶ月に一回は送りの電話をしてきたアキくんが全く連絡をよこさなくなりましたからね」

明久、お前は金の管理がどんだけ下手なんだ。

「それで心配した母が私に見てこいと言ったんですが…あなたを見て、理由がわかりました」

そう言っただけで楽しそうに笑う玲さん。

あー…だから外部の人間が学園に入れる学園祭に来たのか。

なんで来たんだ神様バカか、などと思っていたら原因は俺だったのか…またもやさりげなく原作ブレイクをしていたようである。

そんな複雑な想いを抱く俺を抱き上げ、玲さんはこう言った。

「こんなに簡単に人を変えてしまうなんて…」

さすがアキくんの『恋人』ですね」

「違っわ！…！」

二秒前まで真面目な話だったのにこれかよ！やっぱり超ボケキャラだな玲さん！

ていうか、同性愛が盛んなのは学校だけじゃねえのか！？この世界おかしすぎるだろッ！！

そんな天然美人と俺とのやりとりは、

「美人だ……」
「可愛い……」

廊下を歩く人の注目を浴びていたそうな。

…「こんなんで密引きしても、嬉しくねえよ。」

第二十一話（後書き）

本文に伏線を潜ませ番外編への興味を引き立てようとする作戦をやってみました。

ウザいだけでした。ごめんなさい。

というわけで、次回は番外編になります。

「Fate/kaleid liner プリズマイリヤ」との（くだらない）クロス作品になる予定です。

いやはや、こういうの一度やってみたかったんですよね…
嫌いな方は次回ご注意ください。

朝起きてこの部分のあとがきを見たら意味不明な上不愉快な思いをさせてしまう可能性があったため削除しました。申し訳ありませんでした。

・近況

評価ポイントが600を突破。

あれ…？この前500を超えたって書いたはずなのに…？

何はともあれ、皆さんありがとうございます。

今後も「俺はテストの召喚獣」をよろしく願います。

…略称どうしよう。「俺召」だと多作品とカブるし、やはり「オレハテ」か…？

超・番外編（前書き）

昨日は投下できず申し訳ありませんでした。

そのかわり、今回は長いです。そして内容も酷いです。

あ、多作品とのクロスオーバーがありますのでご注意を。

プリヤ知らない人をあらゆる意味で置いてけぼりにしたッ！！

超・番外編

「なあイリヤ、召喚獣って知ってるか？」

「・・・へ？」

お兄ちゃんが言った言葉に、寝転んでいたわたし・・・イリヤスフィール・フォン・アインツベルンは、思わず固まってしまった。

読みかけのライトノベルをとりあえずソファの前のテーブルに置き、姿勢を正す。

今のお兄ちゃんのセリフはどういうことなのだろう。

普通の妹なら

『召喚獣？そんなファンタジックなものいるわけないよー、もうお兄ちゃん何言ってるのー』

などと答えるべきところなのだろうが、生憎わたしはそんな返事は返せない。

なぜならわたし、魔法少女だから。

『（あらあらイリヤさん、ついに愛しのお兄様にもバラしちゃったんですか？）』

「（そんなわけないでしょ！あんな恥ずかしい格好見せられるわけないよ！）」

ひょこつとわたしの自慢の銀髪の間から、羽の生やした星の形をした不思議物体：カレイドルビーがこっそり顔を出した。

え？形がわかりにくい？えーと…こうすれば分かるかな？

< () >

さて、実はこの物体は『魔術』を知る人なら見た瞬間卒倒するようなチートアイテムらしい。

通称『愉快型魔術礼装』。都市破壊型なんて風にも言われています。

この魔法少女の持つような形のステッキは、並行世界にアクセスす

ることだ『文字通り』無限の魔力を供給して、使用者を『英霊』の域にまで強化することができる…らしい。？

と言っても、そのステッキの中の人がおちよくるのが大好きな腹黒割烹着なので、私としては『不幸を運ぶ杖』という印象しかないけど。

「（ていうかルビー！巻き込んだ本人のくせしてそんな面白そうにしないですよ！）」

『（やはー いいじゃないですかいいじゃないですか！幼女が恥ずかしさに悶えるなんて！！）』

「（あーもう！後でリンさんに言いつけてやるんだから！！）」

さて、そんなものを一般人のわたしわたしが何故持っているかと言つと、

色々あってこのステッキに風呂場を襲われる

詐欺まがいの契約をさせられる

魔法少女、プリズマ イリヤ爆誕！！

こんなことがあったから。

あれ？事実を言ったはずなのに、何を言ってるか全くわかんないや。

…うん、頭のおかしい人だと言われても文句言えない話だね…

そんなわけで、わたしは『クラスカード』という魔術アイテムを集める手助けをさせられるハメになったんだけど、それはまた別の話。

今はそれより、

「イリヤ？どうしたんだ黙り込んで」

「な、何でもないよ！？そそそれで何の話だっけ!？」

兄バレを回避するほうが先っ!!

「?...まあいいか。で、『文月学園』の文化祭の話なんだけど...」
「へ?文化祭?」

あれ?今『召喚獣』って言ってたのに、どうして学校のお祭りの話になるの?

ていうか、私のことがバレたわけじゃなかったんだね。良かった...

「いや、この前一成に聞いたんだけどさ。なんでも、文月学園は『試験召喚システム』っていうものがあるらしいんだけど」

「...しょうかんシステム?」
「なんでも、生徒一人一人に『召喚獣』が与えられて、テストの点数で強くなるんだってさ」

なにそれ?

なんか、凄く良質なラノベみたいな設定...というか、これ大丈夫なの?

「(ねえルビー、魔術って隠しておくべきものなんじゃないの?)」
気になったので、こっそりルビーに聞いてみる。

おかしいなあ、リンさんは確か口をすっぱくして『魔術を一般人に認識させちゃダメよ』って言ってたのに…

召喚獣っていうなら、当然魔術が関わっているんじゃないの？

「(そうですねー、こういうことを大々的に行くと本当は魔術協会が秘密裏にデストロっちゃうはずなんですけど…協会は動いてませんねえ)」

「(…え？スルーしてるっていうことは、『魔術は関係ない』っていうことなの?)」

「(そうみたいです。いやはや、世界は広いですねえ…魔術以外のオカルトがあるなんて)」

なんと、ルビーが言うには魔術は関係ないらしい。それを聞いて、わたしはその学校に猛烈に興味がわいてきた。

だって、召喚獣だよ？イフートとかいるかもしれないんだよ！？
オタク少女が興味を抱くには十分すぎる理由でしょ！

…それに、魔術に関しては微妙に期待を裏切られた感があったけど、
今回はそれとは別のオカルトらしいし。

「イリヤ、こついつの好きだろ？それでさ、その文月学園、もうすぐ
学園祭やるみたいだからさ。行ってきたらどうだ？」

そついつわけで。

そんな事を考えていたわたしにとって、その言葉はたいへん魅力的
に聞こえたのです。

『俺はテストの召喚獣』
超・番外編

『プリズマ・イリヤ』×『バカトとテストと召喚獣』

「そういうわけで、来てみました文月学園！」
『キヤー！私もドキドキしてきましたよー！』
『姉さんに心臓はないでしょう』
「…魔術以外にオカルト的なものなんて、本当にあるのかな…？」

文化祭当日、そこには二人の魔法少女の姿が！

現在、わたしとルビー、それにルビーの姉妹機であるマジカルステツキのサファイア…それとそのマスターのミュで、文月学園の校門前に到着したところです。

へー、文月学園も見かけは普通の学校なんだね。でも外見だけじゃ判断できないし、中はどうなってるかも確認しないとイケない。

「そういうわけだから、行くミュー！」
「ちよっ、イリヤ!？」

期待に胸を高鳴らせながら校門へとダッシュで進むわたし。

コレが若さです。なんにも考えずまずは突撃だ!!ミュと二人で回るのも楽しみだし!!

「…イリヤ、『魔術が関係ないか確かめにいこう』っていう話だったのに」

『どうやら名目だけだったようですね。まあ、最初から隠す気もなかったようですが』

『ふふふ、こつ言えは生真面目メイドの美遊さんも、仕事を休んで出てきますからねー』

「…気持ちは嬉しいけど…恥ずかしい」

わたしの知らないところで、ミユたちがそんなことを話していたりいなかったり。

そんなわけで、校門をくぐって敷地内に入ったわたし。

するじ、

『離すのじゃユキト！ワシは明久に一言言つてやるんじゃ！！』

『ええい、暴れるな秀吉！あ、ホラ二人目のお客さんが来たからビラ配ってこい！』

『ぬ！？しかしそれでは』

『うるせえいいから黙って行け！！』

などという声が聞こえてきた。どうしたんだろ？

そちらの方を向いてみると、驚くほどの美人なお姉さん（男装しているのは何かの出し物かな？）と、80cmぐらいの大きさの、ぬいぐるみのような生き物が口論している。

…えーと、なにあの生物。なんというか、

「（か、かわいい…っ！ー！）」

『イリヤスフィールに電流走る…!』
『何をやってるんですか姉さん』

なにあれ!可愛い以外の言葉が出てこないよ!?

小さいデフォルメしたような顔とか、

怒ってるのに威厳がないところとか、

小さい体で自分の数倍ぐらいあるお姉さん(男装)を押さえ付けてるギャップとか、

す、全てがかわいい…ッ!

女の子なら胸がときめくのは免れないよ!あれが召喚獣ってやつなの!?!お持ち帰りしたい!!

と、わたしが圧倒的な存在に心奪われているところに、召喚獣さんに押されてきたお姉さんがやってきた。

「むづ…ユキトの奴は…まあ、それより仕事かのう…仕方あるまい…」

お姉さんはそうボヤくと、わたしのほづを見て、

「いらっしやいませ。文月学園へようこそ」

天使のような笑顔を浮かべた。

「いぶあつ…！」

「…どづかされましたか？」

やめてお姉さん、顔を覗き込まないで！！わたし今鼻血が出そうになってるから！！

というか、なにこの演技力。さつきまで『美人のお姉さん』でしかなかったはずなのに、一瞬で『オーラを纏う超敏腕完璧美人のお姉さん』に変わってるよ！？

お姉さんの仕草ひとつひとつに心臓と鼻血がドクドク言ってるわたし。と、ときめいたら駄目よイリヤ！わたしにはお兄ちゃんという心に決めた人が……！！

同じ女の子だってわかってるのに顔が熱くなってるのが自分でもわかる。うう、恥ずかしい……！！

「だ、大丈夫ですから！それで、本日はどのような御用件で！？」

って、この言い方は色々おかしいよわたしのバカ！

「？ああ、申し遅れました。私はFクラスの『中華喫茶ヨーロッパ』の広報をしております」

そう言つて自然な動作で私の近くに寄つて来たお姉さん（敏腕）。
だ、だから心臓が…！！

「あ、あのそのあの」

「今ならドリンクのサービス券を配っております。いかがでしょうか、お嬢さま？」

にげあ

「はうあー!?」

笑顔を絶やさずピラを出しながら、わたしに説明し始めるお姉さん。

本当なら中華なのにヨーロッパアンって？とツッコミを入れるところ
のはずなのに、近づいてきたお姉さんに心臓がばくばく言つてそ
れどころじゃない！

うあー!?待つてお姉さん、そんなに近づくと髪の毛から良い匂い
ができてあわわわわわ!?

「イリヤ、先に行かなくても学校は逃げない…ってイリヤあ!?!」
『百合センサー、危険域に突入しています!美遊様、急いであの女性からイリヤさんを引き離してください!!!』

と、わたしがお姉さんオーラに魅せられ何か危ない領域に足を突っ込もうとした瞬間。

わたしの体は手を後ろから全力で引っ張られ、彼女から引き離されていく。

「すみませんっ!人を待たせているのでツ!!」

「え…?そ、そうですか…まあ、とにかく二年Fクラスをよろしく願いますねー」

こんな時でも宣伝を絶やさない。…お姉さん、完璧すぎます。

「…何か、誤解をされてたような気がするのじゃ」

「ふう…花畑が見えてたよ…」

『ユリの花ですか』

「あ、危ないところだった…イリヤが取られちゃうかもしれないかった…」

ミュ…貴方にとっての私はなんなの…？

…すごく気になるけど、聞いたら後悔しそうだからやめておこう。

「…それにしても、流石『召喚獣』なんてものを扱う場所だね。まさか入ってから五分で二回も理性を飛ばされかけるなんて」

「それ、学校は関係ないんじゃない？ いや、ひよつとしたらそうかも」

まあとりあえず、女の子として大事なものは無くさずにすんだよ…

ちよこつと安心。

『しかし、恐ろしい逸材でしたね、彼女は』

「確かに、凄い美人だった…ルヴィアさんや凜さんとは別のタイプの」

ミユの言う通りだと思う。あのお姉さんには『可愛い』という表現のほつが似合うんじゃないかな？というか、同じ女なのに嫉妬を感じるどころかドキドキしてしまうというのは恐ろしいよね。

「しかも、急にキャラが変わったし…あれ、演技なのかな？」

『いえ、私が言っているのはそういうことではなく…彼女の『MS力』です』

「?どういうことなの、サファイア」

MS力?…ああ、前になのはちゃんと会った時にルビーが言ってたアレかな？

確か『魔法少女力』の略だっけ。私が一万で、なのはちゃんは53万。まあ、確かにアレには勝てないよ…

『実は、わたしと姉さんは前回、フェイトさんのMS力を計測しきれませんでした』

「あの黒服の子か…」

「可愛かったもんね」

『あの後にこれではマジカルステッキの風上にも置けない、と姉さんと話し合いました。私たちは『MSカスカウター』をバージョンアップしました』

「…サファイアもどこかズレてるよね」

ステッキにもプライドがあるのかなあ…考えたくないよ。

『その結果、我々はフェイトさんの能力も計測することに成功しました。その数値、およそ136万』

「凄いね…わたしの136倍だよ」

「…凄いの？」

微妙な顔をしたミュの視線が痛い。

『しかし、今の女性は600万を超えています』

えっ

「えっ」

「…ろっぴゃくまん…?」

『はい。もし彼女が魔法少女になっていれば、そのあまりのキュートなMS力で血の海ができていたでしょう』

血の海…そ、想像できないよ…そんな物騒なもの、できれば一生お目にかかりたくないなあ…（ユキトは毎日見えています）

それにしても、本当にすごい美少女だったね。私と話をした時は演技をしてたみたいだけど、その前の爺言葉の時も全然悪い人じゃなさそうだったし。

「あ、そういえば…ルビー、あの人が凄い才能があるからって、ちよっかいかけたりしたら駄目だよ?」

ルビーにとって、サファイアのいう『MS力』が高い人は極めて魅力的な素材なことは間違いないだろう。

ひよっとしたら、リンさんみたいにおちよくったり迷惑かけたりするかもしれない。あらかじめ釘は刺しておかないとね。

「ルビー、わかった？」

しーん…

あれ？

「ルビー？聞いているの？」

再度問いかけてみるが返事がない。

…？ひよつとして、お姉さんのあまりの資質に興奮しすぎてオーバーヒート起こしたかな？

そう思ってルビーの定位置である髪の毛の中をわしゃわしゃと探してみる。

「…へ？」

「どうしたの？イリヤ」

ミユが不思議そうに声をかけてくる。けど、わたしはそれに答えられない。

いやいや、そんなはずないよね？何かの間違いだよ。

わしゃわしゃ

わしゃわしゃわしゃーっ！

「…いない」

思わず、ぼじりと呟く。

「髪の毛の中に、ルビーがない」………

・
》

『…まさか、姉さん』

サファイアがそう呟いた瞬間、

『Yeehhhh…！レックパーリィー…！』

とても聞き覚えのある声が空から響いてきて、

わたしたちは最悪の事態が現実になってしまったことを悟った。

「ふはは…なんと心地良い気分よ！今のワシなら、天下を取れるぞ

！！！」

『きゃはー秀吉さんかっけ！！！さすが太閤さまは格が違いましたね！！』

「我は木下秀吉！日ノ本を正す者なり！！」

『さすがだよ秀吉！やはり君は僕の思った通りの…男だ？』

「そこに疑問系をつけるでない！」

声が聞こえてきたほうを見ると、なんと空中の何もないうところに立体映像が浮かんでいた。これルビーの無駄な能力のひとつだよね…

そして、そこに移るのは先程のお姉さん…もとい、秀吉さん。

秀吉さんは今、先程の男モノの学生服ではなく、和服（羽織？）を現代風に変えたような不思議な服を身体に纏っている。

その服には万遍なく、なおかつデザインを損ねないようにフリルみ
たいなものがついていて、非常に似合っている…のだが、どうして
年齢的にはかなりアウトなはずなのに似合っただろう…。

リンさんやルヴィアさんよりも、なんというか、こう…少女力
的なものがあるなあ、あの人。

『うるさいわよッ！！』

『喧しいですわッ！！』

………何か聞こえた気がしたけど、そ、空耳だよな。

さて、そんな彼女の腕には手甲のカタチに変化したルビーがいて、ピカピカ発光しながら秀吉さんに（堂々と）話しかけている。

これを見た結論。

どう見ても和風魔法少女です、本当にありがとございました。

なんというか、いつの間に秀吉さんのところに行ったの？とか魔術は隠匿するんじゃないの？とか色々言いたいことはあるんだけど、私がまず言わなければいけないことは、一つ。

「ルビーいつ!? 版權んんんっ!」

まずはJASR Cに謝るところからだよおおおおおおおっ
!!

『おやイリヤさん、そんな大声出してどうしました?』
「やめて! ルビーの声拡声されてるから! わたしの名前を呼ばない
でえっ!」

わたしの叫びはルビーにまで聞こえていたようで、空中の映像が返
事をしてくる。

そして広まるわたしの名前。ご近所の噂になったらどうしよう…精神的に大ダメージ。

「ていうかルビーどこにいるの！？秀吉さんに迷惑かけてないで戻ってきてよ！！」

『ふっ…モテるステッキは辛いですね』

「うざい！！」

『そんな拒絶しないでください〜ルビーちゃん泣いちゃいます（笑）』

「泣く気とかまったくないよね！？」

だめだ、ルビーに話をしようと考えたのが間違いだった。

『姉さん、何のつもりですか。魔術をこんなに堂々と使うなんて』

『だって仕方ないじゃないですか！こんな才能を放置するなんて、神様が許してもこのカレイドルビーが許しません！！』

「開き直りすぎる！？」

サファイアの言葉にも耳を貸さないルビー。

まずい…！魔術の秘匿もそうだけれど、このままだと秀吉さんが人として色々戻れないところまで行ってしまっ気がする！

なんとかしてルビーを止めないといけないけど、

けど…

「くっ…流石に、この状況で二人目が出てきたら…」

『…ミユ様も同じような目で見られてしまっでしょうね』

頼みの綱のミユも（社会的な）死を恐れて動くに動けない。

くっ…卑怯な！こんな絡め手を使うなんて…！

『さあ秀吉さん、私は貴方の願いを叶える存在！叫んでください、貴方の願いを…！』

「うむ！ワシはもつと多くの人達に演技を見てもらいたいのじゃ！
！」

「待って秀吉さん！その姿はむしろ罰ゲームに近いものがあるから

あああつー!!」

ルビーの言葉に目をぐるぐる回しながら答えている秀吉さん。明らかに正気ではないだろう。

『SmallerなことはNo thank you!さあいきますよ秀吉さん!第589機関解放!固有結界『魔法少女の夜』起動!』
「きゃあああつー!?駄目、秀吉さん逃げてーっ!?!」

ピカアツ!とピンク色の光が視界を覆いつくしていく。恐らく、次に目を開けた時、辺り一面は大惨事だろう。

ごめんなさい秀吉お姉さん、わたしルビーを止められなかった…!!

「被え、スベル・エラ凶剣」

ばしゅんっ！

「…え？」

聞こえてきた声につられて恐る恐る目を開けると、そこにはルビーのピンク色結界が…

…ない。

秀吉さん（の腕のルビー）から放出された魔力が全て、黒い『なに
か』に喰い尽くされている…!？

『なあっ!？ル、ルビーちゃんの結界が破棄されちゃいましたー!
?』

「ぬっ…ユキト、邪魔をするでない!」

ぺたん、と可愛い足音がして、立体映像にもう一人人物が写る。

そこにいたのは、最初に秀吉さんと一緒にいた、あの（可愛い）召
喚獣。

そして、彼の右手に握られている剣…フェンシングのような突くた
めのカチをした武器から、先程の黒い『なにか』が滲み出して
いた。

「…宝具!？」

『いえ、違います…！我々が保有する文化体系のものではありません！』

そんな声が隣から聞こえてきたが、わたしの頭はそれを受け入れる余裕がない。

わたしは…あの剣を知っている。

スペル・エラー。そう呼ばれたそれは、

「また著作権ネタ！？」

冒頭で読んでいた、ライトノベルに出ていた作品だった。

そんなわたしの叫びは華麗にスルーされ、皆の注目は立体映像に向いている。

っていうか、これマズいよね！？ただでさえ魔術は人の目に触れちゃいけないのに、あの人…じゃない、召喚獣が出てきたせいであらゆるヒトの注目を集めてるよ！！

と、わたしが焦っているど、

ぴんぱんぱんぽーん。

『皆様、学園祭は楽しみ頂けていますでしょうか？ただいま、文月学園の特殊技術を使用した宣伝を行っております』

と、のんびりとしたお姉さんの声がアナウンスされてきた。

『只今行われていますのは、二年Fクラスの『魔法少女演劇』でございます。Fクラスが行っている中華喫茶に、時間限定で魔法少女のコスチュームを着た店員が給仕を行います』

「…ミユ、これ…！」

「うん。誰かがこの事態を収束させようとしてるみたい！」

つまり、文月学園はルビーが起こしたこの『魔術現象』を『学園のパフォーマンス』として誤魔化してしまおうとしているらしい。

「…っわけだ、アホステッキ。あとは俺達がおまえを抑えるだけだ」

『ぬう！？ルビーちゃんのことを知ってるみたいですね…！その剣といい、貴方はこのセカイのイレギュラーっぽい存在ですか…！』

そんな言葉を交わすルビーと召喚獣さん。

どうやら、これを仕組んだのはユキトって呼ばれてる召喚獣さんみたい。

そして、ルビーが固有名詞を使っててバレないかわたしは心配だったけど、

「おー、設定凝ってるなあ」

「Fクラスね。後で寄ろうかな？」

「あの魔法少女いいな」

「木下ああああ可愛い！！！！！！！！！！」

「ユキトくんお持ち帰り！！！！！！！！！！」

「！！！！ムツツリーニ！！ユキトを映さず撮影だ！！！！！！」

「…任せる…！！」

おお、まわりの人もパフォーマンスとして認識してくれたみたい！

ナイスだよ召喚獣さん、もといユキトさん！！これで秀吉さんの色々なものが守られたっ！！

…わたしは何も見えてないよ？本当だよ？

「サファイア、転身するよ！」

『はい、美遊様！』

そして、これが『パフォーマンス』として扱われる以上、ミュが参加しても疑われることはないはず！

パアッ！

「イリヤ、相手は屋上みたい！先に行く！！」

「わかった！！」

そう言い残して、変身したミュは『空中』を魔力で固めて、空高く

飛翔していった。

ミユだけじゃきつと辛い、わたしも行かないと!!!

『おや、更に一人追加されたようですね。Fクラスは美少女が多いようですね。けれども、私は弟のアキくんが一番好きです』
「姉さああんっ!!これ全校に流れてるからあああああっ!!」

…けど、こんな叫び声が屋上から聞こえてきて、わたしは思った。

本当にこれ、あそこ行かなきゃいけないの？

side 美遊・エーデルフェルト

イリヤをとりあえず置いて、学校の屋上へと『跳ぶ』私。

屋上に着く刹那、サファイアを振り上げ魔力を装填し、

「^{ショット}放射ッ！！」

即座に相手に発射する！

『ぬわお！？秀吉さん後ろです！』

「ぬう、このくらいでっ！」

しかし、振り向きざまに裏拳で砲撃を叩き落とされた。
しかし、

「（隙を作れば十分！）」
「はあッ！」

その刹那、先程の召喚獣（ユキトという名前だったと思う）が斬りかかる…！

ガギン！ギイン！！

「…ちっ」

しかし、驚異的な反応速度で弾かれてしまい、ユキトさんもバックステップで後ろに下がり距離を取った。

私も、空中に立ったまま油断なく秀吉さんを見ている状態だ。

「ぬう…何故ワシの邪魔をするのじゃ…ただワシは魔法少女でも太閤でも演じられる様を見せたいだけなのじゃ」

秀吉さんが不愉快そうにそんな事を呟く。

『…姉さん、洗脳はやめてください』

『いえいえ、演じたい』というのは彼女の本心ですよ？ただ、その中の『演じる対象』に魔法少女を含めただけです』

心底楽しそうに言うルビー。

『それに、秀吉さん凄いですよ？魔法少女の声真似とか。たとえばホラ』

『お話、聞かせてほしいの！（田村ゆかりボイス）』

『…いい加減いろんな作品にケンカ売るのがやめろ…！』

声帯模写は素晴らしいけど、二次創作においてソレは大変危ない特技…！

これ以上何かいう前に、全力で止めさせないと！

「ふ…無駄なのじゃ。自分でもわかる、この力の充実具合…！お主らのような半人前の魔法少女には負けぬ！」
『カレイドステッキはMS力に能力が左右されますからね！今の秀吉さんなら真祖にも対向できます！』
「変身して十分も経ってないのに一人前…！？」
「というか、俺は魔法少女じゃねーぞアホ！」

そんな自信満々のセリフにツッコミを入れる私とユキトさん。

ふと、彼と私はお互いの顔を見合わせ、頷き合う。

「…お互い苦労してるなあ…」

無言で伝わるアイコンタクト。今、私と彼の心は一つになったと思
う。

彼とはゆっくり話したいな。あとでイリヤと中華喫茶に行くことにしよう。

『うるさいうるさいうるさーい！ともかく、秀吉さんこそが最強の魔法少女となる存在なのです！！』

「そういう話じゃなかったらうがこのバカステッキ！！あとその声でその演技は厳しいぞ！！」

『ちよっ、声優デイスってるんですか！？』

「違う！釘宮以外にその声は無理だという話だ！！」

『く、釘宮病患者！！』

「収集がつかないから無理やり止めるよ、サファイア！」

『了解です』

「むっ、よくわからぬがそれを演じると言われたなら演じてみせようぞ！！」

なんだか目的も変わりノリだけで動き始めたルビー。…いや、最初からだったね多分。とりあえず、版權ネタは飽和気味なので本当に勘弁してほしい。

まあ、気を取り直して。今は一応戦闘中だ。

「美遊！イリヤスフィールが来るまで抑えれば俺達の勝ちだ！援護してくれー!!」

「はい!!」

・・・なぜ私の名前を知っているのだろうか？

・・・いや、疑問はさておき、今はそんな場合ではないだろう。イリヤは『アレ』を持ってこちらに向かっている。

『アレ』を使えば私達はほぼ間違いなく勝利できるはずだ。

今やるべきなのは、その時間稼ぎだ...!!

ガンゴンギン、と上から降る金属同士がぶつかり合つ音を聞きながら、わたしは屋上への階段を登っていた。

「…はあ、はあ…普段ならひとつ飛びなのに…」

階段を猛ダッシュしているので、足がとても痛い。

そういえば秀吉さんは本当は喫茶店やってるって言ってたなあ…後で休ませてもらえないかな？お詫びもしたいし。

そんなことを考えていたら、屋上前のドアへと到達したようだ。

「!?!き、君ちよつと待って!この先は危ないから戻ったほうがいいよ!?!」

そのまま進もうとしたら、そこにいたお兄さんに止められた。この場にいるということは、あの召喚獣・・・ユキトさんの関係者なんだろうか？

…あれ?この声…

「あ、さつきお姉さんから告白されてた人ですか？」

「さて、屋上から飛び降りようかな」

「すいませんわたしが悪かったですっ!地雷踏んでごめんなさいっ
!?!」

や、やばいよ!なんだか死に親しみを持ってるとような顔をしてるよこの人!?!

「え？」

まただ。

いつかのように、わたしの知らない『わたし』が、眼を覚ます。

「せっ……！」

ぞくり、という恐怖。

自分が塗りつぶされていく感覚。

それがとても恐ろしくて、必死にわたしはそれに抵抗しようとして、

『まあまあ、いいじゃないの。だってほら、今の『外』は大変だよ
』？
「じめんあとよろしくー！」

その言葉の誘惑に負け、自分の意識をブン投げた。

かちり、とノ

歯車が切り替わる音がする

「クラスカード『アーチャー』」

『インストール
夢幻召喚』」

ゴウツ！

と、カードから魔力が溢れて、『わたし』の体に絡み付く。

『英霊』の知識、経験、能力。その全てがわたしの身体うつつにインストールされて、存在そのものが書き換えられていく。

…意識は最適化され、己のやるべきことを、どうすれば実行できるかの理論を瞬時に構築する…

そう。

今私がやるべきことは、

「てい、峰打ち」

コミ

「むじはっ…!？」

ま、とりあえず自殺阻止でしょ？

適当な剣を投影してお兄さんを殴ると、ビクンビクン痙攣してから倒れた。どうやら意識を失ったようだ。

「あれ、やりすぎた？まあいつか、後で謝るのは『わたし』じゃなくってイリヤだし」

適当に眩き、お兄さんの襟をつかんで引きずりながら屋上のドアを開け、

お兄さんをブン投げた。

「ふはは、ワシをよくもまあ追い詰めたものじゃが、次の一撃でのわっ!?!」

「来た、イリヤ!」

『によわー!?!親方、ドアから男の子が!?!』

「ちよっ、明久ああああ!?!」

なーんて皆が言ってるけど、無視無視。

「あ、明久ワシの上に乗るでない!?」などと言いながら顔を赤らめてる秀吉さんにつかつか歩み寄り、

「てい」

「いたっ!」

ぷすり、とわたしは手に持っていた短剣を突き刺した。

∴短剣の名は『破戒すべき全ての符>>ループレイカー<<』。

その効果は、全ての『契約』を消去するという『宝具』。

つまりどつどつこたつてっわかるでしょ。

バシューウウウ...

「...これで幕引きね」

霧散した魔力の煙と共に、秀吉さんの格好がもとの服に戻っていく。
そして、

『...え？あれ？』

後には、契約を解除されたルビーが残った。

「…ふわああ…あー疲れた」

うん、これで恥ずかしすぎて憤死、ってことはなくなったね。

じゃあ、『わたし』の役割はこれでおしまい。

ちょっと外に出れて満足したし、今はまだ、『イリヤ』の中で眠るとしましよう。…ふわあ、眠い…

くう。こてん。

ああ、次はあの『召喚獣』さんに抱きついてみたいなあ。

S i d e コキト

「おっと」

ふらり、と倒れこんだイリヤスフィールを支える。小学生ならギリギリ支えられるな、危なかった。

うーむ、しかし彼女にはずいぶん無理させちまったな。また向こうの『原作』に影響が出たりしそうだ・・・もう手遅れな気もするが。

「イ、イリヤ!? 一体どうし…寝てる…?」
『急激に魔力を消費した反動でしょうか』

サファイア正解。とはいえ、本来俺が知っているはずの情報でもないのでここは黙っておくことにしよう。

その前にやることもあるしな。

「…一体、どういうことなんだろう。今回もまたイリヤに助けられただけ…。」

『また頼り切ってしまいましたね…』

『ああ、大変そうですね。では、私は氷でも用意して』

「スベル・エラー凶剣。吸え」

『あぎゃ ああああっ!?!?』

そう、その前に俺はこいつを拘束しておかないと。

「逃げるなクソステッキ。また面倒なことしやがって。予定が狂っただろうに」

『ギブ、ギブですって!?!?ま、またとか言ってますけど貴方とは初対面ぎゃ ああああ!?!?』

グリグリと剣をひねる。おお、流石『凶剣』。魔法アイテムにまで干渉できるとは。

「…そういえば、ユキトさん…どうして私の名前を？」

『おそらく、元は並行世界や上位世界の住民なのでしょう。私やイリヤさんのこともご存知でしたし、貴方の周りは位相がやや変です』
『いやー！ー！ー！？ルビーちゃんの中身がどこかへ消えていく』
うづうづうづう！！！！』

美遊の言葉に、サファイアが答える。

・
ていうか俺の周り、世界が歪んでるのかよ…なんか心配だな…

「あー、自分でもよくわからないんだよ。多分そんなところだ」

『がふうっ！ふ、ふふ腐。ルビーちゃんはまだ負けてませんよ！ユキトさん、何としても貴方を魔法少女に付き物のマスコットキャラにしてみせますッ！！』

「なあサファイア。こいつ消滅させて良い？（グリグリ）」

『らめえええ！？グリグリしたらルビーちゃん色々おかしくなるうづうづう！！？』

「…なんとというか、本当にすみませんでした」

『姉がこんな真似を…』

「気にすんな、お前らは悪くない」

悪いのはこのクソステッキだけだ。

で、五分後

「そろそろ静かになったか？おい、起きろカレイドルビー」

『…もうお仕置きはご勘弁ください秋葉さまあ…』

「何かうわごとを言ってますね…」

「自業自得だ。さて、俺の『個人的な』分は今ので終了だ」

『ちよつと待ってください！？まだあるんですかこの拷問！？』

流石に今のはキツかったのか、涙声で叫ぶルビー。

だがまあ、秀吉に手を出したんだ。これくらいの覚悟はしておくべきだったな。

「お前に拒否権はない。そうだな、次は人間モードになってウチの喫茶店で働け」

『な、なぜ私が入間モードになれることを！ルビーちゃん七不思議シリーズが知られているなんて！？』

「うるさい、さっさと変身しろ。・・・あ、優子が走ってきた」

「？秀吉さんそっくりな人が校庭に・・・双子なのかな」

『そのようですね。妹さんが心配になったのでしょうか』

「いや、秀吉の関節を全て逆向きにしようとしてるだけだ」

『秀吉さんどんな日常生活送ってるんですか！？』

「はっはっは、何を言ってるんだルビー。曲げられるのはお前だ。

サファイア、変身魔法」

『了解しました』

「ついでに、秀吉さんとこっちの人も記憶操作しておこうか・・・」

『ぎにゃー！？小さい体にマーボー神父が重なって見えるー！？』

そして優子到着。ルビー（秀吉に変身済み）を投げ渡すと、物陰にそのまま消えていく。ウギヤアアア、なんて叫び声が聞こえてきたが、正直同情する気が起きない。ざまあみろ。

「・・・なんというか、不思議な学校ですね・・・」

「なに、秀吉はマシなほうだ。ウチのクラス毎日冥界と現世を往復してる奴もいるし」

「!？」

『死者蘇生は一応『魔法』なんですが…』

「この学校ではな、常識にとらわれてはいけないんだよ!!」

そんなわけで、この騒動は終わりを迎えた。

この物語は多大な苦勞と引き換えに、ちょっとした労働力と二人の魔法少女と友人になる権利を手に入れた・・・そんな、どうでもいい話である。

「ああ、そうそう。お前ら全員勘違いしてるけど、

秀吉は男だ」

「「「ええええっ!!?!?」「」」

そして最後はお約束のオチなのでした。どっとはらい

超・番外編（後書き）

親父に携帯貸したら朝帰り。

というわけで、昨日は投下できませんでした。ごめんなさい。
そのかわりに、今回は超ボリウムでお送りします。
いつもは4000字前後ですが、今回はなんと！

11432字

番外編なのにこれかよ。バカじゃねえの俺？

ちなみに、最後のほう推敲してないし眠い頭で書いたので、後で修正が入る可能性が大きいです。
こんなに長くなるとは…二度とやりたくない。

というわけで、プリズマイリヤとのクロスでした。

夢幻『召喚』を見て閃きましたが、そもそもこの作品を知ってる方のほうが少ないというトラップ。

今回ほんとは誰得な内容になってしまいましたね…

僕としては『琥珀をユキトがいじめる話』でした。

作者への八つ当たりの意味で。ルビー大迷惑。

今回は普通に本編をお送りします。

ババアが言っていた『特殊システム』が起動！

そして雄二の召喚大会を見に行くと、そこにはありえないパートナーがいて…！？

そんな感じのお話です。お楽しみに。

第二十二話（前書き）

お待たせしました、最新話をお送りいたします。
二日に一話にしたほうがいいかなあ…？

第二十二話

「いや、だから玲さん。そもそも同性愛を前提に考えているのがおかしいんだが」

「そうなんですか？アメリカの大学では『カップル』といえは同性でしたが…日本はやはり価値観の違いがあるのですね」

「アンタ日本人だろ！なんでこんなに色んな常識知らないんだよ！？」

「いえいえユキトくん、誤解していませんか？私は『同性愛』がアブノーマルだということはちゃんと判っていますよ」

「今のセリフと矛盾しすぎて信用できないんだが」

「本当ですよ？その証拠に、私は異性であるアキくんのが大好きです」

「姉弟の恋愛もアブノーマルだ！！」

「おまたせーユキト、姉さん。一応捌ききったから中に…どうしたの？」

漫才（と感じられるのは見ている側だけだが）をしていた俺たちのところに、仕事を終わらせたらしい明久がやって来た。

はは…明久、俺がどうしたかって？

「『この世は世界規模で常識がない』と知って絶望していたただけだ…」

「なんだかユキトがすっごく暗い顔してる!?!何やったのさ姉さん!?!」

明久も加えて、俺と玲さんの天然丸出しの会話が終わった時には、Fクラスは一応昼飯時という山場を終えていたようである。

今回のFクラスは優勝を第一に考えているので、当番以外の奴でも店が忙しいならアシストをしてもらおうことになっている。

どうやら元々行きたい出し物も大してなかったらしく、Fクラス全員が特に文句もなくそれに従っていた。

まあ、雄二は別だが。

アレは仕方ないよな…

っていうか、クラスですら最近見ないんだけど何処に行ったんだろ
う。まあ、召喚大会が始まればわかる…と思う。

さて、そんなこんなで教室の中に入ると、少しの客を除いて大体の
人が食事を終えて退店していた。

今の時間は…十二時五十分か。昼飯時というピークは過ぎたし、次
に忙しくなるのは三時くらいかね。

「皆お疲れ。少し交代で休憩取っていいぞ。それとルビー、お前は
不眠不休な」

「……うーす」「」「」

「な、なんですと!？こんな乙女を寝かさない気ですか!？」

「ルビー、迷惑かけたんだから働かなきゃ駄目でしょ?」

『当然の報いです』

「関節全てを曲げられた後に働いてる身にもなってくださいよー!
!」

「…なら、『関節が痛くて動けない』とか言えばよかったのに」

『しまったその手がー!?!』とかなんとか言ってるエセステッキ)

チャイナメイド形態）は意識の隅に追い出して、と。

「玲さん、こっちの席にどうぞ」

「はい、ありがとうございます」

「何か飲み物持ってくるよ」

とりあえず、玲さんをテーブルに座らせて、話を聞くことにした。

「あれ？その人誰なのユキト」

「す、すごい美人さんです…」

と、飲み物を取りに向かった明久と入れ違いになる形で、姫路と島田がこちらにやって来た。

「ん？ああ、この人は吉井玲さん。明久の姉貴だ」

「ええっ!？」

二人にそう説明したところ、目を見開いて驚いている。

まあ、あまり共通点はないから意外に思うのも仕方ないのか？頭の出来も正反对だし。実は足して二で割ると丁度いいあたりは姉弟らしいんだがな。

「こ、この人が…アキのお義姉さん…」

「明久君も顔立ちは整ってますけど…お義姉さんはそれ以上なんですな…」

玲さんの顔や胸、腹回りなどを自分のそれと見比べながら表情をく
るくる変える二人。

「こら、いきなりジロジロ見る奴がいるか。失礼だろ。ていうか、
おねえさん」の発音にすさまじい違和感があるんだが…

「ユキトくん、この二人は…」

おっと、玲さんが不思議そうな顔をしているな。紹介しておこう。

「玲さん、こいつらは明久のクラスメイト。ぼわぼわのぼうが姫路瑞希でモデル系が島田美波」

「あ、し、失礼しました！島田美波です、アキにはいつもお世話になってます！！」

「ひ、姫路瑞希です！むしろ明久君にお世話したいです！！」

何を言ってるんだ姫路。

「あはは、こうして聞くと姫路さんが僕のメイドさんになりたい、みたいな発言だね」

「は、はうっ！？明久君！？」

飲み物を持って戻ってきた明久が笑いながらそう言った。

まあ、あながち間違った表現ではない気がする。このタイミングでこんなピンポイント発言をするとは、流石明久。わざとやっているとは思えない。

「もう名前をバカ久に変えたほうがいいと思うぞ」

「ちょ！？ひどいよユキト！なんていきなりそんなゴキユゴキユゴキユ関節を三回転は新記録うっうっうっ！！！？」

玲さんの肅正（勘違いだが）を喰らって絶叫を上げる明久。

なんとというか、今は明久の間が悪すぎたからフォローする気になれなかったな…

場数を経験しすぎて腕が二、三回ひねられたくらいでは眉一つ動かさなくなってきた俺。なんか悲しくなってきたぞ…

まあ、ともかくコレ以上は流石に哀れなので助けてやるとするか。

「玲さん、誤解だ。別に明久は姫路に意地悪して弄んだりしてるわけじゃない。バカなだけだ」

「いただただユキトバカバカ言うのはやめあいだだだだ！！」

「黙ってる明久。こうしないと傷が増えるぞ」

「僕はバカです姉さん！」

「…おや？アキくんが鬼畜で外道な人になってしまったのかと思いましたが…勘違いでしたか」

ふう、とやりとげた顔で不思議そうに言う玲さん。

なぜだろう、その顔は美女のものはずなのに、やっていることは必殺仕事人という矛盾。

ていうか、勘違いで実力行使するなよ。

「やれやれ…関節を何回曲げる気だ。明久じゃなかったら最悪死ぬ
だろコレ」

「大丈夫です、心配ありません。アキ君ですから」

「大丈夫じゃないよ!? 僕のこといつもは信用してないくせに何故
そこだけは確信してるのさ!？」

「腕を反対側に回して戻る奴にそんなこと言われても…」

普通の人間ならショック死だろうが、この世界のギャグ補正にかか
ればこんなものである。

『命は、何にだってひとつだ!』
『みたいに言ってる人達に謝れお前
ら。』

「…すっごいお姉さんね」

「よっぽど明久君のことが嫌いなんでしょうか…」

「いえ、むしろ逆です。私はアキくんを愛していますよ」

「嘘だ！愛があるならこんなバイオレンスなことしないでしょ！？」

「いえ、愛のムチです。私はアキ君のことを『異性として』愛していますので」

「嘘だと言つてよユキトおー！！」

愛故に人は苦しまねばならぬ！

愛故に人は悲しまねばならぬ！

なんつーか、そんな感想である。

まあ、この後も『原作』であつた『島田姫路男でしょ？』的な会話などが多少あつたが、そこらへんはいつも通りスルーしておく。

詳しくは『原作』で。最新7・5巻発売中。

で、そんな話をしてると、

「む？そろそろ一時じゃのう」

仕事を終えた秀吉がこちらにやって来てそう言った。ああ、もう時間か。

「おや、何か行事があるのですか？そういうえば、パンフレットに『召喚大会』という行事がありましたね」

「違うよ姉さん。召喚大会はこの後一時半から」

そう、明久が玲さんの言葉を否定する。まあ無関係ではないんだけどな。学園長は客引きのために『コレ』をやるらしいし。

「では…何をするんですか？」

玲さんの呟いた言葉に答えるように、『ソレ』は起こった。

ピーッ

『管理者のアクセス権限を確認しました。anotherプログラムを起動します』

「「「え？」」」

突然、スピーカーから高橋女史の声が聞こえてきた。数人がそれに疑問の声を上げた、

その刹那。

視界の全てが、光で覆われた。

「きゃああああっ!?!」
「こ、これは…っ!?!」

パアッ!と、目の前で閃光を浴びさせられたような感覚。

「た、多少は予感していたとはいえ、凄いなこれは…!」
「ちよっ…何が起こっておるのじゃー!?!」

なんとか薄目を開けて、何が起こっているのか目を凝らす。

…光の正体は、文字。

普段は召喚フィールドに描かれている記号や数字の羅列…それらが床を埋め尽くしているのだ。

Fクラスの床に瞬時に光が行き渡り、それでは飽き足らず廊下、さらには校庭までも満たし、

『【試験召喚陣】、解放』

高橋女史の声に従い、一気に収束した。

「…SFかよ」

思わずツッコミを入れざるを得ない。

さて、皆さんを置いてぼりにしたこの展開、一体何が起きたかと言

うっ。

「なるほど…これのことを言っていたんですね」

納得したような玲さんの眩き。彼女の視線を辿ってみると、

ちよこん

と、姫路の頭の上にいる召喚獣が見えた。
周りを見渡すと、秀吉や島田…Fクラスの全員も、同じように召喚
獣を顕現させている。

『本人は呼んでいない』のに、な。

『…外部の来場者の皆様にご連絡いたします。只今、当学園の『試験召喚システム』を一時的に変更し、全ての生徒の召喚獣を視認できるようにしております』

スピーカーから、高橋女史の説明ボイスが入ってくる。

そう、これが学園長が俺を使って実験していた『召喚フィールド無しでの召喚獣の展開』の成果である。

実際には、召喚フィールドは学園の床を利用してきちんと用意されているようだが、そこらへんの技術はよくわからないので置いておく。

さて、この『試験召喚陣』。具体的に何が起こるかというと、この陣（つまり学校の敷地内）では『強制的に召喚獣が召喚された状態』になる。

…なんだか一気にファンタジー世界っぽくなったな、この学校。

と言っても、召喚獣が物や人に触れることができるようになるわけではない。この状態だと点数も減らない。

また、試験召喚戦争を行うならフィールドが普通に必要になる。
あくまで目に見えるようになっただけ、ってことだな。

召喚者の意思で動かせる立体映像ってところか。

…『俺以外』にとっては。

『…！(ぶるぶる)』

「あー…姫路さんの召喚獣が高いところで涙目になってるね」

まあ、そつだよな。人間に換算すると身長の五倍ぐらい…俺の『生前』の身長でいうと8mだ。そりゃ怖いわ。

「ええっ！？は、恥ずかしいです見ちゃ駄目ですーっ！…！」
「チヨキは目に優しくないぎゃあああっ！…？」

それは霧島の技だろ！

って、ツッコミ入れてる場合じゃねえ！今本体が動いたせいで召喚獣のほうで落っこちたぞ！！

『ーっ！！（ぎゅっ）』

「うおお！？間に合えッ！！」

大雑把に落下地点を算出して、急いで駆け寄る。

ダッ！

「そりゃっー！」

ギリギリのタイミングで…ヘッドスライディング…!

ポフッ

ズザザザ…

「…ふう、キャッチ成功か」

「おお、見事じゃ」

「あ、ご、ごめんなさいユキトくん!」

なんとか無事だった…やれやれ、危ない危ない。

そんな俺に対して、感心したように呟く秀吉と、ペコペコ謝る姫路。

召喚獣も一緒に感心したり申し訳なさそうにしているのが、なかなか面白い光景である。

ていうか、姫路。俺より先に明久に謝れ。

…ん？こんなことした意味あんのかって？召喚獣は物に触れないだろ、って話か。

まあ確かに、召喚獣が傷つくわけじゃないが…床は『召喚フィールド』だし、頭打ったら大変かもしれないだろ？女の子だし。

つか、身長の五倍ぐらいの高さから誰かが落ちてきたら普通反射的に助けるわ。

「…（ドキドキ）」
「ん、どうした姫路…の召喚獣」

何やら顔を赤くしてるな。ていうか、こいつらのこと呼びにくいな…姫路（小）とでも呼ぶべきだろうか？朝比奈さん（大）みたいに。

「ふふふ、瑞希さんは女の子ですからね。お姫様抱っこは憧れだったのでしょう」

「ううっ…恥ずかしいです…でも、ありがとっございます、ユキトくん」

「あ、いや」

なるほど、ヘッドスライディングで姫路（小）をキャッチしてそのまま立ち上がったから、今は漫画のお約束、お姫様抱っこなわけか。

いつも思うが、首が痛くなりそうだよなこれ。

とにかく、この態勢から戻すことにしよう。よっ…と。

うん、怪我もなさそうだし、大して問題はなさそうだな。じゃあ下ろして…

『（だきっ）』

「むじっ！…っ、ちよ、抱きつくなお前！？」

下ろした途端、俺に抱きついてくる姫路（小）。

な、何やってんだお前は！？いつもの窒息の危険がないとはいえ、これは…！

「あ、この状態でも思い通りに動きますね」

「コラやめる姫路！恥ずかしいだろ…！」

「え？だってユキト、女子みんなが抱きついてても平然としてるじゃない」

それとこれとは違うんだよ島田！

今、姫路（小）は『俺と同じサイズ』なんだぞ！？今までのペット扱いとは間逆だっ…！

「フ、フィードバックで幸せな感触が現実の体には地獄の苦痛がああああああ…？」

「美波さん、外しますか？折りますか？」

「そうですね、どっちでもいいですけど…場所は背骨で」
「明久ー！？死ぬなら俺を助けてから死んでくれー！！」

犠牲になる明久。でも今は申し訳なさより先に焦りがヤバい！な、
なんとかしてこの状況をなんとかしないと！！

「そつだ、異端審問会！よし、あいつらならなんとかしてくれるはずー！！」

「『羨ましいぞユキトオー！！』」

来てくれたか！これで俺も離れる理由ができたはず…！

「ふふふ、やっぱり可愛いですねっ」

『…？（すりすり）』

「『くわああああアー！！』」

「またかよ！お前らどれだけ姫路の笑顔に弱いんだ！！」

奇跡の姫路+姫路(小)のダブルコンボを喰らって撃沈していった
FFF団であった…。

「…ワシはどつ収集をつけねばよいのじゃ…」

やっぱり秀吉が頑張ってくれました。ありがとうございます…！

「はあ…疲れた」

「そうだね…こんなのが明日もあるなんて…」

憂鬱な溜息をつく俺と明久。

「つーか、あの後廊下とかでも女子とその召喚獣は俺を見るたび抱きついてくるし…」

「僕はその度に肉体的なダメージを受けてるよ…」

いやはや、本当に疲れた。正直、あとは誰もいない場所へ行っただけみたい。俺も明久もそれが必要だと思っただけ。

「さあ皆さんっ！文月学園が送る『試験召喚大会』っ！始まります

「よおっ……」

「……うおおおー……」

「今回は、解説として『考える召喚獣』柊ユキトさんと、『観察処分者』吉井明久さんにお越しいただきましたーっ……」

「……おおおおおおおおおーっ……」

「帰りたい。」

第二十二話（後書き）

遅れました。本当に申し訳ありませんでした。

しかも雄二の相方出せてねーやん！なんてこつたい…

ギャグに走りまくりました。調子がおかしいかなあ…これも全部ルビーのせいかなあ…

ああそうそう、プリズマイリヤがわからないという方へ。

ルビーの中の人は割烹着の悪魔、つまり『月姫』 『MELTY BLOOD』の『琥珀』です。

ユキトがルビーに冷たいのは作者への八つ当たりも含めていた、というネタでした。

やだ…なにこれわかりにくい…

さて、次回のお話は？

雄二のペアはなんとあの男。この時点で消去法使えますね！

始まる一回戦、勝ち進むのは誰か？そして、霧島翔子のパートナーも変わって…？

ユキト「あれ、佐藤さん。本編進出おめでとう」

美穂「ネタバレしないでくださいっ！」

果たして、召喚大会の優勝者は！？そしてユキトは温泉へ行けるのか！？

アンケート

今のところ、常夏コンビを出す予定がまったくありません。しかし、あんな奴らでも一応モブではない訳です。というわけで、

- 1・常夏コンビを本編に出す(悪役)
- 2・常(r)yを出す(ギャグ役)
- 3・モブで出す(声がひっそり入る程度)
- 4・ハゲとモヒカンに必要なんでねーよ
- 5・それ以外

以上でアンケートを取らせて頂きます。感想までどうぞ。なお、回答がない場合は4になります。御了承ください。

それでは、今後も『おしよゆうゆ』をよろしく願います。

…この略称に決まったんですよ！一番人気なんだから仕方ないですよー！！

第二十三話（前書き）

昨日は投下できなくてすみません…
言い訳はあとがきで。

第二十三話

前回までのあらすじ。

召喚大会を観戦しようとしたら拉致られた。

「なあにこれえ」

「遊 王ネタか…ちなみに作者のデッキは【スクラップ】だ」

「OCGネタなんてわからないでしょー」

「おっと、こりゃ失敗したなーウフフハハ」

逃げ出したい、この現実から。

と、明久と漫才をかましてみたが状況が変わるわけもなく。

仕方なく、俺達をこの場に連れて来た少女に説明を求めることにした。

「えーと…君、ちょっといいかな？これから一体何が始まるんです

「？」

そう尋ねる明久。テンパっているからか、語尾とかの日本語がやや変だぞ。しつかりしろ明久。

「あ、申し遅れましたね。わたし、放送部員の新野すみれといいます。：オリキャラじゃないですよ？」

そう新野さんが答える。

ちなみに、彼女が誰かわからない人はDVD・BD三巻の特典映像をご覧ください。どう見ても捨てキャラです本当にありがとうございます。

「はあ：で、俺達は何故いきなり解説席に座らされているんだ？」

「あ、駄目ですよー？今はもうマイク入ってるんですから。観客の皆さんに呆れられちゃいますよ？」

勝手に連れて来てそれはないだろう。

「というか、むしろ呆れてくれたほうが都合がいいんじゃないか？」
「解説引つこめ！」
「的な流れになれば俺もこの場を脱出できるはず…」

「キヤーこつち向いたわよ今っ!!」
「可愛いーっ!!」
「午前のアレ格好よかったぞー!!」

なぜか俺大人気。

ちなみに、今回観客が使用する座席は『来賓用』と『学校関係者用』の二つが用意されている。

何故かと言うと、生徒・教師は召喚獣が顕現している状態だから。頭に乘せてたら後ろの人は前が見えないし。ていうか、今回の召喚獣、召喚者の体には触れられるんだな。

しかし…こんなに人気だと文句が出そうにもない。やべえ、脱出で

きそつにねえぞ…

「つーか、さっきから『なんでよく知らない人にも抱きつかれるんだ？』とか思ってたけど、朝の魔法（？）バトルが原因かよ！ルビー」
後でシメる。

「おお、大人気ですね！やはり私の目に狂いはありませんでした！
これなら解説も問題ないでしょう！！」

「待てコラ話を勝手に進めるな！つーか何で俺なんだ、実況解説は
普通事前に決めておくべきだろ！？」

「いえ…本当は高橋先生だったんですけど…急に用事が入ってしまったらしくて…」

「そんな裏事情暴露すんなよ！観客の皆さん聞いてるからね今！？」

ざわざわと笑い声や話し声に包まれる来賓席。そして高橋女史が学
校席で申し訳なさそつに顔を赤らめていた。

その召喚獣は顔を真っ赤にして彼女の後ろにモゾモゾ隠れてしまっ
た。えらくかわいい動きだな。

…あ、一部生徒から鼻血が…

頭を抱えている学園長。確かに、俺も今後学校に下される評価を思うと悲しくなってくる。…つか、どこまでバカなんだあいつらは。

「ぐふあ！…くっ、この程度僕は…！！」

うん、俺の隣の奴が一番バカでした。

「明久ア！お前どこまでバカなんだ！！この音声全員に聞こえてるつつうの！！」

「あ、でも観客さんも鼻を抑えますよ？」

「こんなくだらねえ世界滅べ！！」

どこまでバカな世界なんだ、いい加減にしろ！

「もうやだ帰る！つーか俺じゃなくてまず教師を呼べ！学園長とかスネ…西村教諭とかいるだろ!？」

「わーわーわー!？待ってください、もう貴方しかいないんですよ！だってビジュアル的に妖怪とゴリラはアウトじゃないですか！」

「アンタ怖いモノ知らずだな！だから全員が聞いてるってば!！」

新野さん、退学の危機。まさに捨てキャラ、話題を取るためなら何だってしてくるなこの娘!!

「はっ!？待ってよユキト、ということは僕のことも観客は『観察処分者』というバカとして見てるってこと!？」

「もう喋るなお前!！」

そのセリフがなければ『観察処分者?何かの称号かな』程度だったはずなのに、

「あ、あの男の子はバカなんだね」

「まあ確かに、頭が悪そうな顔だ」

「あっ!バカなお兄ちゃんですっ!!!」

「あの召喚獣くんは頭良さそうなのになー」

結局、『Fクラスの宣伝を許可』『後で個人的に報酬を用意』という条件で、解説をやらされるハメになってしまった。

まあ…召喚大会中は客は来ないだろうし宣伝できるとなれば案外悪い取引ではないんだが…疲労感だけは誤魔化せない。

「…はあ…もうとにかく、さっさと進めるか」

「おお、やっとやる気になってくれましたね！というわけで、お待たせしました皆様！第一回戦を開始します！！」

その声に、観客から歓声が湧く。…脱線しまくってたが、これで開始か。さっさと終わらせたいなあ…

「それでは、第一回戦一試合目！まず登場するのは、Fクラス代表である坂本雄二君と、Aクラス所属の久保利光君です！！」

え？

「はぁ！？この二人かよ！？」

「ええっ！？雄二と久保君！？」

同時に叫ぶ俺達。

「そ、そんな！？なんでこんな組み合わせなのさ！？」

驚愕している明久。かくいう俺も驚きだ。

初戦でいきなり雄二が出てきたのもそうだが、まさか相方は久保になっていたとは…

「ユキトさん達はFクラスでしたよね？坂本君とはお友達ですか？」
「友達…？」

「悪友とかそんなだと思っぞ…？多分」

「え？何故疑問形なんですか？」

だつて…なあ。地獄を押し付け合う仲を友達って呼んだら世の中の友達の皆さんに失礼だろう。

かといって根本的には仲がいいし…こつこつこの、なんて呼べばいいのやら。

まあともかく、好奇の目を観客から送られながら、雄二と久保が入場してきた。

外部の人は「召喚獣はどんな風に戦うの？」と、内部の人は「何故あの二人が組んでいるのか？」という疑問を抱いているところだろう。

確かに、意外な組み合わせだ。明久と久保ならまだわかるんだが、何故このコンビになったんだ？

「坂本君、チケットはよろしく頼むよ」
「ああ。誰かと行くなりなんなり好きにしろ」

買収かよー！

雄二、自分の身のためなら何でもやる気だ。

ていうか、久保が明久とハイランドに行くってことは俺も自動的に
ついて行くことになるんだが。雄二…後で報いは受けてもらうぞ。

「ん？ユキトにバカ代表の明久じゃねーか。なんでそんな所に座っ
てるんだ？」

「聞こえるように言うなこのバカ雄二！」

「…吉井君、君がこんな近くに」

そんなデジャヴを感じる思考をしていると、雄二が俺達を見つけて声をかけてきた。

どんな場合でも奴は明久を貶めることは忘れない。暇人だなあいつも。

久保に関してはもうスルーだ。あいつの顔を見ると猛烈に説教しなくなるんだよ…

「まあ色々あってな。これ以上は周りの視線が痛いから勘弁してくれ」

「ほー…既に視線が集中してるみたいだな。さすがマスコット」

「霧島、聞こえてるか？例え何があってもお前と雄二にチケットを渡すと約束しよう」

「待てコラア！！なんてこと言っただやがるお前！？」

ぞまあ。雄二ぞまあ。

まあ、『原作』的にもこの流れは回避不能だ、諦める。

「はい試合始まります。そのゴリラは対戦相手に迷惑をかけないように」

「明久！てめえツラ貸せこの野郎！！」

「はいはい、というわけで、予選第一試合開始します。対戦者は前へどうぞ」

「……うおおーっ！！」「」「」

「ユキトてめええッ！！」

え？何？聞こえない。俺はさっさと終わらせたいんで、早くしてくれませんか坂本選手。

「…お二人とも、急にノリノリですね。ていうか、私のセリフ取らないで下さいよ！？」

数少ない出番を取られた新見さんの叫びは、湧き上がる歓声にかき消されたという。

さて、今回の召喚大会だが、これにもやはり『原作』と違う点があるので、そこを説明しておこう。

まず、参加人数が少ない。『原作』では姫路が両親を見返すために島田と組んで出場したが、今回俺たちはBクラス相当の設備を保有しているため、彼女達は出ない。

それに、『売り上げで優勝したクラスに豪華景品』という学園長のお達しも影響して、『とりあえず暇だし出てみようかな』という奴が少なくなっている。

そんなわけで、今回の参加者は16組。雄二と久保、霧島は四回勝てば優勝ってことになるな。

さて、そんな四回のうちの一回である最初の相手は…

「根本を消してくれたのは感謝してるけど、勝負は譲れないわ!」

「足手まといがいるなら、久保君にも勝てるかも…!!」

Bクラスの岩下に菊入か。

『…誰?』と皆さん思うかもしれないが、『原作』でBクラス戦の時に明久に翻弄されたり、姫路に消し飛ばされた奴らである。

この作品ではBクラス戦は省略しちゃったからなあ…影の薄さは佐藤さんすら凌駕するだろう。

「モブキャラって言うな!!」

言ってますん。

「おおっと！相手はBクラスの二人です！久保選手は学年三位の実力者ですが、相方はFクラスの坂本選手！足手まといになってしま
うのでしょうか!？」

「雄二さまあみろ!!」

雄二達が言霊を唱えると、学生服姿だった召喚獣達が光に包まれる。

それが収まると、いつの間にか服装が変わり武器を携えている召喚獣。その姿に、観客たちが感心したような声をあげた。

そんな中、俺と明久は武器について冷静に考察する。

「久保の武器は大鎌か。小回りはきかないが複数を相手にするなら効果的だな」

「ユキトとは相性いいんじゃない？」

「そうだな、精密な動きは天敵かもしれん。まあ、今回は俺みたいに精密動作ができる奴はいないだろう」

「…マスコットとして呼んだのに、まさか普通に解説してくれるなんて思いませんでした!！」

「帰る」

「うわーすみません!?!?お願いしますから許してくださいっ!?!?」

真面目にやってもこれだよ。

ちなみに、

「「きゃああああつ!?!?」」

Bクラス ? 岩下律子

総合科目 ? DEAD

& a m p ;

Bクラス ? 菊入真由美

総合科目 ? DEAD

V S

Aクラス ? 久保利光
総合科目 ? 4259点
& a m p ;
Fクラス ? 坂本雄二
総合科目 ? 1522点

勝負は久保の一撃により、即座に決着していたのであった。

第二十三話（後書き）

佐藤さん出せなかった！

今回はまず謝罪からです。

昨日は更新できませんでした、ごめんなさいっ！

いや、母の誕生日で忙しくて…あと、風邪がぶり返しました。死に
そうです。

そんなわけで、申し訳ありませんが当分忙しいので更新は『二日に
一回』になると思います。

ネタ切れも重なってきた…！

そうそう、PV30万超えました。ありがとうございます！
評価も750pt、バカテス作品ではランキング九位ですよ。まさ
かこんな所に来れるとは。

皆さんの感想も、いつも楽しく読ませて頂いております。作者の励
みになります。

今後も、質問やリクエスト、普通の感想や叩きなど大歓迎です。

「おしよつゆ」をよろしく願います。

「超・番外編」のラストを加筆しました。

設定集その3（前書き）

短いです。

まあ、明日本編を投下するのでお許しを。

設定集その3

学園祭中の試験召喚システムについて

・『試験召喚陣』

本来フィールドを用意しないと召喚できない召喚獣を、学園の床だけで発現できるようにするためのシステム。

詳細はとっても難しい理論によって構成されているので作者にもわからない。

本来はこんなことを行う技術がなかった学園だが、ユキトのデータを元に不眠不休で完成させた。おかげで教頭が倒れた。

今回の学園祭での公開はお披露目と同時に、動作テストも兼ねている。

このシステムを展開中、召喚獣は試験召喚戦争を行うことができない

い。点数も表示されず、減らない。

召喚獣はこの時、が『召喚者』『学園の床や壁』『他の召喚獣』のみに触れられる。ただし召喚者の知覚外の区域には移動できないので壁抜けなどをして意味がない。

なお、ユキトはこの陣の影響を一切受けず、いつも通り。

・召喚大会について

『原作』と違い、16チーム32人で争う。

実況解説はユキトに明久。よって、学園祭に訪れたほぼ全ての人がこれを見る。かわいいは正義だそうな。

大会はトーナメントで行い、四回勝てば優勝。教科などは

一戦目：総合科目

二戦目：数学

三戦目以降：話し合いで決定

となっているが、恐らく物語には一切影響しない。

優勝者には商品があり、教師がいなくても召喚フィールドを展開できる『白銀の腕輪』、点数が400を超えていなくても特殊能力が使用可能になる『暁の腕輪』が手に入る。

670

それと説明不要のチケットも。

学園祭の一日目に二回戦まで、二日目に準決勝からの試合を行う。

なお、大会が開催されている特設スペースには『来賓用』と『校内者用』の二つがある。

違いは、『校内者用』には目の前に小さい物を置く場所があること。優遇されているのではなく、召喚獣をそこに乗せるため。

・ユキトが今まで使用した武器について

元ネタがわかりにくいものがあつたので解説しておきます。面白そうな設定があつたら原作をプレイ！

第九話より

『約束された勝利の剣』>>エクスカリバー<<』

出典：F a t e / s t a y n i g h t

解説：

人々の想いのカタチを星が具現化した最強の聖剣。

f a t eを知らなくてもエクスカリバーという名前はゲームで聞いたことがあるのではないだろうか。

史実において実在したとされるアーサー王（原作のf a t eでは女性という奇抜な設定）が持っていた武器。

その威力は幾千幾万の軍勢をひと振りで葬ったとされ、街中で使ったら大惨事になるとして使用に制限がかかるレベルである。

ユキトは巨大ビームを出す固定砲台として使用したが、普通に使う分にも一級品。

その黄金の輝きも素晴らしい剣だが、f a t e世界では『風王結界>>インビジブル・エア<<』という鞘を使用して、『剣が見えない』という白兵戦では最強の能力まで持っていた。

弱点を強いて挙げるなら、この剣は有名すぎて一発で正体がバレること。

それと、魔力消費があまりにも激しいこと。ユキトはこれを使う度に気絶するくらい疲れる。そして明久もフィードバックで気絶する。哀れ。

第十五話より

『天鎖斬月>>てんさざんげつ<<』

出典：BLEACH

解説：

主人公、黒崎一護の持つ武器。

この作品の『死神』は『斬魄刀』という『意思を持つ刀』をそれぞれ保有しており、そしてその各々に『卍解』というもう一つの名前がある。

一護の場合は『斬月』から『天鎖斬月』に変化する。

「お前：斬月なのか!？」

「違う！私は『天鎖斬月』だ!!」

と原作で言っているので別の存在らしい。よくわからないけど。

『卍解』は刀の性能を限界まで引き出す奥義だが、天鎖斬月はその力を小さいカタチに限界まで収束させることで超スピードで動くことを可能にしている。

ユキトの場合もスピードが上がる。ただし、ムッツリーニの『加速』と違い長持ちしない。

原作が矛盾：じゃなかった、謎だらけなので作者にもうまく説明できませぬ。間違ってたらごめんね！！

超・番外編より

『凶剣>>スペル・エラー<<』

出典：いつか天魔の黒ウサギ

解説：

ライトノベル『いつ天』のキャラクター、紅月光が持つ剣。

フェンシングの剣のように見えるが、どの剣にも属さない。そもそも、何の素材で、どうやって創られているかもわからない。

この剣は誰も抜けない勇者の剣のようなオーパーツとして扱われており、これを管理していた男は、

『それは神様を処刑した槍を溶かして作った…ま、嘘だけど』

と話して、『自分にもそれが何なのかわからない』と述べた。

しかし、月光はあっさりこれを引き抜いてしまう。彼に言わせれば『俺は天才だから当たり前だ』とのこと。

この剣は生物や物体、果ては『魔力そのもの』『魔法』などへ『黒いナニカ』を介入させて、無力化したり消滅させたりする能力を持っている。

『神種』と呼ばれる存在や世界のルールをぶちぎりで無視するマジカルステッキにさえその能力は有効。

本当に、なんなんだろうこれ。いつ天早く最新刊読みたいです。

おまけ

超・番外編より

マジカルステッキ・カレイドルビー／カレイドサファイヤ

出典：F a t e / k a l e i d l i n e r プリズマ・イリヤ

解説：

『この世界に存在する技術や物資』全てを使っても再現できないこと』をF a t e世界では『魔法』と呼ぶ。

このステッキは、その不可能を達成した『魔法使い』が作成したものの。

『並行世界に存在する無数の自分の能力をダウンロードして使用する』という凄まじいチート能力を誇っている。

このステッキを持つだけで、術者は理論上第一種永久機関を持つのと同義の能力を得る。

具体的には恒久的な身体能力の強化、再生、飛行、大規模砲撃、変身、転移、洗脳などなど何でもアリ。

しかし、それを手に入れるためには、関わる全てをギャグに変えてしまうという腹黒割烹着と洗脳探偵に認められる必要がある。

ちなみに、認めてもらう最低条件は『魔法少女にふさわしいこと』。

イリヤスフィールと美遊以外に、このステッキにトラウマを植え付けられなかった者はいないという。

設定集その3（後書き）

じ、時間がない！すみません、あとがきや推敲は明日の朝で！

追記

というわけで、設定集でした。

誰得なんでしょうこれ？反省。まあ、微妙なスランプに陥っている僕の練習ということで御勘弁を…

・近況

前回「750pt超えました！」

今「840ptです！」

えっ？

なにこれ怖い…

皆さんありがとございます。今後も頑張ります。

第二十四話（前書き）

アンケートの結果、モヒハゲの二人はギャグ要因として出す事になりました。

で、アンケートひとつ終わらした直後で申し訳ないんですが、アンケートをまた取りたいと思います。

『次にやる番外編はどれがいいか』です。

- 1・明久とユキトの入れ替わりネタ（ネタ提供ありがとうございます）
- 2・新野すみれがお送りするユキトへのインタビュー
- 3・別の何か。『こういうの読みたい』というリクエストも含みます
- 4・こんなやらずに本編進めろよ

以上です。個人的に詰まってるから4は勘弁してほしいな…（チラッ

第二十四話

「…悪いな柀。これも仕事だ…」

「ちよつと待っててください西村先生！僕に対しての謝罪はうわああああ！？」

「おいやめる馬鹿！マジ疲れるんだよあの席はぬおおー！？」

うがー危ねえ！？曲がり角はほんとぶつかって!？

いきなりで状況がつかめない人のため説明すると、現在スネークが明久を担いで全速力で会場に戻っているところである。

そして、『距離制限』により俺も高速で見えない糸に引っ張られています。壁怖い。

何故こうなったか。それは十五分くらい前の話。

召喚大会の会場をなんだかんだで脱出した俺たちは

『もうクラスのことも皆に任せて屋上で寝るか?』などと話し合っていた。

そんな時、

「MGS!CQC!!」

といきなりスネークに突撃されたのである。

そのネタ伝わんの!?とツツコミを入れていた隙に素早く明久の体の自由を奪うスネーク。

そのまま明久は拉致され、俺も糸に引つ張られて連れていかれた…という流れである。

ちっ…まさか鉄人を使ってまで俺を解説役にしようとするとはな…

こりゃ新野さんだけの権力じゃ無理だ。さては、学園長もこの件に関係してやがるな?

?? ? ? ? 後でクロス

「…で、また戻ってきちまったわけか」

ぺたぺたと目の前のマイクを触りながらボヤク俺。ちなみに明久は力付きて机に突っ伏している。

もうそのまま寝たフリでいいんじゃないかな。俺もお前も。

683

「みなさーんっ！多少のトラブルはありましたが、問題ありません！ユキトくんは戻ってきてくれましたよ！！」

「……いやっほー！！」「」「」

「いや、あんたら今までの流れ全部聞いてたよな？もっと突っ込むべきところがあるだろ」

観客のノリの良さには驚きである。なんとというか、大らかというよりは大雑把な性格だな…しかも世界規模で。

もう少し細かいこと気にしてもいいと思うよ？君達。

「ふー、セーフセーフ。これで客足は安定しますよね！これもユキトさんというマス」……」

「おつと新野。お前は先程の学園長と俺への発言について話がある。補習室へ来い」

「え？……えっ？」

スネーク ？の ？しのせんごく！

すみれ ？の ？ずじょうに ？すづじ ？が ？ひょうじされた！

「ちょ、私の出番これで終わり！？待ってください、私は映像特典の分を取り返さないといけないのにーっ！？」

叫ぶ新野さん。

うーん、多分もう二度と本編に出ることはないだろうな。出たとしても番外編でだろう。

「…新野さん、一言いいかな」

「よ、吉井君！？助けてくれるの！？」

明久な言葉に目を輝かせている新野。絶望を目の前にして、藁にもすがる想いである。

そんな彼女に明久は、

「…絶対に、話を聞かないほうがいいよ。歪むのは…辛いから」

経験からくる、辛すぎるアドバイスを送っていた。

「わ、私どんなOHANASHIされっ…!?!?きゃ、きゃあああ
あーっ!?!?」

彼女の頭上の数字がゼロになった。タイムオーバーか…スネークに
引きずられていく放送委員に黙祷。

あの補習（説教）は『尊敬する人は二宮金次郎!』という人間にし
てしまう効力があるからな。無事ではすむまい。

しかも、今回は学園長も同席。間違いなくトラウマになってしまう
ことだろう。

次にもし逢えたら、元に戻れているといいな…

と言いたいところだが、さりげなく俺のことマスコットって言おう
としてたろ？

スネーク、説教は念入りに頼む。

「人でなしーっ!!」

聞こえてくる叫び声。

俺は正真正銘人外だけど、何か？

「つーわけで、ここからは俺たちが実況も兼ねるぞ」「
「なんか、心労は軽くなっただけど役割は重くなっただね…」

明久の言葉に心の底から同意する。うん、何故こうなったんだろ
うな？不幸だ。

上条さんの真似はさておき、やるからにはしっかり仕事をするか。
Fクラスの中華喫茶のイメージにも響くし。

なに？もう手遅れ？うるさい黙れ。

「ところで、俺達がいなかった間にも試合やってたみたいだが…勝
敗はどうだったんだ？」

それを知らないと次の試合のアナウンスもできないぞ。

新野さんはそこらへん把握していたようだし、どこかにトーナメン
ト表が書いてある紙とかあるんじゃないのか？

と、解説席の周りを探している。

「…今、五試合目が終わったところ」

俺の耳に、遠くまでよく通る綺麗な声が入ってきた。

おや、この声は…

「あれ？霧島さん」

「おー、わざわざ前に出てきて教えてくれたのか？悪いな」

「…気にしなくていい。今、私の試合が終わったところだから」

そこにいたのは霧島だった。

いやいや、気にするなと言ってもここ（解説席）ってヒトの視線が

集まる場所だぞ？主に俺のせいだ。

なのに、彼女の立ち振舞いは一切の気負いもなく堂々としたものである。

姫路あたりだったらこんな注目される場所には恥ずかしくて出れないだろうが、彼女はそんなことは全く気にならないようだ。

…本当にハイスペックな奴だ。まあ相手の雄二もなんだかんだでハイスペックだけど。

「…それに、さっきの言葉のお礼も言いたかった」

「ああ、アレか。約束は守るぞ任せとけ」

霧島が言っているのは先程のチケットについての約束のことだろう。

ここでネタバレ。

どう頑張っても雄二は如月ハイランド送りになります

「俺に人権はねえのか!？」

「え?ゴリラが何言ってるのさ」

モノローグに突っ込む雄二と、爽やかな笑顔で雄二を地獄に落とそうとする明久。お前ら人の心じゃないけどを平然と読むのやめろや。

それにしても…ふむ、五試合か。

今が二時半で、俺達が出ていったのが一時四十五分ぐらいだから…

「一試合九分ぐらいか?えらくハイペースに進んでるな、この大会」

そんな疑問を呟く。

だって、ここに準備や移動時間も入るんだろ？それにしても随分展開が早いが。

と、霧島に聞いてみると

「…私の相手は棄権したから」

と返事が帰ってきた。

あー、なるほど。実質四試合なのな。

まあ、そりゃ学年主席が相手なら棄権したくもなるだろう。多少健闘しても霧島の引き立て役にされてしまっただろうし。霧島が望まなくてもな。

それに、相方も成績優秀の木下優子だから…あれ？

おかしいな。優子は朝の魔法少女騒ぎの件により

『このままここに居たらアタシが魔法少女扱いじゃない！帰る！！』

と早退してしまったのだが。

…優子には悪いことをしたな。今度何かお詫びをしよう。

話が逸れた。つまり、霧島の相方は『原作』通りにはならない、ということと言いたかったんだよ。

まあ本人が目の前にいるし聞いてみるとするかな。霧島、お前の相方は誰なんだ？

「…優子に頼もうとしたけど早退しちゃったから、美穂に頼んだ」
「なんと。やったな佐藤さん！本編進出おめでとう！！」
「あとがきでネタバレされてたじゃないですかあっ！！」

頑張れ佐藤さん。

そんな話をしていると、高橋女史がトーナメントの組み合わせ表を持ってきてくれた。

よし、さっさと始めてさっさと終わらせよう。今回は漫才大会じゃないし。

「それじゃ、第六回戦を始めます！選手入場！！」
「！！！！」
「！！！！」

明久のセリフに合わせて、控えていた生徒達が前に出てきた。それに合わせて俺もトーナメント表に書いてある名前を読み上げる。

「さて、まず出てくるのは全員二年生だ！！Cクラスの代表である
小山友香に、Bクラス代表のゴミー！」

「待てえ！？全員に聞こえるようにゴミ扱いな！？」

そう言って出てきたのは、小山とゴミである。

おや、ここは『原作』通りなのか。もう別れたと思ったんだが…

そしてゴミが何か言っているが俺はそれを華麗にスルー。

俺はお前をバカにしているわけじゃない。コレ以上ふさわしいアダ
名がないだけだ。

「対するはDクラス清水美春とFクラスの土屋康太だ！…って、は
？」

ムッツリーニに…美春…？

またもやイレギュラーな組み合わせである。

俺の言葉と共に、ムッツリーニが入ってきた。…美春もその後が続いているが、

「…(びくっ！)」

「…うむ…」

俺と目を合わせると目を逸らしてしまった。

…まあそりゃトラウマ植え付けたり裸見たりしたらあんな反応だよな…何を話せばいいのかさっぱりである。

と、とにかく今の俺は解説兼実況だ。大会を進めないとな。

「それじゃ、まず大会の抱負でも語ってもらおうとするか。明久、小山にマイク渡してやってくれ」

「あ、うん。わかったよ」

そう言っつて席を立ち、マイクを手渡す明久。

ここはやっぱり、大会への抱負とかを聞いてみるかな。観客と共感させることで場を盛り上げてみよう。

「さて、小山。意外な人と組んでの出場だが、商品が欲しかったとかそんなんか？」

「え？別にいらないけど」

凍る会場。

大会に出ておきながら『大会に興味ないです』という反応。じゃあ何で出たんだ！煽りか！！

「お前な！いくらなんでもその返答はないだろ！？場が白けたらフオローすんの俺だぞ！？」

「…私、無理矢理このクズに引つ張られたただけなのよね」

「お前のせいかこのカス！！」

彼女にも彼女の事情があったようだ。早合点すまない、小山。

「頼むから名前を呼んでくれ！俺今完全に観客からクズとかカスとかゴミ扱いじゃねーか！！！」

「え？何がおかしいの？その通りだけど」

「ぬぐあああー！！！」

明久の純粹な問いに、グサア！と一番ダメージを受けるねも…もとい、クズ。絶対に本名は呼ばない。意地でも呼ばない。

「しかし、このゴミに何を言われたんだ？弱み握られてるならそれなりの対処するが」

「あら、優しいのね。まあ大丈夫よ、泣きながら『優勝したらヨリ

を戻してくれ』って土下座されただけだから」

「…キモかつたる？」

「…相当ね」

「友香あああああああ！？」

なんとというか、ヨリ戻す気全く無いな小山。

「ち…畜生！これも全部お前らFクラスのバカ共のせいだ！見てろよ、優勝したらお前らなんて…！！」

「いや、お前の自業自得じゃねーの？」

『原作』ならともかく、お前Bクラスの連中にまでコロスコロス言われてたじゃねーか。

「実を言えば私も脅されて付き合ってただけだしね。ああそうそう、あのお弁当はコンビニのを詰め替えただけよ」

「うわー、そんな事までやってたんですか」

同じ女として軽蔑です、と美春にまで言われている根本。美春が小

山と同じ『女』かどうかは疑問が残るけど。

ちなみに、コンビニ弁当のくだりは『文月学園放送部』の第二十
四回を参考にしました。

「まったく、ああいうのをバカって言うのかな」

「…むしろ変態」

「やめるおー！…お前らにバカとか変態とか言われたくねえー！！」

バカ代表とムッツリ代表の駄目押しに絶望する変態ゴミクスバカカ
ス野郎。

でも心は全く痛まない！ふしぎ！

「く…くそッ…！…早く試合を始める…！…てめえら全員、ブチのめ
してやるッ…！…」

いや、俺は解説だから。

そんな風にごちらのやる気を著しく削ぎながらも、一回戦六試合目が幕を開けようとしていた。

「つーかさ、観客の皆さん。正直これ不戦勝でよくない？」

「『『『異義なし!!』』』」

「挽回のチャンスすらねーのかよ!？」

しかし、幕は上がらなかったのであった。

そんなわけで、勝者美春チーム。次回へ続く。

第二十四話（後書き）

ラジオ24回の話題を本編24話で出す事になりました。
なんつーか、凄い偶然ですね。

文月学園放送部、ラジオCD第三弾発売中！

そういうわけで、根なんとかさん再びフルボッコでした。
小山さんの召喚獣の描写がなかったもので。なら仕方ないですね。

今回は一度店のほうに戻ります。

皆さんお待ちかね、バカテスのロリ要因である彼女が出ますよ〜

（21）っていいですよね！なにせ抱きしめられても窒息しません
から！！

・近況

何も言わずに評価ポイントをみてくれ。こいつをどう思うっ？

す〜く…伸びています…

どうしてこうなった、僕があとがきに書き込むと何かが変わるんで
しょうか。

総合順位も九位から七位に上がりました。ビビっています。

皆様本当に本当にありがとうございます！

『おしよつゆ』が暇つぶしになれていれば、僕にとっては感無量であります。

それにしても熱い…『暑い』じゃありません、『熱い』です。

さすがは38の真夏日ですよ。ワチャカナドウ…何これ地獄やん…

ユキトたちにクーラーつけてあげてよかった。心底そう思いました。

第二十五話（前書き）

今回、ちょっと最後のネタがわかりにくいかもしれませんが、
伝え切れてるといいのですが。

第二十五話

さて、どうしようもなく半端な決着だったな。さすがゴミだ。もう作中では二度と出ることはないだろう。

ちなみに、この後も八回戦まで試合があったが、大して描写するべきでもない普通の試合だったので割愛させて頂く。

七回戦、八回戦のどちらの勝ちチームも『勝っても霧島とかよ無理矢理』とか言ってたので恐らくこちらでも作中では出てくることはないだろうな…

そういうわけで、予選にあたる一回目の対戦は全て終了した。

休憩も兼ねて、次の試合は五時から。

それが終わると準決勝までのメンバーが決まって、学園祭最終日である明日の決戦へと突入することになるのだ。

というわけで、

「や、大変だったねユキトくん」

「ああ…常識人って癒される…そのままできてくれ工藤」

「…本当に大変だったみたいだね…」

俺たちは休憩中なのである。

「…確かに、大変そうだった」

そう言いながら、霧島もテーブルにうつ伏せで寝ている俺をなでる。

なでりなでり。がちやりがちやり。彼女の手が動くとそのれにつられて持っている手錠が音を立てた。

「なんかいつも通りペット扱いだけどいいや…ありがとな霧島」

「…どういたしまして」

「待てユキト！！俺に手錠をかけている翔子に何故疑問を抱かない

!？」

え、手錠？いつものことだろ。理由？一緒にいたいからじゃね？

…あー、駄目だな。いつもなら霧島にツツコミを入れてるはずなのに頭が回らない。むしろ回す気になれない。俺も疲れてるな。

「あ、僕にも撫でる感触の微妙なフィードバックが…なんだか変な感じだねこれ。頭がむずかゆいというか」

「あ、明久君！私も撫でてあげます!!」

「ウ、ウチも!!」

「では私は間を取ってアキくんにも撫でさせてあげましょう」

「待つんだ姉さん！ゆっくり僕の腕を胸に挟もうとしないでよ!？
つて姫路さんに美波撫でるために道具はいらなきゃあああああっ!
？」

別のテーブルでは明久がいつも通りの仕打ちを受けていた。玲さんも加えて明久のダメージはさらに深刻なことに。

…とは言え、なんだかんだであの三人は明久を撫でたり抱きついたりしているみたいだな。

暴力は何も生み出さないと多少は理解したようだなによりである。
あの調子なら明久の気分も多少は良くなるだろう。

FFF団だけが心配だ。

さて、今この場にいるのは俺と明久、姫路と島田に玲さん。そして、
店員である霧島と工藤、あと雄二の七人と一体である。

駄弁っているのはAクラスの喫茶店である『御主人様と御呼びびっ！』
。 凄い名前だが、わりと評判はいいようだ。 まあAクラスは美少女
揃いだしな。

なぜ溜まり場がFクラスではないのかと言うと、皆忙しいから…

…と、いつだけの理由でもなかったりするんだよな、これが。

俺達の『中華喫茶ヨーロッパ』には特殊なルールがある。申し訳ないが、一定時間が経ったら客には退店してもらうことになっているのだ。

これは、行列ができるのを避けるため。実益を優先してお客さんに我慢してもらった形になるわけだな。

まあ、帰り際にムツツリーニが用意した写真を無料で進呈しているので不満もなく上手くいつているようだ。安心安心。

そういうわけで、Fクラスは長時間の休憩には向かない場所ということのでAクラスにお邪魔したわけである。

雄二？俺達がここに来たらもう居た。詳しいことは疲れてるからスルー。

「しかしまあ、色んな意味で意外なメンバーだったな、召喚大会は」
テーブルの上で体を回復させながら、暇つぶしの雑談を振ってみる。

テーブルの上で寝転がっているのは行儀が悪いかもしれないが、こ
うしないと女子の誰かに抱き上げられるんだ。勘弁してくれ。

「そうそう、ボクも驚いたよ。坂本君はなんで久保君と組むことに
なったの？」

「あー…翔子に優勝させたら俺が」

「…雄二が私を幸せにすることになってる」

「わ、大胆だねー…」

「待てコラ！勝手に他人の意思を捏造するな！！」

霧島がボケ、雄二が突っ込む。こういうのを夫婦漫才と呼ぶ。楽し
そうに笑ってる工藤は観客役だな。

「あはは…そうそうもう一つ。久保君はどうして坂本君に協力して
くれたの？久保君って彼女とかいたっけ？」

「………」

「…あれ？み、みんなどうしたの？久保君に何かあったの？」

「…ヒント。美春と同じ性癖」

「…めん。二度とこの話題は出さないよ」

そう言ってもらえると助かる。

まあ実際、久保は雄二にチケットを譲ってもらって明久を誘うつもりだったのだろう。

ちなみに、雄二は気付いていないようだが、チケットは優勝者二人に『二枚づつ』渡される。

つまり久保がチケットを使ってもあと二枚余る。…『原作』的に考えれば、それが霧島の手に渡るのはほぼ確実である。

712

つまり、雄二に最初から逃げ場はありませんでした。ところがどこもこい…！これが現実…！
！

とまあ、そんな哀れな雄二の未来を考えていると。

『…着いた』

『まあ、居るとしたらここでしょうね』

『ありがとうございます、ムッツリのお兄ちゃん、くるくるしてるお姉ちゃん！』

『す、すごく頭が悪そうな言い方ですね…』

『…！（ブンブン）』

Aクラス入り口からそんな声が聞こえてきた。

『そ、それでは美春はここで』

『ええっ？駄目ですお姉ちゃん！当たって砕けないと気持ちは伝わらないですっ！！』

『え、でででもそれは』

『…砕ける必要はない』

これは…ムッツリーニに美春に新野さ…いや、葉月だな。

ふ…『前世』で鍛えた俺の耳を舐めるなよ？俺はキサラギ少佐と）

（さんの声が同じであると聞き分けたほどだからな！

…この声優ネタ、何人に伝わるんだろうか？不安だ。

と無駄すぎる自慢をしていると、葉月のものであるうパタパタとした足音が近付き、それにつれて声がクリアになった。

「「「いらっしやいませ、お嬢様」「」」

「わっ！す、凄いです…お姉さん達、とってもキレイです…」

ほわー、と驚く葉月。

まあ完璧なメイド服を着てるしな、素材の良さもあって素晴らしい光景が浮かんでいるだろう。

ちなみに明久は『なんでミニじゃないのさ！』と血の涙を流してその数秒後血を流すハメになっていた。疲れてるのに無理するな。

「あ、あのっ！葉月はお兄ちゃんを探しているんですけど、知りませんか！？」

「？御兄弟の方ですか？」

「えーと、違うんです…あ、召喚獣さんを連れてるお兄さんです！」

「召喚獣ですか…？学園の生徒は皆連れているのですが…」

困るメイドさん。まあそりゃそうだよな、今の学園では全員が召喚獣を顕現させている。その中から『お兄ちゃん』を探せと言われても厳しいものがあるだろう。

ああそうそう、Aクラスの召喚獣はどうしているかというのと、現在教室の前でちょこちょこお辞儀とかをする招き猫的なことをしている。

だから俺も抱きつかれず済んだ。助かった…人間には抱きつかれたけど、もうそれは我慢するでしょう。

「うーんと、えーと…あ、そうですっ！」

何かを思いついたようで、葉月の顔がぱあっと明るくなる。

「とつてもバカなお兄ちゃん、とつても可愛い召喚獣さんです！」

「「「吉井君にユキト様、お客様がお見えです」「」」

「「ちよつと待った異義あり!!」「」

おいイ!? 明久はともかく、俺もその『可愛い』イメージで固定されてんのオ!?

何で!? 俺あの場では単なる苦勞人ってポジションだったじゃねーか!!

「待つてよ! なんでユキトに様つけて僕のこととは普通に呼ぶのさ!」

「その着眼点はおかしいぞ明久!?!」

明久、バカ丸出しである。∴いつものことだと言えばその通りなんだけれども。

「あつ! バカのお兄ちゃんですつ!?!」

「ち、ちよつと葉月！？なんでここにいるのよ!？」

嬉しそうな葉月と、相当驚いている様子の島田。よく見ると顔つきとか似てるな…やっぱり姉妹である。

俺は既に葉月のことを知ってるわけだけど、それは不自然なことだから隠しておかないといけない。

うーむ、会話に参加できないって地味に面倒だな…明久はやっぱり葉月のことド忘れしてるんだろうか？

…あ、しまった。このまま『原作』通りの流れでいくと、

「というか、君は誰？僕に幼女の知り合いはいないはずだけど…」
「ふえっ!？ひ、ひどいですバカのお兄ちゃん！葉月と結婚の約束までしたのにつ…!」

あ、遅かった。

「瑞希！」

「美波ちゃんっ！」

と、瞬間的に女子二人が明久のサイドに一瞬で移動していた。

なんだ今の速度。相変わらず人間やめてるなこいつら。

そして、『原作』ではここで終わりだった連携も、この物語では終わらなかった。

「玲さんっ！！」

「…お任せください」

島田と姫路の声がきれいにハモって、三人目の名前を呼ぶ。

それはまるで、女の子向けの変身ヒーローが悪を討つ時の姿のよう
で…

ところで、話は変わるが皆さんは『ガンダムVSガンダム』をプレイしたことがあるだろうか。あ、いわゆる無印な。NEXTじゃないよ。

いやはや、一番最初のは酷かったんだぞ？ゲームバランスが壊れて…

音だけで言うと、こう…ピシユンピシユン大変だったんだ。まあ詳しくは各自調べてほしい。

で、だ。そのゲームの中に『サテライトキャノン』っていうロマン兵器があったんだが、これがえらくヘンテコな武器でな。

なにせ、当たったらほぼ一撃必殺なんだが、絶対に当たらないんだ。隙が大きすぎるし、ロクに狙ってくれないし。

で、それを頑張って当てるのに一番有効なやり方が、『仲間に足止めしておいてもらう』って奴なんだ。

その武器がさ、味方を射出して、命中したらしばらく相手を拘束させる、っていうものなんだ。

そう、まるで今の姫路と島田みたいに。

いやはや、そのゲームそっくりなんだよ今の状況。隙がでかい攻撃を仲間に拘束してもらって、

「アキくん」

「ちよっ、姉さん！？ちよっ、ま……」

「…おしおきです」

ゴシヤ

…一撃必殺、つてところがや。

…明久が復活するまで時間がかかりそうなので、次回へ続く。

第二十五話（後書き）

けいおん最新話で死にそうになりました、琥珀です。
なんであずにゃん泣いてないんだよ…後で大泣きすんの確定じゃねえかよ…

まあそんな話はさておき、本編をお送りしました。

皆わかるかなあ？ガンガン。ブレイブルーといい僕の頭の中はほんだけマニアックなんでしょう。

そうそう、評価ポイントがもうすぐ1000ですよ！

つーかバカテスでランキング四位ですよ！短期間でなにがあったんやねん！！

同じことしか繰り返せませんが、皆様ありがとうございます。本当にありがとうございます…！

1000ptを超えたら番外編にしようと思ってましたが…本編がある所かになるかな？

ひよつとすると番外編は少し後に掲載することになるかもしれない。

アンケートがまだですしね。引き続き募集してます〜

次回、美春に謝るユキト。しかしユキトに逆に謝る美春。

なんか甘酸っぱい空気にAクラスが包まれた時、ついにユキトが異端審問される…！？

「「「「吉井が幼女と一緒にいるぞ！殺せえ！！」」」」

どろろ考えてもそれそうにないです、本当にありがとうとっくに済みました。

設定画（前書き）

今回は挿絵があります。

嫌いな方はONOFF機能を使うか、ブラウザの戻るをどうぞ。御
注意ください。

設定画

「みなさんこんにちは、放送部には負けたくない！佐藤美穂です」

「今回は作者さんが挿絵を描いたということらしいのでその紹介らしいです…！」

「あ、ユキトさんだけですか…私は画像ないんですね…！」

「それでは、まず『生前』の姿からです！どうぞ…！」

> i 1 0 8 4 5 | 1 5 4 8 <

「暗い！？なんか絵に突っ込む以前の問題ですよねこれ！？」

「作者さんいわく、『アナログでやったらごらんの有様だよ』だそ
うです…！」

「『本当ならスキャナー使いたかったけど一日中忙しくて友人の家に行く暇がなかった』そうですね…」

「ひどい言い訳ですね…」

「さて、肝心の絵のほうについては…特に元ネタなどはありませんね。作者さんが気の赴くままに描いたようです」

「まあ、こっちは別にいいですよ。問題は『現在の姿』のほうです…」

「そういうわけで、召喚獣のユキトさんをぶっごぞ…！」

> i 1 0 8 4 6 | 1 5 4 8 <

「デフォルメされてますね…」

「なんとというか、私は作者さんの代理なので絵のうまさに文句はつけられないんですが…」

「葉賀ユイ先生の召喚獣と明らかに違うじゃないですか!!」

「足なんて明らかにパワ ケキャラでしょう!? 作者さん、もってしっかり再現して下さいよ!?!」

「え? 死にたい? なら何故アップロードしたんですか…」

「手に持ってるのは… エクスカリバー? 適当に書いたみたいですよ…
ごめんなさい」

「そんなわけで設定画でした」

「多分後でスキャナー借りて明るいい画像を用意すると思うので、見苦しいのは御勘弁ください…」

「この絵が読者さんのイメージを手助けできたら幸いです」

「『おしよゆ』は挿絵や作品間のクロスオーバーなど、いつでも募集中です!!」

「なにこの絵？俺のほぅがうまいよちよっと来い、みたいな方もい
つでもウェルカムです」

設定画（後書き）

お知らせを改変してみました。

いや、本当にいろいろすみません…

第二十六話（前書き）

スランプです。

遅れました、ごめんなさい…言い訳はあとがきで。

第二十六話

「ところでムツツリーニ、美春。なんでお前らがコンビを組むことになったんだ？」

雄二の目がなんとか治り、テーレッターされた明久が蘇生したりと色々な出来事に一区切りついて、ようやく俺はムツツリーニに質問を始めた。

いやはや、今回の明久はマジで冥府から帰ってこれないのかと心配になるような惨状だったぞ…

最悪、スネークを呼んで天生牙あたりを『現創』しようかと思っただが、まあ生き返れてよかった。

そういうわけで、冒頭の質問に戻るのである。

ムツツリーニと美春ねえ…こいつらの間に接点なんてなかったと思うんだが？せいぜいムツツリ商会のお得意様ってぐらいか。

…ん？待てよ。そういえば盗撮をやらかした（まあ『原作』限定でだが）という共通点があったな。

「おい美春、まさかまた盗撮したわけじゃないだろうな…」

「へ？いえ、それはありませんが…ユキトさんに迷惑をかけるわけにはいきませんし、それに…お、おはなあばばばばばば」

「待て美春！思い出さなくていい！！俺が悪かった！！」

ビクビク痙攣し始める美春。いまだに尾を引くOHANASHIであつた。

…俺でさえこれなら、本場ホワイト デビルさんのOHANASHI Iは一体どのような威力なのだろうか…

「つーかムツツリーニ、お前もいい加減犯罪行為はやめろ。バレたらなんだかんだでフォーすんの俺なんだぞ？」

「…迷惑はかけない。気づかれるへまはしない」

「もつどこからツツ」ミいれればいいんだ俺は」

未遂も犯罪になる世の中だが発見されていない犯罪も増えてきてい

るようだ。なにそれ怖い。

さて、現在俺が座っているテーブルには雄二、ムッツリーニ、美春がそれぞれ座っている。

先程まで居た霧島は店員なのでムッツリーニ達に席を譲って、注文を受けて厨房へと向かっていった。

しかしもう一人の店員であるはずの工藤は、

「お帰りなさいませご主人様」

「…グフツ…この程度…！」

「お飲み物にしますか？お食事にしますか？それとも…わ・た・た・し？（チラッ）」

「…！！（ガクガクガクガク）」

面白がってムッツリーニと仲良く遊んでいた。ただしムッツリーニにとっては拷問である。

「お、鼻血我慢してるのか。成長したなムッツリーニ」

雄二が感心している。俺も同感だ。ムツツリー二も多少は成長しているようだな…工藤のパンチラにも（痙攣しながらだが）なんとか耐えている。

今までスパッツでさえアウトだったという点から考えれば素晴らしい進歩だ。ちょっと感心する俺。

…うーん、俺も考え方がおかしくなってきた気がする。

しかしそんなムツツリー二に対して、どうやら工藤はごく不満な様子。

「むー…なんだか女の子としてちょっとカチンとくるねその反応」
「待て工藤。流血を望むことのどこが女の子らしいんだ」

お前だけはおかしくならないうれ…！まあ、ムツツリー二の日頃

の反応から見れば確かに今日がおかしいんだが。

「…ふ…！貴様の下着になど興味はない…！！」

そんな工藤に対し、堂々とした勝利宣言をするムツツリーニ。

…まあ実際にはもう限界だろうが。身体中の痙攣が物語っている。

しかし、この発言がマズかった。

「な、な、なっ…！！？ボクのおっぱい見たからって、そそそんな言い方はないでしょ…！！？」

彼女としては珍しく、顔を真っ赤にして叫ぶ工藤。

ブパアッ

「ムツツリーニイー!!?」「」

…あー、そういえばムツツリーニは試召戦争の時に見ちゃったんだっけな、ナマチチを。不可抗力とはいえ。

それがフラッシュバックして致命的な致命傷を負ってしまったムツツリーニ。あー、気付いてやればよかったけど時既に時間切れでした。

まあ、その事を工藤が気にしていたとするならこっぴどい勘違いするのも当然だよな。

ムツツリーニは「工藤そのものに興味がない」という意味で発言したのだが工藤は「下着程度では満足できない」と解釈してしまったのである。

まあ前回よりムツツリーニの出血は少ないようだし（今回は妄想だから当たり前だな）命に別状がないなら放っておくか…

「し、しっかりするんだムツツリーニ！」

「土屋！？アンタ何やってるのよ!？」

「？ムツツリのお兄ちゃん、どうかしたんですか？」

「な、なんでもありませんよ？葉月ちゃんは目を開けないでくださいね？絶対に」

しかし、向こうのテーブルにいた明久、姫路、島田はムツツリーニがいきなり倒れたのに驚愕していた。

ちなみに秀吉はまだFクラスで仕事中。あいつ一番人気だし。

そして子供に見せるにはまだ早いということできゅむ、と葉月の目

を手で覆う姫路。うんそれ正しい。

「くっ…！血、血が足りないよ！！誰か、誰か…！助けてくださいー
い！！」

「おい明久。そのネタはアニメ一話で既にやってるぞ」

叫ぶ明久に適当にツッコミを入れる雄二。どう見てもメタ発言だな！

「はっ！そ、そうだ！今ここで吹き出した鼻血をムツツリー二に輸血
すれば…！！」

「ちょ、ちょっとアキ！？そんなことできるわけ…あれ？土屋なら
できるかも」

「やめる！医学にケンカを売りすぎてるぞその発言！！」

良い子はマネしないでください。

「ムツツリのお兄ちゃん、鼻血出しちゃったんですか？」
「え、えーと…」

葉月。お前はまだ、この現実を直視する必要はない…

純粹な子供が、このバイオレンスな世界に足を踏み入れないことを、俺は密かに祈ったのであった。

そんなわけで、工藤の真っ赤になってた顔を見て多少は疲れが取れた俺は、なんやかんやで流れまくってた質問を再開することにした。

あれ？デジャヴ。つかスパッツを見られた時点で恥ずかしいと感じるよ工藤。

「パンツじゃないから恥ずかしくないもん！」

いいから仕事に戻りなさい。

」で、美春

「ひゃいつ!?!」

美春に話しかけると、たいそう驚かれた。目の前にいるんだが。

…反応が虚しいが、これも俺の責任だからな…とりあえず、質問の前に言うべきことは言っておくか。

「悪かった」

「へ?」

「…えーと、風呂のことだ」

「え?…っ!!あ、あれはいいんですっ!む、むしろ美春の方こそごめんなさいっ!…!」

お互い微妙に相手の顔が見れない。なんていうか、胸に顔を突っ込むのと全裸を見るのでは多少レベルが違っんだよ俺としては…

「いや、本当に…すまん。その前に言ってた『貸し』の分はチャラ

でいいし、なんならここのケーキでも奢るぞ」

「む、むしろ美春の方が『貸し』を三つに増やただけです！あのその、むしろ美春が奢りますっ！！」

「いや、俺は食えないんだが」

俺が悪い、いえ美春が悪いんです、とお互い微妙に譲れない空気になってきた俺達。

うーむ、どう収集つけばいいんだこれ。

「…なんというか、新婚のカップルみたいだなお前ら」

「しんこんっ!?!」

「婚約してる雄二にそんなことを言われた…だと…!?!」

「誰が婚約してるだボケ！俺と翔子はそんな関係じゃ」

「…本当は籍を入れたかったけど、18歳まで待たないといけなかった」

「うおおい!?!なんだその紙は、そして何故うちの実印を持っているんだあ!?!」

流石霧島、Fクラスの連中にも劣らない行動力だ。…これ、まったく褒め言葉にならない気がする。

「ししし、新婚なんかじゃないんですっ！！美春にはお姉さまという心に決めた人ががががっ！！」

ポバツ！！

「え！？ちょ、どうした美春！？」

なんか知らないけど美春が爆発したぞ！？どうなってんだこれ！

血の海に沈むムツリーニ。

視力を失いつつある雄二。

冥府に片足を突っ込んだ明久。

「い、いつからここは地獄になったんだ！？」

魔境Aクラス、恐ろしや。

「あれ！？Aクラスなのに私の描写ないんですか！？」

佐藤さんの叫びが虚しく響いていた。

…話が進んでないけど、続く！

第二十六話（後書き）

なんだかんだ昨日更新できませんでした、ごめんなさいっ!!
いや、僕もいろいろ忙しかったんです。昨日なんて、

リアルOHANASHI食らってました。

恩師と四時間半に渡って。

もうなんなんだよ、俺だけシラフで恩師は酒飲みつつ笑いながら毒吐いてくるんですよ？死にます。

おまけにスランプも重なりました。ネ、ネタがねえ！
短い上に話が進んでません、お許しを。

代わりに今晚は番外編を投稿する予定です。入れ替わりネタですよ！

挿絵（というか設定画）はこの後更新しておきます。
つかアナログで写真だったから画像が暗いですね…今度友人の家
でスキャナー使ってきます。

もうなにもかも中途半端です。申し訳ありません…

今日はアイツが召喚獣（前編）（前書き）

今回はリクエストで出てきた入れ替わりネタのお話です。

まさかの二分割…

大幅に加筆しました。

今日はアイツが召喚獣（前編）

「本当にこれ、僕までやる必要あるんですか？」

明久が、気が進まなそうにぼやいた。

「そりゃ勿論さ。今回はアンタ達の『ライン』を観測する実験なんだから」

「『距離制限』の時に俺と明久をつないでる見えない糸も同じものつてことでいいの？」

「みたいだねえ。物理的なんだかそうじゃないんだかさっぱりわからないね。まあ、研究者としては研究のしがいがあるがね」

「なんか明らかに学園長の発言じゃねーよなもう」

「まったくだよ。まさに妖怪の物言いだよ」

「今のどこに妖怪の要素があつたのさクソガキ！」

いや、そこは否定できないだろう。ていうか外見がツツコミどころしかない奴がツツコミをする図は非常にシニールである。

さて、俺達は現在、学校の召喚システムを調整する部屋にいる。

謝礼を出すから研究に付き合ってくれ、とのことなのでわざわざ休日なのに学校に来たのである。一種のバイトだな。

で、わざわざ行つこの研究の目的は『どのような仕組みで俺がこの世界に存在しているか』についてを調べることである。

例えば、俺は召喚フィールドがなくても存在して、動いたり喋ったりしているわけだが…一方、俺は食事をとることができない。

なのに、エネルギーの供給無しで俺は活動している。これは確かにおかしなことである。

で、その推論として『明久から俺に見えないラインが引かれていて、そこからエネルギーをもらっているのではないか』というものが考えられた。

前にも言ったが、f a t eでサーヴァントとマスターを繋いでいるものに似たような解釈だな。まあ、アレとも大分違うようなのだが…

まあ正直、これが正しいかすらも分からない状態なので、とりあえず調べてみよう…ということになったのである。

この研究、突き詰めればひょっとすると将来『見えないラインをつ
ないで離れた相手と会話する』なんてテレパシーっぽいこともでき
るようになるかもしれない。

ここは学園都市にでもなるのか？

しかも超能力の大元が俺とか、なにそれ怖い…ルビーのせいでの
世界に魔術があるのは確定してしまったわけだし、そのうち科学と
魔術が交差しねえだろうな？

つつか、そうになったら多分真っ先に巻き込まれるな俺。

「しかし、すごいメカメカしい機械だね。ポケ　ンでマサキが変身
しちゃった時の機械みたいだよ」

そんな俺の不安をよそに、明久は目の前の計測装置を見ながらほへ

「、と呑気なことを言っていた。」

ケモンか、懐かしいな。俺は赤緑しかやってないけどマサキは知ってるぞ。

確か、何かの事故をやらかしてポケモンと自分の体を合体させてしまったんだっけな。

…ん？

「やれやれ、何を言ってるんだい。ゲームと一緒にしないでほしいたいね。そんな変なこと『絶対に』起こらないよ」「まあ、それはそうですね…」

…あれ？

これ、フラグじゃね？

ホラー映画にありがちなこと。『絶対』という言葉は逆のフラグ。
例えば『絶対生き残ってやる！』はほぼ間違いなく死ぬ。

あ、ちなみに『もうダメだ！』はよく生き残る。結構よくあること
なので皆さん映画を観る時はちよつと注意してみよう。

まあ、今はそのことは置いておいて。

「この状況やべええええ！！」

「わ！？いきなりどうしたのユキト！？」

速やかにこの場を離れなければまずい…！！

「すまん学園長、俺は急用を思い出したので」

「お、装置の準備が終わったね。それじゃ、始めるとしようか」
「あ、はい。ユキト、これが終わったらゆっくり話をしようよ。
急に叫ぶなんておかしいって」
「待て、話を聞け！！この展開は間違いなくフラグだから、ちょ、
引っ張るな明久！！やめろおおおお！！」

翌日

side ? 雄二

「おいーす」

「…おはよう」

「おお、雄二に霧島か。おはようなのじゃ」

「なんつーか、誰か翔子がいることにツッコんでくれ頼むから」

朝。眠気をこらえながら教室に入る俺：と翔子。

「いやいや、ここFクラスだろ？お前がいるのはおかしいぞ」

「…朝ぐらいは一緒にいたい」

「いいからAクラスに帰れ」

そう言っただけで追い払おうとしても翔子は離れず、むしろ距離を詰めてきた。おいやめろ！当たる！！

しかし、挨拶を返した秀吉もこの状況にすっかり慣れちまったらしい。ちくしょう、月曜日はいつもこれだ…

翔子の奴、『…雄二成分が足りない』とか抜かして腕に抱きついてきやがる…！

あれはむしろ俺の傲慢の結果だし、俺はお前に釣り合わない、って何回も言ってるのに…いつになったら理解するんだこいつは！

「(チツ：見せつけやがって)」
「(さつさと離れるクソゴリラが)」
「(死にたい：)」
「『』(…坂本クロス)『』」

おかげでこんな無駄な殺意を貰うハメになる。

このバカ共は相変わらずなんもわかってねーな…一回関節曲げられ
たりお宝本処分されたり地獄の門の前に行ってみればいいんだ。

753

(作者注：雄二も翔子の胸を意識するまいと必死に別のことを考
えています)

こんな風に抱え込んだストレスのはけ口にはやはり明久が一番だな。
今日もあのバカに犠牲になってもらうとしよう。

今日はどんな風に地獄へ送ろうか考えながら、明久とユキトの席のほうを見ると…

「…ん？」

おかしいな、居ないぞ？

今の時間は始業ギリギリの時間だ。いつつ俺はつるんでる連中の中では最後に来るんだが。

ユキトがいるから明久は遅刻しなくなったしな…ん？新学期のときは遅刻してたって？ああ、新作ゲーム発売直後はそんな感じだ。アイツも相当なゲーマーだからな。

しかしマジで珍しいな…なんで居ねえんだアイツら？先週は新作は出てないし、風邪を引くなんて召喚獣とバカにはあり得ない話だ。

「ぬう、やはり雄二も明久とユキトのことが気になるのか？」

「…不自然」

「やっぱり、お前らも変だと思ったか」

「どうやら、異常を察したのは秀吉とムツツリー二も同じだったらしい。」

「生活リズムってのはなかなか変化しねえものなんだが…一体なんだってんだ？」

「と、そんな事を考えていると」

ガラッ

「あ、おはようアキ、ユキト」

「おはようございます、お二人共」

「姫路と島田がちょうどドアを開けた奴らに挨拶をしていた。言葉から察するに明久とユキトらしい。」

「噂をすれば、どうやら今来たらしい。どれ、遅刻した理由でも明久に聞いて…」

「…あー、おはよう姫路、島田」
「「「「！？」」「」」

な、なんだ今の違和感は！？

『明久』は今、何を喋ったんだ！？

「ア…アキ…？」
「あ、明久君今なんて」
「んー？どうした『姫路』に『島田』、そんな顔して」
「「はうっ！？」」「」

また違和感だ。

これは…いつも島田を『美波』と呼んでるっつーのに、今日に限っ

て『島田』と呼んでるのが原因か？

しかもそれだけじゃねえ。『姫路さん』から『姫路』に変わってるし、なんかいつもの明久とは違う言い方だ。

明久は姫路の顔を見るだけで嬉しそうになるぐらいわかりやすいってのに…

「（み、美波ちゃんっ…！こ、これは明久君が怒ってるってことですか！？）」

「（し、知らないわよ！だって別に何もした覚えがないし！ないし…？）」

「（…普段の心当たりがありませんっ…！）」

「（ひよ、ひよっとして…ウチ達のこと…嫌いになつたの！？）」

ひそひそとそんな会話を交わしている姫路と島田。

確かに、今の明久がおかしいの確かだ。なにせ、島田のことを名前で呼ばないなんてミス、自分の命が惜しいアイツがするわけがない。

何故島田を名前で呼ぶと危険なのかは第六・五話あたりを見てくれ。

「ど、どつしたのじゃ？今日のお主は何か変じゃぞ」

俺と同じような疑問を感じたらしい秀吉が明久に恐る恐る尋ねる。

するど、

「ん？ああ、やっぱりわかるか？」秀吉

「うわああああああんっ！！」

「うおっ！？ちよ、授業始まるぞ！？おーい！！」

…ああ、秀吉のことだけ名前で呼んだのがショックだったんだな…

しかし、ますますおかしいな。あの明久が授業のことを気にするだ
と？一体どうなってるんだ？

皆が頭に「？」とか「！？」を浮かべながらどう質問するかを悩んでいると、

「…吉井、女の子は繊細だから気をつけないと」

翔子が明久に対してそう咎める。

やはり、こいつの表情にも疑念の色が見て取れるな。やはり、何かしらの違和感を感じ取っているのだろう。今の発言は会話の取っ掛かりにするためか。

「あー…そのことなんだが、俺は明久じゃない」
「「「「は？」「」「」

しかし、帰ってきたのは核心を突く、しかしさっぱり意味のわからない言葉だった。

うん、やっぱり事故りました。

やれやれ、とため息をついて雄二達のいつもより小さく見える顔を見渡す。まあ俺が大きくなったんだがな…主観的に。

「な、なんの冗談なのじゃ明久？いくらなんでも、お主らの魂が入れ替わるなど」

「3・141592653589…」

「なんと…間違はなくユキトじゃな」

「待ってよ秀吉！おかしいよ、僕だってラムダの数字ぐらいちゃんと言えるからね!？」

「あー、こっちは間違いなく明久だな」
「なんで！？なんなのそのリアクション！？」

円周率をちょこつと言ったら簡単に信じてもらえた。皆、明久のことをよく知ってるなあ…駄目な方の意味で。

ちなみに明久、円周率はラムダ（ λ ）ではなくパイ（ π ）で表す。覚えておけ。

「…でも、どうしてそんなことになったの」
「いやあ…フラグを回避できなくてな」
「いや、何だソレ」

さて、どうしてこうなったかを皆さんにも説明しておこう。

冒頭でも触れたが、俺達がやらされた研究は『俺と明久を繋げているライン』を調べるものだった。

で、フラグ的な流れで不慮な事故発生。

その際、どうやら観測用の機材が間違えてラインになんか変な介入をしてしまったらしい。

マサキのように肉体の一体化にはならず済んだ俺たちだが、その代わり。

体が替わってしまった！！（少年探偵風）

…神と学園長は死ねばいいと思うんだ。

「…はあ…」

「…大変だったのじゃな、あき…ユキト」

「全くだ」

あ、なんか名前呼ぶのが面倒そうだな。少し申し訳ない気分になる。俺も被害者だけ。

「それじゃ、こっちの召喚獣のほうか明久ってことになるんだな」
「うん、そうなるね」

「…！（サッ）」
「え、どうしたのムツツリーニカメラなんて出して…はっ！？ひよ
っとして、この姿はスカート除き放題…！？」

やめる。俺の顔でそれをやるのはマジやめる。

「しかし…まさか中身だけ入れ替わるとはな？」

「…心配」

「もちろん、元には戻れるのじゃろっな？」

「ああ、それは問題ない。昨日からこんな感じだが、二日か三日ぐ
らいで戻れるらしい」

それがせめてもの救いだな…これで戻れなくなったら色々大変なこ
とになっただろう。本編とか。

「…だから、瑞希達のこと苗字で読んでたの？」

「あ、そういえばあの二人はどうしたの？なんか急にでていったけど」

「……お前は黙ってる」「」「」

「シンクロ!？」

ああ、どうやら変な勘違いさせたっぽいな…まあ、日頃の自己嫌悪が、一気に出てきたとも取れるが。

「あ、でも誤解なんだよね？なら早く追いかけて誤解を解きに行こうよ」

根はお人よしな明久がそんなことを言い出す。いや、まあ確かにいつもの俺ならそれに同意するんだが。

「いや、待て明久」

「?どうしたの？」

今回は、それをできない理由があるのだ。

「明久。今俺とお前は体が入れ替わっているわけだ」

「？そうだね」

「で、そうなるとフィードバックの設定も逆になってるんだよ」

普段なら俺（召喚獣）のダメージが明久（主）へ向かうフィードバックだが、今はその役割が逆転しているわけである。

つまり、

俺たちの入れ替わりを話す

召喚獣が明久だと姫路達が認識する

明久が何かやらかす

折檻

俺にもダメージ！

「つまり、俺達は二人共死ぬことになるんだよ!!」
「……な、なんだってー!?!」「……」

朝から憂鬱だった理由はこれである。だってさあ…俺、完全にとばつちりであの世行きだぜ？

それに、残念ながら俺はリレイズを転生で既に使っちゃってるので地獄に逝ったら二度と帰ってこれない。

「わかるか明久。お前の肉体も死ぬ!」

「!!!」

「つまり…俺たちは入れ替わってることを悟らせず、なおかつあいつらを怒らせないように過ごさなきゃならないんだよ!!」

「そ、そんな…!?!」

学園長のポケのせいで、何故か生死の境界線上に立たされてしまった俺と明久。

ちくしょう、だが負けない!

なんとしても生き延びてやるぞ、俺は…!!

「学校休めよ」

それが出来たら物語にならねーんだよバカ!!

今日はアイツが召喚獣（前編）（後書き）

本編よりめっちゃ書きやすいですね。

しかしおしょうゆ、番外編の割合がたいへん多いです。
…本編も進めなきゃなあ。まあ、やってることはバカなこと、とい
う一言で共通しているんですが。

しかし、やりたいこと多くて二分割になってしまいました。
明日は…更新できそうにないですね。

今後、更新が不定期になったらリアルが大変なことになっておりま
す。お察しく下さい。

やること多すぎだー！！

今日はアイツが召喚獣（後編）（前書き）

遅れてすみません。

うーん、入れ替わりネタをつまく活かせなかった気がします。

あ、ひっそりと前編を加筆しました。

今日はアイツが召喚獣（後編）

やあみんな、僕は吉井明久！

…すまん、十三字でギブアップだ。

そういうわけで、いつも通りこの作品は俺こと柊ユキトの視点からお送りする。

さて、改めて状況を説明すると…不慮の事故により明久と俺の意識つまり『魂』とでも言うべきものが入れ替わってしまった。

この状況はフィードバックの関係も逆転しているので、姫路達に折檻されると（とばっちりにより俺の）命が超危ない！

そういうわけで、今は姫路達に入れ替わりがバレるわけにはいかないのだ。

いかないのだが…

「うっうっ……ユキトくん……明久くんがあ……」
「ひっく……ど、どっしよっ……ユキトお……！」
「……（ピクピク）」
「やめろお前ら！あいつら息してねえぞ！？」

現在、バレてないのに死にそうである。

朝のあのやりとりの後にいつも通りに授業は始まり（姫路達は一時
間目の終わりに戻ってきた）、それを適当に寝ているフリして俺は
やり過ごした。

なにせ、俺の外見は今『あの』明久だ。マジメに授業なんて受けた
ら即座に怪しまれるからな。

スネークには既に話を通してあるので、その辺はうまく合わせてく
れたようだ。まあでも、

「吉井は後できっちり補習をしてやる」
「うげやあああああああ……！」

とのこと。生徒のためを思っているいい教師だなー。明久の苦悩の叫びなど聞こえないぜ。

さて、なんで死にかけているかの話に戻ろう。

どうやら朝のことが相当ショックだったらしく、昼休みになった途端に俺（ただし今の中身は明久）に抱きついて恋する乙女っぽく泣き始めた二人。

うん、抱きついて泣いてるってことは、明久はあの胸に頭を突っ込むってことだ。

・・・当然呼吸困難になるよな。

しかも、いつもの姫路巨乳だけでも手に終えないのに、今回は更に

反対側から島田まで抱きついていて明久が脱出できそうにない。

そして俺もフィードバックで大ダメージ。…なんつーか、いつもと変わらねえよこの展開。また窒息か。

しかし明久はとっくに意識を手放してるのにやけに冷静だな、俺。…窒息に慣れすぎているのが嫌すぎる。

「…百合っ…!!」(ブシャアアアア)」

あ、さらに一人死んだ。抱きついてるからってその解釈はどうなんだろう。

まあ予定調和みたいなものか。ふふ…ムツツリーニ、俺もこの現実逃避を終えたらそっちに…逝く…ぜ…

そんな風に、俺が最近は見慣れてしまった青空の下のお花畑に向かおうとするよ、

「ええーい！やめるのじゃお主ら！ー！」

ばっ！

「「あっ」「」

そんな声と共に、顔に感じていた圧迫感が消え去った。

ぶはあっ！た、助かったのか…！…この感想も何回目だよ。鬱になるぞちくしょう…

とにかく、すーはー、と乱れた呼吸を整える。
どうやら、俺が死を覚悟した瞬間に秀吉が明久を救出してくれたようだな。助かった。

…しかし、女子の胸元に平然と手を突っ込むあたり、秀吉ももう男として駄目じゃね？と思わなくもない。今は助けられた立場だから口には出さないけど。

「き、木下！アキだけじゃなくウチらの心の癒しまで奪うの！？」
「木下君…！そ、それだけは…！！」
「うるさいのじゃー！とにかく、明久にこんなことをさせるわけにはいかないのじゃっ！！」

そう言いながら明久をぎゅつと抱きしめる秀吉。あれは無意識の行動なんだろうなあ。…明久が心底幸せそうだ。

というか、いつから俺はお前らの癒しの代名詞になったんだ。そんな称号いりません。返品します。

しかし、これ以上ここにいと色々ボロが出そうだ。ロクに喋ってもいないのになんなんだこの危険度は。

明日になれば元に戻るだろうし、島田達には日頃の反省をしっかりとしておいてもらおう。

え？明久のフリして一日過ごさないのかって？

できるわけないだろ、エルード無敵なしでMGS2エクストリームの戦闘機戦に挑むようなもんだ。

そついうわけだからさっさと教室を脱出することにする。

「秀吉。ちょっと保健室行ってくるからあき…ユキトをこっちに」

「ぬ？っ、うむ…」

手早く明久の回収も完了。姫路達の視線を感じるがスルーだ。血にまみれて鍛えられた俺のスルースキルをなめないでもらいたい。

そんな俺の行動に対し、秀吉は自分の手をじっと見ながら、ぼつりと一言呟いた。

「…ワシはなぜ残念に思っておるのじゃ…？」

知りません。

「あー、神経使ったな…」

「本当だよ…。ユキトがあんまり喋るなって言っから黙ってたけど、案外ストレスがたまるんだね」

「死ぬのと疲れるの、どっちがいいんだ？」

「最悪の二択！！」

「…アンタらの学校生活はどうなってるんだい」

あんたの外見もどうなってるんだ。

さて、なんでここに妖怪がいるかと言つと、『保健室』と壁には言つたものの、実際に来たのは学長室だからだ。

なぜ保健室ではないかと言つと、姫路のことを警戒したからだ。ないとは思つが、最悪の場合

『これを食べて元気出してくださいねっ！』

などと殺人料理を携えてお見舞いに来る可能性もあるからな。

そもそも姫路達から逃れるために教室を出たんだ、この動きは当然とも言える。

「まったく…明日には本当に戻るんだろうな？」

「ああ、それは確かだね。教頭が喜びながら研究室に飛び込んでいったから」

「あいつ死ぬんじゃない？マジで」

この前の学園祭の時も徹夜してなかったか。

…まあ、深く考えるのはよそう。俺としても、実はこの事故は悪いことばかりではなかったりするのである。

なにせこの体、

「失礼します、学園長…ああユキト君。出前が届きましたよ」
「よっしや！うどん来た！！」

今日はメシが食えるのだ！！

いやー、死んでから一年ぶりぐらいのメシである。やっぱり美味しいものを食うってというのは気分がいいよ。

「っーわけで早速、いただきまーす」

ずるずるずるずるー。

うーむ、今回の詫びとして学園長に無駄に高いうどんを注文させてみたが、やっぱり高いものは美味しいな。

たまにはこういうものを明久にも食わせるべきかもしれないな。あ

いつたまにメシそつちのけで漫画買ってきたりするし。

食えない奴の気持ちを考える！

それを学べたという点では今回の入れ替わりにも収穫があったな。
まあ、流石に明久と入れ替わるリスクには釣り合わないが。

一回学園長もアレ（窒息死）を経験すりゃいいと思う。俺たちの気持ちをもっと理解してくれるはずさ。

「…なんか、僕の体なのにユキトだって一発でわかるね。不思議なことだ」

「知性とかの関係かね」

「そうですね！ユキトはすごく頭いいですからね！僕は普通だけども！僕はッ！普通だけどもッ！…」

「まだ何も言っていないよ吉井君…」

…お前ら、人が感慨にふけってるのをブチ壊すなよ。

というわけで放課後。時間の流れが早い気がするが気のせいだ。

あの後、帰ってきてから体調が悪いフリをしてやり過ごしてきたからな…緊張していたが、どうやら今日は平和に終わったようだ。

782

「（明久、さっさと帰るぞ）」

「（ふあああ…あ、もう放課後？）」

静かだと思っていたら本当に寝てたぞコイツ。こいつの心臓は一体何でできているんだろうか。

とにかく、これ以上は非常に危険だ。さっさと帰ることだしよう。まだこの体でやれていないこともあるしな。

主にメシ関連で。帰りに菓子でも大量に買い込んでおこうかな？

いや、俺一人じゃ余りそうな気がする。学校ではなんもしなかったし、雄二達を呼んで遊ぶのも悪くないかもしれん。

などと考えながら帰り支度をしていると、

「あ、あの…明久君」

覚悟を決めたような顔をした姫路が話しかけてきた。

今の俺は体調不良という設定なので、（わざとらしく）腹をさすりながらそちらの方へ向き直る。

一体何の用だ姫路。料理とか抜かしたら即座に帰るぞ俺は。あんな大量破壊兵器は『もたず・つくらず・もちこませず』の三原則で挑まなきゃならないからな。

などと考えていた俺だったが、姫路の台詞はそれを大きく裏切るも

のだった。

「あ、明久君！私を叩いてください！！」

「「「「は？」「」「」

…ムギちゃん？

ってそんな版權ネタ考えてる場合じゃなかった。落ち着け俺。

な、なんだこの超展開は？急に姫路が変なことを言い出したぞ。

…いや、この書き方だといつも通りだな。言い直そう、姫路が『とても』変なことを言い出した。

「ちょ、み、瑞希！？今なんて言ったの!？」

「み、美波ちゃん…！止めないでください、私は明久君にオシオキてもらわなくちゃいけないんです…!！」

「おい姫路、そんな性癖をこんなところで暴露してどうするっ!？」

「…Mっ…!（くわっ）」

「し、正気に戻るのじゃ姫路!ぬ、ぬう…！Fクラス汚染がひどくなつておる…!！」

「…私は雄二が相手なら、がんばる」

そんな姫路に全力でツッコむ一同。そりゃね、クラスの中心で性癖を叫んだらこんなリアクションせざるを得ないだろう。

あ、秀吉。姫路はFクラスに毒されたわけじゃなくて多分元々こんな奴だから多分もう手遅れだと思っ。

あと霧島。FクラスのHRに違和感なく溶け込むのは色々どうかと思っぞ。

さて、俺としては聞き間違いだと思じたかったが、まわりのリアクションを見るにどっちら間違いだはないようである。

どうしてこうなった。

いや、あらゆる物事には確かな理由があるはずだ。ならばここは原因：つまり、なぜ姫路がこんなことを言い出したかを考えてみよう。

・姫路は現在（俺のせい）明久に嫌われたと思っ込んでいる。

・そして、彼女はその理由は『日頃の暴力』であると考えたらしい（そりゃー嫌いにもなるわ納得の理由だな）。

・しかし、彼女としてはそれは愛情表現の一部のつもりだった（八つ当たりも含んでるけど）。

・このように考えると、間違いなく自分に落ち度があった。しかし、それでも姫路は明久に嫌われたくない。故に、姫路は決断する。

その結果

「私ドMです！（要訳）」

衝撃のカミングアウトをした、と。

うん、意味わかんねえ。

…まさかとは思うが、『暴力したのは悪かったので私にお返しということで許してください』という意味の発言だったのだろうか？

言葉足りなすぎるだろアホ！！これじゃ姫路瑞希じゃなくて原田ひとみ（中の人）になってるじゃねーか！！

「…ア、ボク チョット オナカ ガ イタイ ノデ」

「恐ろしいまでの棒読みじゃな」

「そんなに今の発言が衝撃だったのね、アキ…やっぱり叩かれる方が」

「おかしい！その理屈は絶対におかしいから！！」

こら明久！俺の身体なんだから迂闊に喋るな！！どこからボロが出

るかわからないだろ！！

「あ、明久君…！わ、わかりました…それじゃ、わ、わたし明日までむぐ」

「…女の子が皆の前でそんな話しちゃダメ」

ナイス霧島。それじゃ、話が意味不明になってとぼっちりが出る前に俺も逃げ出すとしよう。

『ひ、姫路さんはMだったのか…！！』

『ムツツリーニいい！！今すぐ調査を開始しろお！！』

『な、ムツツリーニが…し、死んでる！！』

『今すぐ蘇生しろ！情報は鮮度が命なんだよ！！』

『『『『うおおおおつ！！』』』』

あのバカ共が『なんて羨ましいことを！！』みたいに矛先を向けてこないうちにな。

・・・いつから、こんな風に考えるようになっただろうか。

あの人を見ると、身体が熱くなってくる。

スレンダーな身体。ない胸。美少女と呼んで差し支えないルックスに、後ろで束ねたポニーテール。

色んなことがあって、男性というものが好きになれない私にとって、彼女…美波お姉さまは、はじめて好きになった女性^{ひと}だった。

でも。

最近、もう一人、気になる人…もとい、存在が現れた。

彼の姿を見ると、なんだか嬉しくなる。

彼の言葉を聞くと、心が暖かくなる。

彼の手が私の頭を撫でると、とても安心する。

彼に、は、裸を見られた時は…嫌悪感より先に、恥ずかしくて死んでしまいそうだった。

『男性』が嫌いで嫌いで仕方なかったはずなのに…私は、彼にだけは心を許している。

そのように思う。

けれど、この気持ちには気づかないフリをする。そうしないと、私は矛盾してしまうから。

これは、きっと…どうしようもない父親の代わりに、あの人の優しさを求めているだけなんだ。

そう、あくまで…父親のように、感じている…だけなのだ。それだけなのだ…。

「美春ううううう…！ま、待ってくれ…！父の愛をぶぐあああっ！？」

「近づかないでくださいこの豚野郎…！」

くっ…！下校したと思った瞬間これですかっ！？

せっかく、今日は早めにHRが終わったから美波お姉さまと、
・ユキトさんと一緒に帰ろうと思って待ち伏せしていたのにつ…！

「貴方のせいで全部台無しです…！」

「そんな！美春にはお付き合いなんてまだ早いんだ…！むしろお父
さんとの関係を改善してほしい…！」

「死んでもお断りですこの豚…！」

読者の皆さんに状況を解説すると、只今私は迫り来る変態の魔の手
から全速力で逃走しているところです。

ちなみに、私はあの変態のことなんてカケラも知りません。赤の他
人です。殺してやりたいくらいですっ……！！

それにしても、下校直後に現れるなんて、まさか待ち伏せされていた…！？

女の子をストーキングするなんて、最低の所業ですね！本当に、あの野郎死ねばいいんです！！（作者注：美春も待ち伏せしようとしていました）

「というか、喫茶店はどうしたんですか！？今日は定休日じゃないでしょう！！」

「な、なんと！！店のことを覚えていてくれたのかい！？娘よ！！」

「逃げるために嫌々行動パターンを調べたんです！！」

「これがツンデレかつ！！」

「プラス思考が気持ち悪い！！」

ぞわあっ！

せ、背筋に鳥肌が…！！

駄目です嫌です無理です！！ゆ、ユキトさん以外の男なんて絶対に受け入れられませんっ！！！！

「というか質問の回答になってないじゃないですか！まさか店を放置してきたんですか!？」

「美春に会ったためなら私は何でもする!！」

「キモいです!！」

「娘の言葉はなんでも受け入れる！それが父親だ!！」

「貴方の娘はもうやめてますから!！」

あらん限りの憎しみを込めて叫んでもむしろ悦ぶ変態。な、何故ですか!？相手が嫌がるなら普通諦めるでしょう!！（作者注：貴女はヒトのことを言えた義理じゃないです）

一体どういふ遺伝子からこんな変態が生まれるんですかつ!おかしいですよっ!！（作者注：貴方も立派に継いでますよそのDNA）

と、ともかく!あれに捕まるわけにはいかないっ…どうなるか想像するだけで自殺したくなりますっ!!

ガッ

「っ!？」

そんな風なやりとりをしていた私でしたが、急に何かに足を取られてバランスを崩してしまいました。

しまっ…後ろを向きながら全力疾走してたら、道の段差に引っかかって…!？」

「み、美春っ!？」

後ろでは変態が焦ったように叫んで、私のほうに手を伸ばし…

…って、さらにスピードを上げてるうっ!？転ぶ痛みより、怪我しそうな恐怖より、後ろのアレに追いつかれるのが一番恐ろしいっ
!!

「（っ！っ！い、嫌…！！誰か、誰か助けてください…っ！！）」

この絶望的な状況の中で、思わず…どうにもならないと知っ
ていても…それでも、奇跡というものを神様に祈った、

瞬間。

「…はあ。またかよ」

「（…え？）」

呆れたような声と共に、ぼふっ、と私は何かに抱きとめられ、

ダッ（後ろから何かが跳んだ音）

ドムツ（猛スピードで何かが靴に吸い込まれた音）

ゴシャアアッ！！（その何かが吹っ飛んだ音）

なんだかバイオレンスな、私にとっては恐らく好ましいであろう効
果音が聞こえてきました。

「やれやれ。受け止められてよかったよ…：やっぱ身体が大きいのは
いいことだな」

…知っている声。

その声に顔を見上げてみると、そこにいたのは…お姉さまの忌々し
い恋敵、吉井明久…

…のように見えただけで、そこには何か違和感がありました。

彼の表情はいつもの気弱なソレよりしっかりしていて、目はややツリ目になっている…ような気がします。

でも、本当はそんなところじゃなくて…私の中の一番奥のモノが、この人は吉井明久ではない、と言っていて。

それに、こんな風に抱きしめられているのに…私の心は嫌悪感ではなく、むしろドキドキしている。

こんな風に、見ているだけで私の胸を苦しくしている彼は、吉井明久ではなくて…

「…ユキトさん？」

…私が一番心を許している、彼なのではないでしょうか。

「…すごいな美春、なんでわかったんだ？」

これは驚いた。俺の中身を一発で当てたぞ。

あその後、色々どうしようもなくなった姫路を放置して下校した俺達。

その帰路の途中、コンビニで明久と雑誌の立ち読みをしていると、何やら叫びながら少女を追いかけている変態を発見したので、たつた今それを撃退したところである。

…これ前にもあったな。確か美春と始めて会った時だ。

しかし、こう頻繁に被害があるなら美春は警察に相談するべきなんじゃねーか……

「あ、あの…ユキトさん…」

などと考えていたら、腕の中の美春が消え入りそうな声で俺を呼んだ。ん？耳が真っ赤だぞ、どうし…

…あれ？腕の中？

「うおおおっ！？す、すまん！！」

「にゃっ！？だ、だだ大丈夫です！！」

のわー！！転びそうになった美春を抱きしめてたまんまだったじゃねえか俺のバカ野郎！！

しまった…現在、俺の身体は明久、つまり人間のソレと同じである。つまり、その…なんだ。女子を抱きしめてたら普通にドキドキする

状態なんだよ。

美春の耳も真っ赤である。な、なんだこのラブコメ的展開は。くそ、まだ心臓がバクバク言ってるやがる。ええい、止まりやがれ！

『って、心臓止まったら死ぬじゃねえか！』などとテンパリながらポケッツコミの両方が自己完結のひとり漫才をやっていると、

「…ぐ、ぐがが…美春…」

「「そりゃあっ！」「」

ぐしゃあっ！

「ぐぼびばっ！？」

変態が再起動しかけていたので、美春と二人で膝を奴の顔に左右からぶち込んだ。

うむ、目標の沈黙を確認。決して今日のストレスをぶつけた訳では

ない。決して。

ちなみに、膝で急所を攻撃するのは格闘技とかで『禁じ手』と呼ばれる技術です。絶対に真似しないでください。最悪死にます。

「…ふう…助かりました、ユキトさん。ありがとございます…ユキトさんですよ。」

「ああ、そうだぞ。ちょっと色々あって明久と『魂』が入れ替わってな」

「…色々あるんですね」

本当だよ、色々ありすぎるだろう。

こんなファンタジー現象を聞かされて、あっさり納得するとかどう考えてもおかしいだろ…どういうことだってばよ…

自分の人生（二回目）の数奇さにほとほと呆れ返っていると、そんな俺を見てくすくすと美春が笑い出した。

おや、そんな変な顔をしていたらどうか。…そういえば、今の俺は

明久の顔だったな。

それが影響しているとするならひょっとして…いや、やめておこう。明久が可哀想になってきた。

「ふふふ…なんだか、不思議な気持ちですね。私が知ってるユキトさんはミニサイズですから」

「あー」

よかったな明久。笑われたのはお前のせいじゃなかったぞ。流石に雄二みたいな奴はなかなか居ないようだ。

…ん？ていうか、美春は明久、というか元々男そのものが苦手だったな。そこの変態のせいだ。

「なあ美春、俺の今の外見は普通の男子だよな？大丈夫だったか、その…さつきは」

「え、ええっ!?!」

…やばい、さつきの柔らかい感触が蘇りそうだ。落ち着け俺…!目の前で顔を赤くしてる美春のことなんて考えるな…ッ!!

「い、いえその…ユキトさんは平気というか、ぬいぐるみはカウ
トしないというか…ってごめんなさい！いえ、違うんですユキトさ
んというてなんだか不思議な安心感が…！？あ、あわわわわ！？」

ぶわーっ！と早口で色々呟きながら慌てたように手をぶんぶん振り
回して混乱する美春。

な、なんか普通にかわいいぞ…ってしっかりしろ俺！！

と、なんかよくわからないままテンパリ続けていた俺たちに、

「ユキトー！お菓子買ってきたよ…って、あれ？清水さん？」
「うわあっ！？」

コンビニから戻ってきた明久が話しかけてきた。

び、ビビったぞ！だがナイスだ明久！この変な空気をなんとかしてくれたな。さすが空気を読めない男だけある！！

「うにゃあああああっ！！！」

「へ？わぎゃー！？」

「って美春！？やめろ、明久に文房具を投げるな！！俺にもフィードバックが来るから痛ってえええええ！！？」

…だが同時に、明久は不幸を呼ぶ存在でもあったのだった。

二十分後。

「いてて…それじゃ、俺は帰るから」

「す、すみませんでした…っ、つい身体が勝手に」

「その動作が染み付いてるってのもどうなんだよ」

…ようやく美春を宥めることに成功した…

おいおい…明久、気絶してるぞ。かくいう俺も体中が痛い…美春が狙ったわけじゃなく混乱して適当に文房具投げまくったいたのが幸いしたか。

「…まあいいや。それじゃ、気をつけて帰れよ？あんな変態もいるし」

「…それは気をつけます…あ、ユキトさん。ひょっとして、これからずっとその姿のままなんですか？」

「いや、今日が終われば元に戻るらしいぞ」

「そうですか…」

それを聞いてちょっと残念そうにしている美春。

これはアレか、島田への恋のライバルが減るからか？色々複雑なんだな、乙女心ってやつは。

「ま、ほどほどにしろよ。それじゃ、俺は帰ってやりたいことやるから」

そう言って、美春に背を向ける。

なんかこれ以上一緒にいると変なフラグが立ちそうだしな。フラグは回避するに限る。誰だって死にたくはないさ。

「…あつ」

「ん？どうかしたか、美春」

どこか名残惜しそうな美春に、振り返って確認する。

「…いえ、何でもありません。また明日、お会いしましょう」
「？ん、ああ。それじゃ、またな」

どころやら何でもなかったらしい。

…さ、帰るか。

家に着いたらどうしようかな？色々やりたい事はあるけれど、

とりあえず、まずは明久の介抱からだな…

彼が去った後。

そのままそこに立っていた少女が、ぽつりと呟いた。

「…ユキトさん」

「美春のこの気持ちは…自分でも、まだよくわかりませんが」

「…これを伝えるのは、吉井明久の身体じゃ、駄目な気がするんです。召喚獣の、身体でも」

「…だから、美春は…待ってますね。美春がこの気持ちを理解して…ユキトさんが、受け止めてくれると思った時には」

「この気持ちを、伝えますから」

口にする意味のない言葉。

だが彼女は、それを敢えて口にすることで、自分のココロを測り、彼への誓いを立てる。

この言葉が、彼と彼女にとって意味を持つのは…

もう少し、先の話である。

翌日。

「…明久君、女の子の匂いがします…」
「え？」

元に戻った瞬間、死の危険が訪れた明久であった。

今日はアイツが召喚獣（後編）（後書き）

いつもの二倍の分量でお送りしました。

うーむ、入れ替わりでイチャイチャするユキトと美春を書きたかったんですが、明久の身体でそんなことやったら死ぬよね？ということとでやや中途半端に。

なんだこいつら。純情すぎる。

ユキトは久し振りに女子を意識したということとでひとつ、どうでしょう。…違和感が残りますが。

そして瑞希がなぜかMっ娘になってしまいました。

ち、違うんだ…！これは原田乳ビンタひとみが悪いのであって、琥珀は関係ないんです…！

などと意味不明な供述をしております（ry

いや、瑞希ファンの皆様はごめんなさい。今度明久と瑞希がイチャイチャする話を書こうと思ひまして、その下準備をしておりますた。

瑞希には色々恥ずかしい想いをしてもらう予定でございます。お楽しみに。

・近況

やったー50万アクセス突破しましたよー

わーわー

友人「なら休むなよ」

友人はいつでも核心を突くのが天才的にうまいです。

何はともあれ、アクセスありがとうございます。作者の励みになります。

今後も忙しくなって二日更新どころか一週間ぐらいになる可能性も
否めませんが、おしよゆをよろしくお願いいたします。

さて、次回は本編を久し振りに…

バカテス新刊が出るらしいので、モチベ上げていきたいですね。頑
張ります。

第二十七話

「あっ！召喚獣さん！はじめましてですっ！..！」

「ああ、葉月…だったよな。こちらこそはじめまして…ってこちら俺を抱き上げてぬいぐるみ扱いするな」

「えへへ」

さて、えらく空白があったが本編に戻るとしよう。

色んな地獄を見たあの後。

ぐるぐる目を回して倒れてしまった美春を

『…やっぱり清水も女の子』

と言いながら霧島がDクラスへ連れて帰ってしまったため、結局俺は何故美春が何故大会に出たのか聞けず終いだっただ。

ムツツリー二も保健室送りになったし気になるな…まあ、なんか複雑な理由がありそうだしここは気にしないでおこう。

で、ムッツリーニが保健室に行く聞いて雄二が

『友人が死を目前にしているんだ。最後までいついてやるのが筋つてもんだろ』

などとホザいて一緒に保健室へ向かっていった。どう見ても霧島から離れただけです本当にありがとうございました。

…でも、保健室に向かうなんて自殺行為だと思っただけど（ヒント：ベッド）、アイツそのへんをわかっているんだろっか？

ていうかその言い方だとムッツリーニこれから死ぬみたいじゃねーか！勝手に殺すな！！

「？召喚獣さん、どうかしたんですか？なんだか疲れた顔してるです」

「…いや、いつものことだから気にしないでいいぞ」

「はわわ、いつも疲れてるんですか…じゃあ葉月、なぐさめてあげますねっ」

葉月にそう返して、こっそりため息をひとつ。

どうやら俺は考え事をしている時、えらく疲れた顔をしているらしい。悲しい事実が判明してしまったな…

そんな俺を、葉月が俺をなでなでして慰めてくれている…が、むしろ本人が俺を撫でただけだな多分。

葉月の歳ではあんまりいない、自分より小さい相手だからか？だからぬいぐるみ扱いやめろっちゅーに。俺はもう18だ。

「あはは、ユキトは大人気だね」

「まあ、女の子はかわいいモノが大好きなのよ」

「ふふふ、二人共可愛いですね」

「…お前ら…」

明久、島田、姫路。日頃あんなだけ助けているのに俺を見捨てやがってエ…ユキトは犠牲にされたのだ…

ひっそりとこの恨みは後で絶対晴らしてやる、と誓った俺であった。あ、これフラグな。覚えておいて。

さて、今俺達はAクラスを出て、Fクラスに戻り仕事の手伝いをするとところである。

『俺達』というのは、俺、明久、島田、姫路、それと葉月の四人と一体だ。

ちなみに、ムッツリー二と雄二は保健室送りで、秀吉は仕事（あいつは今回ずっと忙しいらしい。後で何かお礼しよう）。玲さんは今、善意でFクラスを手伝ってくれているらしい。

…玲さん、まさか料理とかしてねえだろうな…

ま、まあとにかく。そんなわけでFクラスへ移動する間、俺は葉月のお守りみたいな真似をしていたわけだ。

…これはお守りだ！俺の方が愛玩動物にされてるわけじゃねーぞ！
だ、だからお守りだっつーに！！

「いらつしゃいませ…あら、アキくん、ユキト君、それに皆さん。
お帰りなさい」

で、それが今やっと（と言うほど長くないが）終わった。ようやく、俺達はFクラスに到着したのである。

「ああ、玲さん。悪いな、手伝ってもらって」

「ありがとう姉さん。助かったよ」

「いいえ、大丈夫ですよ。一位のクラスには焼肉などというお話があるのでしょうか？この年頃なら、たくさん食べないといけませんからね」

どうやら客引きをしていたらしい玲さんに迎えられ、多少安心した俺。よかった…！彼女が厨房にいらなくて本当によかった…！！

「本当は私が作れればよかったのですが…その、失敗してしまいまして…」

…よくなかった…!!

どつやら厨房には既に、喰ったら最後救急を呼ぶしかないレベルの兵器が用意されているようである。

誰も食ってないよね!? く、食ってた奴がいたら、その…生きるお
ー!!

そんな風に俺がぐああー、と頭を抱えて唸っていると、

「わああ…す、すつごく美人なお姉さんです…!!」

俺を抱えた葉月が、玲さんを見て感嘆の声を漏らしていた。

現在、玲さんは客引きのため、中華喫茶のイメージにマッチするチヤイナドレスを着ている。

元々玲さんはスタイル抜群、いわゆる『出ているところは出ていて引っ込むところも引っ込んでいる』女性だから、チャイナドレスを着こなすなど造作もないだろう。

おお、よかった。姫路と島田が抜けたせいで客が減ってたら少し面倒だったからな。その分のフォーローにはなってもらえたようだ。

「…ウエスト…」

「…バスト…」

そんな玲さんを見て、あの二人はお通夜状態である。

本当は二人共明久にわりと意識されてるんだがな。まあ、人の恋路はなんとやら、ということでも口を出すのは避けよう。

恋路と言えば、雄二はどうなってるんだ？あんまり霧島が張り切っても近くにいるムッツリーニへの追い打ちになっちゃうだろうし、メールでも入れとくか？

そんなことを考えながら iPhone を取り出すと……おや。既に雄二からメールが届いていたな。

f r o n : 坂本雄二

件名 : なし

本文 :

たすてけ

「……………」
「ユキト……………」

どうやら明久にも同じメールが出ていたらしい。明久、漢泣き。

まわりの女性陣が何やら泣き出した明久に慌てているが、うん……まあ……仕方ないね。この涙は。

まあ、俺としてはこのネタは既に原作で見ているので、たいして動

揺は…ごめん嘘。無理、これ無理。ちょっと油断すると俺まで泣き
そうだよこのメール…

しかし、まだ間に合うかもしれない。ここは俺にできる限り、雄二
が傷つかない選択を選ぶべきだッ…!!

宛先：坂本雄二

件名：霧島へ

本文：

雄二を落としたいなら唇を奪ってみろ

…俺にできるのはここまでだ。雄二、生きる。生きていれば…未来
が、待って…いるんだっ…!!

『や、やめる翔子おっ!!』
『…吉井に浮気するなんて、雄二は悪い子』
『なんでメール打っただけでそうなる!あと内容は明らかに救命だ
るバカ!!』
『…私のほうが成績は良い』
『小学生か!!』
『…そう、小学生から雄二のことが好き』
『関係ないよな!その話題今の話と全然関係ないよな!!』
『…とにかく、雄二にはお仕置きをする…』
『ち、ちくしょう!理不尽にも程がある…ッ!!』

ピロリン

『ん?何だ今の音は』
『…また、メールが来た』
『へえ、そうか…ってこら、俺のかよ!?勝手にヒトのメール見ん
な翔子!!』
『…(ゴキリ)』
『ぬぐおあーっ!?!?か、関節がッ!!』
『…ユキトからまでメールが来るなんて…やっぱり、雄二を許すわ
けにはいかない…』
『…なんで件名だけで判断すんだお前は!!中身を見てからそいいう
セリフを吐け!あのマトモ代表がんなことするわけねーだろ!!』
『…じゃあ、何が書いて…っっっ!?!?』
『…ん?どうした翔子』
『…く、くくくくち…!?!?』
『おい、どうした翔子。顔が赤い…って待て、俺の上のにしかかる
な当たってんぞ!?!?』

『…ユキト…私、がんばる』

『ちよ、おま…やめろ、何で俺に顔を近づけ…の、のわああああっ
!??おいコラ、何が書いてあったんだああああああっ!!
』?』

…あいつはどうなったんだろうな…?願わくば、また再会できるこ
とを…俺は祈ってるよ、雄一。

さて、俺のささやかな祈りの後、『いい加減手伝ってくれ』と秀吉
がやって来たので、俺達はようやくFクラスの中に入ることになっ

た。

「やれやれ…やっとワシも少しは楽になるかのう」

「悪いな秀吉。今度何か奢るぞ」

「ふむ…では、姉上の折檻を止める権利でも欲しいのう」

「…じゃあ、お前に落ち度がなかった時は止めてやるよ」

「…ワシはそこまで姉上に迷惑をかけておるのかのう…？」

いや、うん…魔法少女の疑いはとてつもなく迷惑だと思っよ。まあ、アレはお前は悪くないんだけど。

そんなこんなで、皆でお仕事である。

明久と島田は厨房、姫路が接客。んで、俺は玲さんと一緒に呼び込みである。

まあ、当然この配置は一部女子がモメたが、姫路を厨房に入れたら学校が閉鎖される、という俺の説得に納得してくれたので問題はないだろう。

姫路が涙目？知るか。命より重いものなんてこの世界にはない。

そして残った葉月はというと、いつの間にか置いてあったチャイナドレスで俺のささやかなお手伝いをするようになった。

…ムツツリーニ、まさかここまで読み切ってあらかじめ用意していたのか？

その知恵を勉強に少しはまわしたらどうなんだろう。…いや、今更か。保険体育はトップでしたねそういえば。

そんなこんなでしばらく忙しく過ごしていた俺達だが、ここでの事件が発生した。

「ぎゃはははは！なにこの学校、マジで変なのがいやがる…！」

「召喚獣だっけ？うわ、キモっ！オタクかつっの」

「「ぎゃはははははははは…！」」

…なんだあの不良二人は。明らかにキモいのは向こうのほうだ。

しかもこいつら、堂々と喫煙してやがるぞ。校内で。どこまでもクズな奴ってのはいるもんだな。殺意が湧く。

「おい、アレ見ろよアレ！なんかキモいのが接客してやがるぜ」

「むしろ隣の美人がツボだろ？ナンパしてみよーぜ」

「俺はむしろガキを泣かしてやりてえなあ！！」

そんなことをホゼきながらこっちに近寄って来る不良Aと不良B。

そして彼等は俺のほうに屈んで、

「おい、なんか言ってるよ召喚獣とやらア！」

「ぶっ！バカじゃねーのお前！そんなのにわざわざ話しかけるなんて」

「っ！だーはっはっはっはっ！！」

などと全力で罵倒してきた。

…しかも、こっちの方に煙草を押し付けようと近づけてきている。
うん、こいつ間違いない俺に喧嘩売ってるな。

「よし、死ね」
「は？」

ボキボキゴキッ

そついうわけで、不良Aの煙草を持っている指を全部へし折ってみました。あ、お忘れかもしれんが俺、ゴリラ並の握力なんでね。

いきなり攻撃された不良Aは折られた指を信じられないような目でしげしげと眺め、不良Bはその光景がそもそも信じられないようである。

うん、このクズ共の次のアクションは簡単に予測できるな。

というわけで、俺は普段から持ち歩いているポケットティッシュを取り出し、

「ゆ、指がッ！っぎゃあああもっ！っ」
「はいそこうるさいよ」

ドゴオッ！！

全力で不良Aの顔に『蹴り込んで』みた。

吹っ飛んで壁に打ち付けられる不良A。おお、感触からして歯もイッたんじゃないかなこれ？いい気味だ。

「…さて、と。玲さん、ちょっと伝言を頼んでいいかな？あ、葉月は店の中に入ってなさい。怖かったろ？ごめんな」
「わかりました」
「す、凄いです召喚獣さん！あ、ありがとうございますっ！！」

玲さんにとある伝言を伝えて、女子二人を教室の中に入れる。まあ、こんな面倒臭い場面をわざわざ彼女達に見せることもないだろう。

「て、てめえっ！い、いきなり何しやがる！？」

「え？ああ、すいませんね。ウチ禁煙なんで」

「そういうレベルの話じゃねえだろ今の！ゆ、指が全部あらぬ方向に曲がってたじゃねーか！！」

「何言ってるの？そっちが煙草の火を押し付けようとしたのが先だろ。あと、ウチの教師はそんなもんじゃ済まさないよ。運がよかつたな」

「待て！今、絶対に聞き逃さないことを聞いたぞっ！？」

ギャーギャー喚く不良B。まったく、面倒な奴だな。敵わないのは今のやりとりで分かったんだろうし、さっさとそのゴミを引きずって帰れよ。

「ふ、ふざけやがって！てめえ警察呼ぶぞ！？あ、明らかに今は暴行罪だからな！！」

「へえ。未成年の喫煙に、婦女暴行未遂に営業妨害、それと汚物陳列罪までやってる奴がそれを言うのか」

「ぐっ…！そ、それは…って待て！最後のは明らかにおかしいだろ！汚物なんてどこにも」

「喋んな。通報したくなるから」

「俺の言葉を汚物扱いしてんのかコラ!？」

「うるさい、ギャーギャー喚くな。第一、暴行罪?何のことだ。どこの世界に火がついてる煙草ごと指をへし折ったりティッシュを口の中に入れながら蹴り飛ばせる召喚獣がいるんだ」

「なっ…!?!?て、てめえ!とぼける気か!?!」

「やれやれ、いつもは犯罪をしてるくせにいざとなったら頼ろうとするとは…どうしようもない三下だな。」

「こういうタイプが一番嫌いなんだよ俺。決してストレス解消のためにやってるわけじゃないぞ?」

「ハッ!バカが!そもそも、お前のやったことは今、この廊下に出てた連中が見てたじゃねえか!?!」

「へー。じゃあ通行人の皆さん、ちょっとお聞きしましょうか。ニコチン中毒のクズ不良と、客引きをした召喚獣。悪いのはどっち?」

「クズだな」「クズ」

「せめて不良と呼べよ!?!」

はっはっは。残念、貴様の味方など誰もいないさ。いたとしてもそこに転がって気絶している奴だけだ。

さて、もう既に俺の論破は完了したな。あとはボコってゴミ捨て場に放置してもいいんだが、

…せっかくだ。ちょっとした兵器処分を手伝ってもらおう。

「こ、ここうなったらダメエら…！全員ボコって、こいつの敵を…！」

「まあまあ、落ち着いてくださいお客さま」

ヒートアップしていた不良Bの肩をポン、と誰かが叩く。

不良が振り返ると、そこには中々の美少女が微笑を浮かべながら団子を持っていた。

「うちの召喚獣が失礼しました。お詫びとっては何ですが、こちらのお団子をどうぞ。サービスいたします」

「お…おう！気がきくじゃねえか姉ちゃん！！ハハッ、ざまあみろ！やっぱり、俺が正しいと知ってる女もいるじゃねえか！！」

そう言いながら団子を奪い取り、口の中に放り込む不良B。

…くくく

はーはっはっはっは！！このクズが！てめえは何もわかってねえんだよ！！

さて、そろそろここで読者さんにはネタばらしをしておこう。

そもそもそこにいる美少女は姫路でも島田でも、ましてや秀吉、葉月、玲さんでもない。

『女装した明久』なのである。

つまり、『女』ではない。不良Bの発言は致命的に間違っているのだ。俺が先程玲さんに頼んだ伝言はこれだったのだ。

フハハハ！何勘違いしているんだこのクズめ！ざまあみる！！

…そして、もう一つ。

今食ったのはただの団子ではない…！

勘がいい読者さんならもう読めているだろう。そう、あれは…！

「んぐ？なんだコレ、ネバナバとガチガチが混ざり合って、口全体から食道のほうにぶむがゴブハッ！！！！？」

…玲さんの失敗作である、殺人料理なんだよ…！！

こうして、悪は滅び、Fクラスは危険物の処理を完了させたのであった。

…このことが、後々変なゴタゴタを引き起こすとは知らずに。

「ていうか、何で僕を女装させる必要があったのさ!!」
「いや、それは…なんというか、…『原作』が悪いんだよ!」
「『原作』って何!？」

第二十七話（後書き）

遅れました。すみません…

原作が売ってたので購入したんですが、なんとなくか…僕の立てたプロットになかった展開ばかりだったんですよ。井上先生は僕の遙か先を進んでいらっしやる…!!

そんなわけで、本編でした。無意味に不良をボコった回ですな。これが後々響いてくるのですが…続きをお楽しみに。

推敲もまだですが、とりあえず寝ます。明日まで推敲はお待ちください…

全話の見直しもいつかやらないとなあ…大変だ。

第二十八話（前書き）

なんか最近三日に一回のペースになってますね。
うーむ、戻さないといけないなあ…

第二十八話

とまあ、そんなちよつとした事件を終わらせ、その後も客の対処に追われること数十分。

なにやら目の色を変えた女子（Dクラスの玉野だったか？）が

『アキちゃ…あの店員さんに会わせてくださいっ！』

と凄じ剣幕でやってきたり、

『アキちゃ…吉井くんはどこにいるんだい！？』

と久保が突撃してきたせいで明久が女装姿のまま接客するハメになったりという出来事もあったが、そこはまあ明久には売上げのため頑張ってもらった。

あいつひよつとして俺が知らない間に女装させられてたんだろうか。アキちゃんて…

というか、今回のことでアイツが『文月学園女装ランキング』で一位を取ることが決まってしまったような気がする。『原作』通りに。

…なんかムカついたから不良をボコってみたけど、明久に対して申し訳なくなってきたぞ…

…ま、まあその問題は後回しにするとしよう。

今の俺には、もっと優先するべき事柄があるからな…色々世間の評価が決まってしまういそうな程重要な。

そう、俺が優先するべきことは…

「それでは、『召喚大会』第二戦を始めますっ！！」
「「「うおおーっ！！」」「「「

…何故か再び実況席にいる自分についてだ…ッ！！

「コラコラ待て明久！？さも当然のように開幕宣言してんじゃねーよ！ー！」

「え？どうしたのさユキト」

「どうしたもこうしたもねーよ！前回の実況はあくまで人が足りなかったからやっただけであって、今回も俺たちがやる必要はないだろ！」

純粹に疑問に思ってるらしい明久に早口で説明する。なんで俺がこんなとこにいなきゃいけないんだ…！！

前回唐突に訪れたあの無茶振りはおくまで、『高橋女史が仕事で忙しかったから』代理を引き受けただけなのである（相手側の建前と取るにしても、だ）。

しかし、今回は既に高橋女史は仕事を終わらせているはずなのである。

それなら本来の役職である高橋女史が出ればそれで終わりだ。俺達がこんな所に座って見世物にされる必要性はどこにもないはずだろ

…なのに何故、次の部まで引き受けたことになっているんだ…！

と、それについて明久に尋ねたところ

「え？でも学園長が『優勝した時の商品に野菜もつけてやるっ』って言うから」

もの見事に買収されていた。

「このバカ勝手に何やってんだ！？そんな野菜ぐらい俺が買ってやるわッ！！」

「え、何言ってるの？ユキトにそこまで迷惑はかけられないよ。いつもお世話になってるし」

「現在進行形で迷惑をかけられてるじゃねーか！！」

駄目だ、こいつ人前で恥をかくという感覚が麻痺してるぞ。

本当なら同情してやる所なんだろうが、巻き込まれる立場から言わせてもらうと『ふざけんなボケ』という感想しか出てこない。

「つーか優勝した『時』ってことは優勝できなかったら何も渡さない気かよ！学園長が生徒に対して堂々と詐欺やってんじゃねーぞ！」

「…ハッ！？ひ、ひよっとして…僕は、騙されてたのかあああああああっ！！？」

「もっお前黙ってる！！」

『お母さん、あのおにいちゃんおもしろいねー』

『ユキトくん、かわいいっ！！』

『二人共いいぞ、もっつとやれー！！』

そんな俺達、観客達に大ウケ。わはははー、と腹を抱えて笑っている奴もいる始末だ。

…畜生…！知らないうちに恥をかくハメになっている…！！

学園長、貴様だけは絶対に許さない。絶対にだ。後でオトシマエは付けさせてもらおう…！！

『吉井君…赤くなってる顔もなんて愛らしいんだ…！！』

『…ほわあ…ユキトさん、かわ…はっ！？ち、ちがいます美春はお姉さまのことを…っ！？』

『…写真の撮影対象を増やすべきかもしれない』

ん？選手控え席のほうも何やら騒がしいな。よく聞こえないが…まあいいか、後でムツツリー二にでも確認しておこう。

それよりも、今はこの状況をなんとかしないといけないんだ。まずはあのババアを引きずり出すところからだ！

「コラ妖怪！てめえ表出るや！！ふざけた報いを今すぐ受けさせてやる！！」

「駄目だよユキト！罪もないお客さんにあんなグロ画像見せちゃ！！」

「…おっと、そうだったな。まあ確かにあんな姿を見たくて見る奴なんていないだろうし」

「そうそう、だからこういう時は…ババアあつ！！今から殴りに行くから首を洗って待ってやがれえっ！！」

「よし、手袋を用意しておけよ明久！奴に素手で触れるのは危険だ！！」

「もちろんだよユキト！！」

気合を入れて、勢い良く席を立つ。実況？大会？知るか！観客も『いいぞもつとやれ』とか言ってるし、まずは妖怪退治からだ！！！

『アンタら人をなんだと思ってるんだい！？』

人？何言ってるんだ、あんたは妖怪だろ。貴様のような存在は今から消去してやるから、そこにいろよクソババア…！！

ババア相手に魔王式OHANASHI（肉体言語含む）を併せて口論すること十数分。

結論から言ってしまうえば、結局俺の方が折れ、実況をやることになってしまった。

『新野さんがスネークに連れられまだ戻ってこない』

『俺達は前回の実況で既に大人気な存在になっており、今更他の人には変えられない』

という向こうの主張を否定することができなかつたからだ。…ババア相手の被害ならともかく、ここに来たお客さんに迷惑をかけるわけにはいかないからな。

観客を盾に交渉するとか、本当にゴミクズなババアだなこいつ。

「さんざん攻撃しておきながらそれかい!？」

なあに〜?聞こえんなあ〜

で、結局俺はささやかな(笑)反撃として、『今後召喚システムを調整する際はできるだけ俺に利になるようにする』という条件を取り付けた。

これは非常に大きいな。なにせこの学園の核である試験召喚機能だ。俺の存在そのものにも関連しているし。

ゲーム的に言えば『ゲーセン全部料金無料にできる』という位に環境を有利に変化させることができるようになったわけである。

ひょっとすると今後の俺の武器とかにも影響が出るかもしれないな。今の『武装顕現』では剣しか使えないが、ソレ以外も可能になるかも。

しかし、学園長がこんな条件を認めたとすることは、それを含めても学園にとっての利益を出せるということだろうか？

…つまり俺、結果的にはババアに金ヅルにされているのだろうか。なにこれこわい。

ちなみに、前回の実況に関しても別々に報酬を支払うことになっているので、たとえクラス優勝ができなくてもその分でほぼ焼肉と温泉旅行が確定した。

まあ、貸しを作っておくことは悪いことじゃないし、クラス優勝も勿論目指すぞ。

さっき店を手伝ってわかったけど、ここで行った宣伝の効果も割とバカにできないようだっただからな。

そんなわけで、

「…開催側の都合で遅れて申し訳ない。改めて、今から召喚大会を再開する」

渋々ながら、実況開始だ。

『がんばれ、召喚獣！』

『アキくん、ユキトくん、がんばってくださいね』

『きた！大会きた！これで勝つる！！』

『恥知らずな学園長がいた…汚いなさすが妖怪きたない』

『お兄ちゃん達、頑張ってくださいですっ！』

そんな俺にかけられる声援。む、むっ…明らかに身内発言あるな。やめてくれ恥ずかしいから…

あと明らかに観客の中にブロンティストがいるよな。
？

作者はこうしてネタわかりにくいを入れたがる…いやらしい…

「それじゃ、第一試合！今大会で最も成績に差があるだろう、Fクラス坂本とAクラス久保のコンビだ！」

「まずは二人の選手の入場です！拍手をお願いしまーす！！」

ネタ発言もそこそこに、明久と二人カンペを見ながら大会の進行を行う。

…そういえば、雄二の点数が一試合目の時かなり低かったな。確か1500点前後だったか？

あいつの実力からすれば、本来もっと上の点数を取れるはず。

…なるほど。つまり、それも奴の作戦なんだろうな。

相手を油断させておいて、いざ本番という時に動揺を誘いその隙を突く。単純ながら有効な作戦だ（『原作』でもやってたなそういえば）。

これは恐らく霧島…正確には、その相方の佐藤さん対策の一手だろう。

学年首位の霧島に勝つには学年トップクラスの久保でもまだ足りないだろうしな。佐藤さんを即座に片付けて久保と雄二の二人で攻め

込む作戦だろう。

だから緒戦は久保に任せていたのか。アイツも必死だねえ。

「…すまない。少しいいだろうか」

と考えていると、誰かが俺たちに声をかけてきた。

ん、この声は…

「…久保？」

「あれ？どうかしたの、久保君。…そういえば雄二はどこ行ったの？」

「実はそのことについて聞ききたのだよ…実は、坂本君がまだ来ていないようなのだが。君達、何か聞いていないかい？」

「…え？」

雄二が来てない？そんな馬鹿な。

奴にとってこの大会は霧島との色々なアレが賭かっている大事なものである。

だというのに、アイツが来ていないなんてことはどついつことなのだろうか…。

「そっぴや、お前の対戦相手も居ないな。皆揃って遅刻か？」

「雄二が何かしてるとか？」

「いや、今回の相手は確かEクラスの連中だから正攻法で来るはずなんだが」

「…相手に何か妨害をされたという可能性はないのかい？」

「無いな。むしろその場合はお前から狙われる。雄二はむしろ足手纏いと見られてるし、それに…」

「それに？」

「「あんなゴリラ相手にしたいと思う？」」

「…君達は本当に彼の友人なのかい？」

友人か…。『喧嘩するほど仲が良い』という理屈でいくなら俺達は殺し合うほど固い友情で結ばれてるな。

そんな風に三人で友情というものの定義について考えていると、

「…お話中すみませんが、ユキト君。業務連絡です」

何やら携帯を片手にエリート天然教師がこちらに向かってきた。

「ん？高橋女史、何かあったのか」

「ええ…坂本君と久保君の相手の二人ですが、どうやら棄権するようです」

「おや。なら、雄二がいなくても勝ち扱いでいいかな」

彼女からもたらされたのは意外な連絡だった。

なんと。棄権か…そういや、『原作』でもそんなことあったりしたな。確か、原因は…

「何でも、腹痛を起こしたそうですね。食べた物が悪かったのですよ
うか…」

おや、内容まで同じか。やっぱり原作に引きずられてるのかな。

「というか、周囲がやめるよう言ったのに『ここで逃したら…俺は美人との縁が切れるんだ…ッ！』などと意味不明なことを言いながらお団子を口に」

「やめろ！ソレ以上は色々マズイからマジでやめろッ！！」

どう見ても玲さんの料理じゃねーか！なんで！？アレは不良に食わせて終わりだと思ってたのにまだ残ってたのかよ！！

…そしてその恐ろしさをわかっていながら喰った名前も知らぬ対戦者。…なんというか…無謀だけど、俺そんな無謀嫌いじゃないぜ。

…生きる。

ていうか高橋女史。明久のことスルーして俺にだけ言うあたりアンタ明久のことを内心バカ扱い…いや、なんでもない。やめておこう。

こうして、不戦勝で雄二達は勝利し、一回戦第二試合へ進むのだった。

…しかし雄二、ほんとどこに行ったんだろっな？

…あ。

『たすてけ』の件忘れてた。

第二十八話（後書き）

どうも、リリカル一番くじ引いたらA賞当てた琥珀です。
なのは可愛い。フィギュアに目覚めそうですね。

というわけで、28話をお送りいたしました。
果たして雄二の貞操やいかに。…や、この作品は全年齢向けなので
そんな羨ましいことにはなりませんけどね。

そうそう、ユニークアクセスが5万人突破、評価ポイントももうす
ぐ1400いきそうです。
皆様ありがとございます。なんとバカテス作品では三位になれま
した。

感想ももうすぐ100件。皆！オラに感想を分けてくれ！
おしよゆはあらゆる感想をお待ちしております。リクエストなど
も募集中。

しかし、僕としてはこの後（学園祭直後）に瑞希の好感度を上げま
くろうとしてたんですが…原作で大変なことになってしまいました。
やべえ！美波のアドバンテージが全くない！表紙にいたってというの
に空気が殺戮者かの二択ですね彼女は…

そういうわけで、今後明久がどっちとくつつくかのアンケートを取
ります。

…こんなに無駄にアンケートしている作品はおしよゆだけでしょ
うね、間違いなく。

- 1 ・瑞希とフラグ
- 2 ・美波とフラグ
- 3 ・秀吉とフラグ
- 4 ・他の誰かとフラグ（男子と美春と翔子は無理です）

お暇な方はお付き合いください。よろしくお願いします。

第二十九話（前書き）

やっとこさ最新話。ちょっと長めでお送りします。

そうそう、評価が1600ptを超え、バカテス作品の中で二位になりました。

皆様ありがとうございました。これからも頑張ります。

第二十九話

プルルル…

ピッ

『…もしもし』

「お、霧島か。…『俺は雄二に電話したのに』というツツコミは置いておくとして。今どこにいるんだ？」

『…逃げた雄二を追いかけているところ』

「…雄二は逃げれたのか。そいつは凄い奇跡だな（…この電話が終わったら匿ってやるか）」

『…うん。まさか手錠を外せるようになってるなんて…やっぱり雄二は凄い』

「雄二が凄いというか、俺は人間という種の適応力に感動するよ」

『…ユキトのお墨付きも貰えた。嬉しい』

「何言ってるんだ。俺はお前のズレっぷりと雄二の堅物っぷりを評価しなかったことなど一度もないぞ」

『…そう、ありがとう』

「全く褒めていないがな」

『……………ユキト』

「ん？なんだ霧島」

『…り…った…』

「？…どうした、聞こえないぞ」

『…その…キス…』

「ああ、アレか。ついにやっちゃったのか？霧島」

『…恥ずかしくて…無理だった…』

「…なんつーか、やっぱりお前も恋する乙女なんだなあ」

そんなやりとりを終え、『試合が始まる前には戻ってこいよ』と霧島に伝えて、俺は電話を切った。

どうやら雄二は頑張って逃走したようだ。まさか貞操と生命両方守りきるとは。

まあでも、こうなると後で俺が恨み言を言われるんだろうなあ。

まったく心外だ。生命と羞恥や男の尊厳その他諸々を天秤にかけるとしたら、誰だって生命を選ぶだろうに。

しかも、これが本当に霧島のことか嫌ならまだしも…あくまで雄二

の変な意地だしなあ。もうお前から早く結婚しろよ。

え？あいつらが付き合ったら雄二が異端審問される？そこらへんは、まあ…あいつらバカだし、雄二自身になんとかしてもらっしかない。

ドゴッ！

などと考えていると、いつのまにか試合をしていた召喚獣の片方が吹き飛ばされていた。

おお、考え事をしていたら第二試合が終わってしまったようだ。んじゃ、勝者の名前を記入して次に移りますかね。

えーと、勝者はモヒカンにハゲ、と…

「「ちょっと待てやコラア！！」」

…よし、書き終わった。

「それじゃ、次の試合を」

「無視すんなよ！？やめろよそつ言つ態度！すげーキツいんだよ！
！」

「そついつのからイジメは始まるんだから本当にやめろよ！？読者
さんが真似したらどうする気だ！！」

ちつ…スルーできなかった。

そつ思いながら仕方なくそいつらの方に向き直る。

皆さんはモヒカンとハゲという名前で即座にわかったと思うが、今
俺の前にいるのは常村勇作と夏川俊平である。

やれやれ…教頭が出ないから腕輪つんぬんフラグは破棄されたとい
うのに、なんでこいつらに関わらなきゃいけないんだか。

「で？捨てキャラのくせに何の用だ常夏コンビ」

「あ、ユキトうまいこと言うね。僕も今度からそう呼ぼうかな」

「呼ぶんじゃないやねえよこのバカ！」

「やれやれ、うるさい奴等だ。本来なら貴様など読者さん達のお情けがなければセリフ無しでスルーされる予定だったものを…」

「うわ、ハゲてんなあいつ」

「気の毒ね…隣のモヒカンも相当痛々しいわ」

「あ、もう終わったの？不愉快だったから見てなかったよ」

「ねえおかあさん、あのひとはげてるよ？なんでー？おじいちゃんでも、もうちょっとかみのけあるのにー」

「うーん、もう少し経ったらわかるわ。とりあえず、あんな風になつちや駄目よ」

「はい。もひかん、っていうほうはかっこわるーい」

「そうね。あれも真似しちゃいけません」

「「あんたら鬼か！！」」

あれ？あいつら正直出てこなかったほうが良かったんじゃない？

やはり外見は人間を判断する大事な要素であるらしい。観客の全員に拒否反応されているぞ常夏コンビ。

「くっ…！この誤解は後で見せ場を作って挽回するとして…と、とにかく！今のお前の反応に異義を申し立てる…！」

「は？反応？」

ハゲが俺に熱弁している。うわ、とてつもなく面倒だ。さつさと次の試合行って終わらせたいんだけどこの仕事。

そんな俺の嫌そうな反応など無視して、常夏コンビの二人は、

「そつだそつだ！お前、なんだよ今の冷めた反応は！実況解説すんなら選手全員に平等になれ…！」

「っーか勝者ハゲにモヒカンって何だよ！あれスクリーンに表示されてるんだぞ…？」

「え？どれどれ…あ、本当だ。うわー適当に書きちゃったよ。字が汚いなあ」

「着眼点そこ…？」

高いテンションで熱弁を振るっているわけだ。目の前にいると正直

ブサイク過ぎて見てられない。

「とうかこれは明らかに中傷だろ！今日のこの流れだと間違いなく俺達の明日からのアダ名モヒカンとハゲじゃねーか！！」

「っーか俺の頭はハゲじゃねえ！普通に坊主なだけだ！！」

「うーん、二人を個別に呼ぶのは面倒だから常夏コンビに統一されると思うぞ」

「なんでそんな適当なの！？元はと言えばお前のせいだろ！！」

ぴったりハモリながらひたすら文句を言う常夏コンビ。やれやれ…それしか能がないのか…（作者注：わりとマトモな反応です）。

もうダルくてしゃーない。要するに、こいつら出番や人気、見せ場が欲しいってことだろ？

でも残念ながら、

「はいじゃあ即席アンケート。こいつらの姿をもっと見たい人ー」
『『『『『NO THANK YOU』』』』』
「『なぜだあーっ!』」

しよせん彼等はギャグ要因。うん、しかたないね。

気を取り直して、次の試合は…お、知り合い同士だな。霧島達と美春にムッツリーニの対戦だ。

「それでは、両者入場してください！」
『『『『』』』』うおおおーっ！！』』』』

先程とはうって変わってハイテンションな観客。

まあそりゃ美少女三人（佐藤さんも美少女だぞ）に、ムサイ系とは真逆の外見であるムツツリー二という組み合わせだからな。

ハゲ：じゃなかった、坊主とモヒカンとは外見的な格が違うんだよ、客観的に見て。

いや、この盛り上がり様はむしろあの連中が『なかったこと』にされたと判断したほうが正しいんだろ？あ。哀れである。

「どうかしたのユキト？なんか凄くどうでもよさそうな顔してるけど、霧島さん達の試合なのに」

「ああ、いや：これは試合とは関係ない。ちょっとどうでもいいことを考えてただけだ」

おっと、明久に注意されてしまった。…確かにこんなどうでもいいことを考えているべきじゃなかったな。

よし、ここは気持ちを切り替えて真面目に仕事をすることにしよう。さっさと終わらせたいし。

「それじゃ、二回戦第三試合を開始する。四人とも前へ…」
「…ちよっと待って」

と、始めようとした瞬間にストップがかかった。

「霧島？どうしたんだいきなり」
「…ユキト。対戦の形式を変更してほしい」
「…変更？」

止めに入った霧島に何事が尋ねると、彼女は唐突にそんなことを言い出した。

試合形式を変更する…？何を言ってるんだ霧島？そもそもお前の相手はDクラスとFクラスだぞ？既にそっちが有利じゃないか。

「ユキトさん、美春からもお願いします」

「え、清水さんまで…ひよっとして、二人でもう決めてたの？」

「…そう」

明久の問いに頷く霧島。

…意外な接点だ。霧島と美春とは珍しい。二人で話す機会なんてそもそもいつあったん…ああ、そういえば霧島が美春を保健室に連れて行ってたな。

…ん？ひよっとして雄二は霧島が既に居たところに飛び込んでいったのだろうか？

あれ？ひよっとして根本的にはあのメール俺のせい？

…深く考えるのはやめておこう。どうせいつも追い詰められてるしな。雄二ごめんね（笑）

「まあ、二人が了承してるなら問題はないと思うけど…どんな形式にするの?」

そんなことを俺が考えていたり考えを放棄していたりした隣で、明久はどのような『変更』を行うのかを尋ねていた。

「…人数だけ変更してほしい。私と清水の1vs1に」
「…!?」

な、なん…だと…!?美春がタイムンを張るってのか?学年主席である『あの』霧島翔子に!?

「で、でもそれじゃあ清水さんは…いい、いいのムツツリーニ!」
「…問題ない。納得もしている」

どういうことだ…彼女が相手だという理由で棄権する生徒もいるくらいなのに…何を考えているんだ、美春?

「はっ!?!し、しかも佐藤さんがまた空気に!?!いいのか佐藤さん

「!貴重な出番がなくなるぞ!?!」
「うわああああんっ!?!やめてください、マイクの大音量でそんなこと言わないでえっ!?!」

涙目で叫んでいる佐藤さん。

だが、『やっぱり私も出る』とは言わない。どうやら霧島の話に納得しているようだ。

…出番ブレイクとも取れる霧島の提案を認めてあげるなんて、いい人だな佐藤さん。いくら霧島だって他人の意思を無視したりはしないしな。

え、雄二? たぶんあいつは霧島の中で『人』じゃなくて『夫』にカテゴライズされてるんだと思うよ。

ダメだ、雄二の話をするとすぐにギャグ展開になってしまう。切り替える俺。今は割と真面目なシーンだぞ。

「　　」
「キトさん」

雑念を振り払いながら再度気持ちの切り替えをしていると、ぽつりと呟くように美春が俺の名前を呼んだ。

そちらの方を向くと…美春が、見たことのない真剣な顔で俺のほうを真っ直ぐ見つめて、

「お願いします。やらせてください」

俺に向かって、深々と頭を下げてきた。

…客観的に考えて、許可すれば美春は『絶対に』負けることになる。

成績というものはそう簡単に変動するものではないし、ましてや相

手は霧島だ。生半可な策などは決して通じない。

ムツツリーニと二人でなら、まだ可能性はある。しかし、美春一人で闘うということは、ただでさえ少ない勝率をゼロにするということだ。

「…その言葉の意味、わかってるんだな？」
「はい」

しかし、それでも彼女はこの闘いを望むという。

…霧島と何があったのかは知らないが。

どうやら、俺に彼女達の覚悟へ口出しする権利はなさそうだな。

「…わかったよ。頑張りなさい」
「っ！あ、ありがとうございませゅっ！」
「…ありがとう、ユキト」

あ、噛んだ。：口元を押さえて顔を真っ赤にしている美春に、それを見て微笑む霧島。

うーん、二人共やっぱり美少女だなあ、などと場違いなことをこっそり思った。

「さて、そういうわけだ。観客の皆様方、急に予定を変えて悪いが許してくれ。あと、ババアの文句は受け付けないからよろしく」

『おおっ！なんかわからんけど緊張感が！』

『どっちもがんばれー』

『ふっ…恋ですね』

『姉さん、雰囲気出しててもチャイナ服ではぶち壊しです』

『待ちなよ！？データ収集とかの予定をどうする気さね！？』

『ユキトおおっ！てめえ後で覚えてるよオオツ！！』

『お、落ち着くのじゃ雄二、ユキトもわざとでは…』

…なんかいつぱい知り合いの声が聞こえたけどスルーしておこう。
あ、ババアはざまあみろ。

「霧島さん、いきます」

「…お互い、退けない試合。手加減はできない」
「はい。…私…この気持ちがおなのかまだわかりませんが、…絶
対に、嘘にだけはしたくないんです」
「…うん」

二人が向かい合って言葉を交わす。

ウンッ

つと、高橋女史がフィールドを展開し終わったか。準備は完了した
ようだな。…では、始めるとするか。

俺は二人の緊張に呑まれないように大きく息を吸って、

「 …… 試合開始!!」

そう叫んだ。

その声に応えるように、

「『試獣召喚>>サモン<<』!」

二人は同時に召喚獣を呼び出し、そしてそのまま、相手の元へ飛ぶように走らせる。

「はあああああっ!」

「…ふっ…!」

距離はゼロ。

ダッシュの勢いを殺さず、二体の召喚獣は互いの武器を振り上げ

バキィィンッ!!

「……………あ……………」

霧島の刀が、美春の剣を砕いていた。

「……ごめん」

霧島の眩きと共に、必殺の一撃が振り下ろされる。

その攻撃に美春の召喚獣はあっさりと吹き飛ばされ

LOSE

Dクラス ? 清水美春

数学 ? 0点

V S

Aクラス 霧島翔子

数学 ? 396点

W I N

勝敗は、決した。

「…負け、ました…ね」

選手の控え室で、試合を終えた少女…清水美春が、ぽつりと呟いた。

「……………」

最初からわかっていたことだ、と少女は自分に言い聞かせる。

相手は学年主席で、自分はDクラス。特別なことなど何もない、ただの平凡な生徒なのだから、勝てないのは当たり前前だ。

(…それに、ユキトさんにも言われたじゃないですか)

『お前は意味をわかって言っているのか』と彼は言って…自分はそれに『はい』と答えたのではなかったのか。

勝てるわけなんてなかったのだ。

でも。

(それでも、美春は)

「…美春」
「っ!？」

思考に埋没している中突然声をかけられ、美春はびくん、と体を震えさせる。

恐る恐る声のしたほうを振り向くと、

「…」
「キトさん」

そこには、やはり彼がいた。

「……………」
「……………」

声をかけたユキトも、かけられた美春も何も喋らず…お互いに、沈黙が続く。

ユキトの表情は読めない。笑顔か、真面目な顔か、それとも別の何かか…彼自身も、どんな顔で接すればいいのかわからなかったのだろう。

(…どうして、来ちゃったんですか…)

できれば今は会いたくない。

そう思っていた相手を前にして、美春はやや八つ当たり気味な言葉を、口には出さず心の中で思った。

自分がなぜ、大会に出て、優勝して…あのチケットを欲しがったのか、本当派美春自身にもよくわかっていないのだ。

今までの自分なら、島田美波のため、と断言していただろう。けれど
今はできない。

他人から見れば明らかなのに自分では気づけない。まさしく、乙女心は複雑というものであった。

そんな沈黙がしばらく続き…

「ひょっとして、ね」

やがて、ユキトのほうから言葉が投げかけられた。

「…俺のために、頑張ってた？」

「…！」

ぴたり、と美春の曖昧な気持ちの『ほんの少しだけある確かなところ』を言い当てるユキト。

「う…は、はい」

「そっか。ありがとうな、美春」

顔が赤くなっていくのを自覚しながら、美春はユキトに返事をする。それに対し、苦笑しながら礼を言うユキト。

(うう…ま、まともに顔が見れません…って、あれ?)

恥ずかしさで体中が熱くなっていくと共に、先程までの暗い感情が薄れ、自分がどこか安心して始めているのに美春は気づいた。

(…な、何故なんでしょう…)

これもハタから見れば分かりやすすぎる現象なのだが、不思議なことに本人はそれに気づかないのである。

しかし、精神のレベルがいくらか彼女より高いユキトは、美春の気

持ちをかなり正確に…

具体的には、『彼女の感情はまだはつきりとした形ではない』というところまで理解していたりする。

とはいえ、彼も分かるのはここまで。一番大事な、『今どんな言葉をかければいいのか』という答えは、まだ彼には出せない。

(どうすっかなあ…というか、万人向けの『正解』なんて無いよな多分)

ヒトの心は難しい。かなりの数の相談を受けて来た彼だが、まさか自分がこんなことになるとは思っていなかったため、どうすれば良いのか、という経験はない。

(でも)

しかし、彼は思っただ。

「美春」

きつと、今は

「ありがとう。その気持ちを、大切にしてくれて」

心からの言葉ひとつでいい。

「……………」
「キト、ちん」

ぼたり、と。

彼女の眼から、涙が溢れて零れ落ちた。

「…なに泣いてんだ。今回は別に説教したわけじゃないだろ」
「…あ、ご、ごめんなさつ…うあ…っ…」

その場にへたり込んでしまった美春の頬を伝い、ぽたぽたと涙は止まらず溢れてくる。

見かねたユキトが近寄って涙を拭ってやると、美春はぎゅ、と無言でユキトの身体を抱きしめた。

(…俺のこのサイズ、本当に締まらねえなあ)

そんなことを内心ボヤきながら、彼女の胸の中で苦笑する。

色々な感情でごちゃ混ぜになったその涙。

まだまだ、恋愛を語るには幼い涙だけねど。

(∴美春、笑ってくれてるしな)

この涙は本当に綺麗だと　ユキトは思ったのだった。

「ゆ、ゆゆユキト…！まさか、まだフラグを立て足りないのかい…！？」

「（…パシャパシャ）」

「…あんな風な恋もしてみたい」

そんな一部始終を覗いていた奴らがいたというのは、また別の話。

第二十九話（後書き）

ふう…お久しぶりです皆さん。

本来ならここでお詫びとかいろいろしなくちゃいけないんでしょうが、その前にひとつだけ言わせてください。

非リア充実があああつ！！リア充のことわかるわきゃねえだろお
おおおおおッ！！！！

すごいよこのターンX！というわけで本編でした。

なんというか、恋愛経験がない奴が恋愛の話を書くとか何が言いたいのかさっぱりですね。

まだユキトのことを『異性として好き』とまではいつていない美春
なのでした。

明らかに下手惚れなのにね！これでカップルになったからこいつら
どんだけバカツプルになんだよ！！リア充しね！！！！

失言がありました、失礼。

さて、一週間前後お休みを頂いていたわけですが、その間も皆様か
ら感想が届いております。ありがとうございます。

先日、千葉駅が水没して僕のズボンも大惨事になりました。くしゃ
みが出てます。皆さんもお身体にはお気をつけください…

さて、今回は明久と美波がアレする番外編をお送りします。
アンケート、まさかの大逆転でヒロインが美波に決定いたしました。
同情票が多かったですね！

そういえばキスすらさせてませんでしたね。そういうわけで、次回
の明久にご期待ください。

あれ？明久の死しか見えない。

第二十九・五話（前書き）

遅れてすみません。その代わりいつもより長めで…

第二十九・五話

さて、そんなこんなで多少気恥ずかしい展開を終え、召喚大会が終了した。

ああ、ちなみに次の試合の連中は霧島が相手になったと判明した瞬間に棄権したので省略。…これもモブの宿命みたいなものか。

そういうわけで、俺達の文化祭一日目には一区切りがついたわけだな。

後は明日の仕事を終わらせれば、俺の気苦労が重なりまくる仕事も終了というわけなのである。

「明久君、お疲れ様です」

「ああ、ありがとうございます。姫路さん。慣れないこととして声が枯れそうだったよ」

「そ、そうですね！あのその私、実は飲み物を用意して」

「やめるオ！！」

一方、明久は人生が終了しそうになっていた。

「ゆ、ユキトくんっ!? なんですか、邪魔しないでください!!」
「するわ!! お前飲み物渡すなら普通水筒かペットボトルとかだろ! なんで罇體マークの金属ボックスを渡そうとしてんだ!？」
「そ、それはその…私もそうしようとしたらペットボトルが溶けてしまっ…」

「誰かこいつを通報しろ!!」

薬剤師や化学の教師が見たら顔を真っ青にするであろう兵器を、俺は今日撃している。

硝酸から爆弾作ったバトルロ イアルなんて目じゃねえぜ。み、見てるのが恐ろしくなってきた…。

「つかああいうモノはグレネードランチャーに詰めてゾンビにぶっぱなすような液体だろ!? ほんわかキャラの巨乳美少女が持ってちゃいけません!!」

「? 一体どんなお水が入ってるんですか? くんかくんか... ぱたり」
「... あ、あれ? は、葉月ちゃんどうしたの? これ、一体どんな匂いがすーはー... がくり」

「アキ!? 葉月いい!?!」

「メディーック!!-- はやく来てくれ、手遅れになる前にーッ!!--」

危険物の匂いを嗅ぐ時は手で煽って匂いを引き寄せようようにしましよう。直接嗅ぐと、最悪、

死にます。

「ふー、よかった... ねえ、ユキト」

「まったくだ、助かって何よりだ…で、なんだ島田」

数十分後。

召喚獣としての身体能力を使って迅速に保健室に運んだおかげか、
なんとか二人共一命は取り留めた。

今は葉月が明久にくっついていて、二人が同じベッドに寝ている状態である。ん？何故かって？

「…しまばん…」

あのムッツリがもう一つのベッドを占拠してしまっているからだよ。

どうやら葉月が倒れた瞬間に神業的な速度でパンツを覗いたらしい。
お前は一体何回保健室にお世話になる気なんだムッツリーニ。

「もう。葉月も甘えん坊さんねえ」

「気持ちの切り替え早すぎないか島田」

峠を越えて、今は気持ちよさそうにすっすっ寝ている二人を見て、島田がそう呟いた。

いや、確かに『今は』気持ちよさそうではあるけど…さっきまでマジで危なかったよこいつら。

一歩間違えれば『綺麗な顔してるだろ、死んでるんだぜそれ』な展開になるところだったというのに…数々のギャグで生命というものが軽視されすぎていると思う。

896

「…ねえ、ユキト」

そういつやり取り（漫才と言つには重すぎるよな）をすること数分。

ちまちまと葉月のことや明久のことを話していたところ、何でもなさそうな口調で急に島田が話題を変えてきた。

なんだ？ちよっと不自然な会話の転換だな。ひよっとして、何か俺

に話でもあるのだろうか。

ちなみに現在、この部屋にいる（中で意識不明でない）人間は俺と島田だけである。

雄二はまだどっか行ってるし、霧島はそれを探しに行ってしまった。

で、秀吉はFクラスの片付け。玲さんは姫路に危険物の取り扱い方を教えていて、美春や佐藤さんはそれぞれのクラスの片付けに行っただ。

玲さんと姫路には自分の料理センスの悪さを自覚しているかしていないかと言う致命的な違いがあるからな。玲さんの説教も多少は有効だろう。

まあ、玲さんが問題なのは失敗作でも『愛情があれば大丈夫』と喰わせにくるところなんだが。…そっぴや中の人もそんな感じが…いや、やめておこつ。

話を戻すか。要するに、俺と島田は今二人つきり。恋愛的な関係はありえないので、話があるとするなら…明久関連のことだろう。

「どうした島田。相談なら乗るぞ」
「えっ…や、やっぱりわかるんだ」

驚いたように俺のほうを見つめてくる島田。

そんなに意外か？お前も割と感情がわかりやすいタイプだと思うけどな。明久がそれより酷いから目立たないだけで。

で、相談事があるんだっけ？なモノは試しだ、ちょっと俺に言ってみろ。

あー、懐かしいなこの流れ。『前世』では俺の性格のせいかどうか知らないが、昼休みとかはよく相談を寄せられたものだ。

というわけで、柊雪人の相談コーナーはじまるよ！まず、最初の相談はこちら！

「えっと、その…どうしたらアキはウチの気持ちに気づいてくれると思っ？」

「一生無理だな」

「ぶふうっ!? ちょ、ちょっとおおおお!? もう少し考えてから言
つてよおおっ!?!」

はい、というわけで相談コーナーは終了。 柘先生の次回作にご期待
ください。

「待つて! 終わらせないで!! 何も解決してないからウチの相談!
!」

必死に食い下がる島田。 乙女の悩み(笑)とやらをばっさり切り捨
てたのが納得いかないようだ。

おいおい島田。 まさか俺が面倒だから適当に答えたとも思ってい
るのか?

「なら言い直すか。 たとえ明久が死んで生まれ変わったとしても、
その次の人生でも無理だ。 絶対に」
「やめてええええっ!!」

みなみ は ちめいてきな だめーじを おった！

俺の心からの本音に崩れ落ちる島田。なんか俺が泣かしたみたいな展開になってるが、俺の言葉は間違っちゃいないと思う。

なぜ明久が想いに気づかないのか。その理由を考えてみよう。

まずは、『明久が鈍感であること』。が挙げられるな。

…これはもう病気の域なので対処の仕方がない。別に悪いだけでもなく、これは明久の長所でもあるしな。

しかし、それを理解しているはずの彼女たちの反応がアウトだ。

こいつら、明久が幸せになった（要するに他の女子とイチャついた）瞬間に骨や命を破壊していくじゃねえか。

そのせいで明久は『僕はよっぽど嫌われてるんだなあ』なんて考える始末。まあそりゃそうだな、仕方ないね。

とまあ、これくらいは島田も自覚しているんだろうが、実はこのフラグが立たないのにはもっと致命的な理由があるのだ。

それは、島田達が『明久の気持ちをきちんと理解していない』ことである。

やれやれ…最近の色仕掛けとかもやるようになって来たようだが、そこらへんのことは全く進歩無しだなこいつら。

…ふむ、いい機会かもしれん。ちょっと島田の考えを聞きながらちよつと説教でもするとしよう。

「うづうづ…どうせウチは胸なしのガサツ女よ…」

「おい、起きる島田。さりげなく明久の指を握るな」

おかしいな、指を握るといふ行為は本来もつとロマンチックなはずなのに…彼女からは何故格闘技しか連想させられないんだろう…

さて、そんなわけでお話（OHANASHIじゃないよ！）開始である。

「さて、まずは軽いところだな…島田、お前明久の好みとか考えたことあるか？」

「えっ、そ、それはその…聞きたいけど、恥ずかしくて…」

関節曲げにいけるくせに、こんなことは聞いたりできないのか。行動的なんだか違うのかさっぱりだ。

「とにかく言ってみろ。明久が何を欲しがってるか、みたいな話でもいいぞ」

「うーん…カロリーはユキトが来たから改善されて…それに、好きなもの…あっ」

「何か思いついたか？」

「そうよ、アキは巨乳が好き……………くっ……………」

「アイドルでも目指すのかお前」

島田、自爆。

まあ、こんな72的なリアクションをいちいち続けられてたらそのうち明久と葉月が目を覚ましちゃうだろうし、ここはスルーして話を進めよう。

「まあ、確かに明久は巨乳も好きだな。まあポニテも好きだがそれより話を」

と、俺が言った瞬間

シュバッ

がしいっ!!

「ほんとにつ!?それ本当よね!?胸は本当に勝てないから嘘だと
言わないでえっ!!」

「うおっ!?ちょ、近い近い!あと痛いから放せ!!」

さっきまで蹲っていた島田が、一瞬にして俺の体を掴んでいた。全
力で(ちなみに彼女はリンゴを潰せるくらいの握力があります)。

ええい、話が進まない!これだからこいつらは恋愛が下手なんだろ
うが!

「つーかもつとお前人の話聞け!(人じゃないけど)お前らギャグ
体質すぎて説教しづれえんだよ!!」

「ウ、ウチにとってはそんなことよりこっちのほうが重要なのよー
っ!!」

「お前自分から相談しといてその発言かよこのバカ痛たたたた!
?おいコラ力込めすぎだ放せえ!!」

「(ガラッ)全速前進DA!」

「あんたは急に出てくるな波乗り健二郎!」

「フハハハハハハ(ピシヤツ)」

「あんた台詞こんだけかよ!」

それはH A N A S Eだろ! ツーかアンタ世界史の教師っていう
役でしょ!? 版權ネタオンリーは流石にどうかと思う!!

「ゆ、ユキト! ほかに、ホカニハナニカナイノ!?!?」

「ぐおお体からギシギシとした音があっ! いい加減にしる島田あつ
!! お前の悪評をひたすら明久に吹き込むぞコラ!?!?」

肺が圧迫され呼吸困難になりながらも、必死の抵抗を繰り返す俺。
ぐおお、酸素はやっぱり俺が嫌いなのか!?!? こんなアプローチは始
めてだ!?!?

「.....はっ。いっめんユキト! 大丈夫!?!?」

するり、と力が抜けぺしゃりと地面に落下する俺。げほごほ、た、助かった…

ようやく島田の手から逃れ、そそくさと保健室の端に移動する俺。もう酸素不足は御免だ。

ああ、成る程。毎回こんな目に遭わされてたら明久も拒否反応を示すわけだ。これは被害を食らってる側からしたらほんとに洒落にならない。

というか明久、頼むから早く起きてくれ。この状況、いざとなっても『距離制限』で俺逃げられないじゃないか！

「…えーと、ユキト…」

そんな風に俺が死亡フラグを立てていると。

かなり申し訳なさそうな顔をして、島田が俺に話し掛けてきた。

「そ、その…ごめんなさい…」

「…はあ。悪いってわかってるなら最初からやるなよ」

まったく、これを毎日やられてるのに明久はこいつらに多少なりとも好意を持ってるんだよなあ。

このままでは明久が報われないし、ちょっとハッキリ言ってやるか…

「お前はさ、もう少し明久の気持ちを考える。振り向いてくれないのにはお前にも責任があるぞ」

「…アキの気持ち？」

「ああ。…冷静に考えてみる、指をあらぬ方向に捻じ曲げられたら普通の奴は許さないだろ？でも、明久は許す。それはどうしてだと思っ…」

「ひょっとして…アキって、マゾヒ」

「全裸で縛ってそのベッドに突っ込んでやるうか？」

「じゃなくて！ア、アキは優しいのね！！」

…今のはギャグ補正のせいというふうにしておいてやる。

「そうだ、明久は優しい。優しすぎるくらいにな。だからお前らはそれに甘えてしまっ」
「うっ…」

胸を抑える島田。…流石に甘えている自覚くらいはあったか。

まあ、最近は多少よくなっているんだが…それは言わないでおこう。今は反省しなさい。

「…でも、明久がお前らとツルんでるのは、それだけの理由じゃない」
「い」
「…え？優しい…だけじゃない？」

そう。島田達が気づかなきゃいけないところはココだと俺は思う。

「明久はな、お前に『価値』を見出してるんだ。打算的なもの、精神的なものも全部含めてな」

価値。

それは例えば、『美少女が近くに来てくれて嬉しい』という少し意地汚いものであったり、『一緒にいて楽しい』という純粋なものであったり…

ふむ、『理由』と置き換えてもいいかもしれないな。

「つまり、明久は関節を曲げられても、半殺しにされても…それでも、お前と一緒にいる方がいいんだよ」

もちろん明久自身の優しさもあるんだろうが…やっぱり、明久は島田と一緒にいたいんだろうな、普段の生活を見ると。

それが『友達として』か『異性』としてかは本人にもわかってないんだろうが。

「…ど、どうして？ウチは…自分でも後悔するくらいに暴力振るってるし、…む、胸もないのに…」

…やれやれ、島田。お前、自分の評価が低すぎやしないか？

外見は美少女で、体はモデル体型。性格は明るいし、ツンデレ。

その上『意外とぬいぐるみ好き』というギャップまで所有してるんだ。こんな逸材なかなか居ないと思うけどな。

まあ、そんな事は俺が言うべきことじゃない。

だから、俺からはちよこつとだけ明久の本音を教えておいてやろうかね。

実は『原作』で起こるはずだったフラグをこつそり壊しちゃった責任もあるし。

「さあな？それは明久の価値観だから俺には何とも言えないな。けど」

あの真っ直ぐな言葉を思い出す。

…うわ、こんなこと恥ずかしい台詞を言わなきゃいけないのか。明
久もやるなあ。

『僕にとって、美波は』

「明久にとって、島田は 凄く、魅力的な女の子なんだろうよ」

「…っ!?!? x !?!?!?!?」

「いや、ちょっと何言ってるかわかんない」

俺の言葉に、顔を真っ赤にしながらアワアワする島田。…うお、頭から煙出てないか？人間にできることなのかアレ…

「…うにゅ…あれ？ここどこですか…？」

おっと、丁度葉月も起きたようだな。…それじゃ、ここはちょっとばかり島田の背中を押してやるとしましょうか。

「ほら葉月、こっちだ。顔を洗ってきなさい」

「うー…はいです」

「ちよっ…ま、待って！？洗面台ならそこにあるでしょっ！？」

大慌てで俺達を引き止めようとする島田。大方、明久と二人きりになるのが恥ずかしいのだろう。

やれやれ、こっちはわざわざ空気を読んでやっているというのに。

「島田。明久がどんなことをされれば嬉しいのか、ちゃんと考えて

みる」

「え、ちよ」

「ほら、出るぞ葉月。ムツツリーニ、お前もだ」

「…残念」

何気に起きていたこのムツツリも連れて、俺たちは保健室の外に出たのであった。

さて、俺がしてやれるのはここまでかね。

後は島田次第。…ちょっとくらい、勇気を出してみてもいいと思うぞ。

「…ユキト」
「ん？なんだムツツリーニ」

数分後。

今は寝ぼけ眼をこする葉月に、近場の水道への道筋を教えて（俺は『距離制限』があるからこれ以上動けない）向かわせたところである。

そんな折、二人きりになった俺達をだつたが、ふとムツツリーニが
呟くように話しかけてきた。

「…先に謝っておく」
「？何がだ」
「…状況次第では最悪、明久を異端審問することになる」
「もうね、どんだけ異性に飢えてるんだよお前ら」

彼が開いたその口からは、やっぱりバカな発言しか出てきませんでした。

なんというか、本当にバカばっかだなあ。

考えてみれば、島田達の恋愛が実らないのはコイツらのせいっていうのもあるよな多分。バレたら処刑されるとなれば中々恋もできないだろう。

「別にいいじゃねーかそんぐらい。毎回死に掛けてるんだから」

「…よくない。フラグ野郎許すまじ」

「だからといって殺すなよめんどくさい。止めんの俺だぞ」

「…男には、命を賭ける時がある」

俺としては呆れた気持ちしか出てこないのだが、ムツツリーニは掟とやらを徹底してるようである。…それだけ嫉妬心が深いのかね。

ムツツリーニ、この世には命より大事なものが確かにあるかもしれないが、明らかにコレではないと思うぞ。

「…しかしムツツリーニ。お前はそんなこと言ってるのいいのか？」

「…？」

俺が不思議に思ったことをふと呟いてみると、ムツツリーニは疑問符を頭に浮かべた。おや？わかっていない様子だな。

ん？なんの話かって？だって、不思議じゃないか。ムツツリーニはフラグ野郎が許せないっていうけど、

「お前も工藤と微妙にフラグを…ってどうしたムツツリーニ！？静かに血の海に沈むなおい！！」

な、なんだこれは！？さっき保健室で補給したばかりの血液が、次々と廊下に染み出ていく…！？

ど、どうやら、工藤のナマチチを思い出して自爆したらしいな。…あれ？お前やっぱフラグ立ってね？

「ってそんな場合じゃない！！輸血、はやく輸血しないとまたあっち送りに！！」

一体本日何回倒れてるんだムツツリーニ。むしろこの作品では登場したら必ずブツ倒れてないかムツツリーニ。いい加減耐性つけるよ。

…しかし、幸いにも保健室は目の前だ。

果たして輸血パックがまだ残っているかは定かではないが、最悪ベツドに寝かせるだけでも…！

そんな風に考えながら急いで扉を開けた俺は、すっかり『とある事』を忘れていた。

917

ガラッ！

「しっかりしろムツツリーニ！傷は浅…いとかいう次元じゃないけど、多分だいじょ」

…そう、先程自分でけしかけた島田のことを。

「…むじゅ？」

「…んむ？」

あれれ〜おかしいぞ〜？

なんで、明久が島田にベッドに押し倒されながら、

キスされ

「いやあああああああつ!!!?!?」
「のぎゃあああああああつ!!!?!?」

俺、大ダメージ。地獄送り。
明久も、フィードバックにより地獄送り。

かくして、俺達召喚獣主従コンビの文化祭一日目は、あの世で終わりを迎えたのであった。

第二十九・五話（後書き）

次回復活します。御安心を。

というわけで、完全に美波ルート入ったよ、というお話でした。番外編にする予定ですがタイミング良くユキトと美波を二人つきりにする理由を作れたのでこういう形になりました。

正直社長は唐突すぎでしたね。でもHANASEと言ったら遊戯王ですよ！（キリッ）

いやーしかし、遅れて申し訳ありませんでした。

忙しい＋親知らず抜く＋風邪ひく＋AMショーという永久コンボ喰らってました。

うん、最後の最低ですね。

今後も相当忙しいのでひよっとしたら一週間に一回くらいになっちゃうかもしれません…うう、毎日投稿してた日々が懐かしい…

そんなわけで次回は学園祭二日目。やや空気だった葉月ちゃんと玲さんを動かす予定です。お楽しみに。

第三十話（前書き）

新作作ってたら遅れちゃいました。てへぺろ

すみませんでした。マジですみませんでした。

リアルも非常に忙しかったのです。更新頻度：大丈夫かなあ…

そんなわけでまだブログしかありませんが、僕の厨二スピリットをつぎ込んだ作品「魔法少女リリカルなのはVanitory」もよろしく願います。

第三十話

その後。

島田の照れ隠し（にしては威力が高いが）を食らった俺と明久もなんとか復活し、帰宅することに成功。

数々の出来事により疲れ切った俺と明久は、まさに倒れるように眠ったのであった。泥になった気分だったな…

…まあ、家に着いてからも玲さんが見て色々あったが、それはまた後で話すとしよう。

で、翌日。

今日は学園祭も大詰めである二日目。

午後から召喚大会の実況解説を控えた俺達は、現在Fクラスの出し物である中華喫茶で労働中である。

いつの間にか解説だけでなく実況までやることになっていた、ということは…いや、やめておこう。

俺から言えるのは一言だけだ。新野さん、生きる。

さて、ここで少し疑問に思ったかもしれない読者さんがいるかもしれないので補足をおこう。

それは、焼肉と温泉の件だ。

前にも話したと思うが、実は既にクラスの売上一位の商品であるこれらは『召喚大会の手伝いの対価』ということで既に手に入ることが確定している。

では何故それをFクラスの連中には秘密にしているのか。

まあ、理由は簡単なことなんだがな。理解している人には少し申し訳ないが、ちょっとシュミレートしてみよう。

『お前らやったぞー解説役やったら肉もらったー』
『うおおー！！』
『じゃあ今すぐ食おうぜ！』
『俺飲み物買ってくるわ！！』
『おい、誰か老け顔の奴を連れてけよ！』
『当然さ、お前らこそ準備は怠るなよ！』
『…カメラは既に十分…！！』
『そんなカメラで大丈夫か？』
『一番いいのを頼む』
『…神は言っている、ここは撮るべきところだと』
『酔った女子勢ならハプニングが起きるに決まってるぜッ！』
『！！』

バカ共が。

お前ら今学園祭やってんだぞ？店を放り出すな責任を持ちやがれ社会の底辺になるぞ。

…まあ、こんな風に、言った瞬間Fクラスの連中は遊び始めるだろ
う、という結論が出たので今回は秘密にすることにした。

働いたの俺と明久だし、まあ別にこのくらい構わんだろう。この借りはババアに別口で要求してやる。

そんなわけで明久は厨房、女子勢は接客、俺は客引きというふうに、各々が自分の仕事をしていて、しばらく経った時。

ダダダダダダ

と、急に廊下を走る音が聞こえたと思ったら、

ガラッ

「ようお前ら久しぶりだな！手伝いに来たぞッ！！」
「雄二！？」

なんと久しぶりに我らがクラス代表、坂本雄二がやって来た。何話ぶりだっけまともに出てきたの。

「ゆ、雄二・・・！！ま、まさかまた会えるなんて・・・」

「奇跡が起こったのじゃ・・・！！」

「・・・(グスッ)」

目の前で起こったミラクルに感動するFクラス一同。まさかその後霧島から逃げ切った上にここにたどり着くなんて…

あまりの出来事に、明久とムツツリー二なんか涙を流して喜んでぞ。

・・・冷静に考えると、霧島はこいつらにどういつ扱いをされてるんだろう。『霧島から逃げられたら奇跡』って…

何はともあれ、俺も一応あいつに言うておくべきことがある、さっさと伝えておこう。

「おい雄二」

「!?ゆ、ユキト…!!」

おや、なんか大袈裟な反応だな。ひよつとしてメール云々の話だろうか。…まあ、その話は後でゆっくり聞いてやるとして。

「お、お前翔子に一体何を言いやがった!?なんか知らんが、急に態度が、唇が」

「そんなことより雄二」

「そんなことじゃねーだろ!俺にとっては重要な「近くに来てるぞ」俺は厨房な!さーて手伝うか!(ダッ)」

そう言っが早いか雄二は

厨房への最短ルートを補足し、(0.2秒)

間にいた机や客を飛び越え、(1.2秒)

厨房へのドアを開けスルリと中へ入り、(0.7秒)

ドアを閉めて鍵をかけた。(0.9秒)

ここまで3秒。そして、その一連の動作を終えて雄二の姿が見えなくなった瞬間、

がちゅっ

とドアが開き、

「…雄二、いる？」
「「「「さあ？あいつどこ行ったんだろっな」「「「「

狙い澄ましたように霧島が現れた。

…雄二…やっぱり追われてたんだな。息を切らしてたからそんなこ

つたろうと思ったよ。

いや、奴が追われてない日なんてなかったか…ああ無常。

しかし、ここから推察するにどうやら雄二は昨日からずっと逃亡生活を送っているようだな。

…哀れだ。このままでは不憫すぎるのでここは匿ってやるとしよう。

それに、アイツもせっかく働くって言うてるんだ、その労働意欲を無駄にすることもない。

「…どこ行つたの、雄二…」

「霧島、お前もほどほどにしておいてやれよ」

「…愛のカタチだから仕方ない」

「仕方ないんだろ。どうしても言うんなら暴力はやめなさい。キスぐらいにしとけ」

「…ハードルが高すぎる…」

「手錠で縛って檻の中にブチ込むより明らかに簡単だよな」

そして霧島は相変わらず天然だったのであった。

「それじゃ、皆頼んだよ」

「頑張ってくださいね、皆さん」

「玲さんも、お手伝いありがとうございます」

「えへへ、バカなお兄ちゃんと一緒ですっ」

で、雄二が厨房に籠ってから数十分後。俺が校内を回って宣伝に行く、と言ったところ、葉月と玲さんが手伝ってくれる、という話になった。

まあ、二人ともお目当ては『距離制限』により一緒に行かざるを得ない明久のほうだろうか。

そういうわけで、三人と一体で廊下をてくてく歩いて行く俺達一同。しかし、凄いメンツで宣伝回りをしてるな…ちょっと他のクラスなんて比較にならないレベルだ。

まず、召喚獣である俺。

次に、あのプロポーションの上チャイナ服で歩いている玲さん。

さらに、玲さんに対抗したいのかこれまたチャイナ服を纏っている葉月。

そして、駄目押しとばかりにチャイナ服で人目を惹き続けるアキちゃん。

「すれ違った人達は例外なく振り向いてるし、これは宣伝効果も期待できそうなんだナ」

「待ってユキト！おかしい、明らかにおかしいモノローグが含まれてたよ！？」

おかしい？何を今更。『原作』を批判するわけじゃないが、この世界は最初からおかしいところばかりだぞ。

「そうじゃなくて！何で僕はこんな服を着るハメになってるのさ！？」

「大きな声を出しちゃダメですよ？皆にバレたら大変ですからね、アキちゃん」

「やめて姉さん！ナチュラルに僕の呼び名を変えないで！！」

「バカなお兄ちゃん、かわいいですっ」

「ごめん僕が悪かった！できればお姉ちゃんと呼んでくれないかな
葉月ちゃん！！」

男扱いされて周囲の評価を下げるか、女扱いされて自分のプライドを捨てるか。なんとという嫌な二択だろうか。

つーか、玲さんと葉月に既にネタバレされて手遅れになってるな。

…二択すら選べないとは哀れな奴である。

さて、何故明久が女装することになってしまったかを語るには、冒頭で話した昨日の玲さんとの騒動を説明する必要がある。

『そういえば姉さん、泊まるところはどつするの？』

はじまりは明久のふとした疑問だった。

確かに、玲さんはいきなり登場したからそのことについて考える暇がなかったな。

ひょっとして、明久のマンションに泊まりに来たんだらうか？

でも、パツと見カバンひとつの軽装だし、既にホテルを取っていて荷物を置いてここに来たのだらうか？

などと俺は思っていたのだが、

『いえ、アキくんがいるのにわざわざお金を使つこともないでしょう？ですからアキくん、泊めてください』

どつちからどつちよつなのである。

『ちょっと待った玲さん。着替えとか大丈夫なのか？あ、ひよっとしてそのカバンの中か』

『ええ、大丈夫です。』

バスローブが中にありますから』

『待てコリアー！！』』

限界なんてなかったんや！と言わんばかりの展開である。

これは酷い。常識知らずにも程があるだろ…この姉妹がこれなら両親は果たしてどうなっているのだろうか。…いや、父親だけマトモなんだっけ？

まあ、それはどうでもいい。問題は玲さんだ。

『なに！？姉さんは何を考えてるの！？明日一日バスローブでどう過ごすつもりなのさ！！』

『？とても能率的ではないですか。下着をつける必要もありません』

『待て！あんたまさかアメリカでノーブラノーパンバスローブ一枚で過ごしたりしてねえだろうな！？』

『まさか。服があるのにそこまでする必要はないでしょう？』

『服がなきゃやったのか！！』

この弟にしてこの姉あり、という奴である。…

これを見てると、頭が悪いことより常識のないほうがよっぽど酷いと思うんだが、そのへんどうなんだ？

世間の評価では学力優先みたいだが…俺にはとてもそうは思えない。やっぱ常識人が一番だ。

935

『ぐ…ま、まあ他にも色々言いたいことはあるが置いておくとして…』

『ゆ、ユキト…僕もう疲れたよ…』

『よせ明久！そのセリフ回しはフランダース的な死亡フラグだ…じやなくて！』

『ユキト君も大変ですね、家の弟がすみません』

『…その発言もスルーする』

俺の十数年の人生の中で、『お前が言うな』とこれほどまでに叫び

たかったことはない。

『…とにかく。玲さん、貴女は結局着替えがないんだろう？なら、ホテルでもマンションでも滞在のしようが無いじゃないか』

とりあえず。とりあえず…ッ。

喉まで出かけた叫びを無理矢理飲み込み、玲さんにこれから起こるであろう問題点を指摘する。

明久ならともかく、いくらなんでも女性が二日連続で同じ服を着ちやいけないだろう。

これは品位とかの問題でもあるし、本人がいいと言っても譲れないところだ。

ちなみに、何があってもバスローブで外は歩かせない。絶対に。そんな展開は対象年齢的にも許さない。絶対にだ…！！

と、まあ密かな決意を決めていた俺だったが、玲さんはどうやらきちんと考えていたらしく、

『ふふ、問題ありませんよ。あのマンションには、私の少し前の着替えがありますから』

『え？』

俺の疑問をそんな言葉で返してきた。

なんだそれ、初耳だ。まあ確かに明久は使わない部屋はあんまり掃除しないし、段ボールも多少積まれてるからあり得ない話ではないだろうが…

なんだか、あまりにも準備が良すぎないか？

『いつの間に…姉さん、ひょっとしてこうなることを予想してたの？』

俺と同じ疑問を持ったようで、明久が玲さんにそう尋ねる。

うーん、『原作』とは違う世界になっちゃってるからなんとも言え

ないが、ひよっとして玲さんは明久の一人暮らしの場に飛び込む予定だったのだろうか？

するとどうでしょう、男女二人の同棲生活の完成です。姉弟？あの玲さんがそんなことを気にするわけないだろう。

さすがハーバード出た秀才、策士である。正直部外者の俺も冷や汗が止まりません。

『いえいえ、そこまで予言者ではありませんよアキくん』
『じゃあ、何で女物の服が？』

…などと予想していたのだが、その理由は違ったようだ。

じゃあ何故そんな服があるんだろう。そう考えながら話に耳を傾けた俺は

『す』 アキくんが将来、女の子としても生きていけるように、で

あまりにも酷すぎる回答に、その場でずっこけたのであった。

第三十話（後書き）

ちなみに明久もフィードバックで悶絶しました。

そんなわけで本編をお送りしました。

ちよつと微妙な切り方になってしまいましたね。玲さんに関する妄想を書いてたらこんな長文に。動かすのが楽しいキャラですなあ。

あと一話で葉月ちゃんを動かしたら召喚大会やって学園祭に一区切りつける予定です。あ、焼肉もあつたか：

ともあれ、お待たせして申し訳ありませんが今後とも拙作をよろしく願います。

もうすぐ100万PV！何か記念にやりたいなあ

100万PV記念特別編(前編)(前書き)

記念なのに分割…だと…？

100万PV記念特別編(前編)

ユキト「おしょうゆっ！100万PV突破ーっ！！」

明久「いやっほー！！やったね皆ー！！」

しーん

明久「あれ！？ここ普通『わいわいがやがや』的な音がするものじゃないの！？」

ユキト「残念だったな。作者がそんな当たり前かつささやかに幸せなことを俺たちにしてくれるものか！」

明久「この台詞をユキトに言わせるあたり悪意を感じる！！」

ユキト「Shut up！俺だってムカついている！！」

明久「素晴らしい発音！！」

明久「…と、いうわけで。今回は1000000PV記念の特別編をお送りします」

ユキト「読者の皆さん、本当にありがとうございます…こんな多くの人にこの作品を見てもらうことになるとは夢にも思っておりませんでした」

明久「そういうことは後書きで書くべきじゃ…って、あれ？なんだか今回はいつもと書き方が違う？こう、地の文がないというか」

ユキト「ん？…確かに、いつもは俺の一人称からこの話は展開されるよな。なんで今回はこんな…おや、なんだこれ。いつのまにか机の上にメモが」

明久「作者さんからかな…なんか、意思を伝えるのにお約束のやり方だねえ…」

ユキト「確かにな…えーと、なににな…」

じかん ない？ しにそう

さくしゅ

ユキト「……………」

明久「……………」

明久「…つまり、どういふ」

ユキト「やめる明久！そつとしておいてやれ！！」

明久「う、うん…ていうか、本当に珍しいね。あの作者がこんなデ
ンプレネタを使うなんて」

ユキト「この話も本来『誰もやっていないことをやる』っていうコ
ンセプトで書いているからな。俺の体とか美春をヒロインしたことと
か」

明久「なのに今回はそれを曲げてまで何でこんな形にしたんだろう
ね…」

あれ？つまり作者は今」

ユキト「はい会話がループしそうなんでさっさと話を進めるぞ!!」

ユキト「今回は作者のHPが『マーゲイの弾切れてる時に重火力二体に追われてる』ぐらいにヤバイので雑談回でお送りします」

明久「またわかる人が少なそうな例えだ!」

ユキト「そういうわけで、今回は名前のあるキャラを呼んで100万PVの感想を聞いていくぞ!はい、まず一人目!」

明久「え、あ…ぼ、僕?ちょ、ユキト!そんないきなり言われても

」

ユキト「ん?ああ安心しろ、お前じゃないぞ」

明久「え?でも…じゃあ何で僕司会キャラなの?てつきり最初に聞くからだと思ってたのに」

ユキト「そもそも、お前は失言しかしないだろうからインタビュー全面カットだそうだ」

明久「扱いがあまりにも酷いっ!!」

ユキト「じゃあお前インタビューされたら何て言っつもりだったんだよ」

明久「え?えーと…僕が幸せになって雄二が不幸になりますように」

ユキト「感想って言葉の意味を調べ直してこい」

明久「いい、いいじゃないかそれぐらい願ってもおーっ！…あれ、じゃあ一人目は誰なのさ」

ユキト「お前とは別に呼んである。はい、どうぞお入りください」

ガラッ

佐藤「はい、みなさんこんにちはっ！番外編に定評のある佐藤美穂です！！」

テーレッター（BGM：北斗の拳）

ユキト「どんだけ不吉なBGM流すんだよ！」

明久「っていうか、ええええっ！？き、記念すべき100万PVに・
・開幕モブキャラ！？」

佐藤「よ、余計なお世話ですよ！メインキャラには私の苦悩なんてわからないんです！！」

ユキト「はいはい、落ち着け佐藤さん。ていうか、君はメインキャラになりたいのか？」

佐藤「それはなりたいですよ、当然じゃないですか！」

ユキト「そうか？メイン張るってことは『あの』連中と関わっていかってことだぞ。それでもいいのか？」

佐藤「私はこれからも番外編でがんばっていきますね！！」

明久「僕らに抱いてるイメージが丸わかりで嫌だ！！」

ユキト「はいはい、じゃあさっさと感想をどうぞ」

佐藤「あ、はい。長文なので改行しますね。」

私は大してこの作品に関わっていませんけど、『俺はテストの召喚獣』を評価して下さる皆さんには本当にいくら感謝しても足りないくらいです。

本当にありがとうございました、そしてこれからもよろしくお願ひしますね！

あと、読者の皆さん！私のこと、忘れないでください！できれば出版をください……」

ユキト「よし、大体テンプレ通りの発言してくれたな！さすが佐藤

さんだ！」

佐藤「うええっ！？な、なんですか！私一生懸命考えたのに！？」

ユキト「ああ、別に貶してるわけじゃないぞ。ただ、こういう『皆が言いそうなこと』をあらかじめ言ってくれたのが有難いという話だ」

明久「？どういうこと？」

ユキト「実は今回、各キャラに対して、コメントする際に一つの制限を作者が設けた！！」

明久・佐藤「「え、ええっ！？」」

明久「そ、そんなのあるの！？」

ユキト「おう。普通にやっても面白くないしな。そういうわけで今回は、『コメントの内容をカブらせるのを禁止』という縛りだ！！」

明久「・・・？つまり、どういう意味？」

ユキト「まあ、たとえば今佐藤さんは『皆さんありがとう』『これからもよろしく』『出番下さい』という三つの事柄をコメントしただろ？それと同じ内容は次からダメになるってことだ」

明久「へー・・・ん？それってつまり・・・」

モブ全員「「「「俺（私）たちは出番の要求ができなくなるってこ

とかよ！！？」「」「」

明久「うわっ！？ど、どこから出てきたのさ君達！」

モブA「待てよコラ！今回のこの機会に読者さんに土下座してでも出番を貰おうと思ったのにこの仕打ちはないだろう！？」

モブB「そうよー！いくらなんでもこれは横暴・・・って、名前がモブBにつ！？」

ゴミクス「ちよ、俺は名前有りキャラなのに何でここに居なきゃいけない・・・更に名前が酷い！？」

ギャーギャー

ワーワー

ユキト「あーうるさいうるさい。まあ、アレだ。残念だけど・・・お前達を描くにはな、作者の力量が足りないんだ・・・あと、ゴミクスは感想でも満場一致で『いらん』ってさ」

モブ全員「」「作者面倒なだけだろオオオオオオオ！」「」「」

ゴミクス「そして俺が嫌いなだけだろオオオオオオオ！！」

明久「・・・メ、メインキャラでよかったのか悪かったのかかわかんないよ・・・」

佐藤「・・・私、大変なことを言っちゃいました・・・!!」

ユキト「いやいや、君のせいじゃないさ。これ予定調和だから」

明久「なんか今日のユキト黒いよ！そして僕がバカキャラからツッコミキャラになってるよ!!」

ユキト「作者の心情が影響してるんだろ。・・・ふう、世界滅ばねえかなあ」

佐藤「さ、作者さああああああんっ!?!」

「この物語はフィクションです。実在の人間には一切関係ありません。」

おそらく

明久「最後の四文字いらないよね!?!」

ユキト「はい、そういつわけで尺の都合によりさっさと次のキャラいくぞー。」

佐藤「そ、それでは私はこの辺で失礼しますね」

ユキト「あ、了解。佐藤さんお疲れ様ー」

佐藤「あ、は、はい・・・なんだかすみませんでした・・・」

明久「一人目でコレって大丈夫なのかな・・・」

モブ全員「・・・おい待て！まだ話は終わってないぞ！？」

ユキト「残念、君達の冒険はここで終わりなんだ。スネークかもーん」

ガララッ

鉄人「とりあえず補習ううう！！」

モブC「げえ、鉄人！？ちょ、とりあえずって何うぎゃああああ」

モブD「ちくしょおおおおおお！！のぎゃあああああ」

ゴミクス「どうしてこうなっくぎゃああああああああああああああああああ」

ボタンガタンドガガッ

ピシヤッ

しーん

明久「・・・十人以上いたのに一瞬で僕ら二人だけになったね・・・」

ユキト「・・・あの人トライアスロンだけじゃなくて別の何かもやってるんじゃないか？流派東方不敗とか」

明久「さすがにそれはありえ・・・なくもなさそうだね・・・」

ユキト「CV的にはむしろ試作二号機に乗るべきなんだろうがな」

明久「鉄人・・・一体何者なのさ・・・」

ガラッ

鉄人「誰が鉄人だ!!」

明久「うわびつくりした!?って、いたんですか先生!!」

ユキト「この一瞬で補習室送りにしたんだろうか・・・ていうか、そんなセリフの中申し訳ないが名前が鉄人になってるぞ」

鉄人「む？おお、本当だな。鉄人と呼ぶなと言うのに・・・作者までこれか」

ユキト「・・・まあ、丁度いいな。インタビュー二人目はスネークこと西村教諭にするか。というわけでなんかコメントくれ」

スネーク「いや、だから俺をスネークと呼ぶのは・・・って待て！名前を蛇に変えるな！！」

明久「でもダンボールかぶってたじゃないですか」

スネーク「それを言うならお前のお姉さんはもつと大変なことになるぞ・・・」

明久・スネーク「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ユキト「はいはい黙らない。さっさとコメントしてくれ」

スネーク「むう・・・では、読者の諸君に一言言っておくか。俺を『スネーク』と呼ぶのは著作権上問題ない場所のみにしてくれ、これは真剣に気をつけるよ」

ユキト「間違っても『文月学園放送部』の八ガキに『スネーク』とか書かないようにな」

下野「声優さんも困っちゃうからやめてね！本当にやめてね！！」

ユキト「中の人が出てるぞ明久」

下野明久「そんなの気のせいに決まってるだろ!!」

スネーク「・・・じゃあ、まあ俺は生徒指導があるから行くぞ」

ユキト「ああ、また何かあったらよろしくな」

ユキト「というわけでゲスト三人目いくぞ、入ってくれー」

ガラッ

小山「・・・ふう、やっと私の出番ね」

明久「あ、小山さん」

ユキト「八巻で再登場のキャラだな。どうやら九巻にも出てきそうだし、まあ将来性のあるキャラだ」

小山「あら、ありがとう。でも八巻なんてメタ発言していいの?」

ユキト「大丈夫だ。これはあくまで本編とは関係ないしな。それに、

「
明久「????メタ…メタモン…?えーと、何の話?」

ユキト「こいつは理解できないだろうしな」

小山「そういえばそうだったわね」

明久「ぐあっ!?な、なんか唐突にバカキャラに引き戻された気がする!」

ユキト「いつも通りだな」

小山「よかったわね、キャラが確立したわよ」

明久「全然嬉しくないッ!!」

ユキト「何言ってるんだ、お前からバカと女装とツツコミを取ったら何が残るっていうんだ」

小山「……………ごめん、想像できないわ」

明久「僕はその三つで説明できちゃうの!」?

ユキト「まあ明久いじりはこころへんにして、と。三人目の小山にコメントを貰う前にちょっと四人目について話しておこう」

明久「え、四人目?誰?」

ユキト「すぐわかる。小山、頼んだものは持ってきてくれたか？」

小山「ああ、アレね？一応持ってきたけど・・・何に使うの？」

ユキト「強いて言うなら・・・『吸血殺し（ディープブラッド）』
的ななにかだな」

明久「ちよつと待って！？何をどうしたら（なぜか変換できない）さんの話になるの！？」

ユキト「まあすぐわかる。小山、アレを出してくれ」

小山「はいはい。そういえば貴方体が小さくて物を取り出すのも苦労するくらい色々不便なのよねえ」

ガサゴソ

ユキト「・・・よし、出てきたな」

明久「・・・女子用制服？」

ユキト「悪いな小山、ちゃんと後で金は払うよ」

小山「それはいいけど・・・それ、何に使うの？そういう趣味なの？」

ユキト「いやいや、そんなんじゃないさ。今まで出てきた単語の関

ああクンカクンカ！クンカクンカ！スーハー！スーハー！スーハー！スーハー！いい匂いだなあ…くんくん？

んはあっ！子猫さんの茶色の髪をクンカクンカしたいお！クンカクンカ！あああ！！？

間違えた！モフモフしたいお！モフモフ！モフモフ！髪髪モフモフ！カリカリモフモフ…きゅんきゅんきゅい！！？

小説八巻のアキちゃんかわいかったよう！！ああああ…あああ…あっああああ！！ふああああんっ！！？

アニメ二期決まって良かったねアキちゃん！ああああああ！かわい！アキちゃん！かわいい！あっああああ！！にやああああ

OVAも決定して嬉し…いやああああああ！！にやあああああああん！！ぎゃああああああ！！？

ぐああああああああ！！！コミックなんて現実じゃない！！！！あ…小説もアニメもよく考えたら…？

アキちゃん は 現実 じゃ な い？にやあああああああああああん！！うああああああああ！！？

そんなああああ！！いやああああああああ！！はあああああん！！バカテストおああああ！！？

この！ちきしょー！やめてやります！！現実なんかやめ…て…え！？見…てる？7.5巻表紙絵のアキちゃんが私を見てる？

表紙絵のアキちゃんが私を見てます！アキちゃんが私を見てますっ！挿絵のアキちゃんが私を見てるっっ！！？

アニメPVのアキちゃんが私に話しかけてますよ！！よかった…世の中まだまだ捨てたモンじゃないんですねっ！？

いやっほおおおおお！！私にはアキちゃんがいる！！やりました美晴ちゃん！！ひとりでできるもん！！！！？

あ、コミックのアキちゃんあああああああああん！！いやああああああああああ！！！！！！？

あっあんあっああんあユキト様ああ！！さ、坂本くんっ！！久保くんああああ！！！！二股ああああ！！！！？

うっうっうっうっ……私の想いよアキちゃんへ届け……文月学園のア
キちゃんへ届け……！」

ユキト「はい、ここで先ほどの制服を廊下へぽーい」

玉野「せ、せいふくっきゃああああっ……！」ダッ

ガラッ

ピシヤ！

ユキト「そんなわけで出番終了。お疲れ様でしたー」

明久「・・・・・・・・・・・・・・・・」

小山「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ユキト「というわけで四人目は最近人気上昇中の玉野美紀。コメント内容はアキちゃんへの愛ということだ」

小山「・・・・予想していても、アレはなんとというか・・・・穏やかじゃないわね」

ユキト「玉野さんファンから苦情が来ないか心配だが、まあ『原作』でも概ねあんな感じだし多分問題ないだろ。・・・・って明久、さめざめと声を殺して泣くな」

明久「・・・・僕、死んでいい？」

小山「割とリアルでやばい状態なんだけど!？」

ユキト「安心しろ。これはあくまで本編じゃないんだから」

明久「・・・・そ、そうだよね!これは夢みたいなものなんだよね! !目が覚めたら、僕はまだ12歳の夏休みで、ラジオ体操に行つて、冷えたスイカを食べながら宿題をして、午後は友達とプールに遊びに」

小山「やめなさい!そのコピペは本当に洒落にならないわ!」

ユキト「やめろあらすな」

明久「ソウダ、コレハキツトユメナンド。ユメユメユメ」

ユキト「ぶっ壊れてるなあ・・・まあ、明久が復活するまで俺たちで話を繋ぐか。そんなわけで、小山。コメントどーぞ」

小山「そ、そうね・・・コホン。出番が欲しいっていうのが本音だけどそれは無理みたいだから、読者さんに一つだけ」

ユキト「ほう。何だ？」

小山「私とあのゴミクスは、無関係よ」

ゴ「裕香あああああああっ！！？？」

ス「嫌いぞ、静かにしろ」

ユキト「なんか絶叫が聞こえた気がしたが気のせいだな。それじゃ小山、お疲れ様ー」

ピシヤッ

ユキト「続けていくぞー。五人目六人目を同時に呼んでみた。じゃ、入れー」

ガラツ

学園長「おや、アタシの出番かい」

高橋「失礼します。・・・吉井君、どうかしました？」

ユキト「それには触れないでやってくれ。というわけで五、六人目は教師陣であるババアと高橋女史だ」

学園長「誰がババアだい！っていうか、アタシの名前も『ババア』だの『妖怪』だのに変更しないだろうね!？」

ユキト「ちっ、勘がいい妖怪だ・・・まああんまりしつこいのもアレだからな（何言ってるんだ警戒しすぎだろう）」

高橋「ユキト君、思考と言動が逆です」

ユキト「おっと、テンプレネタをまた作者が使ったか。こりゃ本格的にやばいかな？まあとにかく、何か言いたいことはあるか」

学園長「そうさね。案外アタシらは出番があるキャラだからねえ・・・何を言ったものか」

高橋「バカテストがないこの作品では私達は教師陣では相当出ていますからね。西村先生以外では」

ユキト「そうだなあ。なんというか、俺は『召喚システム』に物凄く左右される存在だからな。その管理とかを行ってる二人は物語の『元凶』として非常に使いやすいなだよ」

高橋「システムエラーを起こしてユキト君が〜という話ですね」

ユキト「ああ。幻想入りシリーズでのスキマ妖怪、転生モノでの神様、Fateにおける宝石遣いみたいな存在だ」

学園長「テンプレだねえ」

ユキト「別にテンプレを否定してるわけじゃないけどな（作者も使ってるし）。問題はそこからどうオリジナリティを出すことかだと思っがな」

明久「…あれ？なんでこんなにマジメな話になってるの？」

ユキト「おや、起きたか明久」

学園長「多分アンタが居ないからだろうよ」

明久「余計なお世話だババア！！」

高橋「では、吉井君も目が覚めたようなので我々はこれで失礼します」

学園長「ああ、そうだ。強いて言うなら、学生の読者さんは勉強もするよつに」

ユキト「キサマこの季節においての禁句を言いやがったな!？」

ユキト「なんか案外疲れるなコレ。じゃ次いくぞ、七人目はこいつだ」

久保「おや、僕の番かい？それじゃあよろしく頼むよ」

ユキト「チェンジで」

明久「はやっ!？」

久保「…そんな反応で大丈夫かい？」

ユキト「大丈夫じゃない、問題だ。色々まずい問題だ」

明久「…というか、七人目は久保君か。よかったー、今回は真面目そつな人が来てくれたよ」

ユキト「待て明久!確かにそいつは真面目でガチだが、それはお前にとって必ずしもプラスじゃないぞ!？」

明久「あれ、ユキトがツツコミ役に戻ってる……久保君すごいね、

何したの？」

久保「僕はいつだって君のことを考えているよ」

明久「キミさん…って誰？妹さん？」

久保「うん、予想通りの反応だ」

ユキト「はいそこまで。久保、さっさとコメントしていけ。お前の顔を見てると説教したくて仕方がない」

久保「む、そうかい？では、読者さんへひとつ聞きたいのだが」

ユキト「なんだよ」

久保「…一体なぜ、僕を吉井君のヒロインに推薦してくれなかったんだい！？」

ユキト「なにその発言！？つか作者がダメって最初から言ってただろこのバカ！！」

久保「しかし！木下君は平然と投票されていただろっ！？」

ユキト「あいつは男子でも女子でもねーよ！！」

明久「何言ってるのさユキト！秀吉はちゃんとした女の子だよ！！」

ユキト「お前本当にいらんときだけ会話に参加するのやめろ！！」

久保「くっ…と、とにかく僕は諦めるわけにはいかないんだ！僕は負けないよ読者さん！！」

ガラッ

ピシャン！！

明久「…???久保君はどうしたんだろうね一体」

ユキト「さあな。ま、この物語では島田ルート確定なんだけどな！
ざまあみる久保！！」

明久「またユキトが黒い！！」

ユキト「うるさい！次！八人目は島田葉月！！勝手に学校に入っ
ているか等のツツコミは受け付けない！！」

ガラッ

葉月「やりましたですっ！島田ルートなら葉月がバカなお兄ちゃんのメインヒロインですっ！！」

明久「あれ！？いつのまにか美波の立場が妹に奪われてる！！」

ユキト「『島田』間違いだな。まあ安心しろ葉月、順調にいけばお前にとつて明久はお義兄ちゃんになるからな」

明久「待ったユキト！妹キャラをメインヒロインに据えるって色々おかしいんじゃないかな！？」

ユキト「安心しろ、結果的に義妹になるから問題ない。ヨスガ ソラでもモメタが義妹設定でなんとか押し通しただろう」

明久「そういう問題じゃないよね！？というか義妹になってからメインヒロインになるってことはつまり」

葉月「あ、葉月知ってますですっ！それ、『NTR』ですよねっ！！」

明久「作者アアアアアアアアア！キサマこんな幼女になんてこと言わせてるんだあああああ！？」

ユキト「これは酷い…作者は間違いないくロリコン。しかも酷いほうの」

明久「葉月ちゃんファンの皆さんごめんなさい…！作者は後でボコボコにしておきます」

ユキト「まったくくだ。…さて、葉月。お前はコレ以上こんなところに居ちゃいけない。速やかにコメントを述べて脱出するように」

葉月「？わかりましたです。えーと、葉月は…バカなお兄ちゃんが大好きですっ！！」

明久「う」

ユキト「…そういうこと言う場じゃないんだけどな？ま、いいか。それじゃ、葉月の出番はおしまいな」

葉月「えー…葉月もつとバカなお兄ちゃんと一緒にいたいです…」

ユキト「次の本編で出番あるだろ？さ、行った行った」

美波「そうよ葉月、後でアキとはゆっくり話できるしね？三人でゆっくり」

瑞希「美波ちゃん、さりげなく自分を含めないでください」

葉月「うー…お姉ちゃんがそう言うなら仕方ないです…お兄ちゃん、また後ですっ」

明久「うん、また後でね葉月ちゃん」

ガラガラ…ピシヤン

ユキト「…やっぱり純粋な言葉は癒されるな」

明久「そうだね…ちよつと恥ずかしいけど」

ユキト「そのくらいは見逃せ。ああ、それと……」

お前らナチュラルに何やってんじゃああああああああ！！」

美波・瑞希「ぎくうっ！！！」

ユキト「ぎくうっじゃねえよバカ！脈絡もなく堂々と会話に入ってくんな！！！」

明久「ちよつと美波に姫路さん！？僕ら二人のことまだ呼んでないでしょ！？早いよ！！！」

美波「う、うるさいわね！ああでも言わないと葉月は納得しないで

しょ!?!」

ユキト「別に俺の言葉だけで十分だったと思うがな!?!」

瑞希「そ、それに明久君があんな小さな女の子をメインヒロインなんて言い出すのがいけないんです!えいつ!?!」

明久「ぐごああああ右腕に激痛があああっ!?!?ていうか僕はそんなこと言っていないいいいい!?!」

ユキト「あ、明久あ!ちくしょうなんて横暴だ!?!誰かあの乳ビンタを止めてくれ!?!」

瑞希「ちよっ!?!だ、誰が乳ビンタですかあっ!?!」

美波「瑞希!?!ア、アキにそんなことしたの!?!?…?…ウチへの当てつけは許さないわよっ!?!」

瑞希「美波ちゃんまで信じないでください!?!」

ギャーギャー

ユキト「か、カオス!?!この世は地獄だネコったれ!?!」

明久「ユキトあー!ネコカオスのことはいいから早く助けて両腕があああー!?!」

美波「アキ、ウチをメインヒロインにしたくせに巨乳に媚びるなんてえっ!!」

瑞希「あ、明久君! いやらしい想像しちゃ駄目ですうっ!!」

明久「ぐぎゃあああああああああ!」

ユキト「し、収集がつかん!! ええい面倒くさい、ここは本来呼ぶ予定だった二人も呼んでゴリ押しでいくぞ!!」

瑞希「ええっ!?!」

美波「だ、大丈夫なの六人も呼んで!?!」

ユキト「お前ら明久を処刑しながらナチュラルに会話すんのやめろマジで!!」

…そういうわけで、九人目から十二人目! 姫路瑞希・島田美波・木下秀吉・木下優子の四人だ!!」

ガラガラ

秀吉「うむ、お邪魔す…あ、明久あつ!?! お主、体のパーツがアーマードアのようになっておるぞ!?!」

優子「逆関節タイプね。二人共見事よ」

ユキト「おい優子…お前どんなキャラで喋る気だ。達人か何かか」

優子「いいのよ、ここは本編じゃないから何を喋っても大丈夫よ！」

ユキト「ひどい開き直りを見た」

秀吉「二人共、そんなことより明久を手当てするべきじゃろう！？割と酷いダメージじゃぞ！？」

明久「ひ、秀吉…君だけだよ…僕を心配してくれるのは…」

秀吉「む、むう？いや、それは人間として当然だと…思っのじゃが…」

ユキト「いや、俺も心配してるぞ？」

明久「あ、そうだね。じゃあ訂正、ヒロインの中で僕を心配してくれるのは秀吉だけだよ…」

秀吉「…う、うむ…リアクションに困るのじゃ…」

瑞希「あうっ！？また木下君への好感度が上がったやいました！？」

美波「ど、どうしてこうなるのよーっ！？」

ユキト「OK、ちょっとお前から一方的に殴られる痛さと怖さについてOHANASHIしようか」

召喚獣説教中……………

瑞希・美波「「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」」

明久「…凄まじい説教だったね…」

秀吉「…見てるこっちの心が折れそうじゃった」

優子「…ネタがちよっと古いけど大丈夫なの？」

ユキト「気にするな！」

優子「よくもこんなキチガイネタを!？」

ユキト「こっちはマジでわかりづらいだろうな…さて、話を戻すぞ。じゃあまずは秀吉からコメントを貰うか」

秀吉「うむ、ワシもちょうど読者殿に聞きたいことがあったのじゃ」

優子「あら、そんなのあったの？」

秀吉「うむ…まずは、これを見てほしいのじゃ。第二十八話のあとがきなのじゃが」

『そういうわけで、今後明久がどっちとくつつくかのアンケートを取ります。』

…こんなに無駄にアンケートしている作品はおしょうゆだけでしょうね、間違いなく。

- 1 ・瑞希とフラグ
- 2 ・美波とフラグ
- 3 ・秀吉とフラグ
- 4 ・他の誰かとフラグ（男子と美春と翔子は無理です）

ユキト「おお、選択肢分岐のやつか。で、これがどうした？」

秀吉「…選択肢3と4をよく見るのじゃ」

3 ・秀吉とフラグ

4・他の誰かとフラグ（『男子』と美春と翔子は無理です）

秀吉「…お判りいただけただじゃろうか？」

明久・ユキト「え、何が？」

秀吉「お主らわざとじゃろうっ！？ワシは男なのに何故ヒロイン候補に入っているんじゃああああっ！！」

ユキト「…だ、そうだが。明久、理由を聞いていいか？」

明久「秀吉は秀吉だからに決まってるよ」

ユキト「というわけで、お前の性別は『秀吉』だから問題ないわけだ。わかったか秀吉」

秀吉「ワシはそれをわかってはいかんじゃろう！！」

優子「…秀吉…」

秀吉「！？ち、違うのじゃ姉上！これは向こうが勝手に」

優子「　　BLなら許すわ」

秀吉「はっちやけすぎじゃ姉上！！」

ユキト「やれやれ、本編には関係ないからってなあ…まあいいや、

優子はコメントあるか？」

優子「そうね、『アタシの弟がこんなに可愛いわけではない』ってことくらいかしら」

明久「本当に言いたい放題だね」

ユキト「まあいいんじゃない？特別編だし。それじゃ、このくらいで十分かな。二人共、出番終わりだ。お疲れー」

秀吉「待つんじゃないやお主ら！ワシの話はまだ　　ちょ、姉上！？腕はその方向にはまがらな」

ゴキン

ピシヤッ

明久「…今、変な音が」

ユキト「聞かなかったことにしろ。
さて、優子が居なくなっただし、ここで秀吉ヒロイン化に関しての裏話でも語っておくか」

明久「あ、なんだか本格的に特別編のノリだね」

ユキト「実は作者も『秀吉ヒロインにしたい人ー!』っていうのはネタで書いたんだが、案外投票があって死ぬほど焦ったみたいだな」

明久「…自分で自分の首を絞めてるんだね」

ユキト「まったくだ。で、もしヒロインが本当に秀吉になったらどうするのかというネタを必死に考えて思いついたのが…」

『秀吉実は女の子だった説』だ」

明久「なにその胸が熱く、いや厚くなりそうな話!!」

美波「ピクッ

ユキト「何反応してんだ。

まあ、簡単に言うとも明久が事故で秀吉の全裸見たら『Oh、ナニがっついてねーじゃねーかハハッワロス!』というストーリーだ」

明久「その後僕が血の海に沈む未来が見えるよ…いろんな意味で」

ユキト「さて、そんな秀吉に狼狽しつつも話を聞いてみる明久。

すると『小さい姉上に男だと言われ続けたからそう思っていたのじゃ…まさかこんな…』的な反応が帰ってくる」

明久「いや、普通気づくんじゃないかな!？」

ユキト「この作品にそれを言うな…」

で、色々あって自分の気持ちに気づいた秀吉は翌日から女子として登校して明久と

みたいな話を考えてたらしいが『ユキト関係なくね?』という理由でボツった」

明久「なんて切実な理由!!」

ユキト「まあTSとか無理だしな。そういう意味ではヒロインが島田になって作者としては良かったということか」

美波「そ、そうよねっ!ウチ、これからも頑張ってる」

ユキト「うるさい黙れ」

美波「生まれてきてごめんなさいっ!」

明久「メインヒロインなのにすごい追い込まれてる!??」

ユキト「まったく…ヒロインになるなら暴力は禁止だからな。わかか??つ?た?な??」

美波「はいいつ!!(ガタガタ)」

明久「ちょ、ユキトやりすぎだよ…大丈夫、美波?」

美波「え、う、うん…ありがとう…」

明久「…」

美波「…」

瑞希「納得いきませんっ!!」

明久・美波「ひゃわああああっ!?!」

ユキト「おいおい姫路、今のは空気読め…」

瑞希「だってユキトくん!私だってヒロインなんですよ!?!それなのにあれを見せつけられるなん」

美波「読者の皆、本当にありがとうございますっ!ウチはアキと幸せになりますっ!?!」

瑞希「美波ちゃああああんっ!?!」

ユキト「これは酷い裏切りを見た」

明久「(…僕、喋るに喋れない状況だよね)」

瑞希「う、うづつ…そんな、あんまりです…いくら読者さんの投票だからって…」

ユキト「あー、まあ落ち着け姫路」

瑞希「ユキトくん…」じりじり

ユキト「おいやめるこっちに近付くな。流石に特別編で窒息死はしたくない」

瑞希「がーんっ！？ユ、ユキトくんにまで拒絶されるなんて…」
「こうなったら…」

オヤシロ様の祟りを

ユキト「はいドラマCD時代の中の人を持ち出すのはやめようね原田さん！…」

瑞希「かーなーしみのー…むーこーうーにはー」

ユキト「そのBGMも死人出ちゃうからやめろおオオオ！！轢死も nice boat もアカンから！…」

美波「ねえアキ、後で葉月と三人でどこか行かない？」

明久「え？いいけど…でも僕持ち合わせが…」

美波「ふふ、そんな甲斐性もないのがアキラしいわね…そこがいいんだけどっ」

明久「…えっ？それって…」

黒瑞希「？ユ？ル？サ？ナ？イ？」

ユキト「お前らも刺激してんじゃねーよバカアア…！ちよ、この作品がR15残酷描写アリになるうっうっ！？」

後半へ続く

100万PV記念特別編(前編)(後書き)

ヤンデレ属性は僕にはありません、琥珀です。

本当っ！につ！遅れて申し訳ありませんでした！！

腱鞘炎や風邪やエクストリームバーサスなどが重なり更新最遅記録更新。もーいつになったら楽になるんだ俺は！

しかも今回、二分割です。

ここまでで12230字で過去最高なんですけどね。終わらない学園祭…

中身については全部ボケ倒しでお送りしました。

割とぶっちゃけた内容ばかりになってしまいましたので嫌いな内容やネタがありましたら済みません。

ああそうそう、福原先生と常夏コンビはモブキャラの中に含まれているので出ません。福原先生はまだしも常夏コンビは必要なさそうですしね。

そして哀れな須川君。すまん、何故か知らないが君に出番はないんだ。

しかし、100万PVですか…感動しますね。

評価も2000ptを超えたようで、本当に皆様ありがとうございますっ！

これからも『おしよっゆ』をよろしくお願いします！！

追記：

試験召喚戦争編で設定ミス等の御指摘を頂きましたが、都合により
修正は次回にさせていただきます。

100万PV記念特別編(後編)(前書き)

お待たせしました、後編です。

やっと本編を書ける…いや、その前にVanityかな…ともあれ、
どしどし。

100万PV記念特別編（後編）

ユキト「 さて、ようやく女性陣もクールダウンしたか」

明久「……………」

ユキト「これ以上本編が進まないのはまずいからな。じゃ、お前らさっさとコメントしろ」

瑞希「 「

美波「 「

明久「ねえ、ユキト…」

ユキト「なんだ、どうした明久」

明久「コメントを求める時にさ、刃物はいららないんじゃないな」

ユキト「はっはっは。何を言ってるんだ明久。この作品の唯一の良心であるこの俺がそんなことするわけないだろう」

明久「ちよっと待った！いくら今回地の文がないからって口頭で誤

魔化すのはよくないと思う！！」

ユキト「やだなあ…別に俺キレてないっすよ」ブンブン

明久「真顔で大剣振り回すのやめようよ明らかにキレてるよね！？
というかいくらなんでもネタ古すぎだから！！」

ユキト「…まあ、冗談はこころへんにしとくとして。なーに、この
剣については心配はいらねーよ」

明久「…え？安全なものなのそれ。ていうか、なんか凄い赤黒い剣
だねそれ」

ユキト「あー、『フルンディング』っていうんだがな。敵の武器の
攻撃性を『ゼロにする』だけのものだから大丈夫だ、問題ない」
出典：とある魔術の禁書目録

明久「…本当にそれだけ？」

ユキト「おう。まあガチの斬り合いもできるがこの作品はギャグだ
からダメージはないよ。

…まあ、コイツらにとっては意外な効能があったようだな」

明久「意外な効能？なにそれどういう…」

美波「…ゼロにされるのはいやあっ…！！（ガクガク）」

瑞希「…ゼロはやめ…やめてくださいいっ…！！（ガクガク）」

明久「ちよ、ふ、二人共おー！？何でそんなに怯えてるの！？この剣はあくまで『武器の性能をゼロにする』だけじゃなかったの！？」

ユキト「…『女の武器』、ってやつじゃねーの」

（数分後）

姫路「読者さん、私は決しておっぱいキャラじゃないこと…忘れな
いでくださいいねー！」

美波「：ウチも貧乳キャラなんかじゃないんだからねっ！！」

ガラッ

ピシャン

ユキト「：やれやれ、やつと行ったか。やけに時間くつたな」

明久「結局、二人が言った女の武器って、えーと…

：やめとこ。嫌な予感しかしないや」

ユキト「さすが番外編の明久、賢明だな。

じゃ、十三人目は吉井玲さんだ。入ってくれー」

明久「僕は番外編じゃなきや賢明な判断すら下せないの！？」

ガラッ

玲「私、吉井玲はこの世界で一番アキくんを愛」

ユキト「はい残念それ既に言われています!」

デブーン

明久「姉さん、アウトおおおお!!」

玲「あらら…先を越されてしまいましたか」

明久「待った姉さん!先を越す以前に肉親に愛の告白するのはおかしいと思うべきだ!!」

玲「愛に限界はないんですよ、アキくん。

私の気持ちは愛を超え、憎しみを凌駕し、宿命と成り果てたのです」

明久「宿命!？」

ユキト「どこのフラッグファイターだあんたは」

玲「この気持ち、まさしく愛です」

ユキト「…玲さんがこんなこと言って大丈夫なのか？」

明久「かなり駄目なんじゃないかなあ」

ユキト「ま、そこらへんは作者バカ乙ということで流す。

さて、コメントを貰う前にちょっとこの作品においての玲さんについての話をしよう」

明久「え、なにそれ。姉さんについて…？何か特別なことあったわけ？」

玲「ああ、ひよっとして、それは私の『登場時期』のお話でしょうか」

明久「そういえば、『おしょうゆ』では随分早い登場だったね」

ユキト「ああ。玲さんは本来『原作』では、もっと先で登場するキヤラだからな」

玲「アキくんの生活を是正して、同棲するのが目的でした」

明久「同棲を目的にしないでよ!？」

ユキト「まあ、それもあるが元々は『明久が親に仕送り要求をした』ことが切っ掛けでやって来るはずだった」

玲「その連絡でアキくんの現状を確認しようと思ったわけですからね」

ユキト「で、その仕送りを要求する理由は『美春の父親に恋人だと勘違いされたから』なんだが…作者曰くそのイベントは俺がいると発生しないらしい」

玲「おや。ユキト君がいると誤解されることなく、きちんとアルバイト代を頂けるといことですか？」

ユキト「多分な。まあ、そもそも娘をストーキングしてる奴がマスターやってる喫茶店でバイトなんかやらせないと言つものもある」

玲「他にも、私が本編の中で言った『アキくんの生活はユキトくんのおかげで良くなっている』という理由もあるのでしょうね」

明久「へー。だから姉さんの出番はこんな早いところになったんだねえ」

ユキト「いや、実際はスネークネタやりたかったただけだ」

明久「綺麗にまとまっていたのにオチが最悪だ!!」

ユキト「そんななんいつものことだろバーカバーカ!!」

明久「それは禁句だよユキトっ!？」

ユキト「…まあいい。で、ひと段落したところで玲さん、コメントどうぞ」

玲「ふむ…では、アキくんに一言」

明久「え、僕？読者さんへ向けるはずなのに趣旨がズレてるなあ」

玲「女の子とお付き合いをしたいなら、女の子になりなさい」

明久「なれるかああああああっ！！」

ユキト「はい、玲さんお疲れさん。また本編でよろしくな」

玲「はい。それでは皆さん、『文月学園放送部』もよろしくお願
いしますね」

ピシャン

ユキト「なんか『原作』に媚を売ってるような…考えすぎだろっか」

明久「…はあ。なんだか叫んでばかりで喉が痛いよ…ユキト、飲み
物もらえる？」

ユキト「おう。なんか知らないがマツ スコーピーが死ぬほど置いてあるから飲んでいいぞ」

明久「作者の趣味かなこれ？まあいいや、味がついてるし砂糖いっぱいだし」

ユキト「なんかお前、最近ナリを潜めていた貧乏っぷりが再発してないか…」

ゴクゴク…

雄二「あ、玉野だ」

明久「ぶばあっ!?!」

ユキト「おわあっ!?!汚な…ってちょっと待て、なんで既に雄二がここにいるんだ!?!」

雄二「何言ってるんだ、明久を不幸にできるチャンスはこの俺が逃すわけねーだろ？」

ユキト「嫌がらせのためにスニーキングスキル極めるのってどうなんだよ!?!」

明久「げ、げほっごほっ…!?き、キサマなんてことをげふげふあ
!?き、気管に…ぐふっ」

雄二「お、予想よりダメーシ食らってるな。いやー幸せだ」

ユキト「歪んでる！こいつ明らかにおかしい歪み方をしてるぞ…！」

雄二「まあ今更だろ？それに、この世界では歪んでるのが普通すぎ
て逆に誰も疑問を抱かぬーよ」

翔子「…そんなことない。私の雄二への気持ちは真っ直ぐ」

雄二「ほらな、見てみるユキト。

…この世界はな、歪みが当たり前になってるんだよ…!!」

ユキト「…なんか普通に可哀想になってきたな。

そついうわけで、十四、十五人目は坂本雄二と「坂本」翔子だ」

雄二「待てコラ明久てめえっ!?さりげなく翔子の名字を変えてん
じゃねえぞ!？」

明久「え、霧島雄二がよかったの？」

雄二「お前のその純粹に不思議そうな顔が死ぬほどム力つくわ…！」

翔子「…吉井はいい人」

ユキト「霧島。お前の将来が俺は死ぬほど心配だよ」

翔子「……ユキト。雄二を悪く言うなんて、めっ」

雄二「おい待て翔子。『俺が悪い』という前提をまず撤回するところから始める」

明久「いやあ……人助けって気持ちがいいね、ユキト！」

ユキト「もうこいつらは真人間には戻せないのかなあ」

ユキト「さて、恒例のコメントを貰う前にここで『おしょうゆ』についての訂正のお知らせだ」

明久「あれ、また何かミスしたの？」

ユキト「うーむ、そういう言われ方をすると心苦しいな」

雄二「まあ、ミスはミスだ。きちんと謝らないと色々やべーぞ」

ユキト「ま、その通りだ。さて、訂正箇所は随分前の『試召戦争編』でのことなんだが」

雄二「あー、そこ覚えてるな。『俺がサドンを挑まないのはおかしい』ってミスがあったところか。ひよっとしてまだミスがあったのか」

ユキト「・・・その通りなんだよなあこれが。さて、今回の訂正は『予備設備』についてになる」

明久「僕たちFクラスが引き分けの代償として貰ったやつだね」

翔子「・・・代わりに私は雄二をゲット。みんな幸せ」

雄二「俺の人権はどこへ行った!？」

ユキト「(素直になれねーなコイツも)で、その予備設備についての設定だが・・・

『Aクラスが負けたときのために、Bクラスの設備も用意してあるはずだ』というのが俺の主張だったわけだったろ?」

明久「え、そのどこがおかしいの?別に問題はないと思うんだけど・・・」

ユキト「ところがあるんだな、問題が」

翔子「・・・Aクラスは最上位クラスだから」

雄二「ああ、そういうことか。確かにこりゃマズいな」

明久「?????」

ユキト「つまりだ。例えばAクラスとBクラスが試召戦争をやったとする。すると」

・ Aクラスが勝利した場合

Bクラスの設備がCクラスのものになり、Aクラスは変化なし

・ Bクラスが勝利した場合

AクラスとBクラスの設備が『交換』される。

・ つまり、Aクラスは敗北した場合、必ず『設備交換』をすることになる。

ユキト「この通り、設備を『交換』するだけだから、実はAクラスには『予備設備』がいらなんだよッ!!」

バァーン!!(j.o.j.o風のロゴで)

明久「な、なんだってー!?!」

雄二「おいおい、マズいんじゃないのかこれ」

翔子「・・・間違いなのは確か。…でもこれ、『訂正』なんてできる?」

ユキト「作者もそこを悩んだんだよなあ。文月学園は金持ちだから設備いっぱいあるんだよ!!とか

相討ちの場合があるじゃん！！とかの言い訳を必死に考えてた」

明久「ちよっとそれは苦しいんじゃないかな・・・」

ユキト「と、悩んでいた作者だったか！ここで一発逆転のスーパー言い訳を思いつくことに成功した！！」

雄二「いや言い訳の前に読者さんに謝るべきじゃねーのか普通」

翔子「・・・ごめんなさい（ぺこり）」

ユキト「うるせーよ！多分あとがきでなんとかしてるよ作者も！で、思いついたキーワードが・・・『冷蔵庫』だ」

雄二「は？ダークマター？」

ユキト「ていとくんは関係ないだろ！いい加減にしろ！！」

明久「あまりにもわかりにくいネタだよ雄二にユキト！！」

雄二「作者は原作厨だからなあ…で、結局『冷蔵庫』って何のことなんだ？」

翔子「・・・Aクラスには備え付けの冷蔵庫がある」

明久「あ、そういうえばそうだったね。で、それがどうしたの？」

ユキト「何言っただおまえ、つまり明け渡されたAクラスには霧島が口をつけてたコップとか置いてあるんだぞ？」

ユキト「…まあ、この学園の連中がこうなるのは目に見えているだろっ」

明久「成程・・・間違いなくそうなるね。秀吉は可愛いし」

ユキト「そもそもアイツはFクラスなんだけどな」

翔子「・・・間接キス・・・なるほど」

雄二「おい翔子。おまえ何か俺にとってヤバいこと考えてるだろ。ていうか根本的解決になってねーじゃねーか！！俺たちは『予備設備』の話をしているのであって、Aクラスの設備を手に入れたBクラスの話をしてどうすんだ！！」

ユキト「いや、俺が言いたいのさ『さすがに他人が使っていたものをそのままは使いたくない、もしくは使わせるわけにはいかない』ということだ」

雄二「・・・まあ確かに飲み物とかはマズいだろうが・・・かと言って、Bクラスにはそこまで衛生面に関するものは置いてなかっただろ？」

翔子「・・・この作品では一応氷水が備え付けてある（第十一話参照）」

ユキト「大丈夫だって、Bクラスも同じようなノリで・・・」

イメージ図その2

モブ 「いやー、念願のBクラスだぜー。ん、そういえば席順とかどうなってるんだ？」

モブ 「あ、そこ気をつけたほうがいいぞ」

モブ 「ん？なんだ、何か虫でもいたのか？」

モブ 「いや、そこはあの悪名高いゴミクズの席だからな」

モブ 「先生！設備はちゃんと新しいの用意してくださいよー！！！！こんなの使えるわけないじゃないですかー！！！！」

ユキト「と、なるのも目に見えているからな」

雄二「おお、なるほど」

明久「それなら説得力のある理由だね!!」

翔子「・・・ユキト、それは」

ユキト「何も言うな霧島。お前の疑問も当然なんだが、もうこれしかなかったんだ」

正直、作者ではこのあたりの言い訳が限界でした。読者の皆様、
本当にすみません

ユキト「だらしねえな作者!!」

ユキト「さて、気を取り直してコメントのほうに移るか。二人とも、何か言いたいことあるか？」

雄二「おう、ようやくか。山ほど言いたいことがあるぞ俺は」

明久「…ちなみにそれ、誰に？」

雄二「作者とかお前らにだ」

明久「やっぱり趣旨がズレてるよ！」

雄二「気にすんな。これは読者さんに意見を伺うという意味合いもある。さあ、俺のお前らに対する文句を聞いてもらっぞッ！」

ユキト「…多分俺よりは少ないんだろうな、文句の量」

雄二「・・・と、とりあえずだな。まず、俺の扱いが酷すぎるだろこの作品！」

明久「え？」

ユキト「え？」

翔子「…え？」

雄二「待てテメエら！なんでそこで疑問形になる！

ていつかユキトはネタだとしても残り二人の反応がおかしいぞ！」

ユキト「…まあ、うん。冗談はさておき、確かにその通りだな。どれ、もっと具体的に言ってみるよ」

雄二「おう。例えばだな、俺が出てくる時に間違い無く翔子も現れるだろう」

明久「確かにそうだね。なんで？霧島さん」

翔子「…妻だから」

雄二「例え妻でも四六時中一緒にいる訳じゃねーだろ！」

ユキト「別にいいじゃねーか。美少女が常に一緒にいてくれるんだから」

雄二「翔子が居ると必ずと言っていいほど俺が酷い目に逢うのにか！？おかしいだろう色々と！！」

明久「だそうだけど。霧島さん、なんでそんな風になるの？」

翔子「…妻だから」

雄二「世界全ての夫婦に謝れ！！」

ユキト「（…最近は押し倒してキスされそうになったくせに）しかし、これは霧島のせいであって作品の文句としては少し違うんじゃないか？ここで言われてもな」

雄二「いや、俺が言いたいのはこの作品は『俺が翔子に襲われるイメージ』だけをひたすら描写してるじゃねーか、ってことだ」

ユキト「ああ、なるほど。確かに、『原作』だとFクラスでバカや
つてる時とかは霧島はいないもんな」

明久「で、雄二は要するに『霧島さんと一緒にいる時以外の自分も
描写しろ』って言いたいんだね」

雄二「えらい物分りがいいな明久。少し寒気を感じるぞ」

明久「黙れこのバカ!!」

ユキト「ふむ。じゃあ、作者が何故雄二のそういう場面を書かない
のか、ちよつと聞かか。おーい作者ー」

カパッ

はらり

明久「あれ、何今の擬音」

翔子「…天井から紙が降って来た」

雄二「なんでこんな変な渡し方なんだ…」

ユキト「こまけえことはいいんだよ。えーと、読み上げるぞ。『作者が雄二と翔子をくつつける理由、それは』」

三人「……それは?」「」「」

ユキト「『ただ単に翔子が人気キャラで、読者さんウケがいいだろうからです』だそうだ」

雄二「おいコラ待てエエエエエエエ!? なんだその媚びまくった理由は!?!」

明久「まあ、霧島さんは作中でも人気だからねえ」

翔子「…(ポツ)」

雄二「お前が俺に今までしてきたことのどこに赤面する要素があった!?!」

ユキト「『マジレスすると誰かが酷い目に逢うってというのは非常にギャグとして使いやすいのです。』

で、雄二と翔子ならなんだかんだで真面目な恋愛的進展をさせることも簡単なので彼が犠牲になるわけですね(笑)』だだよ。…これは酷い」

雄二「作者アアアアアアア！お前の（笑）はスイーツ（笑）と同じ種類の奴だろオオオオ！！」

明久「雄二ざまああああ！！」

雄二「明久テメエ表へ出やがれ！！」

明久「上等だよ雄二！マツ スコーヒーがどんな味が教えてくれるわ！！」

雄二「それは普通に飲めばわかるだろ！！」

ギャーギャー

ユキト「…さて、霧島。お前もコメント言ってさっさと帰ってくれ」

翔子「…ユキトも大変」

ユキト「そう思っんならちょっとは自重してくれないかな」

翔子「…後でプレイ ルーで対戦してあげる」

ユキト「ここでまさかの声優ネタ！無理矢理すぎだろ！！」

翔子「…それはそうと、私のコメント。読者さんに感謝の言葉」

ユキト「マイペースだな…って、感謝？何をだ」

翔子「…私達の娘の名前を応援してくれてありがとう」

三人「お前一番のバカだろ！！」

ピシャン！

ユキト「…や、やっとあの天然から解放されたか…そろそろ体力が持たないぞ…」

明久「の、喉が…ゴクゴク…ぷはー。ふう…とここでこの企画、あと何人くらいいるの？」

ユキト「それはえーと…あと三人＋らしい。…なんだって？」

明久「あ、もうそれだけなんだね。それじゃ、次の人に入ってもらおうか。さっさと終わらせたいし」

ユキト「そうだな。んじゃ、次の…」

土屋「…もう来ている」

明久「うわっ！い、いつの間に…ってあれ？誰、土屋って」

ユキト「いやいや明久…お前流石に知り合いの顔ぐらい覚えておけよ…」

ムツツリーニ「…そこまでバカだったか」

明久「そこまでバカじゃないやい！」

そ、そういうことじゃなくて、僕はムツツリーニなのはわかったんだけど、なんか名前が違ったって…あれ、直ってるね」

ムツツリーニ「…！？」

ユキト「おや、本当だな。作者としてもこっちのほうがしっくり来るみたいだな」

ムツツリーニ「…!! (ブンブン)」

ユキト「はいはい予定調和予定調和。というわけで十六人目は土屋康太ことムツツリーニだ。で、コメントあるか？」

ムツツリーニ「…俺はムツツリじゃない…!!」

ユキト「そうだな。最近のお前はオープンだし」

明久「あ、それ僕も思った。なんか知らないけど工藤さんにフラグ立ててるしね」

ムツツリーニ「…!?(ブンブン)」

ユキト「ふむ。じゃあムツツリーニのコメントはこれくらいにして、さっさと次の奴を」

「ちょっと待ったっ!!」

明久「だ、誰!？」

ユキト「む、この学園都市アニメのOPを歌ってそんな美声…なんじよ、じゃなくて工藤か!!」

愛子「な、なんだか凄く嫌な特定の仕方だね!？」

ユキト「まあ とノエルの声優が同じだと聞き分けた俺の耳だからな、仕方ない」

明久「前回の時はジンとハクメンだったのに変わってる！？ていうかその二人についてはストーリーやればわかるでしょ！！」

ムッツリーニ「…何をしに来た、工藤…！」

明久「おおっ！ムッツリーニが女子を前にしてカメラを構えていないよ、ユキト！！」

ユキト「俺たちは今、奇跡を拝んでるらしいな…」

愛子「もうっ！二人共、話が進まないよ！ボクも今回はかりは文句を言わなきゃ済まないんだから！！」

ユキト「？あれ、お前文句なんてあったの？あ、残念だけど『出番くれ』ってというのは既に言われたから使えないぞ」

愛子「そうじゃなくてっ！」

びしいっ！

愛子「ボ、ボクがこんな知識だけのヤツになんかフラグを立てられてるわけないでしょっ！！」

バーン

ユキト「あ、読者さんに詳しく状況を言うと、只今工藤がムツツリ
―二を指差したところですよ」

明久「地の文が使えないって面倒だねえ」

愛子「もーっ！二人共おーっ！！」

ムツツリ―二「…お前達はいい加減話を聞け」

ユキト「いやあ…だってなあ？」

明久「僕から見ても照れ隠しにしか見えないよこれは」

愛子「そ、そんなことないよ！？ボクは…」

明久「だってさ、不本意とはいえこの作品ではナマチチ見られてる
んでしょ？元々ライバル心が多少あった相手に恥ずかしいところ見
られて、でも相手も何故か知らないけどブツ倒れちゃったから怒る
こともできなくて、けどふと自分の貧相な体でもあんな反応を
してくれたことがほんのちよつと嬉しくてちよつかいをかけ始めた
らいつの間にか一緒にいるのが楽しくなってきた、たまに話題を蒸
し返されると胸がドキドキ熱くなってくるのを自分でも自覚しなが
らも気持ちを押さえつけてきつかけを待っている
みたいな露骨なフラグ立てだね」

愛子「……………！？（ばくばく）」

明久「あ、凶星っばい」

ユキト「…よくそんなにペラペラ喋れたな。正直お前が別人に見えたぞ」

明久「うん、そうだね。なんというか…エンディングが見えたんだよ」

ユキト「か、神…!!」

明久「もう感想で予測されてたネタだけどね…」

ユキト「ま、誰でも思い付くわな」

愛子「……………ち…」

二人「「ん?」「」

愛子「違うよおおっ!!ボクはあんなムッツリ好きなんかじゃないんだからあああっ!!」

ダッ

ガラガラピシャン！！

明久「……………」

ユキト「……………」

明久「…顔、真っ赤だったね」

ユキト「…恥ずかしかったんだろっなあ」

明久「…やりすぎたのかなあ？」

ユキト「多分な」

明久「うーん、後で謝っておいたほうがいいね多分…」

ユキト「どうだろうな？本人としても蒸し返されたくはないから何も言わないほうがいいんじゃないか」

明久「…女子って難しいねえ」

ユキト「お前の口からそんな言葉が出るとは、やっぱり今回のお前には落とし神が憑いてるな…というわけで、十七人目は工藤愛子でお送りしました」

明久「…あれ？ところでムツツリーニは？さっきから静かだけど」

ユキト「ああ、あいつなら」

ユキト「お前がフラグについて語ってた時に出血多量で運ばれていったぞ」

明久「思い出し鼻血!？」

明久「そんなわけで、前後編に分かれた特別編も最後の一人になっただね」

ユキト「ああ。作者の気力もないしさつさと呼ぶか。

そんなわけで最後は、『おしょうゆ』のヒロイン、清水美春だ!!」

ワ

パチパチパチ…

美春「…こ、こんにちは清水美春です…うっ…ヒロイン扱いって物凄く恥ずかしいです…」

明久「あれ、清水さんのキャラがおかしい！？僕の顔を見たら迷わず分度器を投げつけるキャラだったのに!？」

ユキト「僕の天敵がこんなに可愛いわけがないってことだな」

美春「う、いえその…今は自分の気持ちがよくわかっていないので、なんとというか色々準備中なんです…」

明久「うーむ…それにしても、清水さんはこの作品で一番変更されてるキャラじゃないかな」

美春「そうですね。作者さんのイメージとしては中野梓さんのキャラに近づけようとしているらしいですよ」

ユキト「けいおん!か…っ！か作者としては変更しまくって文句が来ないか心配だったんだが今のところなんもなくてよかったよ」

美春「前例ないですもんね、私に焦点を当ててるなんて」

ユキト「まあなー。だからこそ作者は『誰もやっていない』ことをやるためにヒロインにしたわけだが」

明久「なんか中の人のキャラになりつつあるよね。中野関連で」

ユキト「誰が上手いことを言えと」

ユキト「さて、ここでコメントの前に美春についての補足をしておこう」

明久「補足って…何を？」

ユキト「島田のこととか、俺に対しての感情は具体的にどんなものなのか、とかだな」

美春「ちょっ!?!?これ、美春にとって公開処刑みたいな企画ですね!?!」

ユキト「まあ我慢しなさい、それがバカテス作品のヒロインってものだ。」

さて、まずは『島田のことを現在どう思っているか』を答えてくれ」

明久「今さらりと問題発言を…えーとつまり、ユキトを今好きになりかけてるけど美波のことはどうするの? ってことだね」

美春「え、えーと…お姉さまのことは勿論好きですけど、お姉さまに何かをしてユキトさんに迷惑がかかるなら、したくないというか」

明久「…むづ。じゃあ、ユキトに迷惑がかからない状態なら色々するの?」

美春「どうでしょう…今はその、

(…ユキトさんのことばかり考えてて他のことを考えていないというかなんというか)によ」

明久「?清水さん?」

ユキト「乙女は複雑なんだ、明久。そのへんにしといてやれ」

明久「うん、まあ…わかったよ」

ユキト「で、次は『今の美春の俺への感情はどんなものなのか』だとさ」

美春「つつつ〜!?!」ビクン

明久「…なんというかユキト…よくそんなことを自分で平然と言えるね」

ユキト「いやいや、美春から俺に向けられてる感情はそんなピンク色なものじゃねーぞ」

まったわけだ」

明久「プシュー」

ユキト「で、彼女にとってユキトという存在は『唯一のまともな男性』という風に映るわけだな。

そんなわけで俺は否応なく特別な存在になっているわけだ」

美春「ゆ、ゆゆゆユキトさんっ！？や、やめてください美春の心を全力でバラさないでえっ！？」

ユキト「ん？いや、でも合ってるだろ？」

美春「合ってるから夕チが悪いんですっ！！」

ユキト「そうか？まあ、そんなわけで俺は美春に意識されてはいるが、このサイズだから恋愛感情は芽生えていないだろう。

だから今美春は、自分欠けている『父親のイメージ』と重ねて俺との距離を測っている途中なのさ」

美春「ううう…じ、自分でもよくわかってない感情を言葉にされると頭がぐるぐるします…」

ユキト「ははは、悪かったな。まあ解説のためということと勘弁してくれ。で、わかったか明久…む」

美春「…あ」

明久「ウン、今日モイイ天気ダナア、ハツハツハツ」

ユキト「…オーバーヒートしたか」

美春「…あの人は一体何者なんですか？」

ユキト「俺が知りたいなそれ。

やれやれ、仕方ねえな…俺はこいつを保健室に運ぶから、美春はコメント言ったら帰っていいぞー」

美春「あ、は、はい。お疲れ様でした、ユキトさん」

ユキト「おう、お疲れー。よっこいせ…」

ズリズリ…

美春「……………」

美春「美春のこの気持ち…」

美春「確かにユキトさんにはお父さんみたいなイメージがあります」

美春「…けど、それは違う気がするんです」

美春「たぶん、それが本当のことじゃないんです」

美春「…えっと、だから…私のコメントは…」

美春「 美春が、ユキトさんを好きになれますように、です」

美春「って、美春はなんて恥ずかしいことを言ってるんですかあああ
あああああああっ!?!?」

ユキト「さて、これで終わりだな…ん？何、まだある？」

ユキト「…最後に俺からのコメント？ああ、『+』って俺のことだったのか」

ユキト「そつだなあ……強いて言うなら、『おしよつゆ』はあつゆゑ
コラボやキャラ貸し借りを受け付けるってことくらいか」

ユキト「ああ、それと」

ユキト「何度も繰り返してる言葉だけど」

『これからも、この作品をよろしくお願いします』

ユキト「…うーむ、コメント制限を守ってないが…
まあ、いっか」

100万PV記念特別編（後編）（後書き）

色々投げっぱな後編でした。

エアバーストとEXVSが僕の自由をうばいますだれかたすけてください

冗談はさておき、流石に次回は一週間後に投下したいですね。分量はこれよりは少ないはず…

でももう一つのお話もあるし…何故連載を始めたんだ、俺。

さて、本文中にも出ていますが、今回作中の設定についての訂正をいたしました。

いや、言い訳が本当にこれくらいしか…納得できなくても適当にスルー推奨、いやむしろしてくださいお願いします。

つか、本当なら『ムツツリーニは死にすぎだからいい加減マトモな扱いをしるよ！』っていうユキトのツッコミを入れるはずだったんですが…何故かまた彼は流血沙汰です。ごめんムツツリーニ…

さて、コラボの話ですが基本的に僕は誰でもウエルカムですよ。キャラを出してほしいってのも良いし貸して欲しいっていうのもバリバリOKです。

ただし、『こういうオリキャラ思いついたから出してくれ』は無理です。ちゃんと作品（つまり世界観）があるキャラを使ってくださいいな。

何はともあれ、記念を祝えてよかったです。

つーかさっさと本編を…十一月には終わるかなあ、学園祭。

第三十一話（前書き）

遅れるのは宿命なのでしょう。死にたい。

第三十一話

前回までのあらすじ。

明久、性別崩壊の危機。

「姉さんは僕をなんだと思ってるのさああああっ！！」

「はい？異性ですが」

「おかしいでしょその捉え方！ていうか異性だと思ってるなら女装させようとしないでよ！！」

「ふふ。男の娘になればアキくんを愛せる女性は私だけになりますからね」

「まず愛すのをやめてくれないかなあ！！」

いかん、なんか最悪な方向に頭が良いぞこの人。

さて、えらく久しぶりに本編に戻ってきたが、開幕から玲さんは全力でトバしていた。

なんというか、明久はよく胃とか痛めねーな。アレか、物事をすぐ忘れるようになったのはこういうDVが原因で…あれ？おかしいな、涙が出てきた。

「召喚獣さん、どうかしたですか？泣いてるです」

「ああ、気にしないでくれ…目から汗が出ただけだ」

すみません今嘘をつきました。

でも子供への教育上明らかによろしくない話題なので許してほしい。

「そうですね…葉月などでしてあげます…えへへ」

そう言いながら、俺を抱いたまま頭を撫でてくる葉月。なんか理由をつけて撫でたがるあたり、お姉さんの立位置に憧れているのだろう。

うん、いいよ。俺が子供扱いされるよりお前の未来のほうが断然大事だから、好きなだけ子供扱いするがいいさ…

「だから姉さんっ！！僕はあくまで男として生きたいんだよーっ！！」

「って落ち着け明久ー！！自分の格好と発言が更に矛盾して取り返しがつかないことになってるぞ！？」

「え、アレ男かよ」

「ママーあのお姉ちゃんお兄ちゃんなのー？」

「なるほど、変態だな」

『いやいや、需要はありそうだ』

…お忘れかもしれないが、現在地は廊下である。しかも文化祭中の明久叫びに対するリアクションがそこらで見えているところを見ると、どうやら明久（現在女装中）は明日から変態扱いになるのが確定してしまったな…

あいつの未来も誰か助けてあげてくれ、頼むから。

「そつえば、葉月さんは何か見て回りたい場所はあるのですか？」
さて、ようやく色々ギリギリな会話が終わり、落ち着いた俺達は出し物巡りを再開することにした。

まあ再開と言っても、まだ行く場所も何も決めていない状態である。行動の指針を定める時間もなかったしなあ。

そんなこんなで、『まあ、店をブラつきながら探せばいいか』という程度しか考えていない俺だった。

と、そんな状態だったのだが、現在タイミングよく玲さんが最年少の葉月に意見を求めてくれたところである。

まあ確かに、何も決めないよりは食いたいものとかを決めて動いたほうがいいのも確かではある。

気がきくなあ、と玲さんの方を見ると、向こうは『お役に立てましたか?』的なアイコンタクトを俺に送ってきていた。うむ、Good job。

…この人、おかしな部分がなければ本当に完璧な人なんだがなあ…

「え?えっと、葉月は…」

「あ、葉月ちゃん。ここにパンフがあるからここを見て探せばいいよ」

急にそう言われて戸惑う葉月に、優しくパンフを見せてやる明久。とりあえず俺を床に下ろして、明久の隣へてくてくと葉月は移動し、明久の手元を覗き込んだ。

「まるで、仲の良い『姉妹』のようですね。ふふふ」

そう玲さんが上機嫌に呟く。…あいつは男だ、と声を大にしてフオーしてやりたいところだが女装が色々ブチ壊しにしてる感が否めない。

それにしても…うーむ、こういう気配りはできるんだよなあ、明久も。葉月も嬉しそうだし、こういう心配りを打算なくやるところに女子は惹かれているのかもな。

「…そうして女の子を毒牙にかけていくアキちゃんなのでした」
「めっちゃ嬉しそうにそんな台詞言うのやめてくんないかなマジで」

というか結局、明久のこと『アキちゃん』呼ばわりかよ玲さん。明久の性別が普通にヤバイ件。

「…あっ」

と、そんなことを考えていたら、葉月が小さく声を漏らしていた。何か見つかったのかな？

「アキちゃん、葉月さんは何を見ているのですか？」
「姉さん僕を完全に女子扱いだね…えーと、なににな」

ツッコミを入れながら、葉月の視線の先をひょいっと覗き込む明久。
俺もそんな風に覗いたらよかったんだがな・・・背が低くて見えね
ーよこんちくしょう。

そんな風に地味に憂鬱になっていると、

「…むー」

…おや？葉月がなんか複雑そうな、不満そうな表情を浮かべてパン
フとにらめっこしてるな。

ひよつとして、欲しかった食べ物とか行きたかった出し物が有料だ
ったとかか？

それなら気にしなくても大丈夫だぞ？・・・この散策は葉月と玲さ
んに『手伝ってもらったお礼』をする意味も含んでいるからな。多
少の飲み物や食べ物は奢るつもりだ。

もちろん、明久ではなく俺が。

やっぱり日々金欠気味な明久であった。

「…あー、なるほど…葉月ちゃん、これが欲しいの？」

「（コクコク）」

「なんだ明久、葉月は何を欲しがってるんだ？」

ムツツリーニみたいなりアクションを返す葉月を横目に俺が明久に
こう尋ねると、

「この『ミツフィー限定クッション』が欲しいみたいなんだけど…
クイズ大会の優勝商品なんだよ、これ」

と、明久は返答したのだった。

…なんですか？

「うーむ、ちょっと人多杉、だな」
「本当にわかりにくいネタばかりだね」

というわけで、問題の会場に来てみたわけだが。
中にはわりかし大勢の…家族連れや女子、中学や小学校の子供達やカップルなどで賑わっていた。

「あ、もしも須川君…いや、会長。ちょっと伝えたいことがあるんだけど」

「やめるコラ。これ以上文月学園のイメージを崩すな」

…危づくこの場からカップルが全員消えるところだったが、それはさておき。

「あっ！ミッフィー君ですっ！！」

テンション高めの葉月が指差すほうを見ると、そこには透明な

ガラスケースに人形が入れられていた。
どうやらお目当ての品はアレらしいな。フィをキに変えたら大変な
ことになりそうだ…

さて、ここで今の状況を整理しておこう。

玲さんに『この中に気になるものはあるか』と聞かれた葉月が目に
留めたのは、とあるクラスの出し物として行われるクイズ大会の景
品だった。

で、これがその概要である。以下コピペ。

『文月学園 大クイズ大会！』

様々なジャンルを超えて勝利を目指せ！

優勝商品には、あの懸賞用に作られた世界に10個しかない『限定
ミツフィー君人形』をプレゼントっ！！

挑戦者、大・大募集中！！

優勝商品：ミツフィー君人形

準優勝：文月学園女子用制服

ベスト4：上履き（サイズは希望のものをご用意いたします）

ベスト8：文月学園No.1美少女プロマイド5枚セット

参加賞：うまい棒』

なんか商品が色々酷いぞ。特にベスト8、どう見ても秀吉じゃねーか。

「ところで、あの人形は貴重なものようですね」

「そうですねっ！葉月もお姉ちゃんと一緒に10通も応募したのに、一通も当たらなかったレアものなんですよ！！」

「そうですねですか・・・でも、どうやってこんな限定品を手に入れたのでしょうか？」

「さあな。アレだ、僕のパパの知り合いに社長さんがいてさー、的な流れじゃねーの」

「ス 夫!？」

とまあ、こんな具合に…現在、この人形に釣られた奴らで、クラス内は大盛況なのである。

「あ、待ち時間に飲み物いかがですかー？」

「おにぎりもありますよー」

おや、クイズが始まるまでの時間にこっそり食べ物を買ってたりする奴らもいるようだ。

なるほど、これでミッフィー君人形のコストも回収する気なんだな。地味に汚い商売である。

とはいえ、チャイナ服で客を釣ってるFクラスは人のこと言えないし、特に何も言うまい。

で、だ。…弱ったな。こんだけ人数いるのに、果たしてアレを手に入れられるのか俺達？

「なあ葉月、アレはどうしても欲しいものなのか？」

「（こくこくこくこくっ！）」

「いや喋れよ」

俺の質問に、残像が見える程に首を上下させる葉月。脳に悪いからやめときなさい。

しかし…葉月の喜ぶことはしてあげたいし、そのためなら欲しいものはなるべく用意してあげたいんだが…本当にどうするよ、コレ。

「金でなんとかなるなら買ってあげられるんだが、まさかクイズの優勝商品とは…」

「困りましたね…」
「確実性がない、っていうのがまた色々不安にさせてくれる原因だな」

「うーん、でも葉月ちゃんが欲しがってるし、ここは参加するしかない流れなのかな…」

「いや、アキちゃん明久は出なくていいから」「」

「二人が酷いっ！！」

クイズという都合上、お前はハナから戦力外だよ明久。

・・・まあ、参加するしかない流れなのは確かなんだろうが…問題はこの人数だ。ざっと見て40人くらいは居そうな空気だな…中にはちらほら召喚獣を頭に寄せたり抱えたりしてる文月学園の生徒もいるようで、密度がわりと凄いいことになってるぞ。

「・・・ねえユキト、僕、大変なことに気づいたよ」

「何だ明久」

「・・・このクイズ、参加料が500円もかかるんだよ・・・!!」

「はいはい」

どうやら、どう転んでもこのクラスの利益にはなる作りのようだな。まあ、流石にFクラスには勝てないだろうが。

とはいえ、真に大変なのは参加料なんかじゃないんだよなあ。何が恐ろしいって、参加したはいいがもし失敗して葉月を泣かせちゃったりした時が問題なんだよ。

期待していたものが裏切られてしまったほど、ショックなことはないからな。特にそれが子供ならなおさらだ。

子供の涙はあんまり見たいものじゃないし、葉月にも嫌な気分ですべてもらいたくはないのが本音だ。

だからいつそのこと、負けたときのことを考えて参加しないという手もあるんだけど…

「…それができたら苦労しねーよなあ」

「…召喚獣さん…？」

純粋な瞳でこちらを見下ろす（見上げる、でないところが俺らしいな）葉月を見て、思う。

1041

こんな子供を裏切るのは、流石に許されない、ってな。

まあ、やらないで後悔するよりやって後悔しろ、というのが世の中の通説だ。

「……よし、おい受付さん！これ、召喚獣も参加できんの？」

やれるとこまで、やってみるとしますかね。

さて、気になるクイズの結果だが。

このクイズ大会、あまりにも人数が多くて回答処理とかが非常に面倒なことになってわりかしg d g dだった。

そんな様子を見せるのもアレだし、ここはせつかくなので『原作』のバカテスト風にお伝えしていこうと思う。

というわけで、以下、ダイジェストでお送りいたします。

【第一問】

問題：

『も歩けば棒に当たる』ということわざの に入る動物を答えなさい

吉井玲 の答え： 『犬』

ユキトのコメント： 正解。まあ間違っ要素もねーな。

島田美波 の答え： 『……………』

ユキトのコメント： ？一問目からアウトかよ！ていうかお前店番はどうした！！

吉井明久 の答え： 『…僕』

ユキトのコメント： それは不幸なだけだと思っぞ。 ていうか参加するなと言ったるうに。
どんな判断だ、金をドブに捨てる気か。

玉野美紀 の答え： 『子猫ちゃん』

ユキトのコメント： お前外部の人もいるのに一体どんな妄想してたんだ？

なんつーか、一問目から色々酷い。
ここでまず明久と玉野、島田が脱落。 ちなみに脱落者はこの三人だけだった。 何しに来たんだよこいつら。

【第二問】

問題：

「根本」という言葉と、「誤算」という言葉を用いて例文をひとつ作りなさい。

吉井玲 の答え： 『その問題が根本こんぽんから間違っていたのは誤算でした』

ユキトのコメント： 正解。俺はこの世界にその言葉を言いたいよ。
・
・

文月学園の多数の生徒 の答え： 『根本ねもとがこんなゴミクスだったとは誤算だった』

ユキトのコメント： やると思った。ま、読みが違うから不正解だ。
： 気持ちはわからんでもないけどな！

小山裕香 の答え： 『ゴミクスが根本だったなんて誤算だったわ』

ユキトのコメント： 逆だ。ゴミクスに失礼だろ。

というわけで、この問題で冷静さを失った奴が次々と脱落していった。外部の人の不思議そうな視線が痛くて仕方がない。
： まあ、仕方ないね！ゴミクスは色々やってたみたいだしね！！

【第三問】

問題：

包丁などの刃物を研ぐ時に使うのは『砥石』ですが、これはなんと読むでしょう。

佐藤美穂 の答え： 『といし』

ユキトのコメント：正解。…ていうか、佐藤さんいたのか。ひよっとして、俺の知り合いはほとんどここに居るのかな？

夏川俊平・常村勇作 の答え： 『ときいし』

ユキトのコメント：？？不正解。よくあるミスだな。…しかし、こんぐらい知つとけよ受験生…

吉井玲 の答え： 『といし…ですが、包丁が使えなくなった時は砥石は必要ないでしょう？
大概、溶けてしまっていますから』

ユキトのコメント： 審査員！この人失格にしとけ！！

姫路瑞希 の答え： 『といし、ですけど…包丁には使いませんよ？』

ユキトのコメント： こいつも失格で！！あとお前後で説教な！！

なんとここで優勝候補が二人脱落。大荒れである。

…まあ、問題とは関係ないところで俺が落としたんだが。みんなわ

かってくれ、あいつらもそろそろ間違いを知ることが大事なんだ。

というか、店番サボる奴多すぎだろ。忙しいはずなんだが…すまん秀吉。

【第四問】

問題：

『遊戯王デュエルモンスターズ』において、ゲームに勝利する方法を二つ述べなさい。

坂本雄二の答え：『ライフポイントをゼロにする
相手がデッキからカードをドローできなくなる』

ユキトのコメント：？正解…って、雄二もいたのか。こりゃ何とか勝てそうだな。
…しかし、急に問題がアレなジャンルになった気がするぞ。クイズマックアカデミーかこのクイズは。

佐藤美穂の答え：『わ、わかりません…』

ユキトのコメント：？だよなあ。女の子には厳しい問題だろこれ。ここであらかたの女子は落ちるだろう。やれやれ、酷い真似を

木下優子の答え：『ライフをゼロにする

エグゾディアによる特殊勝利』

ユキトのコメント：？　なあ優子。お前勝負に勝って人生で負けてないか。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン　？　の答え：　？　？
『究極封印神エグゾディオスの効果
終焉のカウントダウン』

ユキトのコメント：　？他作品！？し、士郎さん！はやくきてくれー！！

なぜか無茶ぶりを増していくクイズ。

これは…ひよっとして、運営側もあの人形を商品として渡す気がないんじゃないか？

全員いっぺんに間違えさせて『優勝者は残念ながらいませんでしたー！！』的な流れに持ち込む腹積もりかもしれない。

気付けばあれだけいた参加者もけっこう減って、残りは十人くらいか…さて、次は何が来る…！？

【第五問】

問題：

『まさか〜ろう』を使って短文をつくりなさい

坂本雄二・平賀源二・木下優子　？　の答え：『まさかりかついだきんたろう』

ユキトのコメント：？汚ねえっ！この問題の作者、Flash黄金期世代の奴を狙い撃ちにしゃがった！？

遊戯王で世代を絞り込んだ上での狙い撃ち…こいつ、できる！！

ちなみに正解は、

柊雪人の答え：『まさかこんな問題を出すとは誰も思わなかっただろっ』

ユキトのコメント：？こんな感じである。

いやはや、これは酷い。Flash世代なら間違いなくこっつ反射的に答えちゃうだろ…汚いなさすが出題者きたない…

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン ? の答え : ? ?
『まさかりかついだきんたろう』

ユキトのコメント : ? お前小学生だろなんで知ってるんだ。

とまあ、そんな訳で。

「ち、ちくしょおおおー！ゆ、優勝者は召喚獣の柊ユキトさんだあ
あああああっ！ー！」

「「「「うおおおーっ！」「「「「

…いつの間にか、俺が優勝していた。

「く、くそっ…！俺の完璧なトラップが…何故回避できたんだ…ッ
！！」

いや、まあ…『この世界の奴』なら全員引つかかったんじゃねーかな、うん。なんか妙なところで転生とか憑依キャラの恩恵を受けている俺であった。

「ぜ、絶対に誰も残らないような問題にしておいたのに…」
「その発言色々問題だからやめろ」ラ

詐欺の失敗を自白するのはどうかと思っ。

「あーあ、間違えちゃったなあー」「アキちゃん…ハアハア…」「
し、しまったわ…！まさかこんな形で自爆するなんて…！」「
俺たちはゆとりじゃねえーっ！」「ま、ユキトが勝つたならい
いか」「…大丈夫、問題ない」「おい翔子、気配を消して後ろに立
つな」「…イリヤ、惜しかった」「しかしあのネタ何人に通じるん
でしょうねー？」「わ、わたしまだ小学生だよ！？」「どうして間
違ったんでしょ…」「葉月になるなら後で貸してもらおうかな
…」

幸運なことに、わいわいがやがやとした終了時恒例の賑わいで彼の
呟きは聞こえなかったようである。

「…おかしいな。なんか達成感がまるで無いぞ」

なんとというか、作者の都合で頑張った描写とかが全部カットされて、
俺ツッコミしかしてなかった気がする。

とはいえ、勝ちも勝ちだ。

そんなわけで、人垣を掻い潜りながら自分と同じくらいのサイズの

人形を持って明久達の元へ凱旋する俺。

「ほら葉月、これはお前のもねだぞー」

「ミツファイクーんっ!!」

「うおっと」

持っていた人形に、ばぶん！と俺から受け取る形で葉月が飛びついてきた。

「こらこら葉月ちゃん、走ったら危ないよ？」

「よかったですね、葉月さん」

そんな葉月に、苦笑しながら二人が言うのを見ながら、思わず俺も苦笑い。やはりまだ子供だなあ。

「ほら葉月さん、ユキトくんにお礼を言わなくては駄目ですよ？」

「あっ、そうでした！召喚獣さん、ありがとうございますっ」

「どういたしまして。しかし、明久は結局500円捨てただけだったな」

「…それを言わないでよ…」

バカは期待を裏切らないということなのか。それにしても、島田と一緒に一問目落ちしてるあたりやっぱりお似合いなんだろうかこの二人。

「…あつ、そういえば…葉月、バカなお兄ちゃんにも召喚獣さんにもお金借りてばっかりです…」

そんなことを考えていると、ふと思い出したように葉月がミッフィーくん人形を抱えながら呟いた。

おや、急に何を言い出すんだこの娘は。子供がお金の話なんて気にしなくてもいいんだぞ？

「葉月ちゃん、そんなこと別に気にしなくていいよ。僕がやりたいからやっただけだしね」

と、明久もどうやら同じ感想を抱いたようだ。
そんな明久に対し葉月は、

「駄目ですっ！『金は命より重いつ…！』ってこの前カードゲームの映画で言っていましたから…！」

「…よし、今すぐその言葉は忘れるように」「」「」

どごその鉄板土下座理論を繰り返していた。葉月、それカードゲームやない。ギャンブルや。ざわ…ざわ…

…なんとというか、子供があんなもん見ちゃ駄目だろう常考…島田があんなもん見るとは思えないし、たまたま一人の時に見たんだろうか。

「あーもうとにかく、別にいいからな？お礼とか考えるなよ、子供は甘えるのが仕事なんだから」

「そうそう。あとさっきの言葉は迅速に忘れてね。本当に」

「アキくんの言うとおりですね。」

…おや、お二人共？そろそろ時間なのではないですか？実況と解説がいなければ大会が成り立ちませんよ」

なに、もうそんな時間か？

なら丁度いい、この会話のながれを切るためにも、もう会場へ行くとしますかね。

「あ、待ってください！葉月は…」

「それじゃ玲さん、また後で」

「姉さん、葉月ちゃんをよろしく！」

葉月には申し訳ないが、ここは玲さんにフォローを任せて脱出するとしておけ。

だって…このままだと、

「明久、急ぐぞ。Fクラスに寄るんだから時間がけっこう危ないからな」

「え、なんでFクラスに行くの？そのまま会場に行けばいいんじゃないや

…」

「お前自分の格好見ろよ」

「ぐわあああああっ!？」

明久がアキちゃんになっちゃっし。

『うー…お礼させてもらえなかつたです…』

『まあまあ葉月さん、子供は遠慮するものではありませんよ?』

『葉月は大人の女を目指してるのですっ!こうなったら、勝手にお礼をしてバカなお兄ちゃんに褒めてもらいますっ』

『あらあら、ふふ。では、葉月さんはどのようなお礼をするのですか?』

『そうですね…まず、くるくるのお姉ちゃんと召喚獣さんをお』

第三十一話（後書き）

復活。

というわけで、31話をお送りしました。さつき見たら話数間違ってたっていうね…もうだめだ…

そんなわけで、葉月ちゃん回でした。基本的に皆幼女に優しいですな。最後に色々伏線張ってみましたが葉月がユキトにフラグを立てられることはありません。主人公ロリコンじゃないよ！

幼女と言えば、『ロツテのおもちや！』がアニメ化らしいですな。いえ、別に野球と優勝は関係ありません。

しかし、主人公が22歳の子持ち（10歳、しかも実の娘）という設定で果たしてアニメが成立するんでしょうかね？

内容もノーパン貧乳ノーパン全裸ノーパンノーパンぐらいの割合ですし。

あ、そうそう話は変わりますが『コラボ受け付けるよ！』と前回言ったところちよくちよく申し込みがありました。ありがたいことですね。

で、まずランカーランスさんの『バカ×拳 Ⅱ大馬鹿』とコラボしたりしなかったりする予定です。

まあまだ何も決まっていらないんですがね！ゆっくりしながらお待ちください。

で、今回の話に戻りますが、試験的にバカテストを導入してみました。

明久がバカ丸出しですな。しかもあの時も女装のまんまなのに本名書いちゃってるという。雄二あたりは爆笑していたかもしれませんなあ…皆様、オラえもんとかたのしい国語とかご存知ですか？

そんなバカテストなんですけど、実は入れられなかった問題が一つあるので、せっかくだからここで出題したいと思います。よかったら感想などでお答えください。バカなりアクション、お待ちしとるぜ！（無茶振り）

【EXステージ】

問題：

「とある魔術の禁書目録」の世界において、能力者は『AIM拡散力場』というものを常に放出していますが、この『AIM』とはどのような意味でしょう。

…なんて面倒な問題だ。マニアックすぎたから没にしたんですよえ…

あ、日本語でも英語でも大丈夫ですのでお待ちしております。回答者はもれなく次回のあとがきに載るよ！

第三十二話（前書き）

遅れて遅れて遅れました…

正直、これからしばらく忙しい時期になる予定なので更新が止まったら僕が死にかけていると解釈してください…

では最新話をお届けします、どうぞぞぞ

第三十二話

「おい、準備はできたのか？」

「うー」

「ぎゃははは、こんなに集まってやんのー」

「いやお前、あの文月の女にイタズラできんなら参加するだろー」

「ま、そりゃそうか。これもタクが言い出したからだな。たまには良いこと言っじゃねーか」

「あ、アニキ！ありが…ありがとうございやす…！！」

「…あれ？…タク…？」

「…なんかマジ泣きしてんな」

「ど、どうしたんだお前…？これから女漁るつてのに泣く要素なんてあんのか？」

「…俺は女よりあの召喚獣の野郎をなんとかしたいんですよ！だから人数集めてもらったことには感謝っす！！」

「あー、喋る召喚獣とかいう話だっけか？」

「そついや、そつちがメインだったな」

「くけけ、なんだよお前なにかされたワケえ？」

「ぐひひ、どうせ大したことないことされたんだろ？服にジュースこぼされたとか…」

アハハハハ…

「指全部折られました」

「「「「なにそれこわい」「「「「

テレレレッテレー

「むっ？」

「どうしたの、ユキト？」

「いや、今なんか不愉快なフラグが立てられた気が…」

「？大丈夫なのそれ？」

「いや、まあ…大事にはならなそうだけどな」

この世界のギャグ補正的に考えて。

そんなわけで伏線終了。今から本編に戻ります。

さて、場所は変わって現在俺達がいるのは例の実況解説席である（ちなみに明久はちゃんと着替えてきたぞ）。

時刻はもうすぐ試合開始といったところで、周りの様子はいえば…

ワアアアアアア

キヤーユキトクーン

大盛況である。

なんつーか、歓声が俺に対してばかりなんだけどな。

…まあ仕方ないか、なんだかんだで真面目な戦闘全然してねーし。
むしろ俺と明久がコントやら女装やらクイズ大会で盛り上がったしまっているくらいだ。

さて、そんな感じでお笑い見学の気分にいる観客席のほうは満員で立ち見まで出ている始末であり、

「お飲み物いかがですかー」

「立ち見の方は後ろの方に配慮してくださいー」

「召喚獣は頭の上ではなくお手元の座席か膝の上をお願いしまーす
！」

などの声がちらほら聞こえていた。

なんかのライブ会場とかであるかもしれない光景だが…召喚獣について
の注意を呼びかけるのは流石にここだけだろうなあ。

「そういえば明久。高橋女史が飲み物くれたぞ」

「あ、そうなの？…って、『いろす』！？カロリー無いの！？」
「ミネラルウォーターだな。なんというか、あの人らしいチョイス
だ」

「な、なんてことを…！僕の好物であるカロリーがないなんてっ！
！」

「明久、とりあえずマイク切れ」

うん、本番前でも明久は特に緊張もなくバカ丸出しだ。もう恥晒し
すぎてマイナス数値がカンストしてるんじゃないだろうか。

そんなわけで（どういうわけなんだろうな）俺達は本番前の打ち合
わせを終え、すっかり準備完了である。

「…なんかすっかり実況が板に着いてきちまったな…」

ああ、憂鬱。

で、定刻。

「よし。それじゃあ、試験召喚大会・準決勝戦を開始する！！」

そう叫んだ俺に対し、わっという歓声で答える観客勢。

うーむ、なんとというか・・・皆が楽しみにしているのがわかってちよっと良い気分になるな。

まあ、これが俺への期待でなかったらもつと良かったんだが。

やめてマジで無理だから。そんな面白いことほいほい言えるほど俺

は口先の魔術師じゃないんだよ。

え？ONANASHI？アレは当たり前のことを押し付ける作業だからあんまり話術は関係ない。

「では、準決勝第一試合から！選手の皆さん、入場をお願いします
！！」

そんな俺の思考をよそに、明久が選手入場を呼びかける（カンペ作：高橋女史）。

さて、第一試合か。予定ではまず霧島と佐藤さんのコンビの実況をすることになって

あれ？そついえば霧島の相手って…

（ゆ、ユキト君！）

と、何かを思い出そうとしていた俺に、慌てた様子で高橋女史が駆け寄ってきた。

…なんか嫌な予感。

(どうしたんですか先生？というかなんで僕のこととは呼ばないんですか？)

(明久黙ってる、悲しくなるだけだ。

で、何があっただんだ？)

(…霧島さんの相手は、その…棄権したそうです)

(…またかよ!?))

これは酷い。どんだけ試合が成立しないんだ。

まあ、学年主席で(学生としては)完璧超人な霧島が相手だから勝ち目はないだろうし、棄権する気持ちもわからなくもないんだが…それにしたって、なんだか霧島の試合だけえらく適当になっている気がしてならない。マトモな試合したの美春相手だけじゃね？

さては思いつかなかったな、世界のヤロウ…

(…はあ。なら仕方ない、霧島は飛ばして次行くか)

(いえ、それが…駄目なんです)

(え？なにが)

本人がいないのならどうしようもない。

そう思っただけと実況を進めようとしていた俺に、高橋女史はかなり申し訳なさそうに、

(プログラムの都合上、あと十五分は次の試合を始められないので
す…)

と、俺に囁いてきた。

あ、はい。そうっすか。

えっ？

…ほうほう、なるほど。そりゃ大変ですね。
うん、さっきから感じてた嫌な予感はこちらか。

なら、俺がとるべき行動は

(そういうわけで、ユキト君達にはしばらくトーク等をして頂いて時間稼ぎを)

「はい皆さん！申し訳ないけど今から十五分ぐらい休憩ね！！」

「ユキト君っ！？」

全力で逃げることだッ！！

「ま、待つてくださいユキト君！学園のデータ収集上、勝手に休憩にされると困るんです！！」

「やかましい！あんたな、俺がわざわざトークスキルないって前置きしたのに何でそんな台詞吐くの！？」

「・・・えっ？ユキト君ならできませんか？」

「なにその俺への信頼度！？やめるよ！そんなことできるわけ無えだろ！！」

「え、ユキトできないの？」

「やめて！無駄な期待しないでマジで！！」

やっぱり無茶振りかよ！なんか最近俺の危機感知センサーがとんでもなく高性能になってきてる気がしなくもない。

…今更だけど、身体だけじゃなくて中身も人間離れしてきてないか俺。まあ感知できても回避できなきゃ意味がないんだが。

叫ぶ俺、慌てる教師、驚く明久。

三者三様のそんな様子を見て、ざわざわ、と観客たちもざわめき始める。

まあそりゃそうだ、定刻に向けてじわじわとテンションを上げてきた彼らだからな、ここでお預けを喰らうなんて正直たまったものではないだろう。

でもまあ、そんなのは俺のせいではない。断じてない。あらかじめ予測できなかった学園長が悪い！！

と思いつつ、俺は観客の方を見ないようにさっさと（明久を連れて）逃げ出そうとして

『ユキトくん、どんなこと言ってくれるんでしょうね』

『召喚獣のお兄ちゃん、何でもできるんですねっ！』

『まあユキトなら大丈夫なんじゃない？』

「ってコラそこの知り合い共！さりげなく俺のハードルを上げるな！！というかやらねーよ！？」

聞こえてきた声にたまらずツッコミを入れていた。

いやね、俺は確かに勉強ができるかもしれないよ？（命が懸かって
いたからそれなりに頑張ったぞ）

んで、運動も相当のレベルだろっさ（召喚獣だからな）

さらに、空気も読めるタイプであることは自覚している（周りが酷
すぎるのもあるが）

…なんか、周りが酷いだけな気もするが、それはさておき。

まあ、俺が結構頼りになる、っていうのは分からなくもない。そこ
はまだ理解できる。

…だが。

ネタを考える時間も与えず、大勢の人々に囲まれてる時にいきなり
「なんか面白い話して」

って言われても、どうしようもないと思うんだ。

「どんっだけ芸人殺しのネタ振りだバカヤロウ！」

「というか、さりげなく作者に対する無茶ぶりでもあるよねこれ」

…まあ反省はしてないけど。当然の報いだしな。

というか、新野さんがいなくなったら即詰みになるってどういふことだよ！

…ああそうか、主役を張れるような人材はほとんど召喚大会に出ちやってるからこんなことになってるのか…

まあ、例えそうだとしても。

文月学園は、なんか本当に大事なところで人材が足りていないような気がしてならない。

「先生、そんな人材でいいじよ…」
「待て明久！そのネタは本当に必要なときのために取っておくんだ！」

エルシャ イネタはこれから使う予定があるので自粛推奨。具体的に言つと次の番外編あたりで使うからな！

…まあ、実はあらずじで既に使ったんだが。こまけえことはいいんだよ！

なんか話が逸れまくってしまったな。とにかく、俺が言いたいのは、

「何で俺だけがそんなリスクを背負わなきゃならないんだ」

この一言に尽きる。

「う、そ、それは…」

ストレートな俺の正論に口ごもる高橋女史。
なんだか気の毒に思えるが、こればかりは譲れない。

誰だって大衆の面前で晒し者にされたくないからな！

…断固とした姿勢を崩さない俺であった。

「…困りましたね…」

困った風に呟く高橋女史。本当に余裕がないのだろう、その表情は
普段見せないような顔だ。

…何もわかっていない観客の一部が、何故か「眼福…ッ！」などとほざきながら鼻血を出しているのが視界の端に映ったが、それは置いておくとして。

彼女もたぶん、この仕事を学園長から押し付けられているんだろう、哀れな話である。妖怪爆発しろ。

だが、流石に俺も自分を犠牲にしてまで誰かを助けたりはできない。…けれど、そんな姿を俺の隣にいるお人よしは放っておけないように。

「…うーん。ねえユキト、やっぱり少し可哀想じゃない？」

こうやって、こっそりと俺に耳打ちしてくる始末である。

…いやね、思想は立派だけど俺に丸投げすんのはやめてくれ頼むから。

「（やかましい。文句あんなら代わりにお前がやれ）」

「（うっ…そ、それを言われると弱いけど）」

「（まあ、俺も自分に被害が来ないんだったらなんとかしてやりたいが、生憎今回はマジで無理だ。諦めろ）」

「（でもホラ、ユキト自身が出なくても高橋先生のサポートくらい

はできるんじゃない？」

「（…む）」

『サポート』ねえ…

明久の言葉に、ちょっと考えてみる。

…うーん

…ふむ

…よし。

「（仕方ない、明久。ちょっとだけ高橋女史を助けてやる）」

「（え、本当！？でも、どうやって）」

うん、ちょっといいこと思いついたかもしれんぞ。

冷静に考えるとちとタガを外しすぎな感はあるが…まあ、このネタ
なら少なくともウケはするだろう。

「ほ、本当に大丈夫なの？」

「安心しろ明久。死ぬ前の俺ならいざ知らず、俺は二次元にリアル突入してしまった男だ」

「あれ！？駄目人間アピールにしか聞こえない！」

まあ、俺もそんな気はするが別にそこは問題じゃない。

俺は思っんだ。

…自分には何か必ず、このまったく活かせていない『転生』という属性を活かしたネタがあるはずだ、と。

そう、それは…

「高橋女史。『きゃーのび太さんのエッチー！』って言えば絶対ウケるぞ！！」

「小学館にケンカ売ったあー！！？」

…声優ネタだ！！

「え、ちよつ…ユキト君それは」

きっぱり言い切った俺に、

流石に冷や汗を垂らしながら抵抗しようとする高橋女史。

あれ、やっぱりし かちゃんも恥ずかしいかねえ。というか、流石にドラえ んは知ってたか天然教師。

「って違うでしょ！恥ずかしいんじゃないやなくてドン引きしてるんですよこれ！？」

「申し訳ないが他人のモノローグを読むのはNG」

「言ってる場合か！」

ていうか駄目だよ！もういろんな版權ネタ取り扱ってきたけどこれはあまりに露骨なアウトだよ！！」

流石にネタがネタだけにキレのあるツッコミをしてくる明久。

いやね、仕方ないじゃん。作者がさ、声優を勘違いしてて最初は『どうしたファンネル！私かわからないのか！？』って言わせようとしてたんだぜ？ミスりすぎだ。

まあ確かに今回はえらく酷いネタ振りな気もするが、大丈夫だろう。上には上がいるもので、

「気にするな、『アレ』よりはマシだろう」

「もうフラグだらけで踏み込みたくない！『アレ』なんて言い回しからして嫌な予感しかないよ！！」

「まあ言及は避けるが、『にじファン』の権利関係のページに載ってるあの会社のことだな」

「読者さん！わざわざ確認して会社名とかキャラ名を感想に書いたりしないでね！！絶対だよ！！」

ハハッ！やだなあ明久、常識に溢れた読者さん達がまさか夢の国に喧嘩を売るわけないだろう？

さて、ふざけるのはこれくらいにして。

今俺が思いついた『声優ネタ』ならば失敗はあるまい。

人にモノマネの向き不向きがあるとしたら、間違いなくその人物にフィットするネタを俺は知ってるわけだし。

いわゆる『な、中の人だ…！』とか『魂こもってる…！』的なリアクションを期待できるわけだな。

「…っーか、これ以外に思いつかねーよー発芸なんて。俺も作者も」
「ああ、本音が漏れてる…」

で、俺達が微妙にメタな話をしている間に、目をぱちくりさせていた高橋女史も覚悟を決めたようで、

「そ…それを私と言えば…ユキト君が時間稼ぎをしてくれるのです

ね？」

「ああ、してやるしてやる」

まあ嘘だが。

多分、そのモノマネを見たら観客はテンションが上がって

『やべえ！リアルしずかちゃんだ！！』

『ママ！すごいよあのせんせー！！』

『もっとやって欲しいわねえ』

『『『アンコール！アンコール！！』』』』

ってこういうような流れになるはずだからな。

なに？他人を踊らせてるなんて鬼畜だつて？

時間稼ぎの手伝いなんだからいいんだよ別に。それに鬼畜というなら俺の周りには殺人鬼だからだから大した問題ではないッ！

「…わかりました。似るはずもありませんが、とにかく一度だけや

「つてみます」

そう言いながら、恨めしそうにこちらを人目見て、高橋女史はマイクのスイッチをつける。

なーに大丈夫、明久の神にーさまのモノマネだってそっくりだし、あんたもやったらやったで『完全に一致』するから問題ない。

ともかく、高橋女史は息をすーはー吸って、

「き、キヤーのび太しゃんによっ」

…

……… 噛んだ。

しーん、という沈黙。

今まで見たことのないくらいに顔を赤くした高橋女史。

…え？今回ここで終わり！？

ちよ、どうすんだよこの状況！？おいこら待て、どう収集つければ
…アッー！！

第三十二話（後書き）

ていうわけで、投げっぱで続きます。頑張れ未来の俺。

いやあ、クリスマスですねみなさん。街を手繋いで歩いているカップルは全員しんおっと、なんでもありません。僕は恋愛のれの字も周りにないんですが、それとは無関係に色々忙しくなってきました。

これが師走か。最初の頃のスピードが懐かしいぜ…

前書きにも書きましたが、今後は更新速度が遅れてしまう可能性が大きいです。申し訳ありません…

今回はランカーランスさんとのコラボ話をお送りする予定なのですが…いつ書けるかなあ。構想はできてるんですが。

ユキトの回想という形になるかと思われます。キャラを回せるかが不安で仕方ないネ！

そうそう、前回のんびりとマニアックな問題を出してみたことを覚えていらっしやいますでしょうか。

こんなネタになんと、

14 ？ ？ 件

も回答が寄せられました。読者さん自重。

そういうわけで、この場を借りてユキトを先生役にして皆さんの回

答にリアクションしていきたく思います。

では、どうぞ。

【EXステージ】

問題：

「とある魔術の禁書目録」の世界において、能力者は『AIM拡散力場』というものを常に放出していますが、この『AIM』とはどのような意味でしょう。

那家乃ふゆい ?さんの答え： 『無自覚』

リディアン ?さんの答え： 『An|Invuntary|

Movement|拡散力場』

overserver ?さんの答え： 『An|Invuntary|

Movement』は『無自覚』ということ？

ユキトのコメント： ?これが正解だな。

AIM拡散力場というのは、要するに『能力者が無自覚に出している能力の断片』のようなものだ。

例えば、『超電磁砲』で有名な御坂美琴は、電気系統の能力者なので無意識に電磁波をAIM拡散力場として放出しているらしい。

そして、この体質のせいで、彼女は動物に嫌われてしまうようだ。

この問題には関係ないが、猫好きなのに猫に逃げられて涙目になるあたりも彼女の魅力の一端かもな。

ちなみに、

嘉神祢将 ?さんの答え: 『An Involuntary Movement.』
直訳すると「無意識下の運動」

本編ではAn Involuntary Movementと書かれているが、外伝では上記で書かれている上、こちらでは英文として意味を成さないため、ただのスペルミスと思われる

ユキトのコメント: 禁書本編はどうやらミスだったらしい。とはいえ和訳は同じなので正解だ。

: 作者もこれに気づいてなかったんだよ!言わせんな恥ずかしい。

紅鎖 ?さんの答え: ? 『固有結界』

ユキトのコメント: fate勢乙。

というか ?無自覚にそんなもん出すなよ!

UBWとかならまだしも、千年城ブリュンスタッドとか枯渴庭園とか水晶溪谷とか出てきたらどうすんだ…

: え?マニアックすぎてわからない?やれやれ、まだまだないか、そもそも固有結界というのは(長いので以下略)

博徒　？さんの答え：

A II Aカップ

I II 以下の

M II 胸

ユキトのコメント：…こ、これは…

ちよ、し、島田！？そんなもの持ったら危な…やめ、やめろ殺人鬼
イー！！

（作者注：博徒さんは急いでその場所から逃げたほうが…いや、もう遅いか…）

千磐　司風？？さんの答え：

A　アイソトニック

I　飲料

M　真冬の頃は飲みたくないZE

ユキトのコメント：　無理矢理すぎる！せめて日本語英語どっちかにしろよ！！

：ちなみに、アイソトニック飲料というのは浸透圧を身体の体液と同じようにして吸収を良くした飲み物のことだ。

有名どころではアクエリアスとかポカリスエットだな。

：まあ、確かに基本、汗をかいたりした夏に飲むものだが、うーむ

…まあ、いいか。

黒丸 ?さんの答え： 『妄想』

ユキトのコメント： 一方さんは妄想のベクトルを操って白い羽や黒い羽を創るわけか…胸が熱く…

ならねえよ！どこのバカテスだよ！！

学園都市と文月学園を一緒にしてはいけません。似てるとこは鈍感くらいじゃないだろうか。

T - w a v e ?さんの答え： 『アンチ・INRAN・ムーブメン
』ト

ユキトのコメント： ……原田さん涙目。

原田さん涙目。

紅葉砂糖 ?さんの答え：

A Ⅱ ああ

I 〓 いいぜ。お前が何でも思い通りに出来るってんなら
M 〓 まずはそのふざけた幻想をぶち殺す！！

ユキトのコメント：？

その

かいとうは

テンプレだろ

だがストレートなのは好ましいな。感動的だ。

だが無意味だ

作者X ？さんの答え：

A 〓 愛

I 〓 命

M 〓 漫画

ユキトのコメント：ジャンプだな。黄金期の。
激流に身を任せ移動する！フンハー

イ (...こついうネタは著作権的に作者に死兆星が見えそつだよな...デ
イ ニーもだけど)

オルメス ?さんの答え:

A あんなことやこんなこと

I いろんなことができる

M ものすごいやつ

ユキトのコメント:

明久「空を自由に飛びたいな!」

ユキト「天国に近くなるのか?」

明久「僕は地べたが大好きです」

ユキト「万能っていうのも苦労するよな...」

ヒヨウガ ?さんの答え:

A 〓 あ

I 〓 いや

M 〓 待って

ユキトのコメント: なんとというか...言いたくないが、まるでこの
回答、明久のような発(検閲削除)

大和 ?さんの答え:

A || アキちゃん

I || いっぱい

M || 萌えるお！拡散力場

ユキトのコメント：

ユキトくんが窓から飛び降りようとする吉井君を止めに行ったので、このコーナーはこれで終了とさせていただきます。

たくさんのご投稿、ありがとうございました。 by 佐藤美穂

第三十三話（前書き）

色々あって修正でございます。

第三十三話

キング・クリムゾンッ！

「さて、女史が倒れて色々あった。俺は文章に書き起こすとそれだけで軽く一章分くらい埋まってしまふ小話をひたすら展開し、時間稼ぎどころか壮大な蛇足をやらかした。

だがまあ終わったことだし細かいことは気にするな！別に本筋には一切関係ないのでこのまま本編開始だッ！！

気になる方はそのうち投稿される『俺とテストと召喚獣 外伝集』を見る！！」

「・・・あれ？そもそも外伝はまだ終わってなぶべらあっ！？」

「終わったことだし、それでは準決勝第二試合を開始する！」

「悪意を感じるよ・・・」

うるさいだまれ。反論は受け付けない。

色々ごめんなさい。

さて、そんなわけで準決勝である。

ここで闘うのは雄二・久保チームと、色々残念なことに定評のある常夏コンビチーム。

どちらかの勝った方が決勝に進み、霧島・佐藤チームと戦う。そして優勝した者に、行った瞬間結婚させられるという『如月ハイランド』へのペアチケットが与えられるのだ。

さて、どうしてこのような流れになったのか？

あまりにも久しぶりなので、ちょっとおさらいをしておこう。

『さりげなく俺の活躍により腕輪バグ騒動は消滅した！
そんなわけで、シリアスを全て放棄しながら優勝商品の肉と温泉旅
行を賭け、Fクラスは売り上げ一位を目指していた！
それとは全く関係ないが、雄二も自分の未来を賭けて『召喚大会』
に出ていた！』

がんばれFクラス！俺の温泉のため、そしてついでに明久の健康生
活のため、キミ達で一位を目指すんだ！』

「それこの章のあらすじだろうがアアアア！というか貴様ら俺の応

20%くらい減ると思うんだよな。

霧島とFクラス総員で約束もしたし（第一章参照）、なるだけ彼女の恋は応援してやりたいところである。

『おっ、なんだか青春してるみたいだなー』

『ほっほっほ、うらやましいのう。ワシもあと百年若ければのう』

『そうですねえ、おじいさん』

『いや待てアンタ何歳だ！』

『何歳なんですか？おじいさん』

『んー？ワシの趣味は盆栽じゃて』

『古い！ギャグのセンスが五十年ぐらい前じゃねーか！！！』

唐突に繰り広げられるコントにも動じず、のんびりとしたリアクションを取る外部席。というかむしろ、自分達でもコントを展開していた。どうということなの。流石はギャグ補正である。

そして校内生の席はというと、

『よほど愉快的な死体になりてエらしいなアアアアア！！！』
『ブ・チ・コ・コ（ry』
『ぞげぶぞげぶぞげぶぞげぶぞげぶぞげぶ』
『【不適切な発言により】』
『【検閲削除】』
『【くけけけかかかか】』

殺意にまみれていた。

「まあいいや」
「いいの!？」
「止めるよテムエ！」

大丈夫、死んでも説教だけで済むさ。その説教がキツいんだがな。

「そんなわけで、約一名既に入場しているが準決勝の選手の紹介だ
！」
「お前らのせいだろ！」

その通りだな。だが私は謝らない！

「青コーナーひとりめツ！地元の不良にはよく知られているケンカ
野郎坂本雄二！戦闘センスと経験に優れてはいるが学力は最低のF
クラス！果たしてどこまで食い下がれるか！？」

「（・・・あれ？ユキト、でも雄二の点数って）」
「（こら静かにしろ明久、それも雄二の作戦なんだからバラしてや

るな）」

「（えー、どうしよっかなー）」

「（バラしたら爪きりどころかチェーンソーが出てくるかもしれんぞ）」

「（口にチャックをしておくよ）」

S・フィンガーズ！

いや、妄言だった忘れてくれ。

「そして青コーナーふたりめッ！こちらは打って変わってケンカの経験は無いが、学年三位の秀才久保利光！AクラスとFクラス、互いの弱点を補えるコンビになるかっ!？」

俺の実況に合わせて堂々と入場してくる久保。

一部の女子がキヤーキヤーと黄色い声援を上げ、きゃー久保くーんこっち向いてー愛してるー受け攻めどっちなーなどという声がこちらにも聞こえてきた。

文月学園自重しろと言わざるを得ない。

あと玲さん、静かに久保を撮影するのやめてくれませんかね。そいつ別に明久とは何の関係もないんで。同姓との付き合いなら許可で

きますみたいなキラキラした眼で久保を見ないでください。

「さて赤コーナ―常夏コンビ！聞いて驚け、こいつら別に兄弟じゃないぞー！」

「……ええっ！！？」「」「」

「おい待てコラアアアアアアア！苗字が明らかに違うじゃねーか！もう忘れてるだろ俺達の名前！！」

いやいや、何を言ってるんだ。忘れてるわけじゃないか。最初から覚えていないものをどうやって忘れるっていうんだい？明らかに読者の皆さんも忘れてるぞ。

「まあそんなことはどうでもいい！」

「よくねえよ！」

「……いや、どうでもいいから進めてくれ」「」「」

「俺達に味方はいないのかっ！？」

「さーてこの常夏コンビ、ビジュアルは残念だが腐っても受験生！……えーと……」

……多分なんか隠し玉とかあるんじゃないかな！というわけで試合開始ー！」

「どこまでボロクソに言うきだよ！？」

「くっ……まあいい、俺達の点数を見て驚くがいいぜー！」

「ああ、ユキト君。教科は数学でお願いするよ」

ぐぬぬ、という顔でなんとか怒りを堪えながらも試合に臨もうとする常夏コンビ。いやあ、実に立派な心がけである。まあ怒らせたのは俺だが。

「それでは全員、準備はできたな？あ、学園長。BGMは『マミさんのテーマ』で頼むわ」

「かませ犬にする気満々じゃねえかアアアアアアアア！！！」

「うるせーぞブサイク先輩。不細工先輩も静かにしろ」

「待て！ついに俺達は漢字の違いだけで判別されるレベルなのか！？」

「それならむしろ常夏先輩でいいから！勘弁してくださいオナシヤス！」

「では、TKNT先輩とお呼びさせていただきます」

「おいAクラスのメガネ！お前だけはマトモだった筈じゃなかったのかー！？」

そんな遣り取りを横目に、彼らの地面、つまり『試験召喚陣』がボ

ウ、と発光する。

それに伴い、先程からちよこちよこ動いていた召喚獣も一時的に消失する。あの状態では武器を持ってないから、一時的にリセットするためだろう。

よし、問題は無さそうだな。学園長の方を見て（ちなみに高橋女子はまだ立ち直れていない。何ヶ月たちんだよ）合図を受け取った俺は、宣言する。

「それでは！全員　召喚しろッ！」

「『『『『試^{サモン}獣召喚』！』』』』」

発光。

召喚者の言霊に合わせて、各々の召喚獣が光の粒子と共に姿を現す。その様にやはり外部の観客を驚きを隠せないようで、どよめきながら召喚獣達に注目していた。

その中でもやはり一際目立つのは、久保の召喚獣だろう。身の丈ほどの大鎌に、数珠をつけた和服を装備した姿は和風死神と言ったところか。・・・本職の死神は元気かなあ。サボってなけりやいいけど。

それに反し雄二の召喚獣は・・・特攻服に、メリケンを纏っての登

場。

まあ俺からは見慣れたものだが、やはり久保と比べると見劣りするなあ。とはいえそもそもここで正直に召喚の応じたのが俺にとって
は意外である。

これまでの戦いでは霧島との決勝戦を見越して、なるべく情報を見
せずに立ち回っていたからな。はてさてどう闘うのか見物だ。

「あれ？ねえユキト、あれは・・・」

「む」

明久の声に指差された方を向くと、そこには点数が表示される電子
パネルがあり、そこにはこんな点数が表示されていた。

【数学】

久保利光 409点

&

坂本雄二 234点

V S

常夏コンビ

合計734点

「おや」

雄二の点数は・・・Cクラス上位程度か。アイツの本気だと300点は越えるはずだからこれはちょっと手を抜いたくらいのレベルの点数だろうか。

ふーむ、これは決勝まで雄二無しでは流石に無理と踏んで点数調整を行ったようだな。

決勝までは一応インターバルがあるし、その間に点数補充を急いで済ますつもりなのだろう。

というか、ひよっとすると数学以外の教科は既に仕上げてあるのかもな。さっきサラッと久保が教科申請して誰も咎めないからそのまま進めちゃったけど、なるほど雄二はこの展開を見越して久保にあらかじめ入れ知恵していたのだろう、抜け目のない奴である。

「まあ、要するにいい勝負になりそうだなー」

「「いやいや待て！もっと他に言うことあるだろ！！」」

え？いや、別に俺としては既にモノローグは済んだしこれ以上言うことはないんだけど・・・

「どう考えてもツツコミ所があるじゃねえか！俺達をさんざんバカにしておいて『えっ！？あいつらこんな点数なの！？』的なリアクションのひとつも無いのかよー！」

「というか点数も合体しちゃってるじゃねーか！なんでだよー！」

「何言ってるんだ、パンフ読めよ。お前らがAクラスだってことくらい既に書いてあるぞ？」

「『えっ』」

実況席からばーいとパンフレットを投げてやる俺。ちなみに、普通の召喚フィールドだと外部からの介入はできないつくりになっているが、今回は『試験召喚陣』の上で戦闘を行っているため介入が可能である。うーむ便利。

「パンフにまで・・・『常夏コンビ』扱いで書かれている・・・だと？」

「だから機械にもあんな風に誤認されちゃったのかよ・・・」

で、パンフを受け取った二人はわなわなと肩を震わせながらぶつぶつ
つ呟き、

「俺達の見せ場がああああーっ!!」

「大声で絶叫したのであった。ああ、実に見苦しい」
「声に出して言うあたりユキトも相当な鬼畜だよね」

何言ってるんだ、本物の鬼畜っていうのはもっとあっさり残虐行為を
行うものなんだよ、どこそそのOPMTみたいにな。

「ていうか、いいのかお前ら？さっきから雄二がお前らの召喚獣
に殴りにしてるんだが」
「ぬわああああっ！？」
「」

Fクラス教訓、殺られる前に殺れ。
攻撃は最大の防御なんだなあ、と感心しつつ次回に続く。

第三十三話（後書き）

まだちょっとだけ続きます、久しぶりのバトル展開なので。

そういうわけで、久しぶりにユキト以外のキャラをひたすら酷い眼に合わせる話でした。雄二もさることながら、常夏コンビのツッコみっぷりは非常に書きやすくいいですね。こう、打てば鳴るといふのはこういうことなのでしょうが。

今回は文脈が多少おかしくてもテンポや勢いを優先させて推敲もせずに出しました。

うーむ、このくらいだとサクッと書けますね。やっぱり今までが詰め込みすぎだったのかなあ。

さて、今回は足りない部分は同じネタでゴリ押ししてしまったのが悔やまれます。めだかボックスとかハルヒとかのネタを入れたかったんですが、残念ながら書いてるときは禁書のことしか思いつきませんでした。

『僕の活躍に』『期待してほしいな』

さいきんのみそぎくんはどうみてもしゅじんこうだね！

あと久保くんについて淫夢ネタを使っちゃいました。やべえよやべえよ・・・相性良すぎてサジ加減を間違つと大変なことになりそうです。

これは全く関係ない話なんですが、EXVS掲示板のYJSNPI
スレが消えたことに俺は深い悲しみに包まれた。

なーんて馬鹿な話をしているとキリがありませんので、今日はこの
くらいで。次回はすぐ投下できますよ！4000字くらいですが。
それでは、また。

第三十四話（前書き）

200万アクセスを達成しました！みなさんありがとうございます！！

第三十四話

通常の召喚獣は、俺と明久のように召喚者と感覚がリンクしていない。

つまり、召喚獣がどのような状況になっても、召喚した者がそれを認識していなければ召喚者は召喚獣の危機に気づかない。いや、気づくことができなくなっているということだ。

それは人間にとって『痛みを感じない』ということも同然。人間が痛みを感じるのは危険を察知するため、というのは有名な話だと思う。それが働いていないというのは、非常に・・・ひっじょーに危うい状態であるのだ。

無論、通常より危険が少ないとは言え、

召喚獣も、例外ではない。

「うわ、常夏コンビの召喚獣が鎧を全て剥ぎ取られてるね」
「とこなつの 防御力が がくーんと さがった！」

・ ・ ・ よし、満足したし真面目な実況に戻るか。

そういえば見てて思ったけど、こまかい鎧の破損箇所とかをしつかりと表現してる文召喚システムって本当によく出来てるよな。ああいうのって学園のシステムが表現してるんだろっか。なんかPCに負荷をかけそうなキメ細かさしてるよなあ。夏場はめちゃくちゃ暑そうだ。

ああ、ちなみに言っておくとあの鎧は『点数によって構成された物質』だから壊れているのであって、今俺が着ているこの服は別に破れたりほしくないぜ読者さん。

まあ、俺の服が吹き飛んでもマジでなんの需要もないだろうし、別にどうでもいい話だったか。

「それより女子の服が吹き飛んでほしいよね!!」
「明久、どうしてそんなに死に急ぐんだ・・・!!」

マイクの前で迂闊なセリフを喋るのはやめましょう。

「くそツ！人が落ち込んでいるときに追い討ちとかテメエそれでも人間か！」

「鬼！悪魔！！！」

「うるせーんだよブサイク先輩共！ストレスが溜まってるのがユキトだけだと思ったら大間違いだツ！」

「・・・ああ、いつも代表がすぐ帰るのはキミの為だったのか」

そんな風に俺達が話している間によつやく、ブサ・・・常夏コンビは体勢を立て直したようである。

召喚獣も立ち上がってビシィ！と雄二達に剣を向けている。これか
らが本番かね。

ちなみに現在の点数差はと言つと、

【数学】

久保利光 409点

&

坂本雄二 234点

VS

常夏コンビ

合計734点 648点

うむ、やっぱりかなり点数は下がっているな。

雄二はとりあえず相手の点数を削ることを優先したようだ。てつきり奴の性格からして武器から先に破壊するかと思っただが・・・そこは何かしらの考えがあるのだろうか？

ちなみに現在の常夏コンビをビジュアル的に説明すると、スタボロになった鎧の破片がなんとか身体にくっついていてる程度で、ライフ

が赤になっているイー ツクを彷彿させるような姿である。

とはいえ天使とはとても言えず、完全に昔の妖怪絵巻に出てきそうな落ち武者のような姿なのだが。見る、また奇妙な奴が出てきたぞ
(笑)

「おい実況！無駄に俺達を煽るのはやめろ!!」

「だが断る」

「おいイー!?」

読者もそれを望んでいるッ！諦めろッ!!

ところで、皆さんご存知のことだと思うが、『召喚獣』という存在は非常に強力な能力を持っている。

『原作』にも、『明久の点数で顕現した召喚獣でさえゴリラ並のパワーを持っている』という描写があるくらいだ。

しかし、ちょっと待ってほしい。この設定、無視できるものだろうか？

ゴリラの平均の握力は400kggf～500kggf。ヒトの平均握力は男性で50kggf、女性で30kggfなのでなんと約10倍の能力を持っていることになる（秀吉の握力は生命の危機に応じて変動するので除外）。

この時点でも相当強いが、しかし召喚獣はこの他に『耐久力』、『素早さ』など様々な要素がパワーアップするのである。

・・・あれ、これ強すぎないか？

召喚獣一体につきこんな身体能力がつく上に、400点を越えると特殊能力まで手に入るというのは多分リリカルな連中やらインなんとかな連中とガチでやりあってもそこそこいい勝負を思うんですが。

そしてその中でも俺は恐らくぶつちぎりのチートっぷりじゃないだろうか。

腕輪能力があまりにもアレだし。なんてこった、これはタグにチートを付けるべきかもしれない！

まあ、それを活かす場面が全く無いから俺も平然としていられるんだが。あつたら厨二病を思い出して恐らく憤死する。

ちなみに蛇足だが、Google先生に聞いてみたところ、

・気候は晴れ

・20

・互いに平均個体、または最強個体の雄の成獣同士（一部雌の方が強い種もある）

が草原で正面から一対一で相対した場合の戦闘を仮定すると、

- S + アフリカ象 トラ
- S ライオン インド象
- S - マルミミゾウ
- A + インドサイ シロサイ
- A クロサイ
- A - アジアスイギュウ カバ キリン バツファロー ガウル
コープレイ
- B + バンテン バイソン アラスカヒグマ ジャガー
- B セイウチ 北極熊 ナイルワニ イリエワニ ヌマワニ エラ
ンド
- B - 豹 ピューマ モリイノシシ ヘラジカ ジャコウウシ
- C + 雪豹 チーター シマウマ オリツクス ブチハイエナ ニ
シキヘビ アナコンダ ヌー ワピチ サンバー カリブー ゴリ
ラ オカピ ツキノワ熊 ナマケ熊 メガネ熊 アメリカ黒熊 ジ
ヤイアントパンダ
- C ウンピョウ オオヤマネコ タイリクオオカミ バク オラン
ウータン ダチョウ オオアrikイ ヒクイドリ シマハイエナ
ラテル クズリ
- C - カラカル ボブキャット アカカンガルー チャクマヒヒ
チンパンジー マレー熊 コモドオオトカゲ

逃亡禁止、同じランクでは左のほうが強い

という結果になるそうな（人によって意見は違います）。
キリンは蹴りでライオンを殺せてカバはワニさえも噛み殺したりするらしい。なんだこりゃ、自然怖い・・・。

で、なんでこんなことを長々と話していたかと言つと。

「行くぞ常村ッ！何が何でも坂本をボコる！！」
「おうよっ！！」
「久保、作戦通りだ」
「了解したよ」

そんな強大な力を持った者達がぶつかり合つと、

「おらああああああああああアッ！！！！」
「いくぜッ！！！！」
「……ぶっ！！」

すさまじい衝撃が発生するのである。

ドツゲオオオオオオオン!!!

『うわあああああああつ!?!』
『きゃあああああああつ!?!』

この光景に慣れていない外部席から、思わず叫び声が漏れる。

『おー、さすがに点数あるとすげーなー』
『つーか坂本はFクラスじゃなかったのかよ?』
『ああ、確かアイツ霧島さんの彼氏らしいから』
『『『』なるほど、坂本は殺す』』』』

一方、そこそこ召喚獣同士の戦いに慣れている校内生が座っている席からは、感心したような声と・・・なぜか憎しみが満ちていた。

「アイツは嫌われる天才なのだろうか」
「霧島さんが好かれる天才なんじゃないかな・・・」

舞台の中心に立つ雄二の頬に冷や汗が垂れているのは恐らく見間違いはあるまい。恐らくヤツは準決勝が終わったらどう逃亡するかを必死に考えているであろう。

「ククク・・・どう妨害してやろうかなあ・・・!!」
「しかし四面楚歌・・・!雄二圧倒的不利っ・・・!!」

そして、俺と明久は試合そっちのけでこれから起こる惨劇に思いを馳せていた。もちろん底う気はないよ!

「アンタら・・・色々ダメなんじゃないかい・・・?」

まさかの学園長からのツッコミを頂いてしまった俺達であった。

「と、というか、今この場にはツツコミキャラが圧倒的に足りないぞ。ババアのツツコミとか誰得だよ」

「アンタその言い草は流石に無いんじゃないかい!?!」

「これは誰かツツコミ要因を呼んでおくか・・・あ、そうだBGMをマミさんのテーマにするんだった。島田を呼ぼう」

「無視すんじゃないよゴルアアアアアアアア!」

「うわあ・・・これはどう見ても美琴ですね・・・たまげたなあ・・・中学生の真似とか流石に歳を考えろよ」

「え、ユキト・・・美波、呼ぶの?」

「ん?なんか不都合でもあるのか明久」

「いや、うん・・・なんというか・・・マミさんとの落差がっつてぶらああああつ!?!」

「あ、明久あー!?!ど、どこからともなくリボンが飛んできて明久を吹き飛ばした!?!なんだこれは、布槍術って奴なのか!?!」

斬り付ける。

弾く。

蹴りを仕掛ける。

受け流す。

打つ。

打ち返す。

ガキキキキキキーンッ！！

「うおおおおおおおッ！！」

怒りやら気合やらを怒号に込め、雄二と不細・・・常夏コンビの召喚獣が衝突する。

闘うのは全て人外。ヒトの領分を越えたその闘争に、参加者もたまたまず固唾を飲み込み、大会を見守っていた。

（す、すげー！でも女の子だったらパンチラとかあったんだろっな
あー！チッ！！）

（なんか絵面が映えないねー）

（もしもし、こちらはCクラス。Fクラスの申請は受理された、拙

ここに座って実況の手伝いをしてくれるそうさ。

で、明久はイスにされている。

「おかしい・・・！ツッコミを期待したのにどうしてこうなった・・・！！！」

「アキがバカだからでしょ？」

「明久のバカ野郎！」

「あまりにも理不尽！！！」

プルプルと足を震わせながら空気イスの姿勢を取りつつツッコミができるって凄いなと思う。しかもヒザの上に島田を乗せてるし。

どうやら禁句に触れた対価として、明久はこの試合中島田のイスになることを厳命されたらしい。ああ、試合が白熱した展開で本当によかった。こんな恥さらしは流石に見ていて気持ちのいいものじゃない。

「くっ・・・耐えるんだ僕・・・!!ここで転んだりしたら、美波に恥をかかせることになる・・・!」

「えっ・・・ア、アキつてばそんなこと言って・・・えへへ」

自分を鼓舞しながら耐える明久に、その呟きを聞いて照れる島田。彼女の顔は（恋する乙女なので）やや赤くなっている。そして明久も（色々我慢しているので）顔真っ赤。腰から下を隠してやればバカップルにしか見えないかもな。実際は拷問現場だが。

(転んだら、アキに抱きついちゃったりして・・・って、だ、ダメよ！大勢のヒトの前でそんな)

(転んだら、きつと世にも恐ろしい方法で処刑される・・・耐えろッ・・・！！)

そしてこいつらの頭の中はこんなもんである。すれ違いもここまで来るとギャグになる。

なんというか、果たしてこいつらくつつくのだろうか。未来一切が見えない。

「・・・待たせたね、坂本君」

とまあ、実況席でバカをやっている間に、試合のほうでも動きがあった。

先程まで雄二一人に戦わせて何やら静かに目を閉じていた久保が動いたのだ。

「へっ。遅いぞ久保」

「悪かった。この借りは、これからの働きで挽回するよ」

きゃあああああああああーっ！

「おおーっ、ここで不適な発言だ！勝利宣言とも取れるこの内容、このメンツの中で唯一イケメンな久保君にはとってもお似合いだね！黄色い声援が飛んできたよー！！」

「くくくうるせえよこのバカー！！くくく」

空気イス状態でも雄二を煽るのは忘れない明久である。

「よ、吉井君・・・!!・・・フツ、先輩方!申し訳ないがあなた方には負ける気がしないよ!!!」

そして明久の応援に久保のテンションもMAXである。・・・といつかさ。

マイクのスイッチを切って、明久に尋ねる俺。

「明久、オマエひよつとしてわざとやってるんじゃないか?」

「え、何が?」

「・・・ねえアキ、あとでウチの体、好きどころ触っていいよ?」

「ぶっ!?!み、美波さん!?!どうしたのさ急に!!!」

「だからね、その・・・久保じゃなくて、ウチのことを見てほしいの!!」

「僕には君が何を考えているかさっぱりわからないよ!？」

「こんなの絶対おかしいよ」

気合を入れた久保、不適に笑う雄二。

身構える常夏コンビ。

過去に類を見ないほど真剣なアプローチを明久にかけている島田と、それに困惑する明久。

そんな力オスな状況になっている周囲を見回して、俺は呟いた。

「オチ要因が沢山いるのに、何故オチが無いのだろう」

思いつきませんでした。すまぬ・・・すまぬ・・・

そんなわけで、次回に続く。

第三十四話（後書き）

もうちょっとだけつづくんじゃ

しかし学園祭が終わらない！

外伝より先にこっちを片付けたほうがいいのかもかもしれませんねえ。

第三十五話（前書き）

うーむ、難産でした。
遅れて申し訳ありません。

第三十五話

【幕間】

わぎゃああああああああああああああああああああああ
．．．．．

「ふーむ。ユキトの言つとおりになったのう」

『．．．．．確かに、十分考えられることだった』

「ワシらも油断しておったな．．．しかし、それにしても霧島を襲おうとするなぞ自殺行為じゃのう。雄二もいることを知らぬのか」

『．．．．．そこまで深く考えないと思う。その点やはりユキトは頭がいい』

「うむ。明久もユキトのように少しは成長してほしいものじゃな」

『．．．．．』

「．．．．．何か言ってほしいのじゃ、ムツツリーニ」

『．．．．．俺はムツツリじゃない』

「そっちには反応するのじゃな．．．というかお主、まだそんな絵

空事を主張する気なのか」

『……（ブンブン）』

「携帯越しに首を振られても風を切る音しか聞こえぬぞ。……ぬ、
そついえば霧島はどこへ行ったのじゃ？」

『………追い討ち』

「……霧島を守るためのワシらじゃったのだが……なんだか本
末転倒じゃのう」

『………なんだかんだで、雄二の次くらいにユキトを気に入
ってるらしい』

『………成敗』

「ひ、ひひひひひひっ……！」

「あん？どつし・・・つて、オマエ指治つてネ！？」

「こ、この学園に入った瞬間に治ったんですけど・・・」

「なにそのオカルトこええええええええええ！ひよっとしてアレか、

あのくされ野郎（ユキト）はここまで計算してたのかよおおお

お！？」

「ま、まままてお前らららら」

「りよ、りよーさん！喋つて大丈夫なのかヨ！？」

「こここのままでは引き下がれれん、なななんとか突破口をををを」

「た、確かに・・・けど、こんな適当に走り回ってる中、あのユキトとかいう人形の関係者で逆転の糸口なんて・・・」

てくてくてく

「はあ・・・私にとって、ユキトやなつて・・・」

[] [] []

~ ~ ~ ~ ~

「さあ、いくよ先輩方！吉井君のためにも！！」

高らかな宣言と共に、久保は自身の右腕を掲げた。
そこにあるのは、腕輪。成績上位者たる能力を持つ証。

「おおっと、ここで久保利光が『腕輪能力』を使う模様だ！」

「ユキト、そついえは来賓のひとのために説明しておいたほうがいいんじゃないかな？腕輪のこと」

「要するに宝具だ！」

「大雑把すぎるわよっ！？」

「じゃあ封具だー！！」

「あんまり変わっていない！？」

夫婦のごときツツコミを繰り返す島田と明久。

やっぱりお似合いなんだよなーこの二人。なんというか、根本的なところで相性がいい。やれやれ、こういうのアレか。リア充末永く爆発しろというヤツか。

『…会長』

『落ち着け。ここで吉井を討てば坂本には逃げられる』

『ハッ!? さ、流石会長。先を見ておられますな…』

『ふっ…この程度、慣れればどうにでもなるさ』

『…慣れてるんですね、会長…』

『ブワッ』

『す、すいませんでしたー!!』

一方、校内生は静かに手に持つカッターの刃を砥いでいた。…いや、カッターは切れ味が落ちたら刃を折り取ればいいんじゃないだろうか。相変わらず非常に残念な連中である。

「?どうしたのユキト、試合も見ずに」

「明久、お前はこの気配を感じないのか?どうしたんだいつもの危機察知能力は」

「へ?」

…ふむ、どうやら明久はリア充となる対価にこの世で最も大事なものを無くしてしまったらしい。残念なこった。

とまあ、そんなバカなことをやっている間に、カッ！と久保の召喚獣が光に包まれる。

(…：そういうば久保の腕輪能力はアニメで出てきたんだっただな、一応)

考えの間にも光はどんどん強くなり、次第には会場を包み込むようにな広さへ広がっていく。
思わず目を閉じる一同。

そして、光が消えたとき、そこにいたのは、

(∴坂本君、言われたとおりにしたよ)

(よし、よくやった久保。あとは直ぐ行動を起こすはずだ)

(しかし、ここまでする必要があったのかい？あまりにもオーバキルだと思っただけ)

(お前、明久と遊びに行きたくないのか？)

(立ち塞がる総てを破壊させてもらうよ)

(∴自分に正直だな、お前も)

あれ、何故だろっすっごく嫌な予感。

「ちょ、ちょっと顔が怖くないかしら？」

「あはは、何を大げさな。アレ久保君だよ？」

「で、でもまるでオバケみたいだし」

「心配性だね美波は」

そうこうしている間にも俺の隣ではラブコメが展開されていた。…
なんというか、最早恋人三ヶ月目くらいの親密度になっているような

ゾ
ワ
ッ

「
ツツツ！！？！？！？！？」

ナンド。
ナンド、コノ気配ハ。

おかしい。悪寒が止まらない。まるで目の前に熊や龍・・・いや、
もっとおぞましい、まるで『人類』の天敵がいるかのような錯覚。

震えが止まらない俺の身体は反射的にババツと辺りを見渡し、この
気配の持ち主を探す…！

一体なんなんだこれは！まさか、先程の嫌な予感はいかッ！？
これほどの圧力をかけてくるモノなど、おそらく数えるほどしか
まさかッ！？

「明久君っ！美波ちゃんっ！！」

程無くして、俺の眼がひとつのモノを捉えた。

（まさか）

桃色の髪をした少女。

おそらくは走ってきたのだろう、顔を赤くして息を切らせている彼女。

そして、その手には小さな袋が握られている。

（明久、お前は）

明久からは見えない角度に存在する『それ』は、

「あーん？なんだありゃ！おい、ふざけんなよ吉井！なんでお前実況のくせに急にラブコメをゴブハッ」
「？おい常村、いったいどうしガゲヴボッ」

ガタタタッ

ズシャアアアアア

常夏コンプレを『破壊』した。

(詰んでいたのか、・・・最初から)

・そして、姫路の持っている『ナニカ』を見た。

・結果、二人が死んだ。

「わけがわからないよ」

意味、不明である。

というか、一体なんなんだアレ。いや、予想は大体ついてるけどさ。

そう思いながら姫路の持っていた『袋』に目を凝らしてみると、

「・・・え、な、なんだコレ。見えない・・・!？」

自分の目はその部分に焦点を合わせようとすると、何故か見れば見るほど黒いモヤモヤが掛かっていくような感覚。

まるで蜃気楼、具体的にはzeroバーサーカーの宝具を見ているようだ・・・

『よし、久保！今だ、トドメを刺せ。あと間違っても目を開けるな』
『了解したよ。というか、一体この向こうには何があるんだい？』
『・・・見ないほうが幸せなこともある。俺は既にアレの片鱗を見た』

「ってコラ雄ニテメエエエエエエエ！！やっぱりコレはお前のせいか！何しやがったアアアアアアア！！！」

黒幕はここ にいた！

「って、ギャグを言ってる場合じゃない！おい雄ニ説明しろ！！まさか、お前！！！」

『・・・その声、ユキトか。お前には謝っておかなくちゃいけないことがある』

「まさかお前・・・！『開放』したのか、アレを・・・！！！」

『やっぱり知ってたか。そうだな、認めるよ。俺が間違っていた』

「ぶざけんな！そんな言葉でどうにかなるレベルだと思ってんのか

『ど、どういうことだオイ!』

「いいから早くしろーッ! 学園長、今すぐ俺たちの周りに召喚フィールドを出せッ!」

「な、何かよくわからんが了解さね!」

くそ、せめて全員が逃げるくらいの時間は稼がないとマズい・・・! 根本的な解決策もわかっていないのになんてマゾゲーだよ畜生!

『ふむ。よく解りませんがユキトくんが言うなら大事なことなのでしよう。葉月さん、行きますよ』

『???わ、わかつたです・・・』

『た、隊長ッ! 坂本が逃亡しました!』

『逃がすな追ええええ!』

『『『『了解ッ!』』』』

よし、話のわかる一部観客はさっさと避難しているな。もう今忙しいからッッコまないぞ。

そして、俺たちが大慌てで準備を整えている中 ついに、姫路は動き出した。

「明久君ッ！美波ちゃん！」

「え、ひ、姫路さん？」

「どうしたの瑞希、そんな慌てて・・・？」

島田と明久はまだ気づかないんだろうか、姫路が後ろ手に持っている『アレ』の存在に。
どれだけ危機察知能力が欠けているんだ。

「わたし・・・坂本君から、全部聞きました・・・」

「へっ？」

そう前置きをすると、姫路はすっーっと大きく息を吸い込んで・・・

「ズルいですっ！最近は二人ですっといチャイチャしてっ！
！」
「へっ？」

大声で、叫んだ。

「え、ひ、姫路さん・・・なんのこと？」

「私、知ってますっ！最近は何久君が美波ちゃんに甘い言葉囁いたり、胸じゃなくて実はお尻が好きなんだとか言ったり、こっそりデートしたりしてることをっ！」

「え、え？・・・えええええ？」

顔を真っ赤にして叫ぶ姫路に、対する明久と島田は困惑顔である。

まあ、それはそうだろう。

姫路は恐らく、雄二に嘘八百を吹き込まれているのだから。

何故姫路が唐突にこの場に現れたのか？

それは恐らく・・・雄二が、自分の保身のために仕掛けたことだったのだと思う。

霧島との結婚コース直行片道切符により、唐突に人生の危機に陥った雄二は、なんとしてもチケットを回収する必要があった。

そのために、ヤツはあらゆる作戦を考え、策を練り・・・そして、気づいたのだ。

『俺にとって一番の敵は、翔子じゃねえ・・・明久だ！』

自分と幾度となく強力し、争った明久。いわば自分の手の内を完璧に把握していると言っても過言ではない存在。明久が本気で雄二を妨害すれば、いくら雄二でもその状態で霧島に勝てる確率は限りなく低くなるだろう。

もちろん、明久が本当に雄二の邪魔をするかどうかはわからない。忙しくてそんなことにまで手が回らないかもしれないし、逆にどんなに忙しくても雄二の妨害には全力を出すかもしれない。

だから、雄二は明久を『何があっても』抑える作戦を用意する必要があった。

そこで姫路である。

丁度いいことに、明久は姫路と島田という二人の少女に好意を寄せられていた。

だから雄二は姫路に適当な嘘八百を吹き込んで、明久を拘束する枷として使うことにしたのだ。

(・・・まあ、俺も雄二の立場だったら『知らなかったら』やってたかもしれないな)

アイツらの恋愛初心者っぷりは見ててイライラするレベルだし、このことが切っ掛けで何か進展があるかもしれない。

おまけに、雄二にとっては純粋な明久への嫌がらせにもなる。

そんな軽い気持ちで、アイツは姫路にあることないことを吹き込んだのだろう。

ああ、雄二。確かに、お前の計画は完璧だったさ。

だがな、雄二。もう既に気づいてしまったようだが、お前はひとつ

の事実を知らなかった。

「だから、私も・・・もう、負けてられないんですっ！手段は選んでられないから、だから・・・!!」

ぶ。

誤解が解けていないままに。
微妙なすれ違いを抱えたままに・・・それでも、姫路は、叫

「私も、明久君が好きなんですっ!!」

「え？」

明久が、驚愕の表情のまま、凍りつく。

「み、瑞希……っ!？」

「明久君……!私、冗談なんかで言ったわけじゃありません!だから、私の気持ち」

「 『お菓子』 に込めましたっ！！受け取ってください！！！！」

ふと、昔読んだとある文章を思い出した。

とある国の魔術師は、魔力を溜め込むために眼を縫い付けらしい。

今回のことも、それと同じことだと、今更ながら俺は気づいた。

姫路瑞希はな・・・『殺人料理人』なんだよ、雄二。

らな。

ああ、知ってるよ。俺もプロトタイプを食わされたか

「告白は他人に迷惑をかけないようにやりやがれちくしょおおおお
おおおおおおおッ！……！」

ゴバアツ、と姫路の『クツキー』から瘴気が放たる。

それを破壊するために、木刀を強く強く握り締め
出した。
俺は、走り

第三十五話（後書き）

お菓子だからね（意味深）

さて、何人に伝わるかわからないギャグは置いておきまして。お久しぶりです、琥珀です。

僕の周りはずいぶんと環境が変わりまして、パソコンを取替えてそして修理して破棄して取り替えていたりしました。複雑すぎワロタ。

さて、今回の話ですが・・・ええ、仰りたいことはわかります。ですがどうかお許しください。

なんだこの超展開は。どうして試合中に唐突な告白が始まるのか。そしてどう考えても最後のユキトの動きは打ち切りのごときry

いやー、ついにこのSSでも姫路瑞希さんのポイズンクッキングを解禁しました。いつかは使おうと思って大事に取っておいたのですが、話の都合上ここで使うことになりました。

つまり、僕は溜めていた弾丸のストックを使い切ったということですよ。やべえ。

レキさんとかはきちんと銃弾の管理をして最後の一発をアレする用に取っておくというのに、このゴミ作者ときたらこの体たらくですよ。笑ってください。

さて、本編とは関係のないお話なのですが、なんと『おしょうゆ』に外国人の方から感想を頂きました！本当にありがとうございます！！

しかも超上手い絵まで描いてくださり感激でした！いつも感想をくださる皆さん、本当にありがとうございます！

それと次話ですが、恐らく来週か再来週の金曜日にお届けすることになると思います。いやあ、やっと定休日的な日を設定することができました・・・

小話のストックも70%くらいできているので、そちらも近日お届けできるかと思っています。

それでは皆様、また次回に。

・・・あ、そうそう

バカテス9・5巻で久保君が「事実であれば訴訟も辞さない」って言ってるんですけどこれはつまり井上先生があこのネタを把握している可能性が微粒子レベルで存在している・・・？

第三十六話（前書き）

途中でパソコンが落ちて遅れました。

多少後半部分が削れてしまいましたが、その決着も次回ということ
で…

第三十六話

バチンッ！

という音と共に床に展開されていた『試験召喚陣』が強制的に電源を落とされ、火花を散らして消滅する。それに続いて幾何学模様が俺を中心に展開され、体育館の全域が『召喚フィールド』に包まれた。

漫画のような展開。

SFのようなエフェクト。

そして、俺。

どれもこれも、本来なら有るはずのない存在だった。

『世界が異常に満ちている』という、常人ならば違和感、拒否感を感じてしまうような『ソレら』はしかし。

この場では、ただの演出に過ぎない。

正直、俺キレてもいいよね。

…姫路の恋心そのものは真っ直ぐなはずだったのに、汚れたフィルターに通した結果がこれだよ。

もうなんというか…アレだ。ここからが本当のデモンズ…いや、やめておこう。これ以上難易度が上がったらたぶん俺耐えられない。

「この状況・・・ジャイロのように　タフなセリフを吐きたい」

そんな独り言が口から漏れた。

ああ、認めるよ。俺は今すぐ逃げ出したい。ネタを言わなきゃ震えた足を止められないくらいに、俺はビビッている。怖くて怖くてたまらない。
だけど。

逃げちゃだめだ。

そう、俺の魂が叫んでいる。

「おい、コラそこの暗黒物質ッ！！」

【！？】

「全国の主婦に喧嘩を売る程度の完成度でラスボス気取ってんじゃねえぞコラ！あれか？お前アレか！暴力で押してけば恋愛が成就するでも思ってたんのかこの乳ビンタ分裂体！！」

【…！ ジャ@シNイデ！ア*ヒハク ガ¥イノ！】

「何言ってるか全然わかんねーよバーカ！悔しかったらかかってこい！！！」

そう相手を煽り、こちらに注意を向けさせつつジリジリと立ち位置を調整する。

おそらく、あの暗黒物質の目的は明久だ。どのように姫路の気持ちに歪んだにしろ、明久に一番関心を持っているのは間違いないからな。

(…というか、なんで微妙にでも会話が成立してるんだろうか)

喋ること自体が一番ヤバくねえかこれ？などと考えつつも…俺は、チラリと横目で明久達を見る。

そこにいるのはあくまで普通の、三角関係に悩みながら告白を受けている人類史上でも類を見ないバカ達でしかない（普通か？というツッコミはとりあえず置いておくとして）。

あいつらは決して、実は世界を滅ぼせるくらいの能力を持った召喚獣でもなければ、ギャグを超越してバトル展開を呼び込んでしまったクツキー（絶望）でもない。

ここはファンタジーの領分だ。

「
『リアライズ武装顕現』
」

木刀を構え武器を呼び出しながら、それに、と思う。
それに殺人料理については多少なりとも俺に責任があるわけだし、
なにより。

他人の恋路の邪魔は、俺にも誰にもさせはしない。

【オアア¥アアア@アアぁアアアアツ!!!】
「来いよベネットおおおお!!! 毒素なんて捨ててかかって来いッ
!!!」

瘴気がカタチを変えて、触手のようなものを伸ばし、俺の元へと殺
到する。
それに負けないように、俺は声を上げながら迎え撃つ

そんな風に、ユキトが自分の戦いをしている間

他の者達も、自分の『戦場』で戦っていた。

ダダダダダダダッ!!

「「「坂本オオオオオオオオオオオオ!!!!」」「」」
「こっち来んなアアアアアア!!!!」

…とはいえ、ユキトの命賭けの『闘争』と、雄二の命賭けの『逃走』
では、シリアスの度合いは比べ物にならないのだが。

「ええい、お前らなんでこっちに来るんだ！目の前で明久がラブコメ展開していただろう！そっちを先に殺れこのバカ共！！」

「『『『あんな相手にはできるかッ！！』』』」

「情けねえええええええ！！！！」

逃げながらそんな遣り取りをする雄二。

しかし自分からアレを押し付けておいて、更にスケープゴートにしようとするあたり、彼も相当の人間の屑である。

「というかお前ら俺への攻撃はやめるはずじゃなかったのか！ユキトのやった唯一の善行だと思っていたのに何故こうなったッ！」

「それは霧島さんを応援するだけだ！霧島さんがいなきゃお前なんてただのゴミなんだよ！」

「妬ましい！ブチ殺す！！」

実際のところ、唯一どころかすさまじい数の善行をユキトは積んでいるのだが、雄二は（微妙に自覚しながらも）それを棚に上げて叫んでいた。だめだこいつ、本格的にアウトじゃねーか。

とはいえ、世の中には因果応報という言葉があるように、

「す、好き勝手言ってるじゃねーよ！第一俺は翔子のことなんて」
「……雄二、見つけた」
「」「」「あっ」「」「」

デデドン！

「しよ、翔子…?」
「…雄二、いくつか聞きたいことがある」

ゾ
ゾ
ゾ
ゾ
ゾ
ゾ
ゾ
ゾ

それは

『雄二の生存確率は オーラの多寡のみでは決まらない』という
FFF団の経験則をはるか凌駕し 黙らせるに十分すぎる程の

絶対的ともいえる圧力を湛えていた

「き、霧島さん！お疲れさまです！（な、なんか霧島さんが殺意の波動に目覚めてるんだけど）」

「どうもっす！（なんか知らんがめっちゃ怒ってないか霧島さん！）」

「それじゃあ自分らはこれで！（よし、全員退避！どうやら坂本は勝手に死ぬようだ！！）」

「待てお前らぁ！頼む、頼むから待ってく」

「……雄二」

「はいっ！？」

溺れる者は藁をも掴む。

とはいえ、そんな藁すら吹き飛ばされたら、あとは絶望しか残らないのであった。

そんな地獄まっしぐらの雄二をしっかりと見据え、翔子は静かに言葉を吐き出した。

「……さっき、雄二を捜しに会場に行った」

「お、おう。それがどうした？」

「……なぜか観客が全員外に出て、大きなモニターの前で騒いでいた」

「へー、そうなのか。な、なんでだろうなー？」

「……モニターの中で、瑞希たちがすごく大変そうになってた」

「あ、あいつらの恋もようやく進展するんじゃないかねえかな」

「……その隣で、ユキトが何か黒いモヤモヤと必死に戦ってた」

「ファンタジーはファンタジーを呼ぶのか、すげーなー」

「……『雄二の野郎後でブチ殺す』って叫んでた」

エエエエエエ！！！」

自業自得です。

っていうか自分だけ助かるうなんて考え、そんなんじゃ甘いよ〜）
棒読み）

このままじゃ人間の屑として読者に嫌われちゃうから責任は取らなければいけない（戒め）

バランスを取らなきゃいけないこっちの事情も考えてよ（迫真）

「……このあと、雄二には頼み事があるから後遺症は残らないようにしてあげる」

「ま、待てやめろッ！どうせ毎回ギャグ補正で怪我が治ってるんだから、結局いつもと変わらな…ぎゃあああああああああああああああ
ああああああッッッ！！！！」

爆音。

破碎音。

そして更に悲鳴が上がり、雄二は報いを受けたのであった。

……南無。

（数分後）

「ぐ、ひ、ヒデエ目に遭った…」

「話を聞く限りどう考えても自業自得なのじゃが」

「この後ユキトも相手にしなきゃいけないんだぞ俺は」

「じゃから自業自得としか思えんのじゃが」

秀吉に反論（できていません）しつつも、俺：坂本雄二はようやくハッキリしてきた意識で周りのメンツを見渡した。

俺、秀吉、翔子、ムッツリーニ。：なかなか珍しい組み合わせだな。いつもは野郎で集まるときは明久とユキトがいるし、その代わりに翔子がいるというのはなかなか新鮮だ。

「…で、だ。お前ら、なんで俺を呼んだんだ？」

正直、今の俺に時間を無駄使いしている暇は（ユキト的な意味で）

ないので、早急に用件を聞くことにする。

…よく考えてみると、翔子がオシオキを控えめにするってのはかなり、いやほぼあり得ないことだな。

それくらいイレギュラーな事態が今、この場で起こっているということなのか…？

そんな俺の疑問に対し、翔子は簡潔に応えた。

「……………美晴がさらわれた。助ける為に、雄二に手伝って欲しい」

…ねーだろ、それは。

色々な意味で、呆然とする俺だった。

第三十六話（後書き）

ああ、微妙な切りですいません。

実際は美晴救出まで書いてたんですが落ちました。

PCという意味でもそうなのですが、寝落ちしました。俺も色々忙しいんだぜ…

予定になかった活動がいきなり発生したりで色々今週はキツかった。まあ来週もキツいんですが。

何がヤバいって、今回ばかりは怠慢とかそんなんじゃないやなくてマジで忙しいというところですね。死ぬ。誰か代わってください。

できるだけ次回も早急にアップしたいと思います。番外編も5000字くらい書きあがってますしね。

番外編・『部屋とフラグと勉強会』（前書き）

番外編です。

彼らの日常によくあるグダグダな1ページをお送りします。

番外編・『部屋とフラグと勉強会』

突然だが、世の中には『フラグ』というものが存在する。

この言葉本来の意味の説明はみなさんご存知であると想うので省略させてもらうが、単にフラグと言ってもその種類は実に様々だ。

死亡フラグ。

生存フラグ。

恋愛フラグ。

あるいは、これらを総称してイベントフラグ、という分類もできるだろう。

で、だ。

俺こと柊ユキトは今まで様々な形で死亡フラグをヘシ折ってきたわけだが、実は俺は死亡フラグ以外にもけっこうな数のフラグを折ってしまっていることにお気づきだろうか。

それは、

「明久。勉強するぞ」

「嫌あああああああああーっ！！！？」

成長フラグである。

「そんなわけで、只今より第一回バカ野郎共限定勉強会を始める！」

デデーン！

「逃げなきゃダメだ、逃げなきゃダメだ、逃げなきゃダメだ……！」

「……保健体育以外は厳しい」

「やっとな……やっとなは男と認められたのじゃな……！！！」

「いや、恐らくここで重要なのは『バカ』の部分だと思っぞ」

「やめるのじゃ！ワシの希望を奪うのはやめるのじゃ……！」

言い放つ俺と、聞く側のテンションの落差があまりにも激しいが、勉強とはそういうものなのだッ！

さて、ここは吉井家、そのリビング。

何故こんな勉強会をすることになったかと言うと、

・この前のテストでいつも通り明久が赤点を取った
・あ、そういえば俺、本来明久が勉強するイベントをことごとく潰してたな

・明久、この時点ではちょっとずつ点数が上昇してなかったっけ？
そろそろ勉強させねーと色々ヤバくね？

というわけで、明久を勉強させることにしたのだ。以上説明終わり。
で、それを聞いたいつもの連中がワラワラと集まってきたので、今回はみんな勉強会を開くことになったのである。

…とはいえ、今回はいつもと違うところがある。

「なんとこの場には今回、『男』しかないッ！ー！一人微妙だがッ
「！」

「最後の台詞をワシは認めぬぞッ！ー！」

それというのも、

『えっ、お勉強ですか？なら、私もお手伝いしましょうか？ゴハンくらいは用意できますよ？』

と、姫路が安全性の理由から却下され。

『あー、ウチ今日はお客さんが来るから葉月の面倒見なきゃいけないのよねー』

と、島田が家庭の事情で遠慮することになり（原作でこれからの予定に島田家での勉強会があったからかもしれない）。

『…今日は、お義母さんとお話することがある。残念』

と、霧島が根回し…個人的な事情のために欠席。

『うーん、女の娘がボク一人…ひとり…？なのはちょっと、ごめんね？』

で、工藤も女子の少なさから不参加という運びになった。

「そんなわけで、今回なんと教師役は俺しかいねーわけだな」

「待てユキト！いくつか危険な発言が今の会話に含まれていねえか

！？」

「え？何言ってるのさ雄二。いつものことでしょ」

「言い返せねエツ……！！」

「……むしろ、束の間の自由を噛み締めるべき」

哀れ、雄二。久しぶりに霧島がないのにこれである。

「のう、ユキト」

「却下」

「まだ何も言っておらぬぞ……！！」

予定調和というヤツだ。

さて、そんなわけで勉強開始である。

勉強の教え方、なんていうものは実に多種多様で、下手するとそれだけで本が何冊も書いてしまうほどだ。
教える側は聞く側の3倍の知識が必要だ、なんて話もよく聞く。

とはいえ、それは『普通』の奴らに勉強を教える時の話だ。

こいつら、揃いも揃って勉強以外のスペックが異常に高いからな。
その長所を生かすやり方で勉強を教えればいい。
なーに、問題ない、こいつら単純だから多少はゴリ押しでいけるさ。

というわけで作戦開始。

・ムッツリー二の場合

「多分お前が教えるの一番簡単だろうなあ。んじゃ、まずは居間にシートを敷いて、と」

「お前が何やるのか想像はついたが…ヒデえなおい」

うるさいぞ雄二。多分一番効果的な方法がこれなんだよ。

「よし、準備完了。ムツツリーニ、これを持って」

というわけで、勉強のための『秘策』を手渡す。

「……PSP…?」

「えっ、なんでいきなりゲームなのさユキト!?!」

「まあ落ち着け。ムツツリーニ、XMBからゲームを起動してみる」

「(カチカチカチ)…わかった」

ピローン(起動音)

『はわわ、ご主人様！敵が来ちゃいました!!』

ブパアアアアアアアッ

「ムツツリーニイイイイイ！……！」

「これが孔明の罠か……！」

台詞はイメージです。実際の製品とは異なります。

「んじゃ、今から世界史の勉強な。ムツツリーニはこのゲームのテキストを全部覚えろ」

「ええっ！？何その無茶振り！？」

「大丈夫だろ、これ全年齢版だし」

「そこじゃないよ！いやそこも重要だけどさ……！」

大丈夫、まだ15禁のタグはつけなくても大丈夫、大丈夫のはずだッ！

いい加減流血表現だらけなのに規約違反じゃね？とか突っ込まれそうで怖いけど……！！

「……待て、明久……！」

「ムツツリーニ……？」

がしり。

ムツツリーニが崩れ落ちながらも、明久の足首を掴む。

「……やる。やってみせる……！この程度できなくて、ムツツリ商會が運営できるか……！」

「…な、なんて覚悟…！でもムツツリーニ、どうしてこの作業が運営に必要なの…！？」

「じゃ、一時間後にテストすっからよろしくなー」

うん、これで良し。

一見ムチャクチャな方法だが、アイツは本当にやってのけるから恐ろしい話だ。

神にーさまも物理的に時間を超越したプレイをしてたし、この程度余裕だろう。

このやり方を真似しないでください。普通の人がやっても萌えキヤラに飲まれるのがオチです。

・秀吉の場合

「まあお前も大概ハイスペックだからムツツリーニと似た様なやり方で問題ねーだろ」

「あ、あのような無茶振りワシにはできぬぞ…？」

「知らぬは本人ばかりか…んじゃ、秀吉はこれでやるっ」

がさごそ。

そう言つて俺は本棚から一冊の本を取り出し、秀吉に渡した。

「ぬ？何の本じゃ」

「『魔 科高校の劣等生』つてラノベ。

簡単に言つて最強主人公が敵を粉碎する話だ」

「ちよつとユキト大丈夫なのおー！？絶対ファンに怒られるよその発言ー！？」

大丈夫だ問題ないッ！

あくまでこの物語はフィクションだ！登場する作品・人物はあくまで架空のものだ！！

つまり、こんなゴミみたいな物語に大人気PV3000万な作品は一切関係ないんだ！！

ファンの方、お許してください！

「う、うむ？それで、どうしてその本がワシに必要なものじゃ…？」

「いや、この本情報量がめちゃくちゃ多くて纏めるのが大変な作品なんだよ。そんなわけで、秀吉は簡潔なあらすじを書いて後で一人読み聞かせを俺たちに行うように」

「またレベルの高い無茶振り！？」

「何、男役も演じてよいのか！？やるのじゃー！！」

「ええっ！？秀吉もアツサリ認めるのお！？」

【Side 明久】

「さて、あとは明久だな」

「うづうっ!?!」

開始数分後、僕はいまだかつてない『嫌な予感』に震えていた。

な、なんだこの感覚!いつもの死の予感とは違う、別方向の地獄を今日は見てしまう予感しかしないよ!

しかも、いつもの理不尽と違って今回は圧倒的にユキトが正しいから何も文句を言えない…!!

あのユキトの様子を見ると僕にもどんな無茶振りが来るかわかったもんじゃない!

(何か、何かないのか!!)

救いを求めて無我夢中であたりを見渡す僕の目に映ったのは、

「……………（ボタバタバタ）」

（そのままの意味で）必死にゲームで勉強をしているムッツリーニ。

「ぬ、この言い回しはやけに難解じゃな……」
無心にラノベで勉強をしている秀吉。

「じゃあな。潔く死ね明久」
醜いゴリラ。

…うん、今なにか目に汚いものが映ったけど気のせいだな。
でもなんとなくウザかったから、後で霧島さんに雄二のエロ本の隠し場所を教えてあげよう。なんとなくだけど。

…まあ、それは今は置いておくとして。

「さーで、明久は普通にこの問題集でもやらせっかなー」

「ゆ、ユキト！おかしいよ、そんなカドで殴ったら人を殺せそうな問題集はおかしいよおッ！！」

「お前は根本的に量が足りてねーんだよ。というか、最近俺が出した課題もサボってたしな。ちよーどいいくらいだ」

「アッー！！くそっ…！？僕に救いは、救いはないんですかアアアアアアアアッ！？」

「おい、申し訳ないがレスリングはNGって言って…」

ブルルルルルル

「ん？」

え？電話…？

音の発信源を見ると、ユキトの携帯からみたいだ。

「あれ？というかユキト、着メロ変えた？前は確か」
「だ
ったのに…ってアレえ！？なんだかオートで伏字になったあ！？」
「おい馬鹿やめろ、曲名やら歌詞やらはにじファンの利用規約に引
つかかるだろ！！」

…って、そんなことはどうでもいいか。それより誰だ？この電話」

普通のちょっとした用事はメールで済ませるし、長話をする場合は本人に直接会うことのほうが多い。

番号を教えている人にはそれをいつも伝えているはずんだけど、清水さんはひよっとして聞いてなかったんだらうか？

まあとにかく、ユキトは端末を机の上に置き、スピーカーモードにして、通話ボタンを押した。

「（ピッ）もしもし？どうした、電話なんてかけてき
『ユ、ユキトさんっ！助けてくださひゃああああああっ！？来
ないでこの変態いいいいっ！！』」

ぶっっっ

「……………」

なんだろう、聞いてはいけないものを聞いてしまった気がする。

「…明久、ちよつと自習してる。俺は美春を助けに行ってくるから」
「え、でも今の発言だけじゃ何が起こってるのかさっぱりだよ？」
「たぶん父親に追いかけられてるんだろ。『変態』って言ってたし」
「変態イコールお父さんなんだね…」

否定はできないけれども。

「でも、『距離制限』はどうするの？」
「大丈夫だ、マンシヨンのベランダから狙撃する」
「この国はいつの間にかこんな無法地帯になつたんだろう…」
「…俺が聞きたいわ。というか、お前の周囲が酷すぎるだけだ」
「え、いやそんなことは」
「有るだろ。やれやれ…最低10ページはやっつけよー」

そう言い残して、ユキトはトテトテと走り去っていった。

…まあ、清水さん本人は多分大丈夫だろう。

秀吉やムツツリー二のことを散々言っただけど、ユキト本人のスペックも大概だし…

むしろ、その標的になった相手の心配をするべきだろう。…うん、医者じゃダメだ。黄色い車じゃないと。

そうして、僕が静かに清水（父）さんのご冥福をお祈りしていると、何時の間にか秀吉が手を止めて僕のほうをじっと見ていた。

…今日も秀吉は可愛いなあ。

「のう明久よ」

「今日も秀吉はかわ…ん？なに？」

「相変わらずおぬしは何を言おうとしたんじゃ…ま、まあ、それはよい」

「いいのかよ」

いつの間にかこっちを見ていた雄二のツツコミが入る。…どうやらさっきの清水さんとの電話でみんなの集中力が切れちゃったみたいだ。

「コホン…さ、先程、ユキトが『狙撃』と言っておっただろう。あれ

はどついつことじゃ？」

「……ユキトの武器はフィールドが無いと使えないはず」

「あー、そのことかあ」

秀吉の疑問も真つ当なものだと思う。

まあ、普段のユキトは『剣』や『刀』しか使わないから、『狙撃』
つて言われてもちよつとイメージしづらいかもしれない。

…実はあの能力、『狙撃』くらいは余裕でできるし、それどころか
『広域制圧』『精神干渉』『過去改竄』『蘇生』とか色々トンでも
ないことができるらしいんだけどね。リスクも高いみたいだけど。

「随分前なんだけど、ユキトが腕輪能力を発現させた時、ババアが
『詳しいデータを探りたい』つて言い出してさ。けっこういろんな
実験をしたりしてたんだ」

「ほー。バイトつてのはそのことか」

「で、『武装顕現』つていうくらいだから、ひよつとしたら『刀剣』
以外も出せるんじゃないかって話が出てきて、一時期ユキトがいる
んな武器を通販で買ってたんだよ」

「ほうほう、イメージのための小道具といった所かの」

『武装顕現』…というか、召喚獣の腕輪の発動原理とかは学園側にも
よくわかっていかなかったみたいだから、その辺は学園側としても
協力を惜しまなかったみたいだ。

ユキトとしても、生存のためとか色々な理由で、けっこう真剣に
調査をしてたなあ。

…僕が鉄人との補修が終えてユキトと帰ろうとしたら、弓やらエアガンやら木刀・スタン警棒が学園長室に転がってた時はついに妖怪討伐が始まるのかと思ったよ。

「……………それで、結局どうなった？」

「うーん、どうも『武装顕現』っていうのはさ、『元々ある武器に魂を宿らせる』っていうのを前提とした能力だったみたい。

でさ、僕の点数で現れる武器が『木刀』だったから、ユキトは剣しか出せないんだって」

「……………なんだ、明久が足を引っ張ってたのか……………」

「痛い！今ものすごく心が痛いッ！！」

やめてよ！結構気にしてるんだよそれ！！

ユキトの身体が戻ったらいっぱい恩返ししないとイケないって思ってるのに、次々と迷惑をかけてて正直申し訳なさすぎるんだよーッ！！

「なら、『狙撃』はエアガンやら弓でやるつもりってことか」

「……………法律に引っかかりそう」

「おぬしだけは言えた義理ではないのう」

「……………（フルフル）」

傷ついている僕にも構わず、三人は話をそのまま進めていた。

…皆、酷くない？

「…はあ。まあ、ほとんどの『武器』は学園側が引き取って他の召喚獣の武器の参考にするんだって回収されちゃったけどね。今、ユキトの部屋に置いてあるのはほんの少しだよ」
「ユキト？」「ユキト？」

え、何？どうしたの三人共。

「ユキトの部屋…！？」
「ユキト？」

あれ？

なんで三人は顔を見合わせてるの？

「いい加減、俺に対する扱いが改められても問題ねえはずだよな？」
「男友達の部屋で悪戯…うむ、実に男らしい行為じゃ！」
「……顧客のニーズに応えるのは当然」

…あれれえー？

…………何だかいま、とっても嫌なフラグが立ったような気がするよ
ー？

【Side 雄二】

「そんなわけで、ユキトの部屋に侵入したッ！」

「「おおおおー！！！」」

こちらスネーク、待たせたな…！ とまあ、ユキトならそんなことを言う状況だろう。

「ククク…いつもはやられている側だが、やる側になるとこんなに
も愉快的なモンなんだな、家捜しつてのは…！」

「おお、雄二がとてつもなく悪い顔をしておる…」

「……発言の節々が哀れ」

んなどうでもいいことは置いておけッ！今は目先のことだけ考えればいい！！

そんなわけで、現在俺・ムツツリーニ・秀吉の三人はユキトの部屋に侵入している。

ちなみに明久は下手に動くと『距離制限』でバレそうなので待機である。

まあいい、ヤツは別に役に立たないしな！まったく、これだからバ力は使えねえ！

『…身体から出る小物臭が、既に露骨なフラグと化してるよね…』

さて、ここで気になるユキトの部屋の間取りについて説明しておこう。

部屋としては普通のマンションの一角なので、変なカーペットが敷いてあるとか、そういうことは別に無い。むしろ飾りっ気が無いのは男子なら普通だな。

が、まずは机のサイズの小ささが際立つ。…というかコレ、段ボールの上に色々敷いて誤魔化しているだけだ。

「これは多分明久の貧乏性のせいだろうな…」

「甲斐性の無い男じゃ」

いかんいかん、ユキトの弱みを捜すはずなのに何故か明久のダメさばっかり出てくるな。

気を取り直して。

他の家具はどうだろうか？…チョイスそのものは本棚やらベッド、それとクローゼットが置いてあって普通だ。

「ぬ、ユキトの身体に対してえらく大きいベッドじゃのっ」

「メシが食えないからその他のことには拘るって言ってなかったか？睡眠もそうなんだろ」

風呂に関しては恐ろしい執着っぷりだからな、アイツ…

「さて、さっきから気になっていた本棚は、っと…うおっ！？なんだこりゃ、全部漫画じゃねーか！！」

「（ガラガラ）ぬう、この本棚後ろにも動くのう…隙を生じぬ二段構えじゃ」

「なんというか、実感わかねーけど普通にオタクなんだよなアイツ…」

別にそれについてどうこう言つつもりは無いけどよ。
えー、ちなみに漫画のチョイスは…

「マテリアル・パル、グリードパケツ、ARRS、…マニアックな本ばつかじゃねエかアアア！！！」
「ちよっと待つんじゃ！なんじゃ最後の『』というのは！？」

畜生、あの野郎何考えてやがる…！こういうときは読者さんに共感できるような作品出して、『あ、ですか僕も読んでますよ！』的な感想をせびるところだろうが！まあ全部名作だけど！

もっとメジャーな、最近再アニメ化したジャンプ作品とか選べよ！果たして何人がこの総ての作品を読んでるんだよ！！

ちなみに全部作者の家の本棚にある作品です。『』の中身、当
ててみよう！

「……雄二」

「ああ！？んだよ今ツツコミで忙しいんだよ！！」

「……クローゼットの中にジヨジヨが全巻入ってた」

「ジャンプはジャンプだけれども！今度は語るとめっちゃ時間かかるじゃねえかアアアア！！！」

え、ええい！次だ次！

おいムツツリーニ、クローゼットの中身は他になんかあったか！？

「……ライトノベルはこっちに保存しているらしい」

「そういえば、ユキトは服を着替えることもできぬのじゃったな。

その中は丸々収納スペースとなっておるのか」

「……（ブルブルブルボタボタ）」

「おいムツツリーニ、血を零すなよバレるだろ」

「ラノベの表紙は過激じゃからのう……」

ふむ、ちなみにこっちのラノベのラインナップは……

「……………（フワフワ）」

…余計なことを言つとムツツリーニが鼻血を再発させそうなのでやめておくか…

その後も搜索は続くも、

「ベッドの下はテンプレ位置というやつなのじゃ…！」

「なんか動きが女子っぽいぞ秀吉…！」

「な、なななそんなことはないのじゃっ…！」

「……………何も無い」

ユキトの部屋からめぼしい物は発見できず、

「本棚の裏というのもテンプレじゃ…！」

「ギッシリ入ってて隙間なんてないな」

ただ時間だけが過ぎて、

「！！薄い本を発見した…！」

「何っ！？ここに来てついでにか！」

「ぬ、確かにR18じゃのう…タイトルは…」
T H T I S I

T『…？』

「おい馬鹿やめろ、蛸壺屋は本当にやめろォー…！」

…ただ、時間だけが過ぎていった。

「くそ、アイツ色々おかしいだろ！なんで弱みのひとつやふたつが
出てこねーんだよ…！」

思わず頭を抱えてしまう。

誰だって秘密のひとつやふたつ抱えているはずなのに、ヤツにはそれが無いというのだろうか。

だとしたら、ヤツは本当に人間じゃねえ、召喚獣の鑑だともいうのか…野獣と化した先輩かつ！

「というか、途中から完全にエロ本探しになっておったのう」

「いやまあ、一応18禁の本ならあつたけれども」

「……アレをエロとは認めない…精神が…」

「読んだのか(よ)」「」

チツ…流石にそろそろマズいぞ、もうそろそろ制限時間を過ぎる頃だ。

ここまで来たからには、いい加減弱みのひとつやふたつ見つけるまでは戻れねえ…!!

「…のう、雄二よ。ふと思ったのじゃが」

「なんだ秀吉」

「この部屋…『パソコンが無い』のじゃ」
「！！」

確かに…！

ヤツは結構な数のゲームをプレイしているし、その中にはPCゲームも含まれていたはずだ！）一応、ユキトの設定年齢は18です）

「ムツツリーニ！」

「……金属探知機、作動！！！」

ぴーぴーぴー。

「……発見！」

「はやっ！」

「というかどこにそんな大荷物を持っていたのじゃ！」

と、とにかくこれで俺たちはヤツへの突破口を開けたッ！

探知機が指すポイントをくまなく調べてみると…げ、この段ボールの下収納スペースかよ！

あの野郎、こっそりこんなところにパソコン隠してやがったな…！！

だが、もうそれも無意味！

「ムツツリーニ！パスワードは！」

「……（カタカタカタ！）」

ピロローン（起動音）

「おお、凄いのじゃムツツリーニ！」

「何故そんなことを平然とできるんだろうな！だが今はナイスだッ
！！」

フハハハハ！わざわざ隠す必要があるってことは、それなりの内容
があるってことだ！

ならば俺の目の前には当然、

「おお、このテキスト見るよ！『設定・技名・text』とか書いて
あるぞー！」

「こ、これはまさか……！」

「……黒歴史……！！！」

ヤツの弱みが広がっているんだ…！！

や、やっと見つけたぞ！これを使って、俺はユキトに日頃の恨みをぶつけてやるんだッ！

ハハハ、これさえあれば！もう何も怖かねえエエエエエエ！！！！

そう心の中で叫びながら、俺がその文章ファイルを開こうとした時。

がしゃこん。

鈍い音がした。

…え、なんだこの音。まるでアレだ、某筋肉ロボが片手でシヨット
ガンをリロードしたときのような音が、今したような…

ギチギチギチ、ガシャシャ

『うわー、凄いバランス感覚だねー』

『ユ、ユキトさん？えーとその、それドアくらいなら貫通するんじゃないか…』

『大丈夫だよ清水さん。たぶん一発も外さないだろうし』

『そ、そうですか…』

ギューイイイイイイイイン

『ところで、この武器どこで買ったんですか…』

『さあ？聞きたいの？』

『…やめておきます』

『うん、そりゃそうですよね』

おい待て。

なんだ。

なんだこれは。

ドバツ！と体中から汗が吹き出ているのがわかる。

まずい、まずいまずいまずい！

何か危機が迫っている！今すぐ逃げなきゃいけないのに、なんだこれは…！身体が金縛りがあったかのように動かない…！！

ドスンッ！

何かを床に叩きつけたような音。

うん、アレだ。丁度、軽いぬいぐるみ程度の存在が足を叩きつけたら…こんな音が出るだろう。

『あ、雄二。聞こえてる？とりあえず、僕が言いたいのは一言だけ』

明久の声だけが、やけに部屋に響いた。

『フラグ回収乙』

㊦

見

夕

ナ

㊦

ガラッ

ユキトの安らぎのエリアに侵入してはいけない。
あと、勉強は集中してやりましょう。

番外編・『部屋とフラグと勉強会』（後書き）

秀吉にも容赦しなかったでござる。

鬼畜な主人公ですみません、琥珀です。

唐突なトリビアですが、エアガンって狩猟用もあるんですよ。マイナーな所ではカノン・ヒルベルト君がテロまがいのことやらかしてましたね。ってこのネタも反応しづらいたらうなあ。

本来はこの話、ユキトの部屋オンリーか勉強の話オンリーで別々の話にするはずだったんですが、何故か一つに合体してしまいました。

おかげで凄まじい超展開です。え、いつものこと？ 違うない。

今回出てきた『蛸壺屋』は某エロ同人誌のサークルさんなんですけど、悪い事は言わないので検索しないほうがいいです。

特に『けいおん！』や『まどかマギカ』のキャラが好きならマジやめたほうがいいです。

もうね、暴力シーンやら何やらが胸糞悪すぎて死ぬ作品ですから。チエックしきれないゾ

とまあ、今回は調子に乗りすぎた感が凄いですね。物語の軸としては『死亡フラグの回収』がテーマのバレバレな作りだったわけですが、漫画部分がね。

どれも『面白い作品だけど、俺の周りで話せる奴がない』作品をチョイスしてみました。誰か僕とマテパの話してください（切実）。

そんなわけで、次回は本編です。多分めっちゃ長くなります。それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5500m/>

俺はテストの召喚獣

2011年9月18日22時51分発行